財団法人八尾市文化財調査研究会報告42

Ⅰ　跡部遺跡（第14次調査）
Ⅱ　植松遺跡（第２次調査）
Ⅲ　太田川遺跡（第１次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第16次調査）
Ⅴ　小阪合遺跡（第25次調査）
Ⅵ　志紀遺跡（第１次調査）
Ⅶ　成法寺遺跡（第10次調査）
Ⅷ　成法寺遺跡（第11次調査）
Ⅸ　成法寺遺跡（第12次調査）
Ⅹ　太子堂遺跡（第５次調査）
Ⅺ　田井中遺跡（第13次調査）
Ⅻ　東郷遺跡（第40次調査）
XIII　東郷遺跡（第41次調査）
XIV　東郷遺跡（第43次調査）

１９９４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

財団法人　八尾市文化財調査研究会報告42　正誤表

ページ	行	誤	正
3	22	m	cm
27	19	高坏には	高坏は
46		第２図はP54の第２図と入れ換え	
54		第２図はP46の第２図と入れ換え	
72	図版一	第１次面（西から）	第１次面（東から）
72	図版一	第２次面（東から）	第２次面（西から）
137	6	体部のみの	体部のみに
140	9	範疇入	範疇に入
143	3	範疇入	範疇に入

財団法人八尾市文化財調査研究会報告42

Ⅰ　跡部遺跡（第14次調査）
Ⅱ　植松遺跡（第２次調査）
Ⅲ　太田川遺跡（第１次調査）
Ⅳ　久宝寺遺跡（第16次調査）
Ⅴ　小阪合遺跡（第25次調査）
Ⅵ　志紀遺跡（第１次調査）
Ⅶ　成法寺遺跡（第10次調査）
Ⅷ　成法寺遺跡（第11次調査）
Ⅸ　成法寺遺跡（第12次調査）
Ⅹ　太子堂遺跡（第５次調査）
Ⅺ　田井中遺跡（第13次調査）
Ⅻ　東郷遺跡（第40次調査）
XIII　東郷遺跡（第41次調査）
XIV　東郷遺跡（第43次調査）

１９９４年

財団法人　八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は東に生駒山地、西に上町台地、南に羽曳野丘陵に囲まれた大阪平野の中に位置しています。この平野は、淀川や旧大和川および生駒山地西麓から西へ流れる中小の河川の堆積作用によって形成されており、従来より肥沃な土壌地帯で、人々が生活する上で好ましい条件が揃っていた地域であり、古来より人々が生活していた遺跡が多く存在しています。現在、その遺跡のほとんどは河川等の堆積作用や近年の土地区画等の整地によって地中深くに残っています。近年、平野部では住宅建設や工場建設等の大規模な開発が多く行なわれるようになり、地中深く眠っていた遺跡が破壊されることが頻繁に起きてきました。そこで、これらの文化財を開発による破壊から守り、先人が残した文化遺産を後世に永く伝承させることが我々の責務と認識し、文化財の保護・保存の徹底をはかってきたところであります。

今回、平成５年度に実施しました跡部遺跡（第14次調査）、植松遺跡（第２次調査）、太田川遺跡（第１次調査）、久宝寺遺跡（第16次調査）、小阪合遺跡（第25次調査）、志紀遺跡（第１次調査）、成法寺遺跡（第10～12次調査）、太子堂遺跡（第５次調査）、田井中遺跡（第13次調査）、東郷遺跡（第40・41・43次調査）の10遺跡に及ぶ調査・整理が完了しましたので報告書を刊行する運びとなりました。

本書が学術研究及び本市の地域史の資料として、さらに文化財保護への啓発普及に活用して頂ければ幸いであります。

末筆となりましたが、調査においてご協力いただきました関係各位の皆様方に深くお礼申し上げますとともに、今後ともより一層のご理解、ご支援を賜りますようお願いいたします。

1994年10月

財団法人　八尾市文化財調査研究会

理事長　木　山　丈　司

序

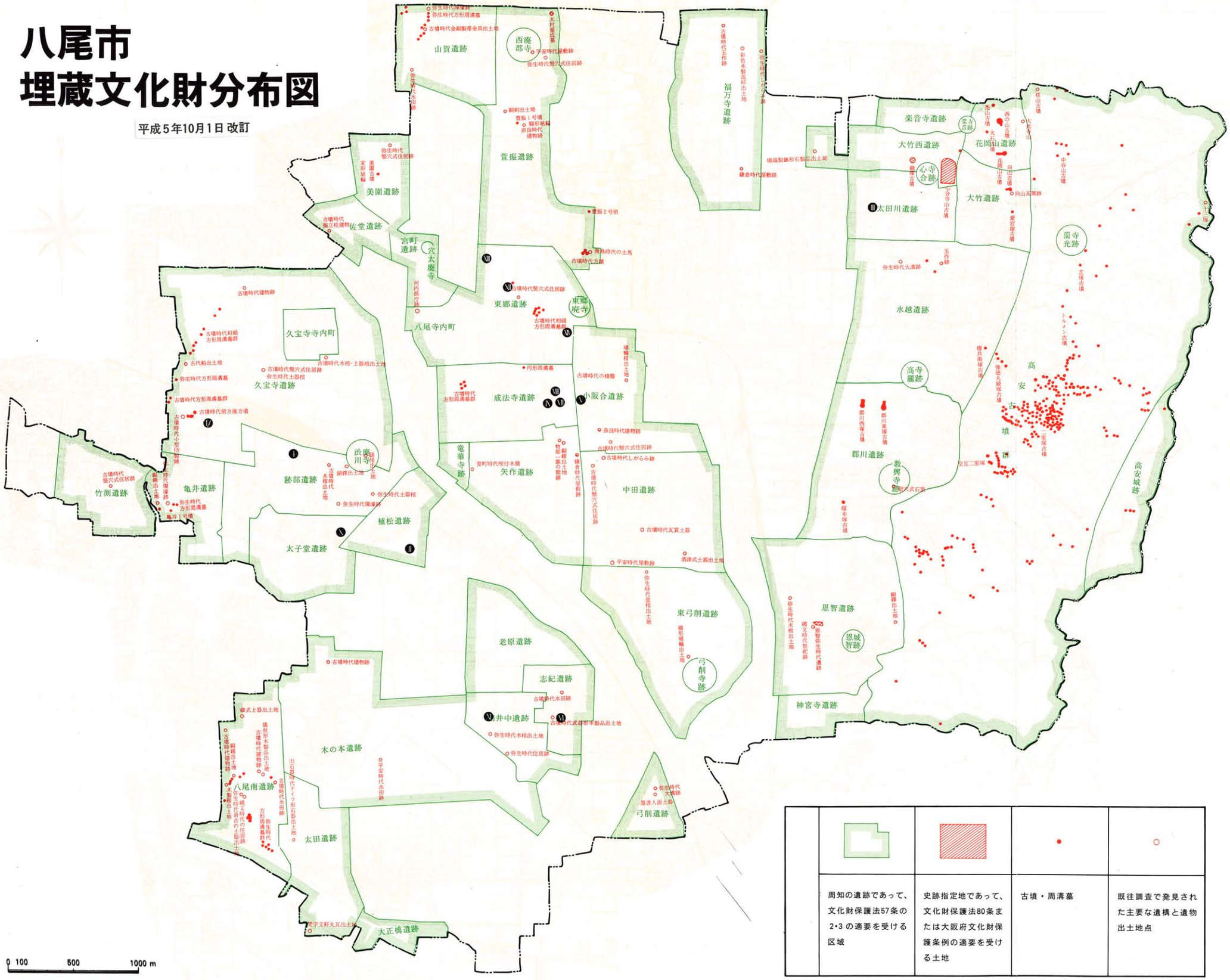
1．本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成５年度に実施した発掘調査成果報告を収録したもので、内業整理及び本書作成業務は各現場終了後に着手し、平成６年９月をもって終了した。
1．本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1．本書掲載の地図は、大阪府八尾市市役所発行の2,500分の1(昭和61年８月)・八尾市委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成５年10月１日改訂)をもとに作成した。
1．本書で用いた高さの基準は東京湾の平均海水面である。
1．本書で用いた方位は磁北及び国土座標の真北を示している。
1．遺構は下記の略号で表した。
竪穴住居－ＳＩ　溝－ＳＤ　井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　小穴－ＳＰ　自然河川－ＮＲ
掘立柱建物－ＳＢ　落ち込み－ＳＯ　土器棺墓－土器棺　土器集積－ＳＷ
1．遺物実測図は、断面の表示によって次のように分類した
弥生土器・土師器・瓦器・埴輪・石類－白、須恵器－黒、木製品－斜線。
1．各調査に際して発掘調査、写真・実測図の他にカラースライドも多数作成している。市民の方々が、広く利用されることを希望する。

目　　次

はしがき
序
八尾市埋蔵文化財分布図
Ⅰ　跡　部遺跡　第14次調査（ＡＴ93－14）…… 1
Ⅱ　植　松遺跡　第２次調査（ＵＭ93－２）…… 7
Ⅲ　太田川遺跡　第１次調査（ＯＴＧ93－１）…… 15
Ⅳ　久宝寺遺跡　第16次調査（ＫＨ93－16）…… 25
Ⅴ　小阪合遺跡　第25次調査（ＫＳ93－25）…… 31
Ⅵ　志　紀遺跡　第１次調査（ＳＩＫ93－１）…… 39
Ⅶ　成法寺遺跡　第10次調査（ＳＨ93－10）…… 45
Ⅷ　成法寺遺跡　第11次調査（ＳＨ93－11）…… 53
Ⅸ　成法寺遺跡　第12次調査（ＳＨ93－12）…… 61
Ⅹ　太子堂遺跡　第５次調査（ＴＳ93－５）…… 77
Ⅺ　田井中遺跡　第13次調査（ＴＮ93－13）…… 83
Ⅻ　東　郷遺跡　第40次調査（ＴＧ93－40）…… 89
XIII　東　郷遺跡　第41次調査（ＴＧ93－41）…… 113
XIV　東　郷遺跡　第43次調査（ＴＧ93－43）…… 129
報告書抄録

八尾市
埋蔵文化財分布図

平成5年10月1日 改訂



周知の遺跡であって、文化財保護法57条の2・3の適要を受ける区域	史跡指定地であって、文化財保護法80条または大阪府文化財保護条例の適要を受ける土地	古墳・周溝墓	既往調査で発見された主要な遺構と遺物出土地点

Ⅰ　跡部遺跡第14次調査（ＡＴ93－14）

例　　言

1．本書は、八尾市跡部北の町１丁目地内で実施した公共下水道（平成５年度第12工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する跡部遺跡第14次調査（ＡＴ93－14）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第68号　平成５年９月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年11月29日～12月10日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約38㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに…… 1

2．調査概要…… 3

　1）調査の方法と経過…… 3

　2）基本層序…… 3

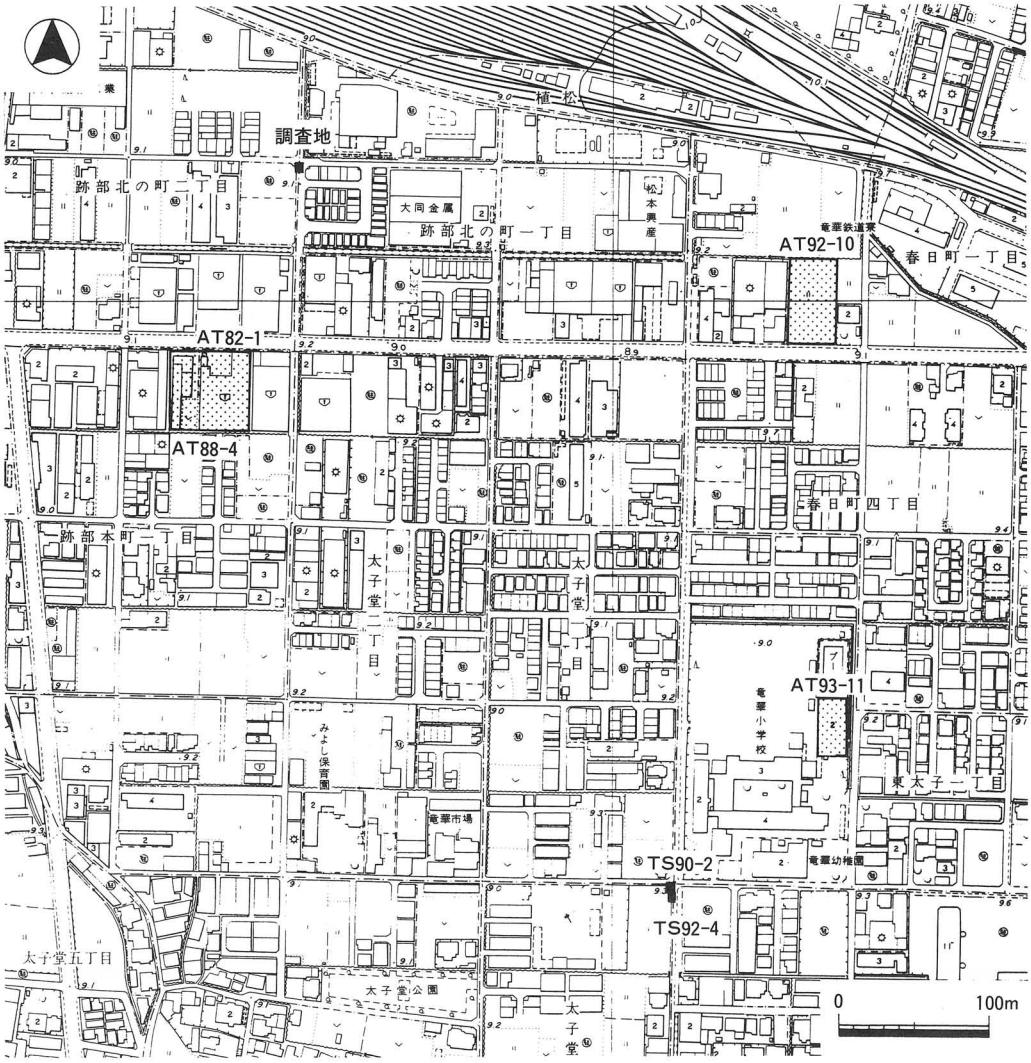
　3）検出遺構と出土遺物…… 4

3．まとめ…… 4

Ⅰ　跡部遺跡第14次調査（ＡＴ93－14）

１．はじめに

跡部遺跡は、八尾市の西部に位置する跡部本町１～４丁目、太子堂１・２丁目、東太子堂１丁目・春日町２～４丁目、跡部北の町１・２丁目にあたる。旧地形では旧大和川の主流であった長瀬川左岸の沖積地に立地する。標高は現在（T.P.+）9.0m前後を測る。当遺跡の周辺には東に植松遺跡、南に太子堂遺跡、西に亀井遺跡、北に久宝寺遺跡がある。また、調査地は渋



第１図　調査地周辺図

川廃寺推定地の西端に近接しているところでもある。

調査地の周辺では第１表に掲載した発掘調査が行われている。これらの調査成果では弥生時代前期～中世に至る遺構・遺物が検出されている。特筆すべきものとしては、平成元年度に当調査研究会が公共下水道工事に伴う発掘調査（AT89-5）で発見した銅鐸埋納壙と銅鐸。平成５年度には共同住宅建設（AT93-13）に伴う発掘調査で弥生時代中期の環壕と思われる大溝が発見されている。

第１表　跡部遺跡発掘調査一覧表

年度（西暦）	番号（第次）	調査地	原因（原因者）	調査期間（実労日数）	調査面積（㎡）	主な検出遺構・出土遺物	調査主体（担当者）	略号	文献
S.53（1978）	1	春日町１丁目	国鉄職員官舎（国鉄）	－	－	弥生前期－壺、鎌倉－瓦	八尾市（山本他）	－	－
S.56（1981）	2	春日町１丁目57	マンション（林三業）	11月９日～11月19日	92	弥生中期－土坑１・溝３（弥生式土器・石器）、古墳前期－方形周溝墓？（庄内式土器）	八尾市（山本・高木）	－	当調査研究会報告１
S.57（1982）	3（第１次）	跡部本町１丁目３	冷蔵庫建設（八尾冷蔵K.K.）	10月１日～10月５日	50	古墳時代－包含層確認	当調査研究会（西村）	AT82-1	当調査研究会報告１
S.58（1983）	4（第２次）	跡部本町２丁目46	社員寮（津田治）	59年３月１日～３月31日	500	鎌倉－羽釜・井戸２・土坑19・溝２・小穴群（多量の土師皿と瓦器）	当調査研究会（山本・米田）	AT83-2	当調査研究会報告５
S.59（1984）	5	跡部本町２丁目44－1．45．46－1	浄化槽（津田治）	５月10日～５月22日	56	鎌倉－土坑１・小穴１・土器溜１（土師小皿・中皿・瓦器）	八尾市（嶋村）	－	八尾市文化財調査報告11
	6	安中町３丁目52－2	ビジネスホテル（広栄住建K.K.）	６月18日～７月２日	69	古墳後期－土坑１、遺物－Ｖ様式－庄内式・須恵器・土師・製塩	八尾市（嶋村）	－	八尾市文化財調査報告11
S.62（1987）	7（第３次）	安中町３丁目26．19－５	集合住宅（東興殖産K.K.）	４月６日～５月18日	1,150	長瀬川左岸堤防	当調査研究会（成海）	AT87-3	当調査研究会報告16
S.63（1988）	8	跡部本町２丁目47－1	共同住宅（津田武雄）	３月17日～３月31日	116	古墳後期－遺物、平安末期（9．1～9．2）土坑３・土器溜２	八尾市（米田）	－	八尾市文化財調査報告19
	9（第４次）	跡部本町１丁目４－１・４－２	共同住宅（種田竹松）	10月１日～10月22日	300	古墳前期－土坑６・溝２、遺物－弥生土器・土師器	当調査研究会（西村）	AT88-4	当調査研究会報告25
H.元（1989）	10（第５次）	春日町１丁目	公共下水道	10月16日～11月31日	100	弥生前期－遺物、弥生後期－銅鐸埋納壙、古墳前期－竪穴式住居、平安末期－土坑	当調査研究会（成海・西村）	AT89-5	当調査研究会報告31
H.３（1991）	11（第６次）	春日町１丁目	公共下水道（八尾市）	９月30日～10月４日	16	弥生前期（6.1～6.3m）－包含層、古墳前期（7.0m）－土坑２、奈良以降（8.0m）－溝１、遺物－弥生土器（Ⅰ）・布留式土器・瓦	当調査研究会（高萩）	AT91-6	当調査研究会報告34
H.４（1992）	12（第７次）	春日町１丁目47、48	店舗付共同住宅（栗山義孝）	７月９日～８月10日	220	弥生後期（6.9m）－河川１、古墳前期（7.0）－包含層、遺物－弥生土器（Ⅳ・Ⅴ）・庄内式土器・布留式土器	当調査研究会（原田）	AT92-7	当調査研究会報告39
	13（第８次）	跡部本町４丁目４－20	鉄塔新設（ＮＴＴ）	８月20日～９月５日	100	奈良（7.8m）－井戸１、鎌倉（8.3m）－土坑２・溝７・小穴２、遺物－土師器・須恵器・木製品（削り掛け２）	当調査研究会（岡田）	AT92-8	当調査研究会報告39
	14	跡部本町１丁目４番47号	マンション（戎屋科学工業KK）	７月６日・10月27日～29日	135	古墳前期（6.64m）－井戸１・不明遺構１・小穴１・土坑１、遺物－庄内式土器・布留式土器	八尾市（沼）	－	八尾市文化財調査報告27
	15（第９次）	春日町１丁目	公共下水道２工区（八尾市）	10月７日～10月13日	20	弥生後期末～古墳前期（6.4m）－包含層、古墳中期・奈良（7.8m）－包含層、遺物－弥生土器（Ⅴ）・庄内式土器・須恵器・瓦	当調査研究会（原田）	AT92-9	当調査研究会報告39
	16（第10次）	春日町３丁目	公共下水道98工区（八尾市）	１月29日～２月15日	28	弥生前期末～中期初頭（6.1m）－溝１、中期後半（6.7m）－溝１、後期前半（7.0m）－溝１、後期後半（7.2m）－溝１、遺物－弥生土器（Ⅰ～Ⅴ）・庄内式土器・銅鏃１	当調査研究会（西村）	AT93-10	当調査研究会平成４年度事業報告
H.５（1993）	17（第11次）	東太子１丁目106	講堂兼屋内運動場（八尾市）	４月30日～７月14日	1,215	弥生中期前半（5.1～5.7m）－溝１・溝状遺構11・小穴９、中期後半（5.2～5.7m）－溝１、弥生後期－古墳前期（5.8～6.6m）－溝状遺構１・河川１、遺物－弥生土器（Ⅱ・Ⅴ）・布留式土器・土師器	当調査研究会（成海）	AT93-11	－
	18（第12次）	春日町２丁目35－1、35－２	共同住宅（萩原隆）	５月17日～６月18日	245	弥生前期（6.8～7.0m）－土坑１・溝１・落込み２・小穴53、中期（7.3）－土器棺１、後期（7.8m）－土器集積１、古墳初頭（8.0m）－落込み２、後期（8.4m）－溝１、後期以降（8.4m）－溝13・小穴２・掘立柱建物１、遺物－弥生土器（Ⅰ～Ⅴ）・庄内式土器・須恵器・土師器・石器	当調査研究会（坪田）	AT93-12	－
	19（第13次）	東太子１丁目16	共同住宅（北谷正勝）	６月28日～７月24日	348	弥生中期（6.6m）－溝３・河川１、古墳前期以降（8.2m）－洪水による砂層、遺物－弥生土器（Ⅲ～Ⅴ）・庄内式土器・布留式土器・石器（石包丁・石斧）・木製品（杵）	当調査研究会（坪田）	AT93-13	－

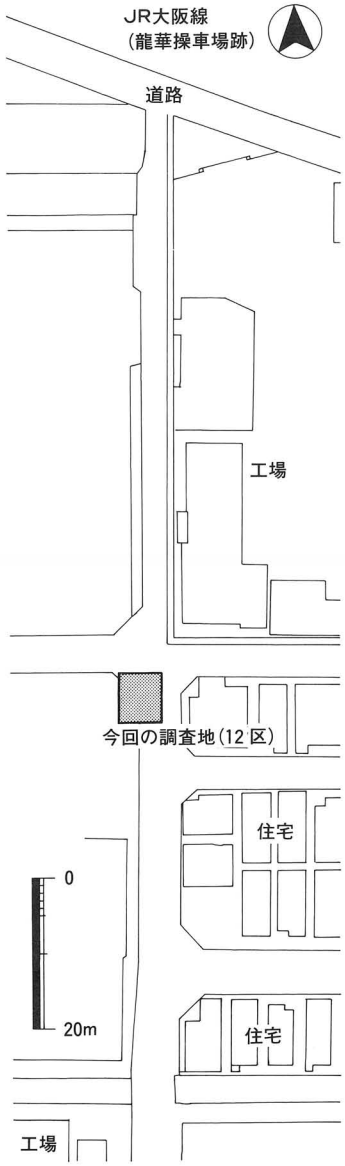
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（第12工区）工事に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会、当調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成５年11月19日～12月10日である。今回の調査は、当調査研究会が実施した第14次調査（AT93-14）にあたる。

調査区は下水道工事の立孔部分１ヶ所（縦6.55ｍ×横5.75ｍ）で、面積約38㎡を測る。調査は現地表下約2.0～2.2ｍまでの土層を機械掘削し、以下、0.2ｍの土層については人力掘削、さらに下層確認調査を行った。

調査地は、当遺跡の北西部にあたり、東南へ約300ｍの所では弥生時代後期末以前の銅鐸埋納壙や古墳時代前期の竪穴住居などが発見されている。



第２図　調査区設定図

２）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　盛土（層厚80～100ｍ）。アスファルト・バラス・盛り土・旧耕土・床土である。旧耕土・床土は東部（借換地内）の一部で確認されただけで、道路部分は水路及び水道・ガスなどの埋設工事により攪乱されている。

第２層　明青灰色粘土（層厚30～35㎝）。粘着のある粘土である。

第３層　茶灰色砂粘土（層厚50～60㎝）。

第４層　茶灰色粘土（層厚10～15㎝）。

第５層　灰色粘土（層厚20㎝）。植物遺体を少量含む。

第６層　灰白色細砂（層厚100㎝）。1～2㎜の砂粒である。

第７層　暗灰色粘土（層厚10㎝）。植物遺体を含む層で、粘性の強い粘土である。

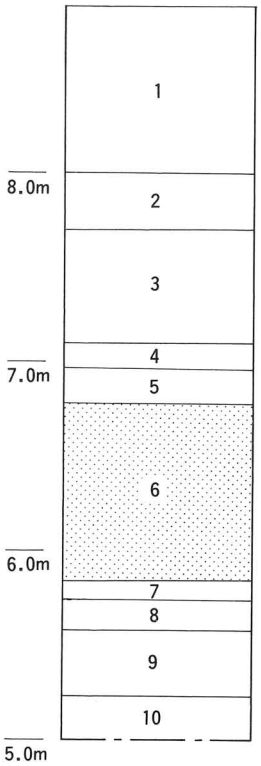
第８層　灰色粘土（層厚15～20㎝）。

第９層　灰黒色粘土（層厚40㎝）。

第10層　青灰色粘質シルト（層厚20㎝以上）。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、遺構・遺物は検出しなかった。周辺の既往調査で確認されている古墳時代前期の検出面のレベル高（T.P+6.8～7.2ｍ）に相当する第４層・第５層は、遺物包含層・遺構面として捉える層とは異なるものであった。第５層は湿地帯に堆積する沈澱層と考えられる。第６層は河川の氾濫で堆積した細砂層が厚く堆積している。第９層は第５層と同様、湿地帯であったと考えられる。弥生時代前期～中期の時期に対応する土層はレベル高（T.P.+5.5～6.5ｍ）から第８層～第９層と考えられるが、遺構・遺物は認められなかった。

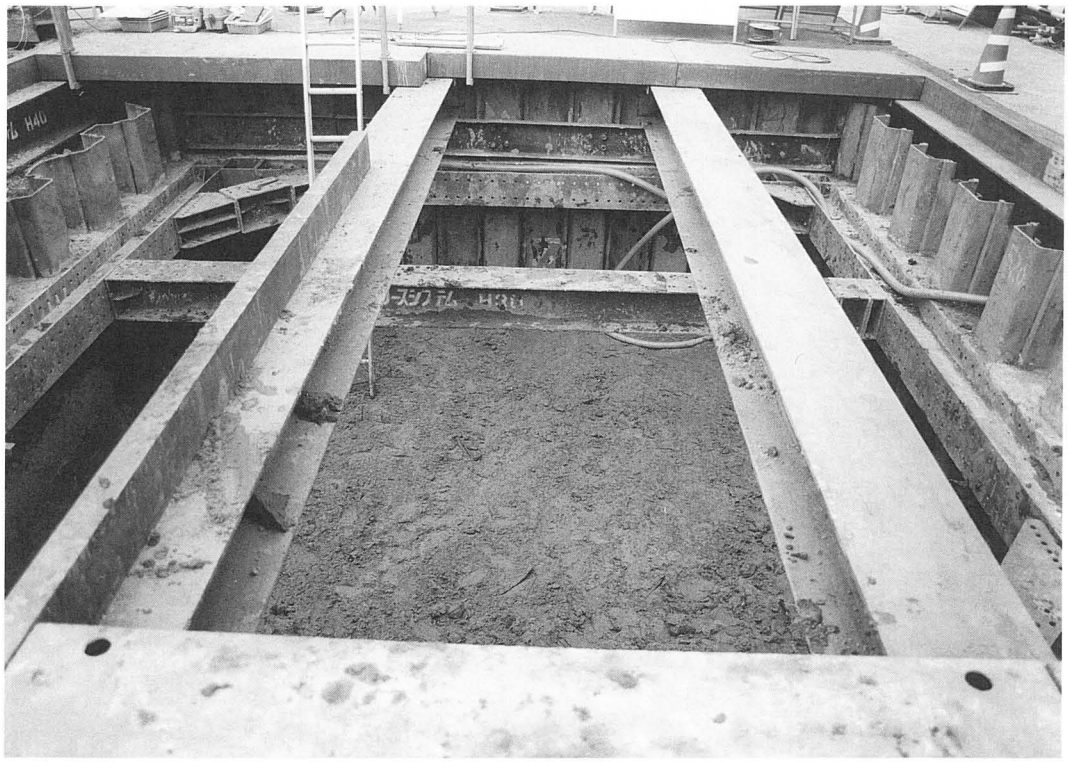


第１層　盛土
第２層　明青灰色粘土
第３層　茶灰色砂粘土
第４層　茶灰色粘土
第５層　灰色粘土
第６層　灰白色細砂
第７層　暗灰色粘土
第８層　灰色粘土
第９層　灰黒色粘土
第10層　青灰色粘質シルト

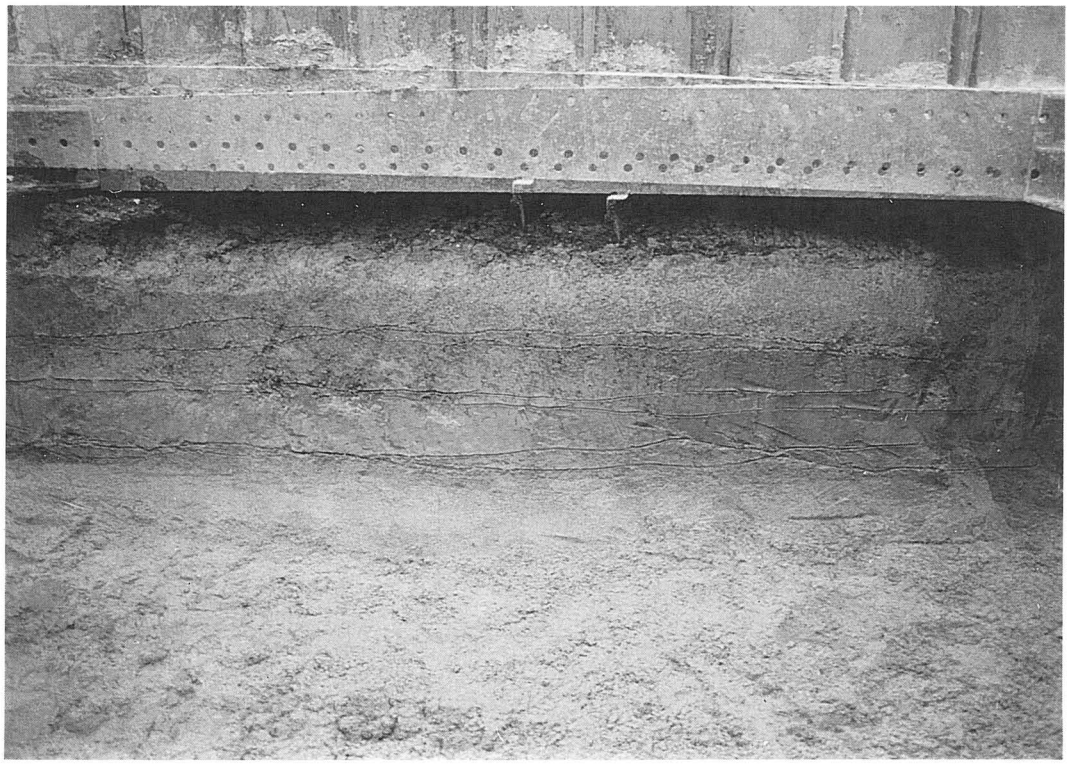
第３図　基本層序柱状図

３．まとめ

今回の調査では、周辺調査で確認されている弥生時代前期～古墳時代前期の遺物包含層及び遺構は検出しなかった。また土層の堆積状況では湿地帯及び氾濫源であり、調査区付近は居住域からはずれた空白部分であろう。



調査区全景（南から）



西壁（東から）

Ⅱ　植松遺跡第２次調査（ＵＭ93－２）

例　　言

1．本書は、八尾市永畑町３丁目１番１号他で実施した共同住宅建設（その１）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する植松遺跡第２次調査（ＵＭ93－２）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第21号　平成５年３月12日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がニチメン株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年４月19日～７月19日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は134.64㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに…… 7

2．調査概要…… 7

　1）調査の方法と経過…… 7

　2）第１調査区…… 9

　3）第２調査区……10

3．まとめ……11

Ⅱ　植松遺跡第２次調査（ＵＭ93－２）

１．はじめに

植松遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では植松町３～８丁目、永畑町２・３丁目を中心に所在する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸一帯に広がる沖積地の自然堤防上に位置する。当遺跡では、昭和56年に平安時代前期の掘立柱建物１棟・溝が確認されたのみにとどまっている。その後、八尾市教育委員会が数回の遺構確認調査の実施によって古墳時代前期から中世に至る遺物包含層を確認している。また、今回の調査地の隣接では当調査研究会が公共下水道工事に伴う第１次発掘調査（UM92-1）を実施している。この調査では遺構は確認されていないが、弥生時代前期から平安時代の遺物をごく少量出土している。

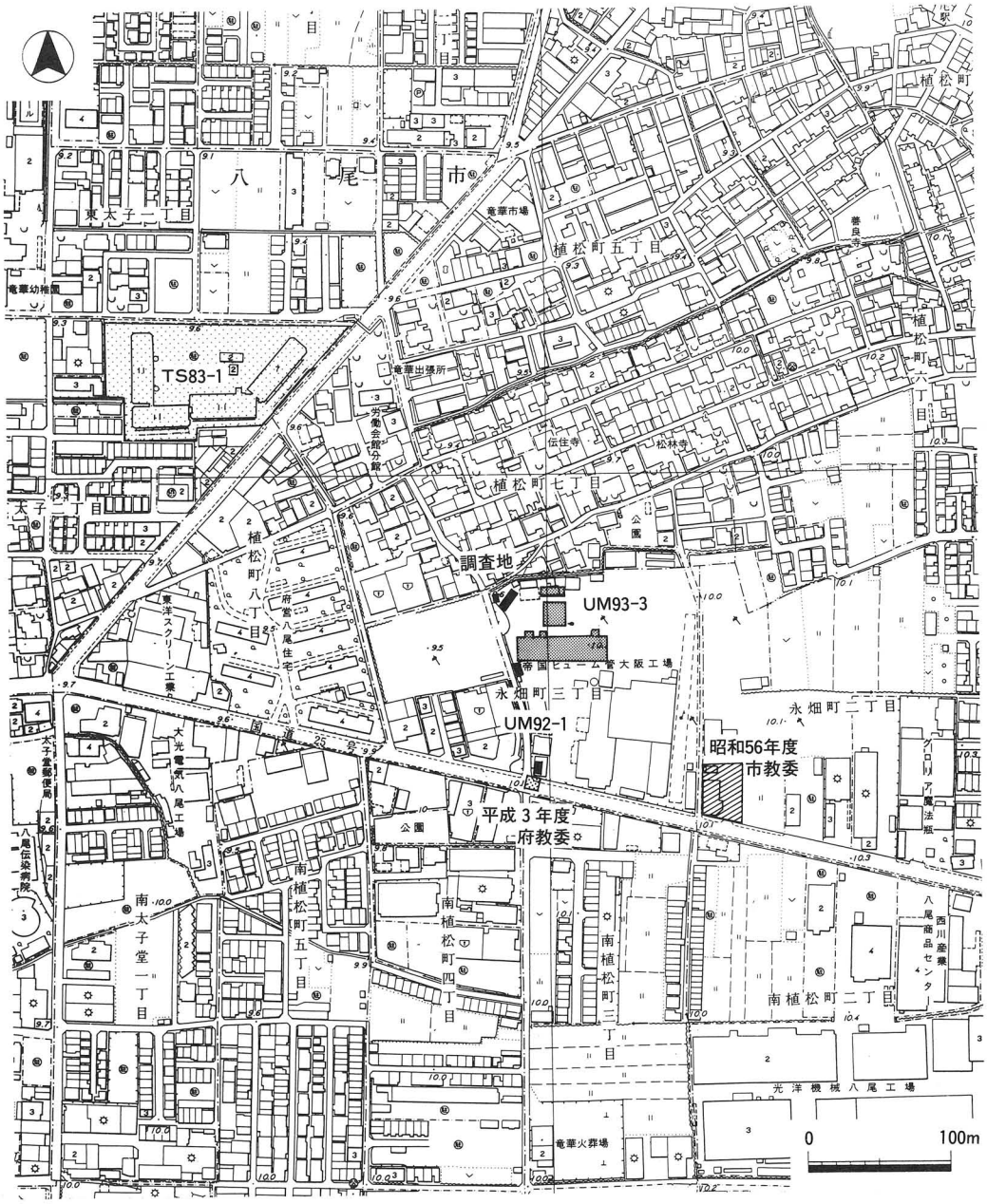
当遺跡の周辺には南に木の本遺跡、南西に八尾南遺跡、西に跡部遺跡・太子堂遺跡・亀井遺跡が同一沖積地上に存在している。また、今回の調査地の近隣では、古くは大和王権のころに物部一族と蘇我一族との闘いの痕跡が遺存している。調査地より西へ350ｍの所には物部守屋墳、北東へ300ｍの所には「旧大和川の一つである長瀬川東辺にあった龍華寺の大門付近にまつられてあったのが移された」と言い伝えられている大門地蔵、さらにそこから200ｍの所には植松の式内社で、「物部一族の祖神をまつったもの」と言われている渋川神社がある。調査地南部にはこれらの交通の往来として盛んに使用された奈良街道がある。この街道は現在国道25号線と称して、今なお八尾市の交通の主要道路として活躍している。調査地点としては南植松町３丁目交差点より北へ進入し、植松の旧村に続く道の東側にあたる。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅の下水道の立坑と防火水槽の工事に伴うもので、ニチメン（株）と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成５年４月20日～７月19日である。調査面積は約134.64㎡を測る。今回の調査は、当調査研究会が当遺跡で実施する第２次調査（UM93-2）である。

調査区は下水道工事の立坑と防火水槽設置部分の２ヶ所である。下水立坑（縦6.8ｍ×横3.6ｍで、面積24.48㎡）を第１調査区、防火水槽（縦5.4ｍ×横20.4ｍで、面積約110.16㎡）を第２調査区とした（第２図）。調査は鋼矢板を打ち付けた後、第１調査区より開始した。第１調査区は４月20日～26日、第２調査区は７月19日の期間で調査を実施した。掘削は現地表下約1.8ｍまでの土層を機械で行い、以下の土層については人力掘削及び機械の併用で実施した。最終



第１図　調査地位置図及び周辺図

調査深度は第１調査区が現地表下6.5ｍの工事掘削深度まで、第２調査区が現地表下4.0ｍの工事掘削深度までを確認した。

調査地は当遺跡推定範囲の南部にあたり、南東部約150ｍの所では昭和56年に八尾市教育委員会が店舗建設に伴う発掘調査を実施し、平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物を確認している。南部約150ｍの所では平成３年度に大阪府教育委員会が国道25号線上で公共下水道に伴う発掘調査を実施し、古墳時代から平安時代の土層を確認している。南部約50ｍの所では平成４年度に当調査研究会が下水工事に伴う第１次発掘調査を実施し、弥生時代前期から平安時代の包含層を確認している。

第２図　調査区設定図

２）　第１調査区

①　基本層序

第１調査区の基本層序は第３図のとおりである。

第１層　盛土・攪乱（層厚0.8～1.5ｍ）。工場（帝国ヒューム管）跡地の基礎と工場を取り壊した際のコンクリート片等である。

第２層　旧耕土（層厚20㎝）。耕土下の標高は9.5ｍを測る。道路（西）側の一部で確認した程度でほとんどが攪乱されている。

第３層　淡灰褐色シルト（層厚20㎝）。中世以降の土器の小片がごく少量含まれている。旧耕土と同様、道路（西）側の一部で確認した程度でほとんどが攪乱されている。

第４層　淡灰褐色細砂～粗砂（層厚4.5ｍ以上）。１～２㎝の礫を含む層が２～３層みられた。

第５層　暗灰色粘土（層厚20㎝）。植物遺体を含む。

第６層　灰青色粘質土（層厚１ｍ以上）。南から北へ落ち込んでいる。この上面が河川の左岸斜面の底面である。

②　検出遺構と出土遺物の状況

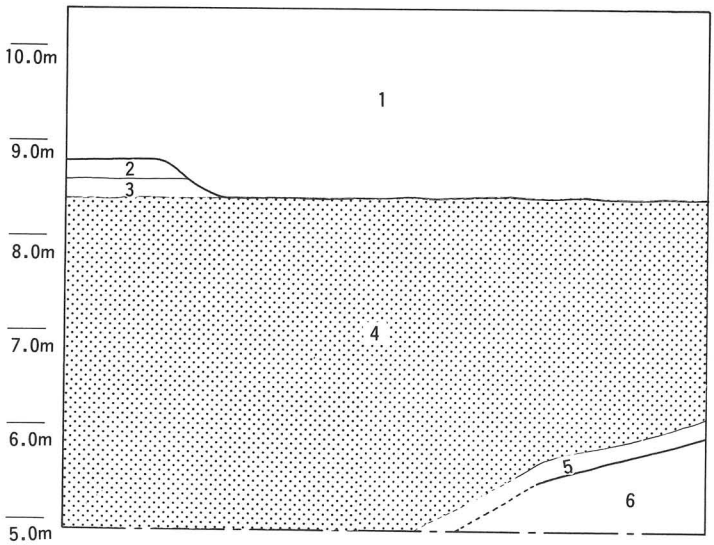
現地表（標高10.4ｍ）下約1.8ｍまで攪乱されていた。その下から、さらに工事掘削される深さまで掘削を実施し、下層の状況を確認した。その結果、現地表下６ｍ以上は河川の堆積する砂層であった。が、南部の一部で河川の床面と思われる粘土層を確認した。この層は約25度の傾斜があり、北へ落ち込んでいる。遺物は砂層内から古墳時代から平安時代に至る土器類がごく少量出土している。

３）　第２調査区

①　基本層序

第２調査区の基本層序は第４図のとおりである。

第１層　盛土・攪乱（層厚90㎝）。第１調査区と同様の盛り土である。



1　盛土及び攪乱　　4　淡灰褐色～乳灰色細砂～粗砂
2　旧耕土　　5　暗灰黒色粘土
3　淡灰褐色シルト　　6　暗灰青色粘土

第３図　東壁断面図

第２層　乳灰色細砂（層厚40㎝）。

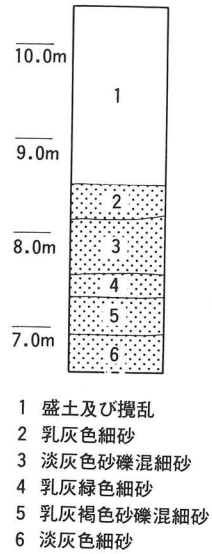
第３層　淡灰色砂礫混細砂（層厚20～40㎝）。

第４層　乳灰緑色細砂（層厚60㎝前後）。

第５層　乳灰褐色砂礫混細砂（層厚40～70㎝）。

第６層　淡灰色細砂（層厚50㎝以上）。

第２層～第６層は古墳時代～平安時代の河川の堆積層である。



第４図　第２調査区柱状図

②　検出遺構と出土遺物の状況

現地表（標高10.4ｍ）下約1.8ｍ前後までの土層は、工場跡の基礎によって攪乱されていた。第１調査区で検出した堆積層と同様、河川跡の砂層が調査区全体に堆積していた。遺物は砂層内から古墳時代の土師器・須恵器がごく少量出土している。

３．まとめ

今回の調査は、第１次調査で弥生時代前期～中期の遺物包含層・古墳時代前期の遺物包含層を検出している北部約50ｍ地点にあたる調査地であったが、調査の結果、古墳時代～平安時代の大規模な河川跡を検出した。この河川の流路の方向については、調査区内の状況では明確に言えないが、調査区の南部で八尾市教育委員会が平成４年度に実施した帝国ヒューム管八尾工場跡地の遺構確認調査で古墳時代前期の遺物包含層を検出しており、南側には砂層の堆積が確認されていない。また同年度、当調査研究会が実施した第１次調査の調査成果においても弥生時代前期～古墳時代前期の遺物包含層が存在することが確認されているが砂層の堆積は確認されていない。このことから判断すると東－西方向か南西－北西方向の河川であることがいえるであろう。検出した河川の北部約600ｍには旧大和川の主流の一つであった長瀬川がある。この河川は南東から北西方向の流路であり、検出した河川との関連が考えられる。今後の調査が進むに連れ、相互関係が明らかになるものと思われる。

また今回の調査では奈良時代以降の遺構・遺物を確認することはできなかったが調査区東部に近接する既往調査では平安時代前期の遺構・遺物が見つかっており、この調査区付近にも存在するであろう。

参考文献

○八尾市教育委員会「第２章　植松南遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980・1981年度』　1983.8

○八尾市教育委員会「４．植松遺跡(90－433)の調査」『八尾市内遺跡平成３年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告26　1992.3

第１調査区上層（北から）

第１調査区下層（南から）

第２調査区全景（西から）

第２調査区北壁断面（南から）

Ⅲ　太田川遺跡第１次調査（ＯＴＧ93－１）

例　　言

1．本書は、八尾市大竹１丁目で実施した電話地下管路新設工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する太田川遺跡第１次調査（ＯＴＧ93－１）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第64号　平成５年９月６日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がＮＴＴ関西から委託をうけて実施したものである。

1．現地調査は、平成５年12月15日から平成６年２月３日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。

調査面積は18.5㎡を測る。なお調査においては中西明美・西村和子・八田雅美・浜田千年・平沼寿隆が参加した。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子・山内千恵子が参加した。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

1．出土した石材の鑑定は、八尾市立曙川小学校教諭　奥田尚氏にお願いした。

本　文　目　次

1．はじめに……15

2．調査概要……16

1）調査の方法と経過……16

2）１区の調査……16

3）２区の調査……20

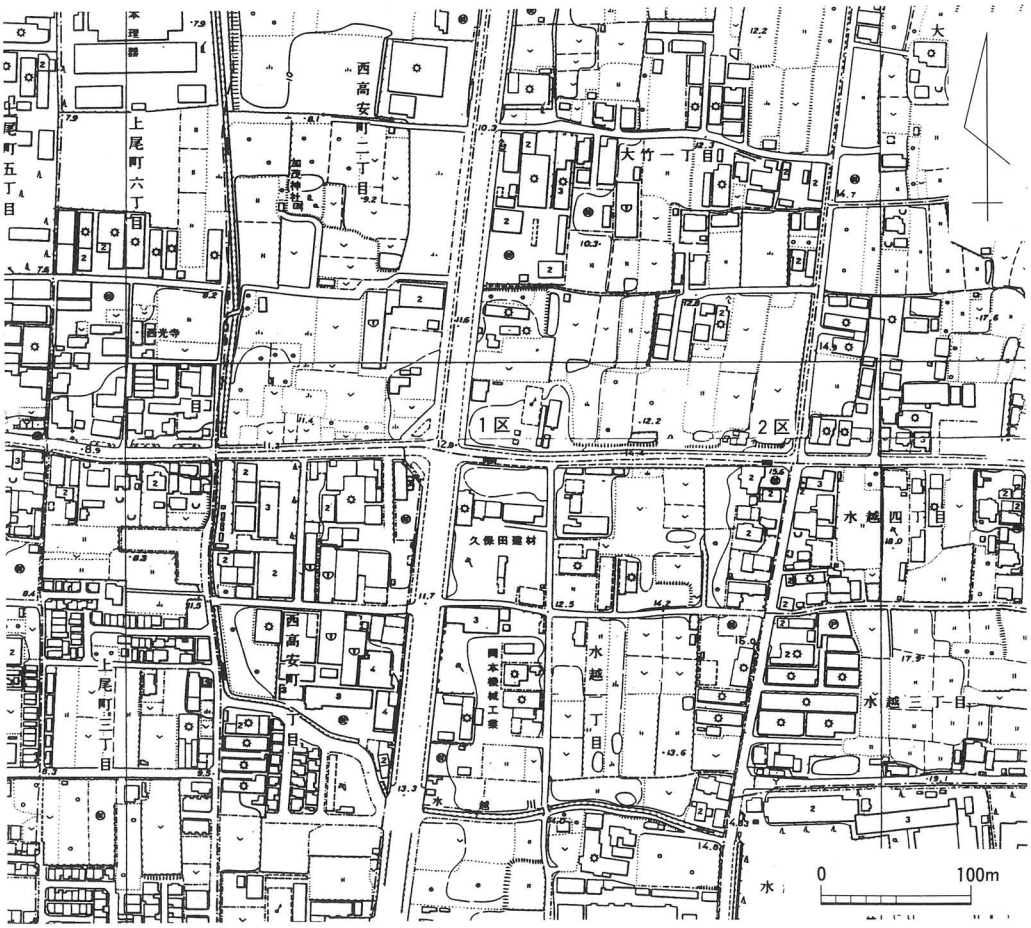
3．まとめ……21

Ⅲ　太田川遺跡第１次調査（ＯＴＧ93－１）

１．はじめに

太田川遺跡は八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では大竹１・３・４丁目、水越１・３・４丁目、西高安町１・２丁目がその範囲となっている。地理的には生駒山西麓の扇状地端部にあたり、西流する太田川と水越川に挟まれた地域であり、同地形上において北側で大竹西遺跡、東側で大竹遺跡、南側で水越遺跡に接している。

当遺跡が認識されたのは、昭和15年３月、東高野街道改修工事の際、滑石製勾玉・弓筈状木製品等を含む包含層が確認されたことによる。そして昭和56年以降、八尾市教育委員会・大阪府教育委員会により調査が実施され、弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物が確認されている。



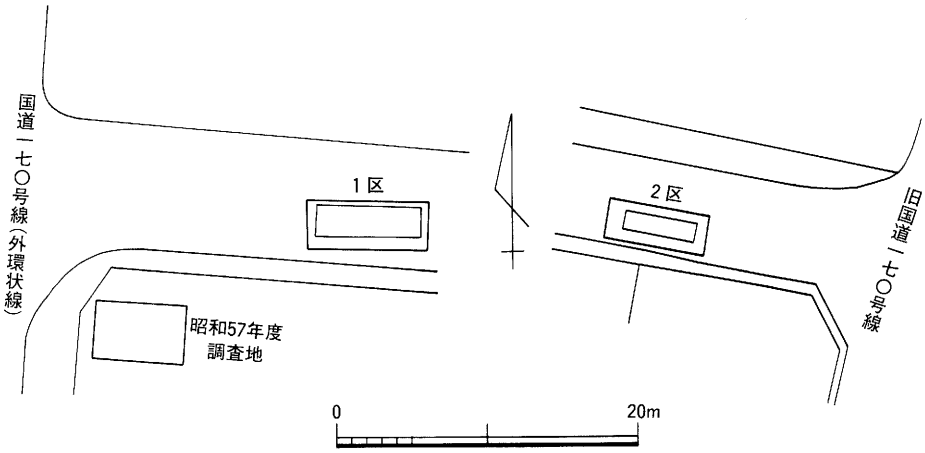
第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／5000）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は電話地下管路新設工事に伴うもので、当調査研究会が太田川遺跡内で行った第1次調査である。調査は立坑部分を対象としており、約180mの間隔で2か所（1・2区）に分かれている。なお1区の南西約15m地点では、昭和57年6月に八尾市教育委員会により発掘調査が実施されている。

調査は、1区では現地表下約2.7mまでの盛土を機械掘削し、以下の約1.4mを人力及び機械掘削により行った。2区では現地表下約2.6mまでの盛土を機械掘削し、以下の約0.9mを人力及び機械掘削により行った。



第2図　調査区設定図（S＝1／500）

2）1区の調査

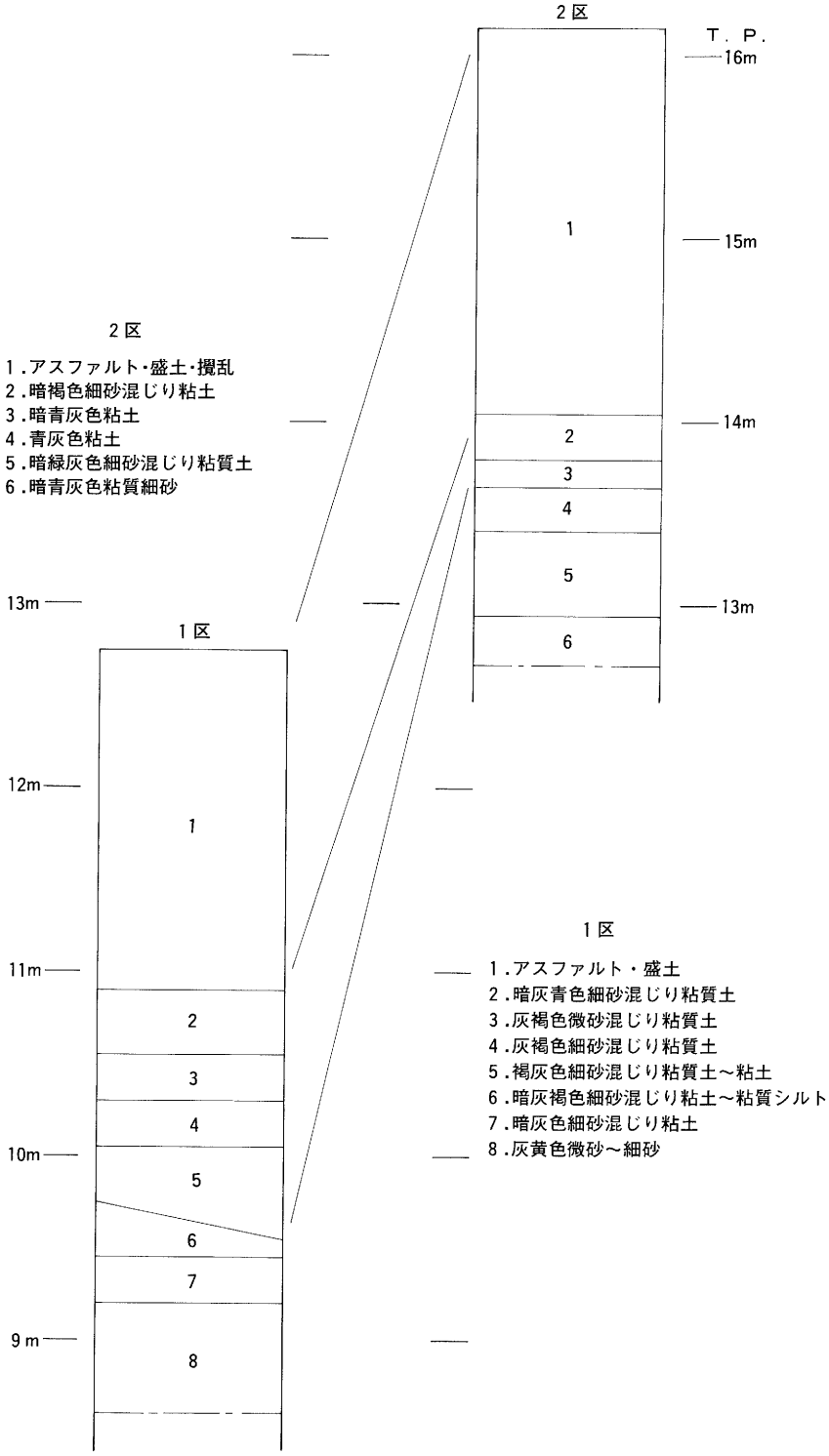
・基本層序

第1層がアスファルト・盛土である。第2～4層は機械により掘削したが、遺物は検出されなかった。第5層は時期不明の土師器を含み、この上面が第1次面で、標高約10.05mを測る。第6層には弥生時代後期～古墳時代前期（庄内式期）の土器が少量含まれる（11・12）。この上面が第2次面で、標高約9.75m～9.55mを測る。第8層上面が第3次面で、標高約9.45mを測る。第8層の砂層からは遺物は出土していない。

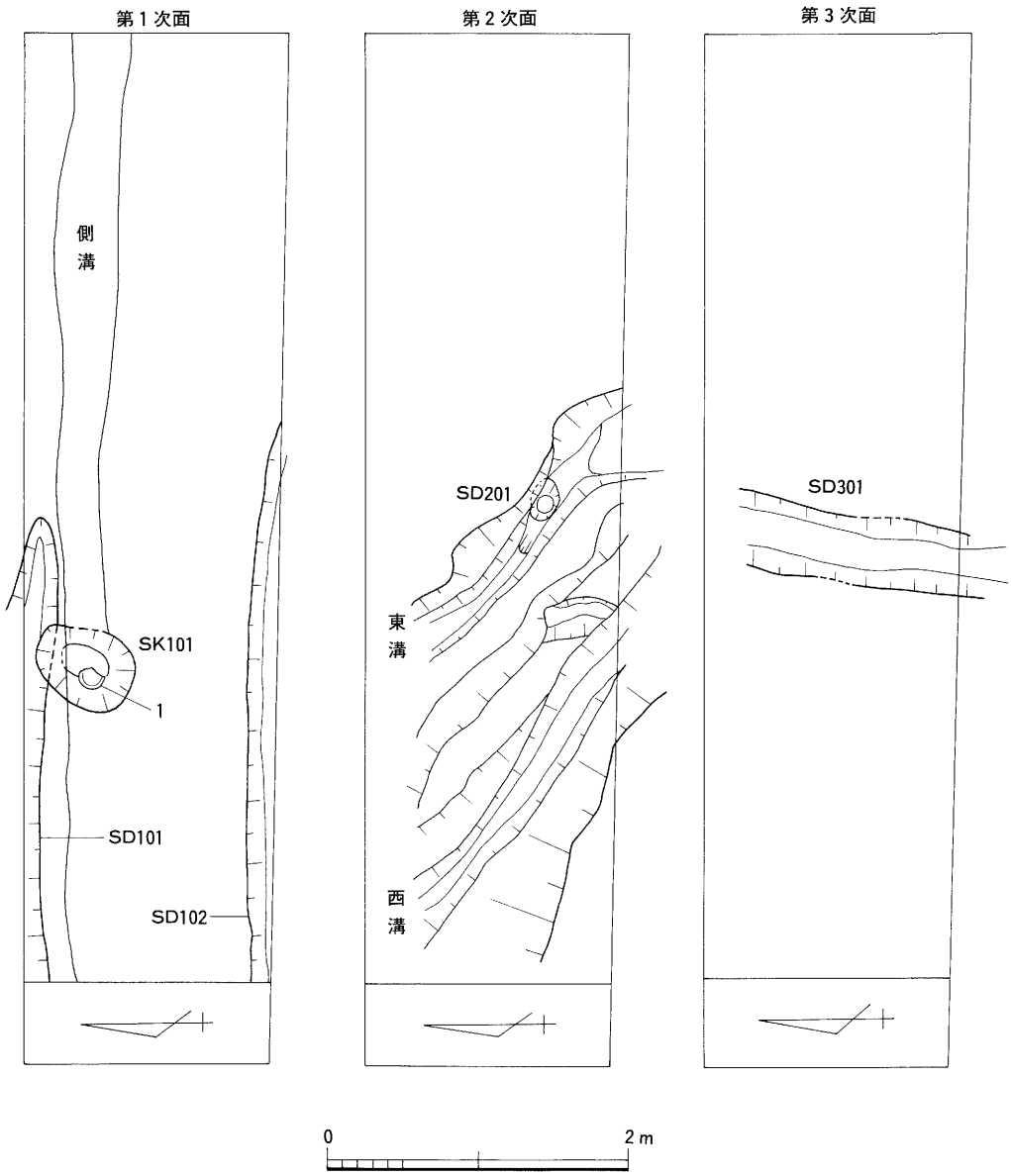
・検出遺構と出土遺物

〈第1次面〉

第5層上面で土坑1基（SK101）・溝2条（SD101・102）を検出した。



第３図　基本層序（Ｓ＝１／40）



第４図　１区遺構平面図（Ｓ＝１／50）

ＳＫ101

平面形は68㎝×53㎝の扁円形を呈し、北部はＳＤ101に切られている。深さ約51㎝を測り、断面形状はＵ字形で、埋土は上から明褐色細砂混じり粘質土・黄灰褐色細砂混じり粘質シルト・灰黄色粘質シルト・灰黄色微砂混じり粘質シルトである。柱穴の可能性がある。

遺物は最下層から奈良時代に比定される土師器皿が１点出土している（１）。口縁部の1/2を

欠いており、法量は口径17.4㎝・器高3.0㎝を測る。内面は放射状暗文を施し、底部外面には木の葉痕が残る。

ＳＤ101

調査区の北端で検出した東西方向の溝で、全容は不明である。検出長3.1ｍ・深さ約８㎝を測り、埋土は明褐色砂質土である。遺物は出土していない。

ＳＤ102

調査区の南端で検出した東西方向の溝で、全容は不明であるがＳＤ101に平行しているようである。検出長3.75ｍ・深さ約40㎝を測り、埋土は上から淡褐灰色細砂混じり砂質土・褐灰色微砂粘質土・黄灰褐色粘質シルトである。出土遺物には土師器甕（２）がある。

〈第２次面〉

第６層上面で溝１条（ＳＤ201）を検出した。

ＳＤ201

北西－南東方向の溝で、検出長約2.5ｍ・幅1.6ｍ～1.85ｍを測る。検出面のレベルは西部が約20㎝高く、斜面に掘削されていたか、あるいは東部が削平されているのかは不明である。横断をみると底部の中央が高いため２条の平行する溝状を呈する。両溝は２段に掘られ、東溝は幅約0.8ｍ・深さ約35㎝、西溝は幅0.6ｍ～1.1ｍ・深さ約40㎝で、底部幅は両溝とも10㎝～20㎝を測り、底部のレベルは東溝が約15㎝低い。埋土は上層が灰黄褐色系微砂～シルト、２段目部分にあたる下層が灰褐色礫混じり粗砂・細砂であり、流水していた状況が窺える。

遺物は土師器の甕（３）・高杯（４～６）、須恵器の杯（７～９）の他、図化しえなかったが製塩土器が出土している。また有孔石製品の未製品が１点出土している（10）。これらの時期は５世紀末～６世紀初頭頃に比定される。

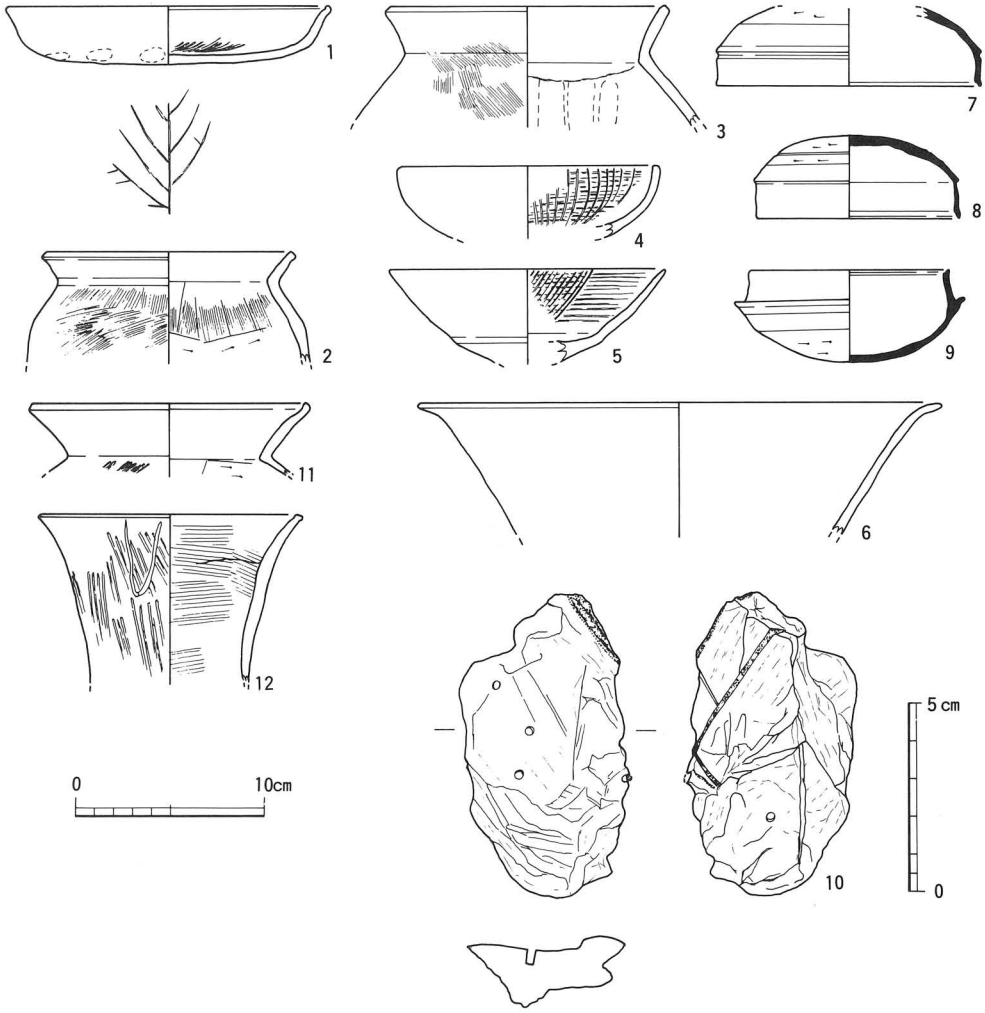
（10）は長さ8.1㎝・幅4.3㎝・厚さ1.9㎝を測る。表面から４か所、裏面から１か所の円孔（直径約２㎜・深さ２㎜～４㎜）を穿っている。材質は滑石で、色調は緑灰色を呈する。蛇紋岩を含み質の悪いものである。

〈第３次面〉

第８層上面で溝１条（ＳＤ301）を検出した。

ＳＤ301

南北方向の溝で、第７層上面から掘られている。規模は検出長1.8ｍ・幅約48㎝を測る。断面形状はＵ字形で、深さ約42㎝を測り、埋土は上層が暗褐色細砂混じり粘質シルト、下層が暗灰色細砂混じり粘土である。遺物は出土していないが、この面を覆う第６層出土遺物（11．12）から時期は弥生時代後期から古墳時代前期（庄内式期）と考えられる。



第５図　１区出土遺物（Ｓ＝１／４、１／２）

３）２区の調査

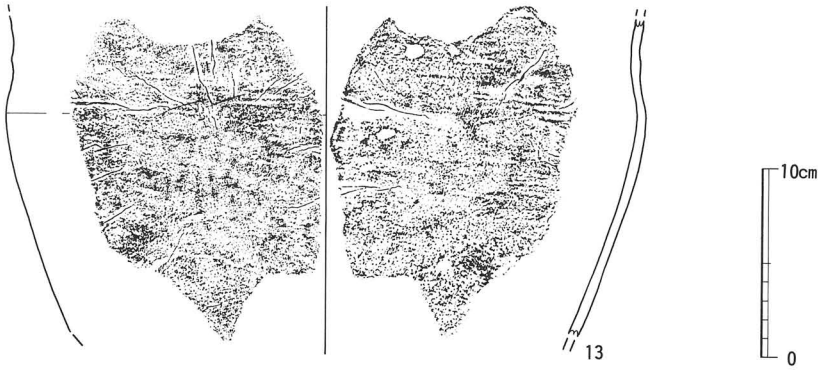
・基本層序

第１層がアスファルト・盛土・攪乱層である。第２層が１区の第６層（弥生時代後期の包含層）に対応すると考えられる。第５層から縄文時代晩期頃の土器片が出土している。

・検出遺構と出土遺物

層理に従って掘削・精査を行ったが、遺構は検出されなかった。出土遺物は第５層から出土した縄文時代晩期に比定される土器１点である（13）。第６層上面が当該期の遺構面となる可能性がある。

(13)は深鉢の頸部～体部で、法量は体部径34.2㎝・残存高16.0㎝を測る。色調は淡茶色で、胎土中には１㎜位までの砂粒が多く含まれる。調整は外面が頸部－横方向、体部－左上り、内面が横方向の条痕文である。



第６図　２区出土遺物（Ｓ＝１／４）

３．まとめ

今回の調査では縄文時代晩期から奈良時代の遺構・遺物を検出した。出土遺物量は、コンテナ１箱である。

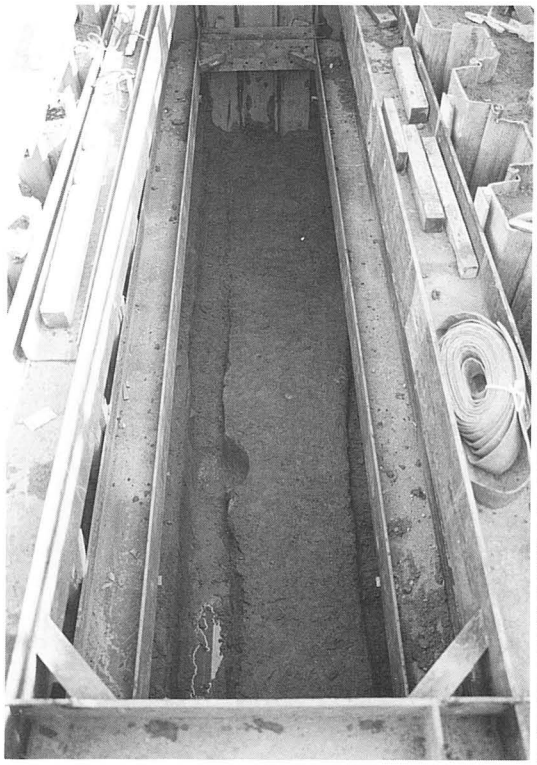
１区南西部に位置する前述の昭和57年度調査区では、弥生時代後期の包含層・溝状遺構から多量の土器が出土しているが、当調査区では土器の包蔵は希薄なものであった。

１区で当遺跡内では初めての奈良時代の遺構が検出された。古墳時代ではＳＤ201から出土した有孔石製品の未製品（10）は、その製作工程を復元する上で重要なものである。また周辺の水越遺跡・福万寺遺跡等の玉造関連遺跡と当遺跡との関係も注目される。

２区では縄文時代晩期の包含層と考えられる土層を確認した。滋賀里式に比定される深鉢片１点が出土している（13）。縄文時代の集落は、恩智遺跡や当遺跡南側の水越遺跡等、生駒山西麓の扇状台地に分布しており、その拡がりが確認されたといえよう。

参考文献

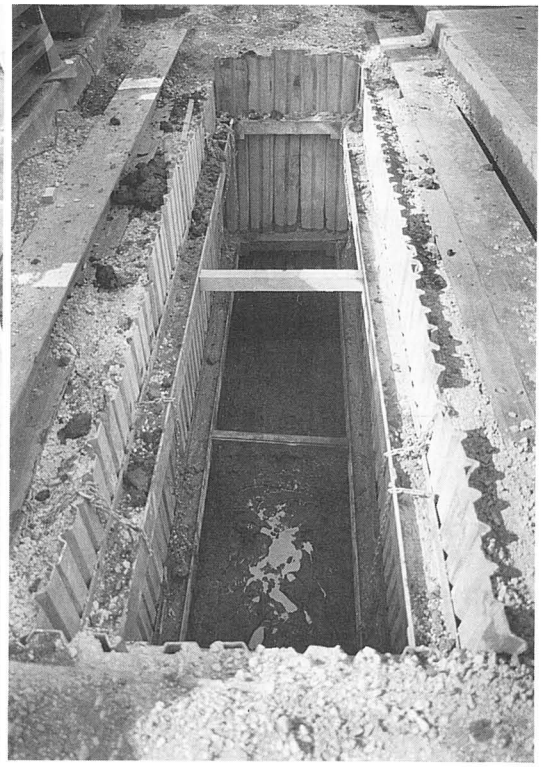
（財）八尾市文化財調査研究会「第３章　太田川遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要昭和56・57年度』1983（（財）八尾市文化財調査研究会報告３）



1区　第1次面（西から）

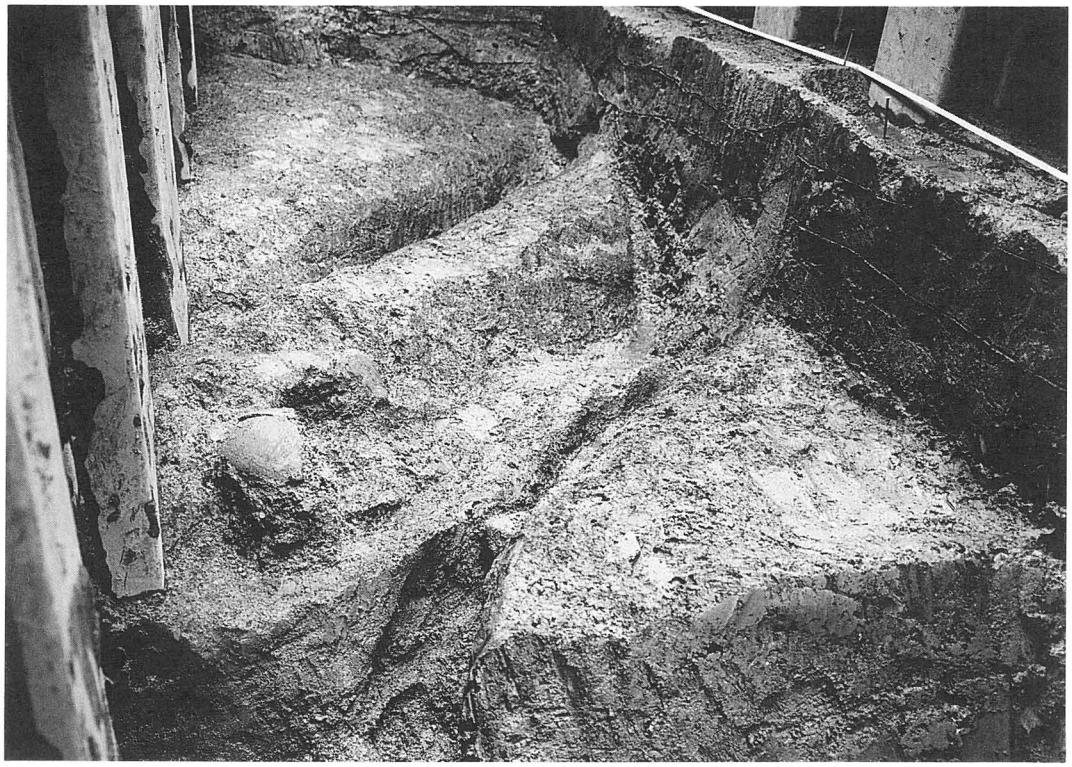
1区　第2次面（西から）

1区　第3次面（西から）



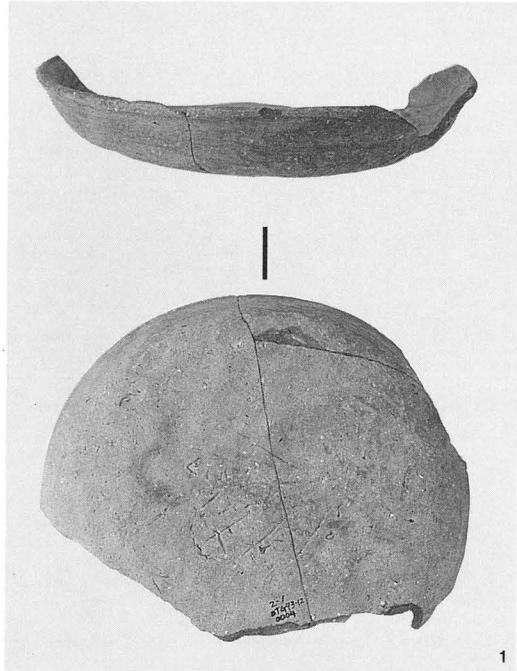
2区　全景（東から）

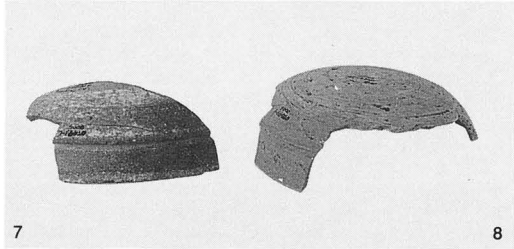
１区　ＳＫ101（南から）

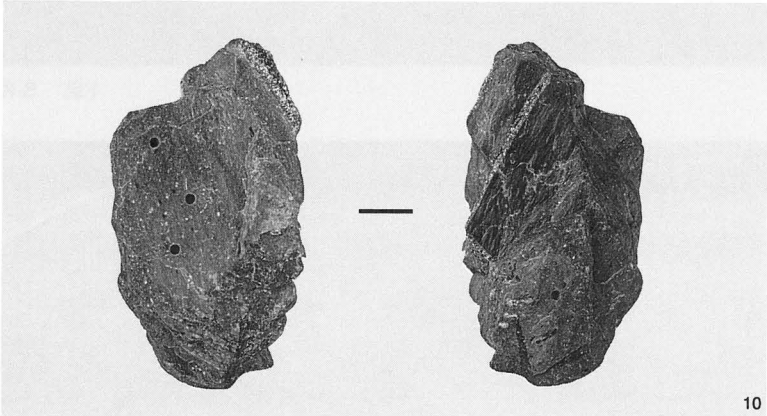


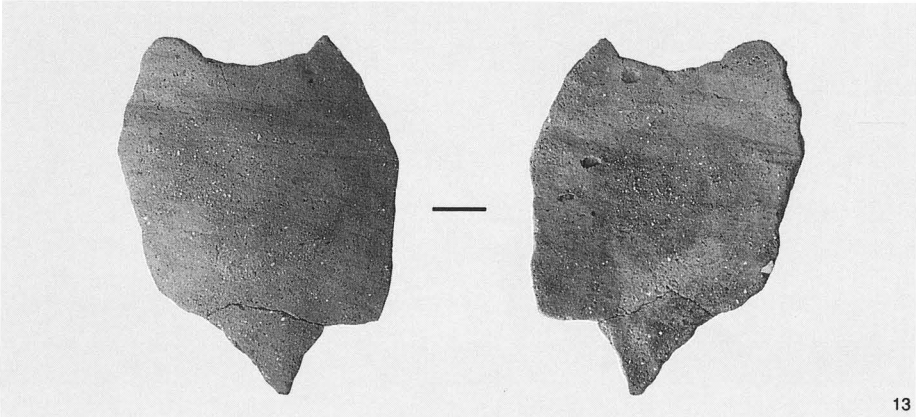
１区　ＳＤ201（東から）

図版三









Ⅳ　久宝寺遺跡第16次調査（ＫＨ93－16）

例　　言

1．本書は、八尾市北亀井町３丁目地内で実施した公共下水道工事（平成５年度第93工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第16次（ＫＨ93－16）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第27号　平成５年５月24日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年５月31日～６月８日にかけて、高萩千秋・岡田清一を調査担当として実施した。調査面積は25㎡である。なお、発掘調査は夜間調査であった。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物写真－八田雅美、本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……25

2．調査概要……26

　1）調査の方法と経過……26

　2）基本層序……26

　3）検出遺構と出土遺物……27

3．まとめ……28

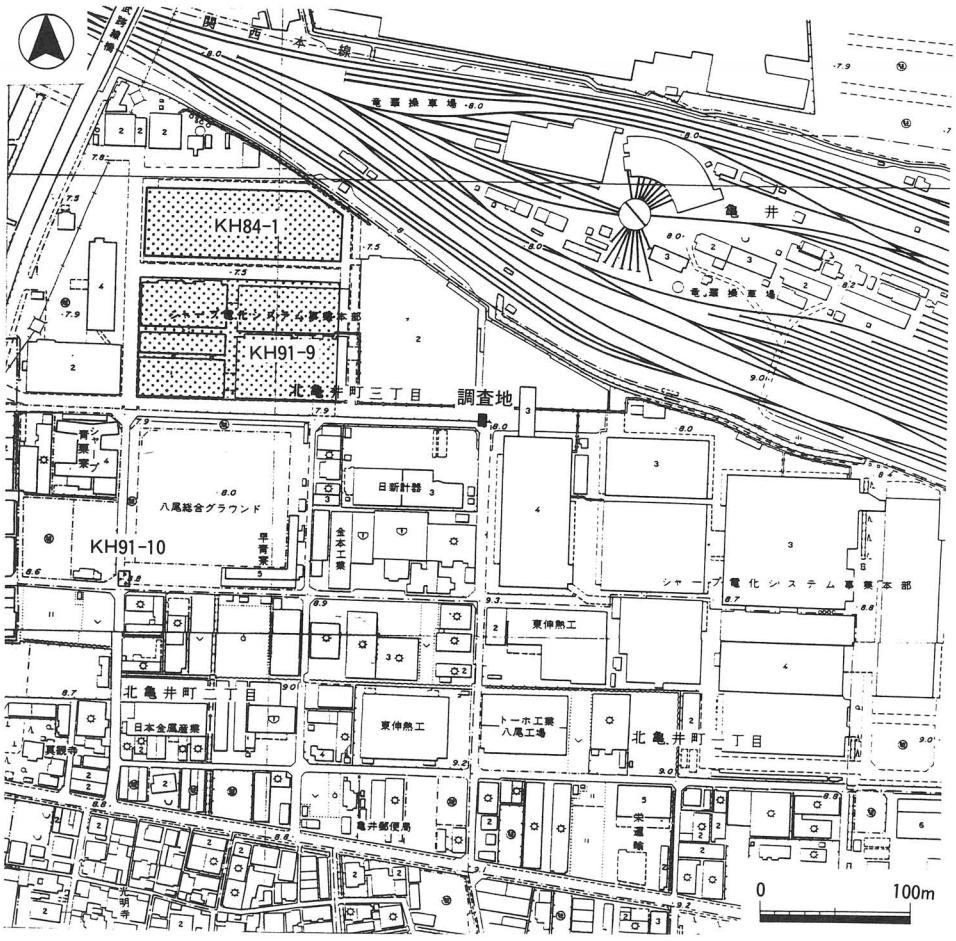
Ⅳ　久宝寺遺跡第16次調査（ＫＨ93－16）

１．はじめに

久宝寺遺跡は、八尾市の西部にあたる久宝寺一帯に存在する弥生時代～近世に至る複合遺跡で、旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に位置する。現在の標高はT.P.+８～９ｍを測る。

周辺には当遺跡と同様、弥生時代から近世に至る遺跡が密集している。東には跡部遺跡、西には竹渕遺跡・加美遺跡（東大阪市）、南には亀井遺跡、北には美園遺跡などが接している。

隣接の調査では第５次調査（KH90-5）で弥生時代中期の土器（甕）棺、第９次調査（KH91-9）で古墳時代初頭の小型銅鏡（重圏文鏡）が出土した竪穴住居群、古墳時代前期の前方後方



第１図　調査地位置図

墳（墳丘長35ｍ）１基・方墳３基などが検出している。

今回の発掘調査は、公共下水道（第93工区）工事に伴うもので、当調査研究会が当遺跡で実施した第16次調査にあたる。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

調査地は久宝寺遺跡の西部で、調査は下水道工事の立孔部分（縦6.8×横3.6ｍ）の約25㎡を対象にしたものである。掘削は現地表下1.6ｍまでを機械で行い。以下、工事掘削で破壊される現地表下6.9ｍまでの土層を人力及び機械の併用で掘削を行うことになった。しかし、矢板を打っていない既設ケーブル下の部分から大量の地下水があり調査不能となり、現地表下約4.5ｍまでの調査で打ち切った。また、調査区が工場敷地内であり、日中の作業ができない為、夜間の発掘調査を行った。調査期間は平成５年５月31日～６月８日で、うち３日間である。調査面積は約25㎡を測る。

２）基本層序

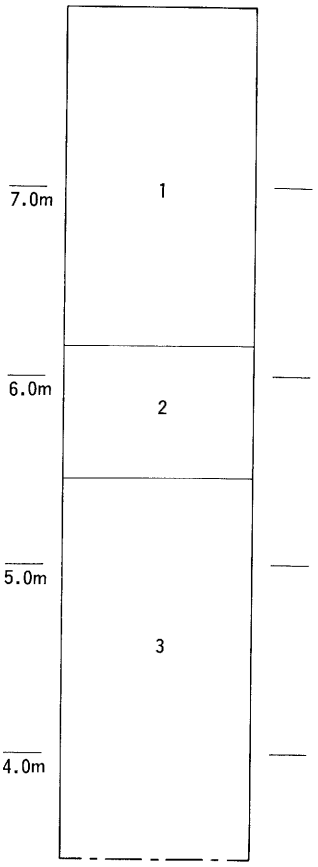
調査区の基本層序は、第２図に示すとおり３層に分けられる。

第１層：盛土（層厚1.0～1.6ｍ）。アスファルト・バラス・埋め土等である。
一部で暗灰色シルト層を確認した。

第２層：暗灰色粘質シルト（層厚70㎝）。植物遺体を含む。下位では奈良時代の遺物が少量含まれている。

第３層：灰青色細砂（層厚200㎝以上）。自然木・植物遺体を含む。

第１層は中世から近世までの土層で、ほとんどが道路工事によって攪乱されており、近代井戸の残存を検出しただけで、中世～近世の時期の遺構状況を掴むことができなかった。



1 盛土
2 暗灰色粘質シルト
3 青灰色細砂

第２図　基本層序柱状図

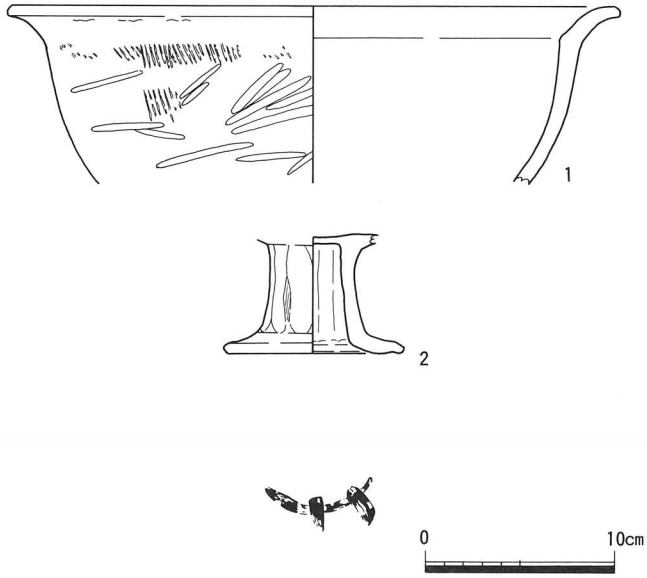
３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、第２層上面で奈良時代～近代に至る遺構・遺物を検出した。遺構は奈良時代に比定される自然河川（ＮＲ－１）１条、近代に比定される井戸（ＳＥ－１）１基である。出土遺物は、奈良時代に至る遺物がごく少量出土した。

自然河川（ＮＲ）

ＮＲ－１

調査区全体で確認した。流路・規模などは不明であるが、第２層～第３層の堆積土層から河川跡と思われる。第２層内には植物遺体の沈澱層が含まれ、第３層では自然流木・枯葉などが沈澱しており、穏やかな流れであったと考えられる。遺物は第２層下位の部分に含まれていた。遺物は奈良時代に比定される鉢（１）・高坏（２）の２点である。鉢は１／４程の口縁部片で、復元口径は32cmを測る。外面は叩き目や接合痕が残る粗いヘラミガキ調整、内面はナデである。高坏には脚部片のみで、脚部底径は９cmを測る。外面はヘラケズリで８面に面取りしている。内面は記号のようにみえる墨書が書かれている。



第３図　ＮＳ－１出土遺物実測図

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

調査区の南西部で検出した井戸側を備えた井戸を検出した。井戸の掘形は西半部が調査区外に至り、全形は不明であるが、東側の井戸枠は、現地表面から約1.4ｍの所で「コ」字形の枠を検出した。南北辺は約80㎝を測り、方形の枠をもつ井戸と思われる。堆積土は、暗灰青色砂混じり粘土である。遺物は、井戸側内から近代の煉瓦片がごく少量出土しており、現工場建設（昭和初期）まで使用されていたものであろう。

3．まとめ

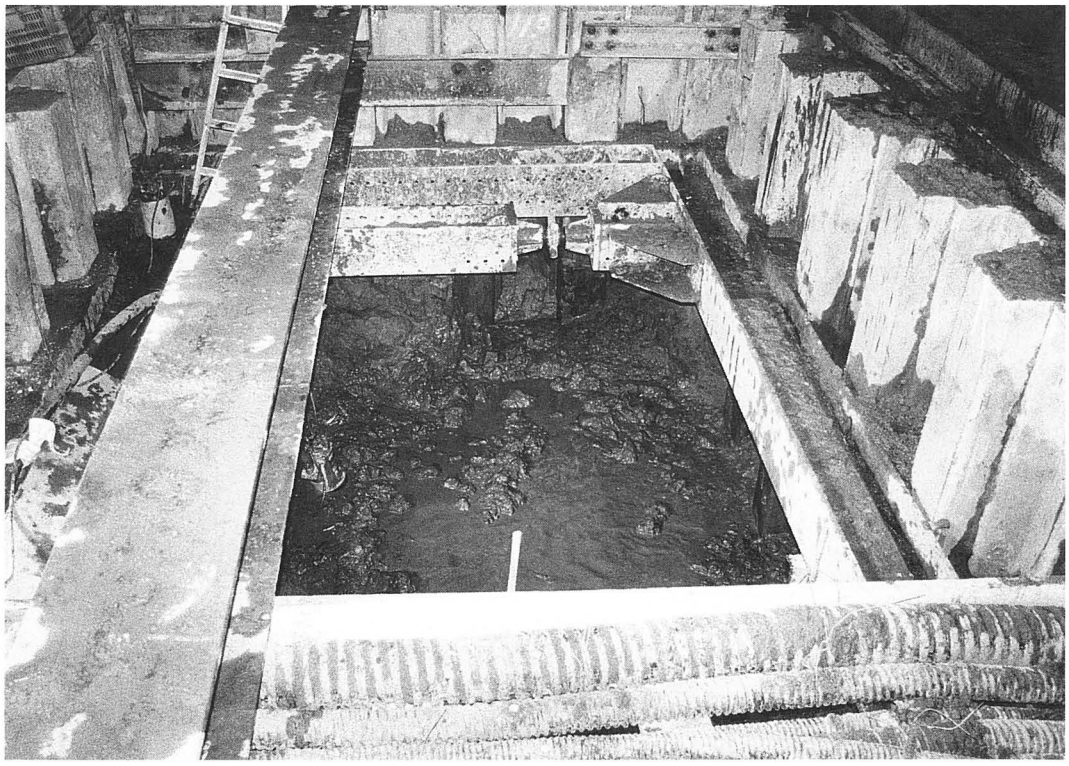
今回の発掘調査は工場敷地内の道路敷面下である。しかも小面積で夜間という最悪の調査であり、土層などの色調がわかりにくく、遺構を検出することが非常に難しい調査であった。

調査区は、第９次調査（KH91-9）で古墳時代前期の前方後方墳を検出した調査区より東へ約100ｍの地点にあたり、それに関連する遺構が予想されたが、地表下1.8ｍまでの土層は、ほとんどが工場施設の埋設管（ケーブル・ヒューム管など）による掘削工事で攪乱されており、その状況を掴むことができなかった。調査区では奈良時代の河川跡と思われる堆積土が確認されただけであった。奈良時代以前のものは削平された可能性が考えられ、周辺調査では要注意が必要である。

参考文献

○（財）八尾市文化財調査研究会「１久宝寺遺跡（第５次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』八尾市文化財調査研究会報告32　1990」

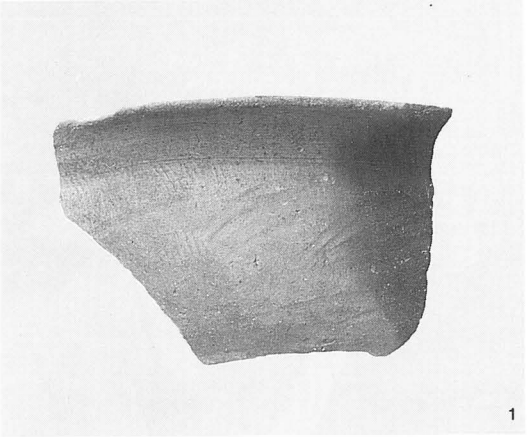
○（財）八尾市文化財調査研究会「13久宝寺遺跡第８次調査（ＫＨ91－９）」『17久宝寺遺跡第13次調査Ｄ久宝寺遺跡第13次調査（ＫＨ93－13）」『平成３年度事業報告』　1991



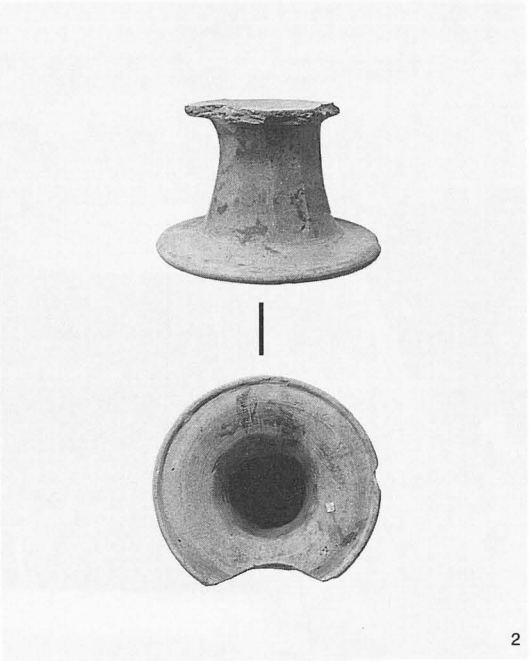
調査区全景（南から）

南壁断面（北から）

図版二



NR－1



Ⅴ　小阪合遺跡第25次調査（ＫＳ93－25）

例　　言

1．本書は、八尾市青山町２丁目５番地で実施した公共下水道工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する小阪合遺跡第25次調査（ＫＳ93－25）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第 162号　平成５年２月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託をうけて実施したものである。

1．現地調査は、平成５年４月２日から７月９日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は44㎡を測る。なお調査においては山内千恵子・垣内洋平が参加した。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が参加した。

1．本書の執筆…写真撮影及び編集は坪田が行い、出土遺物観察表は主に田島が作成した。

本　文　目　次

1．はじめに……31

2．調査概要……32

　1）調査の方法と経過……32

　2）基本層序と出土遺物……32

　3）検出遺構と出土遺物……34

　4）出土遺物観察表……36

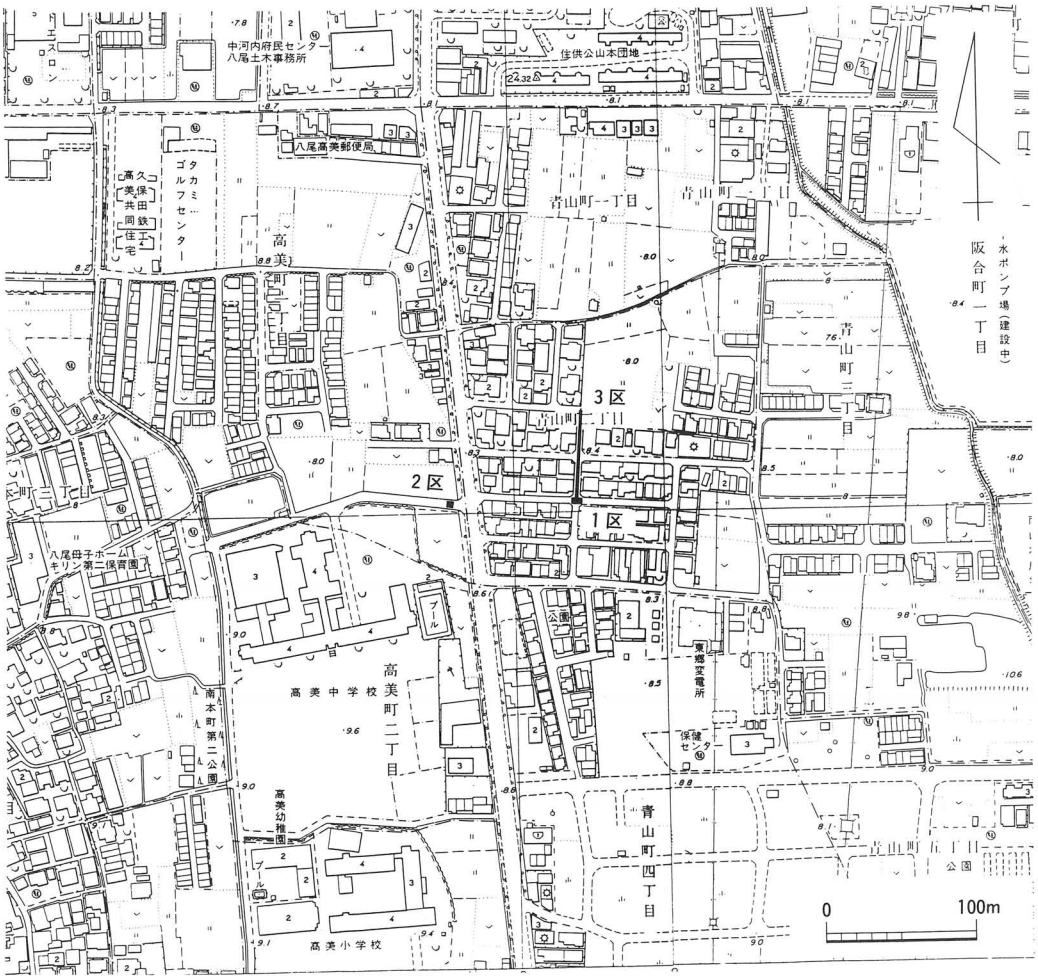
3．まとめ……36

Ⅴ　小阪合遺跡第25次調査（ＫＳ93－25）

１．はじめに

小阪合遺跡は八尾市のほぼ中央部に位置し、現在の行政区画では小阪合町１・２丁目、南小阪合町１・２・４丁目、青山町１～５丁目、若草町、山本町南７～８丁目がその範囲にあたる。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置し、同地形上で東郷遺跡・成法寺遺跡・矢作遺跡・中田遺跡と接している。

当遺跡内では昭和57年以降、土地区画整理事業等に伴う発掘調査が、大阪府教育委員会・八尾市教育委員会・当調査研究会により実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期から近世に至る遺跡であることが確認されている。



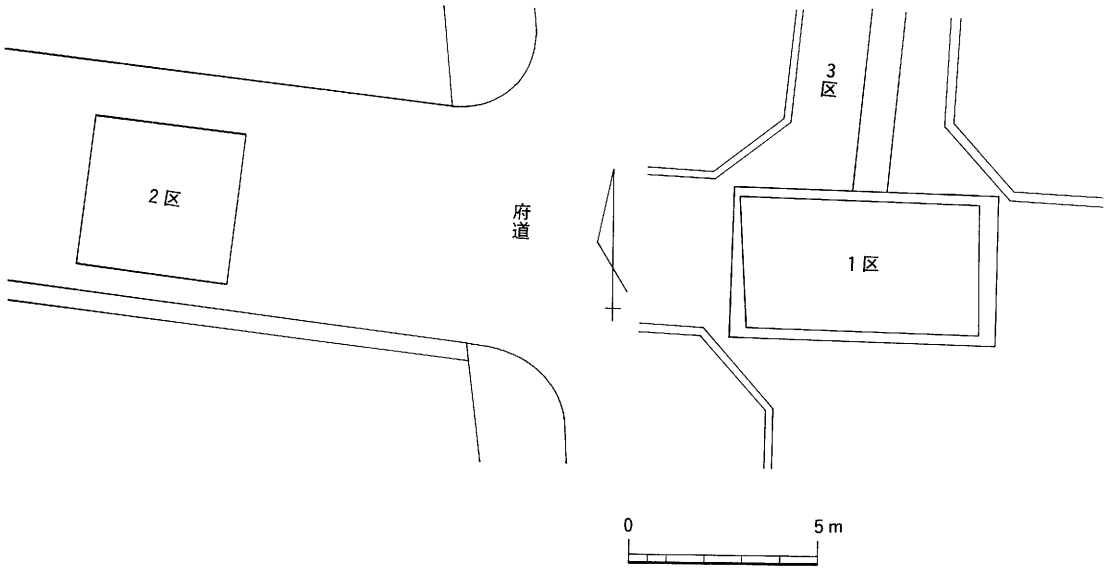
第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／5000）

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は公共下水道工事に伴う調査で、当調査研究会が小阪合遺跡内で行った第25次調査である。調査区は立坑部分２か所（１・２区）と、１区に伴う南北方向の布設管トレンチ部分約56m（３区）に分かれている。

調査は、１・２区では現地表下約0.7mまでを機械掘削とし、以下約0.8mを人力掘削により実施した。さらに１区では地盤改良の為の薬剤注入工事の後、ライナープレート設置工事に並行して下層確認のための立会調査を実施し、断面観察・遺物採集を行った。しかし薬剤注入により立坑内の地盤はほとんどセメント化した状況であり、土層の観察が行えたのは部分的なものであった。２区では工事の都合上、包含層途中までの掘削で調査を断念した。３区では布設管埋管に伴う機械掘削について立会調査を実施し、主に土層観察を行った。



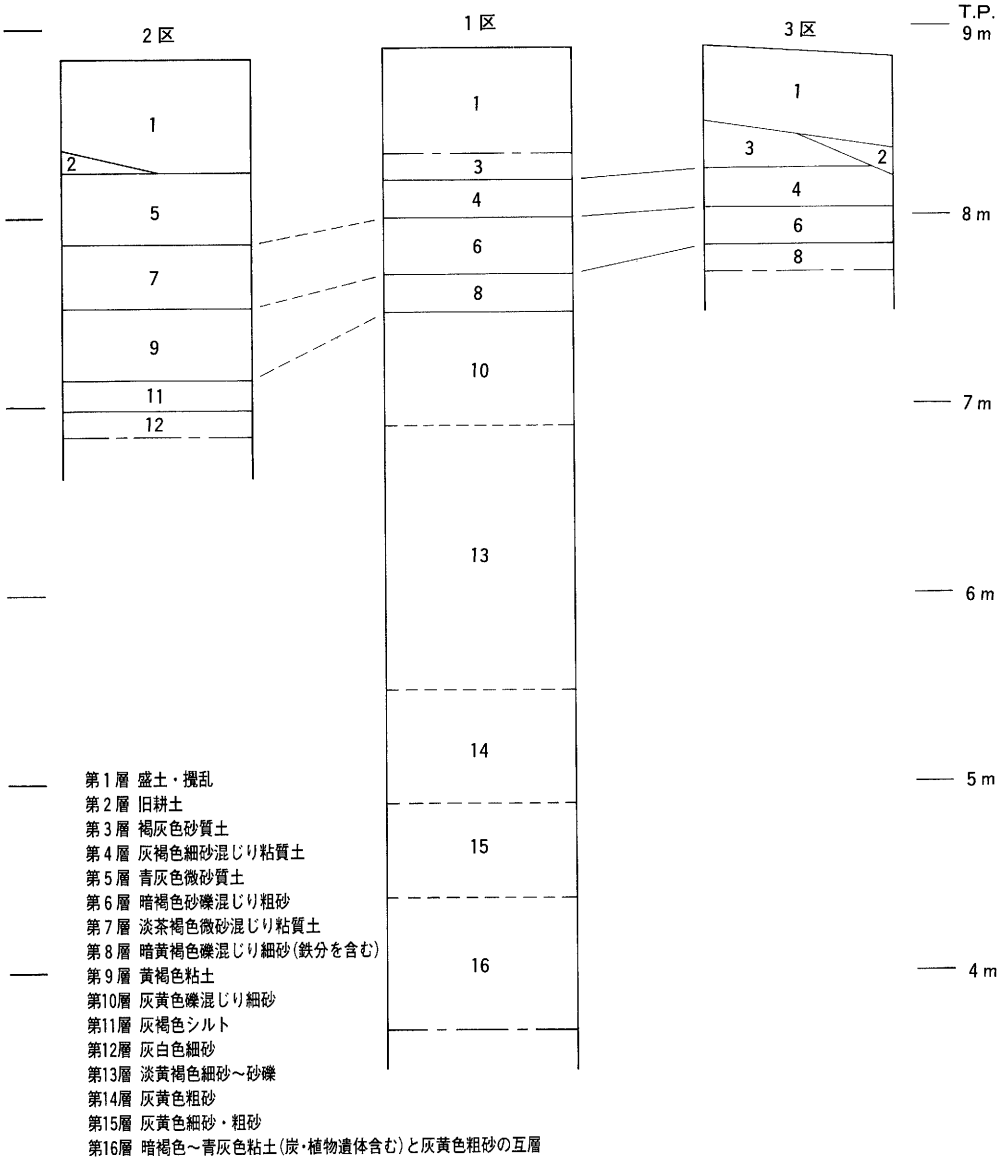
第２図　調査区設定図（S＝１／200）

2）基本層序と出土遺物

第１・２層は近世の盛土・攪乱・旧耕土である。旧耕土は２区で部分的に、また３区の北部でみられた。第３～５層は弥生時代後期から近世までの遺物を含んでいる。近世の整地層とも考えられる。第６・７層は古墳時代中期頃の包含層であり、１区第６層からは平行タタキを施す韓式系土器の平底鉢口縁部が出土している。また２区第７層からは埴輪片が出土している。

１区では第８層以下は砂層が続き、河川堆積土と考えられ、弥生時代中期頃から古墳時代前期（布留式期）までの土器を含んでいる。弥生時代のものはかなり摩滅したものが多い。

２区では第９層の上層部に布留式期の土器が少量含まれているが、中～下層は遺物を含んでいない。第11層上面が遺構面となると考えられるが、工事の都合でここまでの掘削はできなかったため遺構検出は実施していない。第10・11層以下は湧水が著しい。２区第12層は弥生時代後期末頃の自然河川と考えられる。



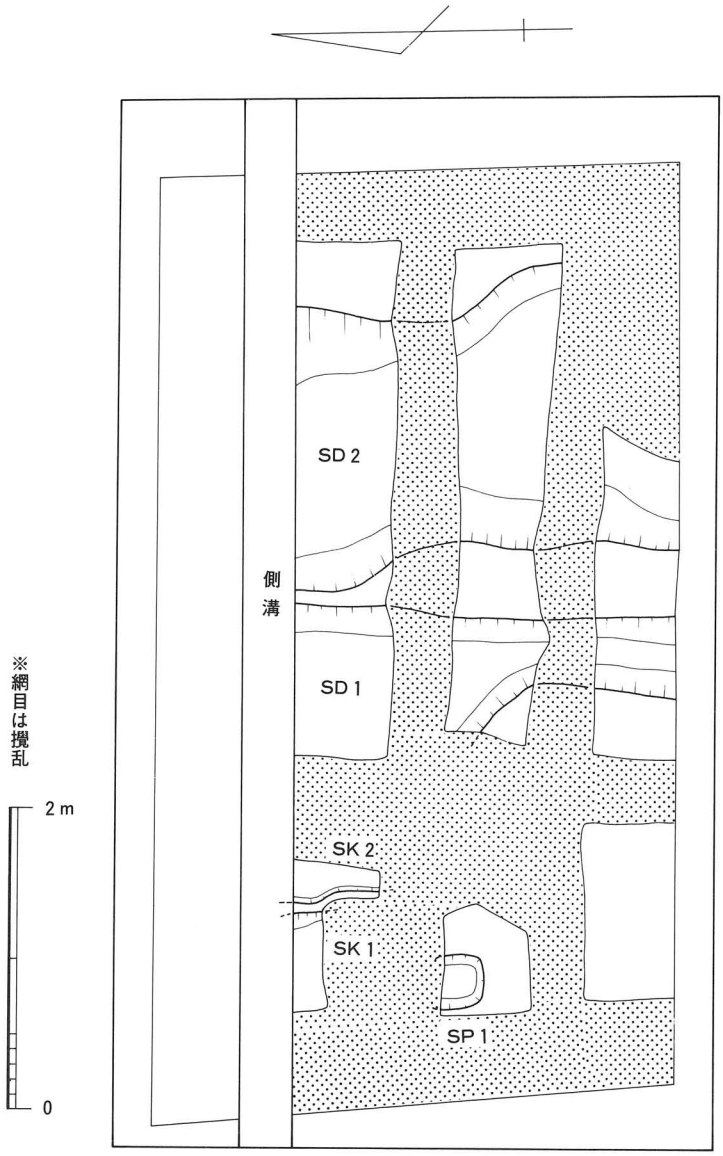
第３図　基本層序（Ｓ＝１／40）

3）検出遺構と出土遺物

遺構を検出しえたのは１区のみである。遺構面は水道管等の埋設による攪乱によってかなり分断されていたものの、第５層上面で土坑２基（ＳＫ１・２）、溝２条（ＳＤ１・２）、ピット１個（ＳＰ１）を検出した。

ＳＫ１

調査区北西部で検出したが、平面形は不明である。法量は65㎝以上×20㎝以上、深さ約８㎝を測り、埋土は暗灰褐色細砂混じり粘質土である。



第４図　１区遺構平面図（Ｓ＝１／50）

ＳＫ２

ＳＫ１の東部に隣接しており、平面形は不明である。法量は30㎝以上×58㎝以上、深さ約５㎝を測り、埋土はＳＫ１同様、暗灰褐色細砂混じり粘質土である。

ＳＤ１

調査区中央で検出した南北方向の溝で、法量は幅46㎝～100㎝、深さ約10㎝を測る。南部で幅が狭くなっている。埋土は淡灰褐色細砂混じり粘質土である。時期不明の土師器・須恵器の小片が少量出土している。

ＳＤ２

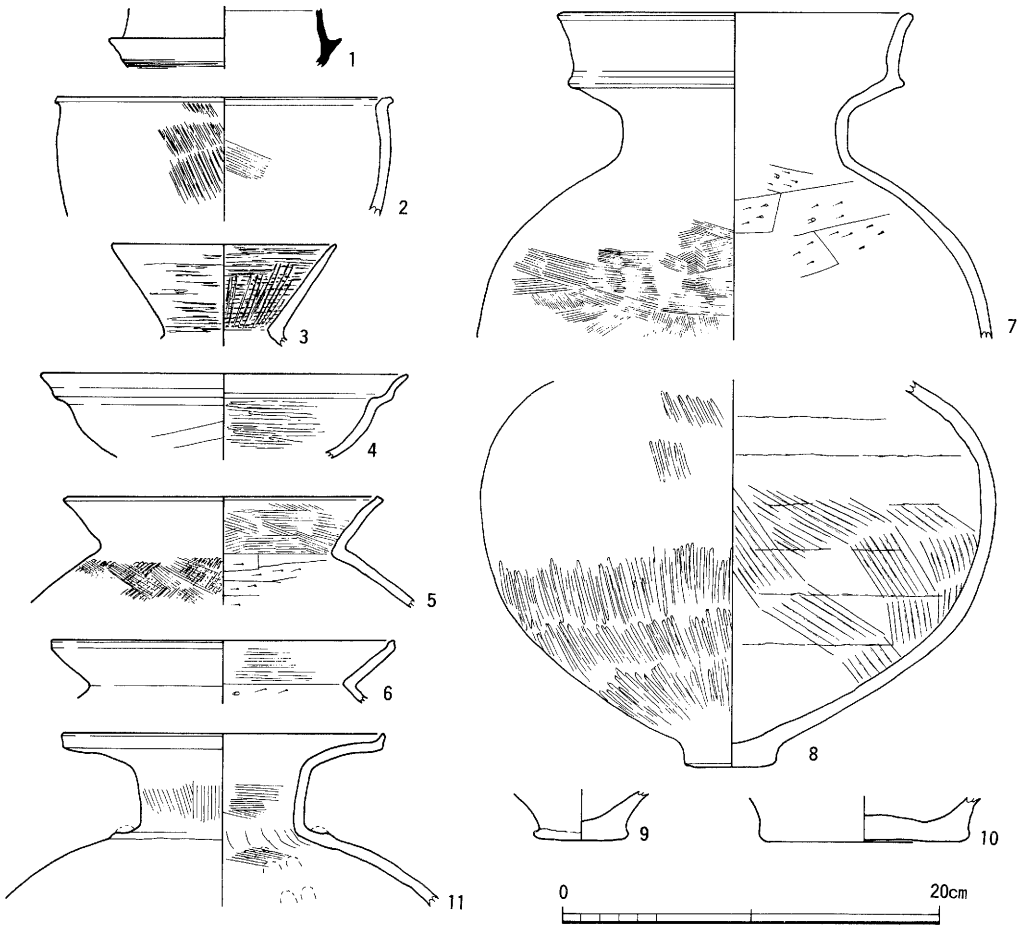
調査区東半で検出した南北方向の溝で、法量は幅140㎝～190㎝、深さ約10㎝を測る。断

面皿状で、埋土はＳＤ１同様、淡灰褐色細砂混じり粘質土である。時期不明の土師器・須恵器の小片が少量出土している。

ＳＰ１

調査区西部、ＳＫ１の南側で検出したピットで、平面形はやや方形を呈する。法量は33㎝×30㎝以上、深さ約25㎝を測り、埋土はＳＫ１と同様、暗灰褐色細砂混じり粘質土である。時期不明の土師器の小片が出土している。

これらの遺構の時期は出土遺物からは特定できなかった。包含層出土遺物からは、古墳時代中期以降と考えられる。



第５図　出土遺物実測図（Ｓ＝１／４）

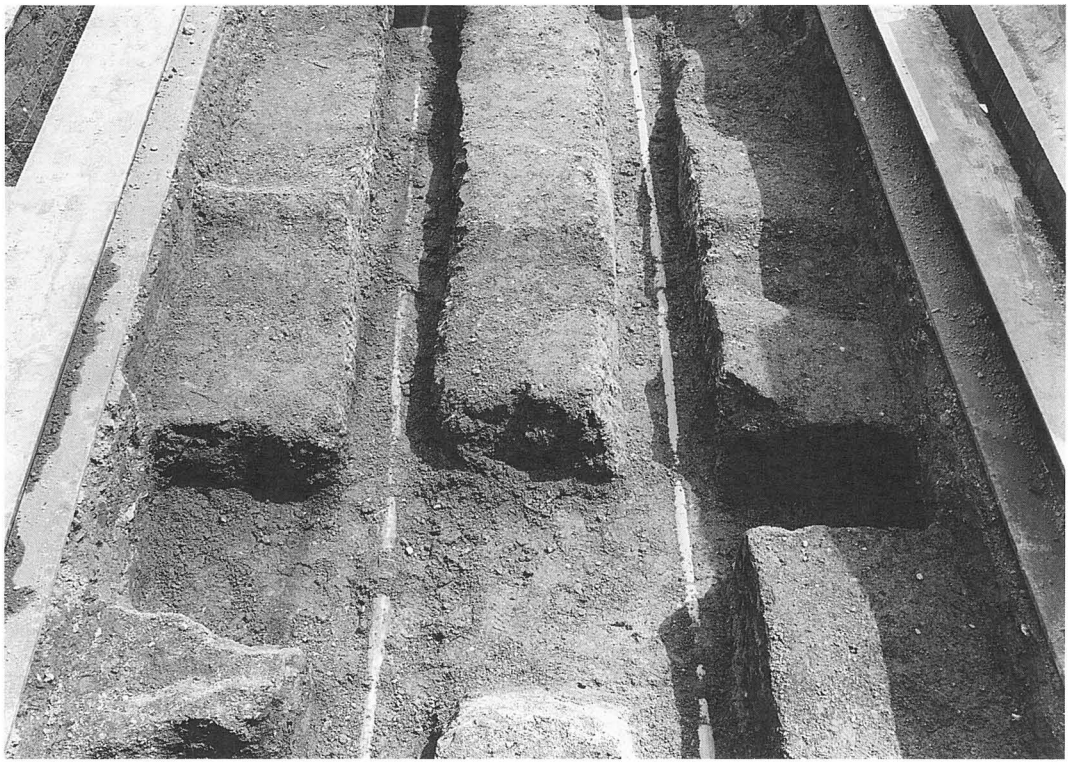
4）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種	出土地点	法量（cm）口径 （復元値）器高	色調 外 内	胎　土	焼成	技　法　・　形　態　等　の　特　徴	残　存 備　考
1	須恵器 杯身	1　区 第6層	(10.3) 受部径　(12.4)	暗灰色	密	良好	回転ナデ。底部回転カキ目。	1／6 反転
2 二	韓式土器 鉢	1　区 第6層	(18.0)	乳茶色	やや粗	良好	口縁部ナデ。体部外面平行タタキ、内面ハケ。	極小 反転
3	土師器 壺	1　区 第8層	(12.0)	乳茶色	密	良好	口縁部ヘラミガキ。	1／8 反転
4	土師器 鉢	1　区 第8層	(19.6)	乳茶色	密	良好	口縁部ナデ。底体部外面ナデ、内面ヘラミガキ。	極小 反転
5	土師器 甕	1　区 第8層	(17.0)	乳茶色	やや粗	良好	口縁端部～口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面ハケ。肩部外面タタキ後ハケ、内面ヘラケズリ。	1／6 反転
6	土師器 甕	1　区 第8～15層	(18.3)	灰茶色	やや粗	良好	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケ。体部内面ヘラケズリ。	極小 反転
7 二	土師器 壺	1　区 第8層	(19.0)	乳橙色	やや粗	良好	口縁部～頸部ヨコナデ。体部上位外面ハケ、内面ヘラケズリ。	1／3 反転
8 二	土師器 壺	1　区 第8層	体部最大径 (27.4) 底径　4.9	明茶色 茶色	やや粗	良好	底体部外面ヘラミガキ、内面板ナデ。底部外面ナデ。底部外面黒斑。	体部1/4 欠損 一部反転
9	弥生 底部	1　区 第8層	底径　5.0	茶色	やや粗	良好	ナデ。	体部1/3 欠損 一部反転
10	弥生 底部	1　区 第8層	底径　(11.2)	灰茶色	粗	良好	不明。	1／4 反転
11	土師器 壺	2　区 第9層	(17.3)	茶色	やや粗	良好	口縁部ヨコナデ。頸部外面ハケ、内面ハケ後ナデ。頸部～体部間内面しぼり目。肩部外面ナデ、内面ハケでユビオサエ残る。肩部貼付突帯。	口縁1/6 欠損 反転

3．まとめ

今回の調査では弥生時代中期頃から近世の遺構・遺物を検出した。出土遺物の量はコンテナ1箱を数える。

1区で検出された遺構は、この東部の調査地での調査成果から、古墳時代中期から平安時代頃のものと考えられる。2区では遺構は検出されなかったが、同時期の土器が出土しており、集落域の拡がりが確認された。注目すべき遺物として1区で韓式系土器、2区で埴輪が出土している。

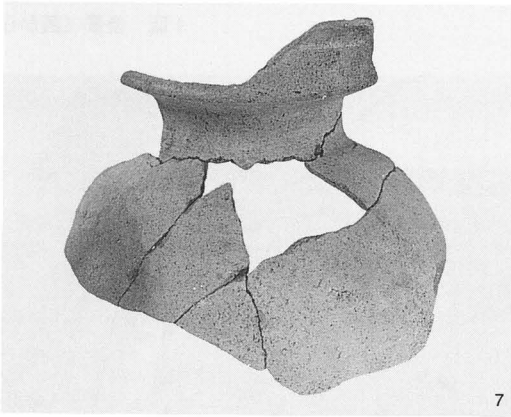


1区　全景（西から）

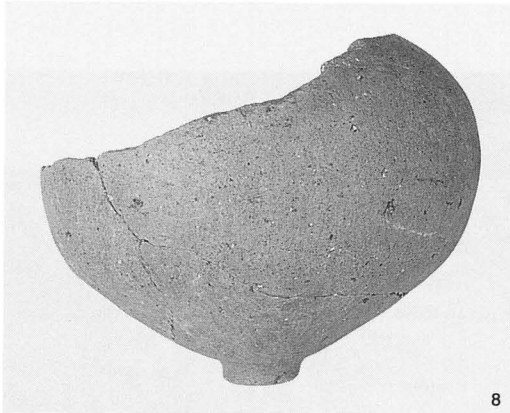
2区　全景（東から）

図版二

1区　北壁



7



8

2

Ⅵ　志紀遺跡第１次調査（ＳＩＫ93－１）

例　　言

1．本書は、八尾市志紀町西２丁目地内で実施した、公共下水道工事（平成５年度第21工区）に伴う発掘調査の報告である。

1．本書で報告する志紀遺跡第１次調査（ＳＩＫ93－１）の発掘調査業務は、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第82号　平成５年10月13日付）に基づき、八尾市下水道部から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成５年11月20日から12月27日にかけて成海佳子を担当者として実施した。調査面積は約52㎡を測る。現地調査には、澤井　幹が参加した。

本　文　目　次

1．はじめに……39

2．調査の方法と経過……40

3．調査概要……40

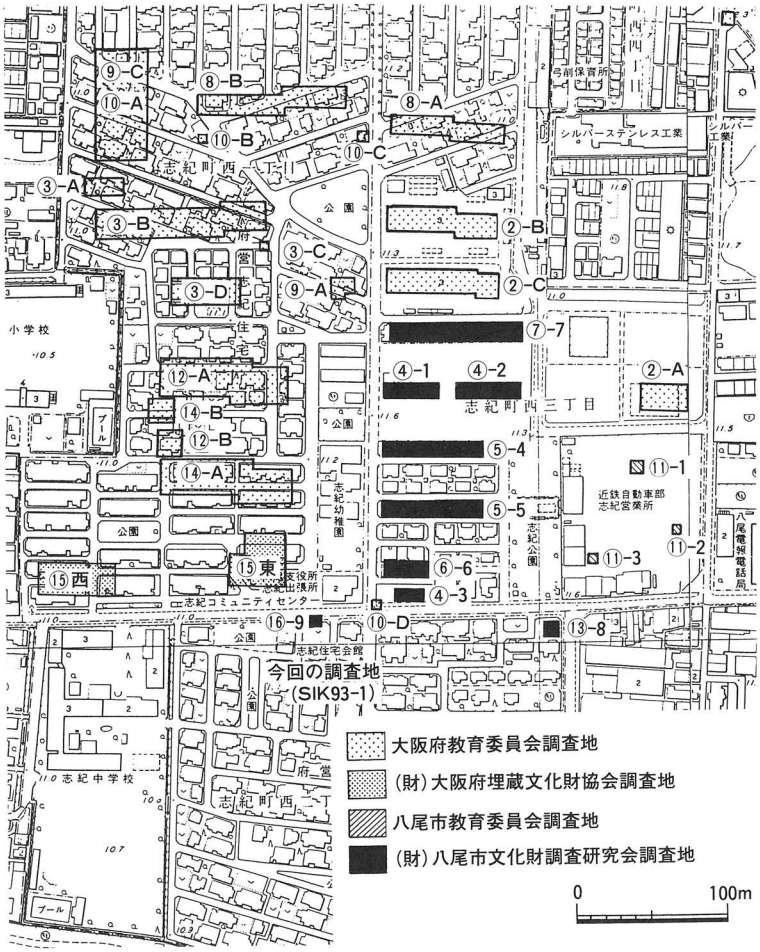
4．まとめ……42

Ⅵ　志紀遺跡第１次調査（ＳＩＫ93－１）

１．はじめに

志紀遺跡は、八尾市南東部の志紀町西・田井中３丁目に所在する遺跡で、北は老原遺跡、南は田井中遺跡と接し、西には木の本遺跡、南東には弓削遺跡、長瀬川を挟んだ北東には東弓削遺跡が位置している。

当遺跡は、昭和63(1988)年以後、田井中３丁目・志紀町西１丁目・同４丁目をその範囲に当てていたが、平成５(1993)年10月１日付で、田井中遺跡の東部であった志紀町西２丁目・同３丁目もその範囲に含まれた。それまでに当研究会が「田井中遺跡」として９度にわたる調査を行った結果、遺跡の南部（田井中・空港地区）と北部（志紀町西地区）では様相の異なることが明らかになっており、後者が「志紀遺跡」の範囲に含まれたわけである。



第１図　調査地周辺図（Ｓ＝１／5000）

周辺の発掘調査一覧表

番　号	調査主体	遺　跡　名	調　査　期　間	文献
	大阪府教委	志紀(試掘)	1982. 7	
②-A～C	大阪府教委	志紀(第1次)	1983.	1
③-A～D	大阪府教委	志紀(第2次)	851112～860331	2
④-1～3	調査研究会	田井中(第3次)	851209～860311	3
⑤-4～5	調査研究会	田井中(第4次)	861210～870325	3
⑥-6	調査研究会	田井中(第6次)	871124～871226	3
⑦-7	調査研究会	田井中(第8次)	881001～890220	3
⑧-A～B	大阪府教委	志紀(第3次)	881020～890831	
⑨-A～C	大阪府教委	志紀(第4次)	890815～900323	
⑩-A～D	大阪府教委	志紀(第5次)	910201～920325	
⑪-1～3	八尾市教委	志紀(91-319)	911007～911008	4
⑫-A・B	大阪府教委	志紀(第6次)	911101～920325	5
⑬-8	調査研究会	田井中(第9次)	920408～920510	6
⑭-A・B	大阪府教委	志紀(第7次)	920623～930325	7
⑮西東	府埋文協会	志紀	9308　～9403	
⑯-9	調査研究会	志紀(第1次)	931120～931227	今回報告

前者の「田井中遺跡」では、陸上自衛隊八尾駐屯地内で７度の調査(TN82-1・TN84-2・TN87-5・TN88-7・TN92-10・TN93-11・TN93-12)を行っており、地表下2.5(T.P.+8.7)ｍ前後で弥生時代前期から古墳時代中期に至る集落跡が検出されている。

一方、後者の「志紀遺跡」では、国家公務員宿舎敷地内他で５度の調査（TN85-3･TN86-4･TN87-6・TN88-8・TN92-9)を行っているが、ここでは弥生時代後期から平安時代後期までの水田遺構などを検出している。また、これらの調査地の西側および北側に位置する府営住宅敷地内では、昭和57(1982)年以降、大阪府教育委員会による調査が行われており、ここでは縄文時代晩期にまでさかのぼる遺構面を検出している。

今回の調査は公共下水道工事に伴うもので、志紀遺跡第１次調査(SIK93-1)であるが、これまでの調査の関連からは、志紀地区第９調査区とも呼べる。

２．調査の方法と経過

調査区は7.26ｍ（矢板内法）四方の発進立坑１か所で、調査期間は平成５年11月20日～同年12月27日までのうち15日間である。

当遺跡は、これまでの調査で、鎌倉時代前期から弥生時代中期頃までに遡り得る水田遺跡であることが明らかにされているが、今回の調査地では、水田遺構を平面的に検出するには無理があるため、土層断面の観察を主にして調査を進めることとした。

調査の対象となった立坑は北半分が道路敷下にあたっており、この部分については現地表下１ｍ前後までの掘削にしか立ち会っていない。南半分については、調査においては、工事の進捗状況に合わせて機械掘削・人力掘削を併用し、随時断面観察を行い、工事による掘削が終了するまで立ち会った。最終的な掘削深度は現地表下約9.6ｍ（T.P.+2.1ｍ）である。

３．調査概要

現地表面の標高はT.P.+11.8ｍ、盛土は約１ｍあり、以下１層から62層までの土層が確認できた。そのうち、水田耕土の可能性のある土層は８枚である。

１層（緑灰色砂混粘質シルト）・２層（暗褐色砂混粘質シルト）は近世の耕作土である。

３層（灰色砂混粘質シルト）・４層（灰色～黄灰色粗砂）は、ともに鎌倉時代前半の洪水層である。

第２図　調査風景

５層（暗灰～青灰色粘質シルト）は鎌倉時代初頭の水田耕作土に対応し、上面レベルはT.P.＋10.2～10.4ｍを指す。上面には耕作痕や足跡状遺構と考えられる波状痕跡が見られるが、畦畔は認められなかった。

６層（暗青灰色礫混粘質シルト）は５層の床にあたる土層で、酸化鉄の沈着が顕著である。

７層（灰色粗砂～礫）・８層（灰色シルト・微砂の互層）は平安時代の洪水層にあたる。

９層（灰色粘質シルト）は平安時代の水田耕作土と考えられ、上面レベルはT.P.＋9.9ｍ程度である。調査区南部では、東西方向の畦畔が確認できた。畦畔の規模は上面幅0.2ｍ・基底幅0.7ｍ・高さ0.1～0.15ｍで、水田上面は畦畔を境として南が高く北が低い。

10層（灰色中砂）・11層（緑灰～青灰色粘質シルト）は古墳時代中期後半以降飛鳥時代に相当する洪水層である。

12層（灰色粘質シルト）・13層（暗灰色粘質シルト）は古墳時代中期後半の水田耕作土に対応する。ともに層厚は15～20㎝、上面レベルは、12層上面がT.P.+8.9～9.1ｍ、13層上面がT.P.+8.8～8.9ｍを指す。

14層（暗灰色粘土）は12層・13層の床にあたり、硬質で炭化カルシウムを含む。

15層（暗灰褐色粘土～シルト質粘土）・16層（淡紫褐色粘質シルト）・17層（淡青褐色粘質シルト）は古墳時代中期前半の水田耕作土に対応する。上面には波状痕跡が認められ、上面レベルは15層がT.P.+8.5～8.6ｍ、16層がT.P.+8.2～8.3ｍ、17層がT.P.+8.0～8.2ｍである。

18層（青灰色シルト～微砂）・19層（灰色粘質シルト）は古墳時代前期初頭の洪水層にあたる。

20層（紫褐色粘質シルト）は弥生時代後期の耕作土に対応する。上面には波状痕跡があり、上面レベルはT.P.+7.8～7.9ｍを測る。

21層（淡青色礫混シルト質粘土）・22層（暗灰色シルト質粘土）は炭化物を含む硬質の粘土で、20層の床にあたる可能性がある。

23層（黒灰色シルト質粘土）は、炭化物・ビビアンナイトを含む層である。24層～27層は青灰色系の粘土で粘性が高い。

28層～30層は灰褐色系の粘土にシルト・植物遺体が混入するもので、31層（黒灰色粘土と炭化物の互層）とともに不安定で、沼沢地状の堆積状況を示している。

32層（青灰色シルト）は弥生時代中期～前期までの湧水層である。

33層（黒褐色礫混粘土）はきわめて粘性が高い。23層・33層のどちらかが、これまでの調査で確認されている黒色粘土帯と考えられ、弥生時代中期に対応するものであろう。

34層（青灰色粘土）は、下部に植物遺体・青灰色粘土の互層が沈殿しており、再び沼沢地状の土層堆積を示している。

35層～37層は、暗青灰色～黒灰色系の砂混粘土で、第２黒色粘土帯（縄文時代晩期相当層）

に対応するものと考えられる。38～40層は青灰色粘質シルトをベースとする土層で、暗灰色粘土・微砂などが混入している。これらのうち、37層（黒灰色礫混粘土）から38層（暗青灰色微砂混粘質シルト）にかけて、地震による「ずれ」が見られ、複雑な土層堆積を示している。

41層～57層は縄文時代後期頃に対応する河川内堆積土で、1.3mにわたって粘土～シルト～砂の互層や微砂～粗砂、植物遺体層などが複雑に堆積しており、流水・滞水を数回繰り返えしていたことがわかる。41層（青灰色微砂）の上面はT.P.+5.6m（現地表下6.2m）、川底はT.P.+4.2～4.3mに達する。

58層（黒灰色礫混粘土）は厚さ0.3m程度あり、比較的安定した堆積状況を示している。

59層～60層も河川内堆積土であるが、上層の河川に比べ単純な堆積状況を示し、一気に埋没したことがわかる。59層（青灰色粗砂混粘質シルト）上面はT.P.+4.0m（現地表下7.8m）60層（灰黒色粗砂～礫）は厚さ1.4m程度あり、川底はT.P.+2.3～2.4mを指す。

以下、61層（黒褐色粘土－層厚0.2m前後）、62層（暗青灰色粘土－層厚0.2m以上）を確認し、調査を終えた。これらのうち、58層・61層のどちらかが第3黒色粘土帯に対応するものと考えられる。

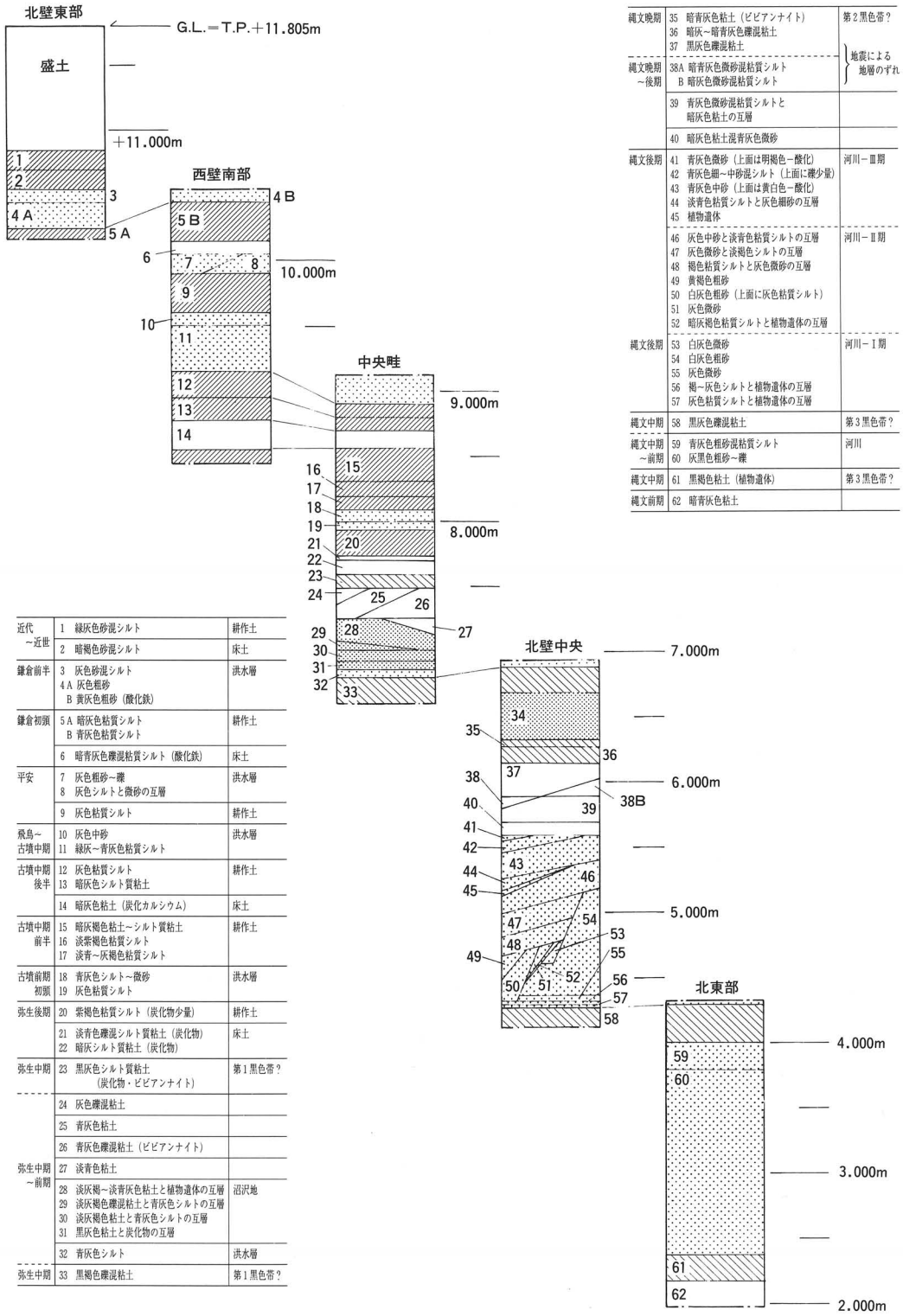
4．まとめ

調査の結果、水田耕作土の可能性のある土層を8枚、弥生時代中期以前の沼沢地、縄文時代晩期頃の地震のあと、縄文時代後期・およびそれ以前の埋没河川などを確認した。出土遺物は皆無であった。

この調査地での最古の水田耕土は、20層紫褐色粘質シルトで、弥生時代中期後半以降に比定できる。それ以前の当地は、沼沢地・河川があり、生活の場としては不適当であったことがわかる。逆に、弥生時代中期後半に、水田耕作に適した土地であったために、それ以後は水田として利用され続けていた土地であったとも言えよう。

参考文献

1　『志紀遺跡発掘調査概要』　大阪府教育委員会　1986.3
2　「八尾市志紀遺跡の水田遺構」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第21回）資料』　1990
3　「田井中遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告：八尾市文化財調査研究会報告40』（財）八尾市文化財調査研究会　1994．3
4　「志紀遺跡(91-319)の調査」『八尾市内遺跡平成3年度発掘調査報告書：八尾市文化財調査報告25』　八尾市教育委員会　1992
5　『志紀遺跡発掘調査概要Ⅱ』　大阪府教育委員会　1992.3
6　「田井中遺跡（第9次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告：八尾市文化財調査研究会報告39』（財）八尾市文化財調査研究会　1993
7　『志紀遺跡発掘調査概要Ⅲ』　大阪府教育委員会　1993.3



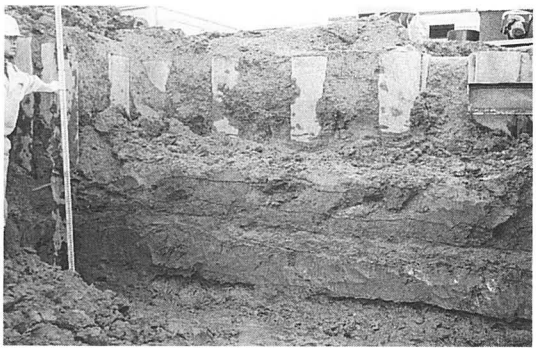
縄文晩期	35 暗青灰色粘土（ビビアンナイト） 36 暗灰～暗青灰色礫混粘土 37 黒灰色礫混粘土	第２黒色帯？
縄文晩期～後期	38A 暗青灰色微砂混粘質シルト B 暗灰色微砂混粘質シルト	地震による地層のずれ
	39 青灰色微砂混粘質シルトと暗灰色粘土の互層	
	40 暗灰色粘土混青灰色微砂	
縄文後期	41 青灰色微砂（上面は明褐色－酸化） 42 青灰色細～中砂混シルト（上面に礫少量） 43 青灰色中砂（上面は黄白色－酸化） 44 淡青色粘質シルトと灰色細砂の互層 45 植物遺体	河川－Ⅲ期
	46 灰色中砂と淡青色粘質シルトの互層 47 灰色微砂と淡褐色シルトの互層 48 褐色粘質シルトと灰色微砂の互層 49 黄褐色粗砂 50 白灰色粗砂（上面に灰色粘質シルト） 51 灰色微砂 52 暗灰褐色粘質シルトと植物遺体の互層	河川－Ⅱ期
縄文後期	53 白灰色微砂 54 白灰色粗砂 55 灰色微砂 56 褐～灰色シルトと植物遺体の互層 57 灰色粘質シルトと植物遺体の互層	河川－Ⅰ期
縄文中期	58 黒灰色礫混粘土	第３黒色帯？
縄文中期～前期	59 青灰色粗砂混粘質シルト 60 灰黒色粗砂～礫	河川
縄文中期	61 黒褐色粘土（植物遺体）	第３黒色帯？
縄文前期	62 暗青灰色粘土	

近代～近世	1 緑灰色砂混シルト	耕作土
	2 暗褐色砂混シルト	床土
鎌倉前半	3 灰色砂混シルト 4A 灰色粗砂 B 黄灰色粗砂（酸化鉄）	洪水層
鎌倉初頭	5A 暗灰色粘質シルト B 青灰色粘質シルト	耕作土
	6 暗青灰色礫混粘質シルト（酸化鉄）	床土
平安	7 灰色粗砂～礫 8 灰色シルトと微砂の互層	洪水層
	9 灰色粘質シルト	耕作土
飛鳥～古墳中期	10 灰色中砂 11 緑灰～青灰色粘質シルト	洪水層
古墳中期後半	12 灰色粘質シルト 13 暗灰色シルト質粘土	耕作土
	14 暗灰色粘土（炭化カルシウム）	床土
古墳中期前半	15 暗灰褐色粘土～シルト質粘土 16 淡紫褐色粘質シルト 17 淡青～灰褐色粘質シルト	耕作土
古墳前期初頭	18 青灰色シルト～微砂 19 灰色粘質シルト	洪水層
弥生後期	20 紫褐色粘質シルト（炭化物少量）	耕作土
	21 淡青色礫混シルト質粘土（炭化物） 22 暗灰シルト質粘土（炭化物）	床土
弥生中期	23 黒灰色シルト質粘土（炭化物・ビビアンナイト）	第１黒色帯？
	24 灰色礫混粘土	
	25 青灰色粘土	
	26 青灰色礫混粘土（ビビアンナイト）	
弥生中期～前期	27 淡青色粘土	
	28 淡灰褐～淡青灰色粘土と植物遺体の互層 29 淡灰褐色礫混粘土と青灰色シルトの互層 30 淡灰褐色粘土と青灰色シルトの互層 31 黒灰色粘土と炭化物の互層	沼沢地
	32 青灰色シルト	洪水層
弥生中期	33 黒褐色礫混粘土	第１黒色帯？

第３図　基本層序模式図（Ｓ＝１／50）

北壁東部（０～５層）

中央東西畦（20～33層）



西壁南部（４～10層）

北壁西部（32～43層）

中央東西畦（10～22層）

北壁中央部（39～58層）

最終掘削（59～62層）

Ⅶ　成法寺遺跡第10次調査（ＳＨ93－10）

例　　言

1．本書は、八尾市高美町１丁目地内で実施した公共下水道工事（平成５年度第４工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第10次調査（ＳＨ93－10）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第49号　平成５年７月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年11月９日～11月24日にかけて、高萩千秋・岡田清一を調査担当として実施した。調査面積は約50㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……45

2．調査概要……46

　1）調査の方法と経過……46

　2）基本層序……46

　3）検出遺構と出土遺物……47

3．まとめ……50

Ⅶ　成法寺遺跡第10次調査（ＳＨ93－10）

１．はじめに

成法寺遺跡は、現在の行政区画では八尾市の中央部にあたる光南町１・２丁目、清水町１・２丁目、南本町１～４丁目、高美町１・２丁目、陽光園１丁目、明美町１丁目、松山町１丁目に所在する古墳時代前期～平安時代に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡と同一沖積地上では東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡・東弓削遺跡、南に矢作遺跡、南西に竜華寺跡、北に東郷遺跡・萱振遺跡などがある。

第１図　調査地位置図及び周辺図

当遺跡では八尾市教育委員会が昭和56年度に実施された発掘調査（註１）で、弥生時代後期から古墳時代後期の遺構・遺物が検出され、遺跡として認知されたのが発端である。その後、当調査研究会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会により、現在までに十数回の発掘調査が行われ、弥生時代中期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

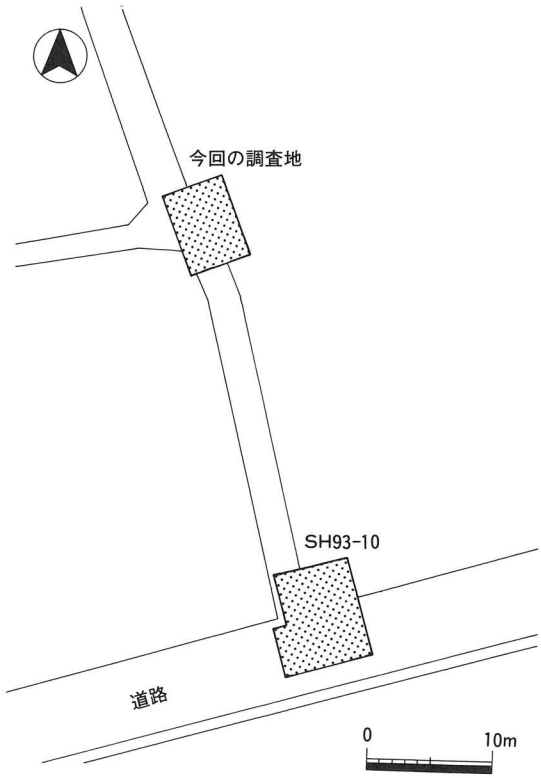
註１　八尾市教育委員会「成法寺遺跡ー八尾市光南町1丁目29番地の調査ー」 1983.3

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（第４工区）に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会、当調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成５年11月９日～11月24日である。今回の調査は、当調査研究会が実施した第10次調査（SH93-10）にあたる。

調査区は下水道工事の立孔部分１ヶ所（縦8.0ｍ×横6.8ｍ）で、面積約50㎡を測る。調査は現地表下約1.1～1.2ｍまでの土層を機械掘削し、以下、0.4ｍの土層については人力掘削、さらに下層確認として工事で掘削される最終深度までの土層の確認を行った。

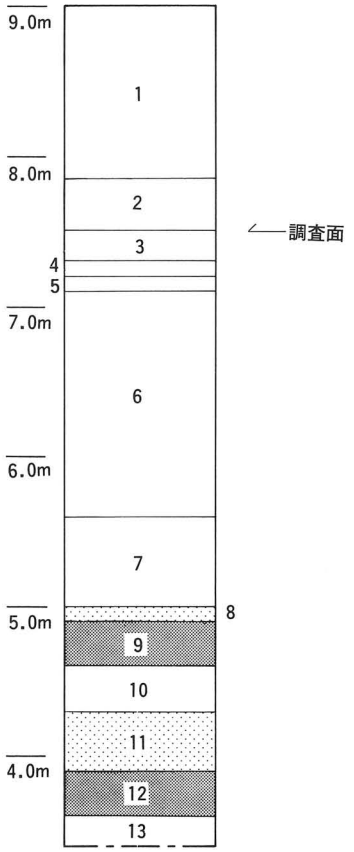


第２図　調査区設定図

２）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　盛土（層厚1.0～1.1ｍ）。アスファルト・バラス・盛り土・旧耕土・床土である。旧耕土・床土は北東部（借換地内）の一部で確認されただけで、道路部分は水路及び水道・ガ



1 盛土・旧耕土・床土 等
2 灰茶色砂礫混粘質土
3 茶灰色粘質シルト
4 乳灰褐色粘質シルト
5 青灰色粘質シルト
6 青灰色細砂混粘質シルト
7 暗灰色粘質土
8 灰色細砂
9 灰黒色粘土Ⅰ
（植物遺体リビアンナイトを含む）
10 灰青色シルト
11 灰青色細砂
12 灰黒色粘土Ⅱ
（植物遺体リビアンナイトを含む）
13 暗灰青色粘質土

第３図　基本層序柱状図

スなどの埋設工事により攪乱されている。

第２層　灰茶色砂礫混粘質土（層厚30～40㎝）。古墳時代から中世の土器片がごく少量含まれている。

第３層　茶灰色粘質シルト（層厚20㎝）。古墳時代前期から中世の遺構検出面である。上面の標高は7.5ｍ前後である。

第４層　乳灰褐色粘質シルト（層厚10㎝）。

第５層　青灰色粘質シルト（層厚10㎝）。

第６層　青灰色細砂混粘質シルト（層厚150㎝）。無遺物層である。粘質土とシルトが相互に堆積しているのがみられる。

第７層　暗灰色粘質土（層厚60㎝）。無遺物層である。

第８層　灰色細砂（層厚10㎝）。１～２㎜程度の砂粒である。

第９層　灰黒色粘土Ⅰ（層厚30㎝）。植物遺体を少量含む。

第10層　青灰色シルト（層厚30㎝）。植物遺体をごく少量含む。

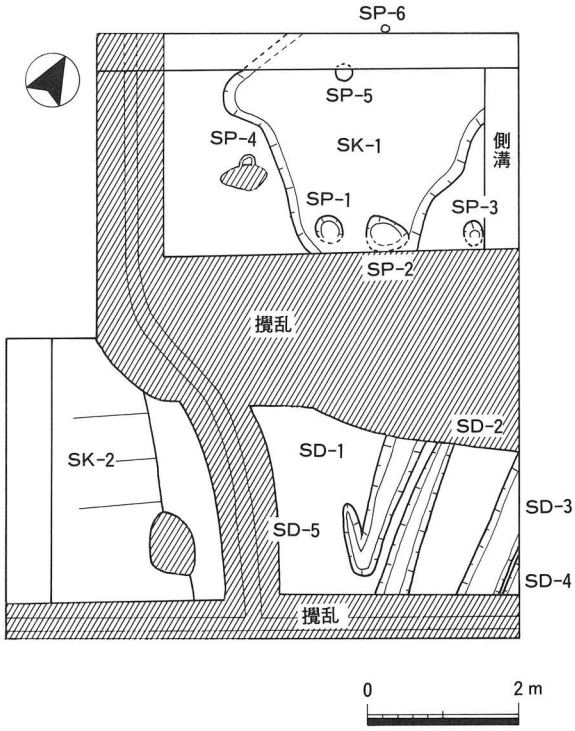
第11層　灰青色細砂（層厚40㎝）。１～２㎜程度の砂粒である。

第12層　灰黒色粘土Ⅱ（層厚30㎝）。植物遺体を少量含む。第９層とほぼ同質の土層である。

第13層　暗灰青色粘質土（層厚20㎝以上）。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表（標高8.9～9.0ｍ）下1.5～1.6ｍの第３層上面から切り込む古墳時代初頭から中世に比定される遺構を検出した。遺構は古墳時代初頭に比定される土坑１基（ＳＫ－１）・小穴６個（ＳＰ－１～ＳＰ－６）、鎌倉時代後期に比定される土坑１基（ＳＫ－２）・溝５条（ＳＤ－１～ＳＤ－５）である（第３図）。出土遺物は古墳時代初頭～中近世に至る遺物がコンテナ箱にして約１箱分であった。以下、各遺構について記す。



第４図　遺構平面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区北部で検出した。南部は現在の攪乱で削平され、北部は調査区外に至り、平面形状は不明である。規模は検出部で、東西径2.8ｍ、南北径3.5ｍ、深さ40㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗褐色砂質土（鉄分を含む）・褐灰色粘質土である。底面より小穴３個（ＳＰ－１～ＳＰ－３）を検出した。遺物は内部から古墳時代初頭（庄内期）に比定される土器の小片が少量出土している。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１～ＳＰ－６

調査区北部のＳＫ－１内及び周辺から６個の小穴を検出した。ＳＫ－１内には土坑の底面から切り込む小穴（ＳＰ－１～ＳＰ－３）と土坑が埋まった上面から切り込む小穴（ＳＰ－５・ＳＰ－６）がある。小穴の平面形状はほぼ円形で、径10㎝～55㎝、深さ６～34㎝を測る。遺物は小穴内から庄内期に比定される土器片がごく少量出土している。各小穴の詳細については第１表に掲載した。

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表

＊単位はcm

遺構番号	平面形	断面形	径	深　さ	堆　積　土	備　　考
SP-1	円　形	逆台形	36	6.5	暗茶灰色粘質土	SK-1底より検出
SP-2	楕円形	半円形	48～56	18	暗茶灰色粘質土	SK-1底より検出。土器片
SP-3	－	逆台形	21	10	暗茶灰色粘質土	SK-1底より検出
SP-4	－	逆台形	24	18	暗茶灰色粘質土	南部は攪乱
SP-5	円　形	U字形	23	33	暗茶灰色粘質土	SK-1底より検出
SP-6	円　形	U字形	12	10	暗茶灰色粘質土	SK-1底より検出

ＳＫ－２

調査区南西部で検出した。西部は調査区外に至り、平面形状は不明である。規模は検出部で、東西径2.5ｍ、南北径４ｍ、深さ80cmを測る。東西断面の観察では西へ約45度の傾斜して落ち込んでいる。堆積土は灰色粘質土・乳灰色粘質土混細砂・灰青色粘質土（植物遺体を含む）である。遺物は内部から鎌倉時代後期以降に比定される土器の小片がごく少量出土している。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１～ＳＤ－５

調査区南東部で５条を検出した。方向は南－北方向のもの４条、北北西－南南東方向のもの１条である。ＳＤ－１とＳＤ－５は切り合い関係があるものと思われるが、明瞭な切り合いの判断がつきにくい状態であり、あまり時期差がないものと思われる。規模は幅20～52cm、深さ５～15cmを測る小規模な溝である。断面形は浅い半円形を呈する。堆積土は灰茶色砂礫粘質土である。遺物は含まれていなかったが、基本層序の第２層と同層と考えると、農耕に関連する鋤溝などであろう。以下、各溝の詳細については第２表に掲載した。

第２表　溝（ＳＤ）一覧表

＊単位はcm

遺構番号	方　　向	断面形	幅	深さ	堆　積　土
SD-1	南－北	半円形	30～48	5	灰茶色砂礫混粘質土
SD-2	南－北	半円形	20～38	4	灰茶色砂礫混粘質土
SD-3	南－北	半円形	52	5	灰茶色砂礫混粘質土
SD-4	南－北	半円形	20以上	5	灰茶色砂礫混粘質土
SD-5	北北西－南南東	半円形	20	6	灰茶色砂礫混粘質土

3．まとめ

今回の発掘調査は小面積であり、明確なことは言えないが、この調査成果でわかったことを各時代ごとに記す。

弥生時代中期

この時代のものは当調査区より北部約200ｍの地点で大阪府教育委員会が実施した府道拡張工事の発掘調査で木棺・土器棺を主体部にもつ方形周溝墓が発見されており、その南側の広がりを確認する絶交の調査地であった。しかし、調査では対応する層位が明確に認識できるものはなかった。

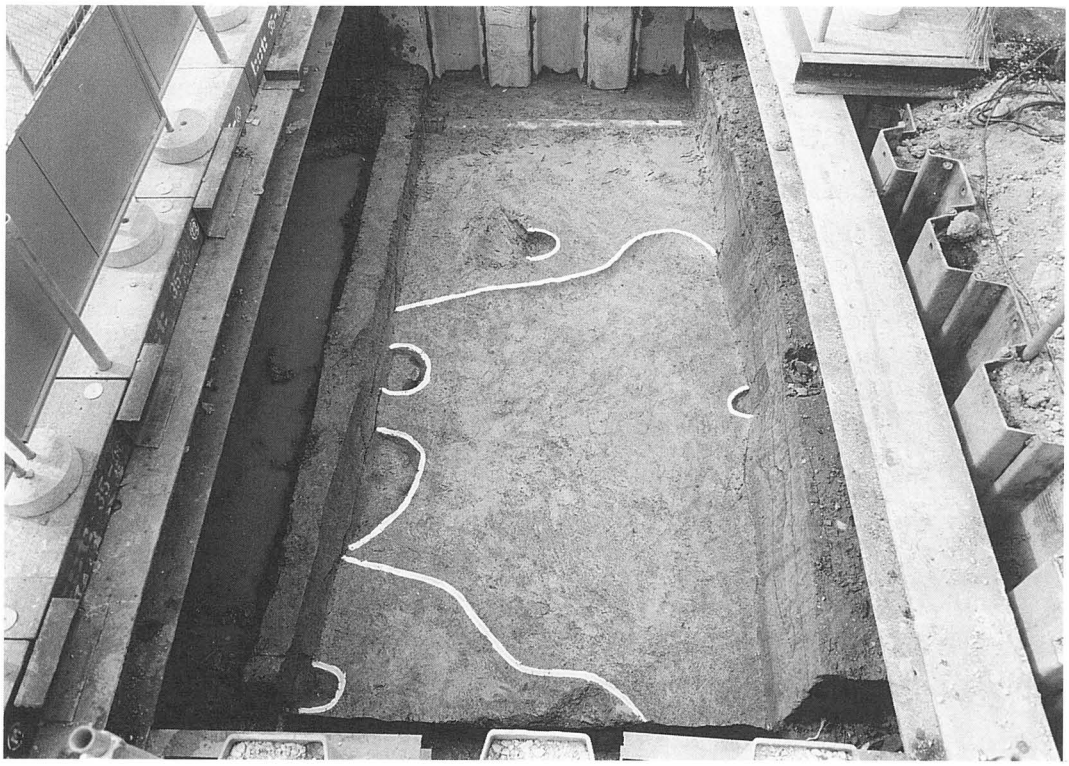
古墳時代前期

古墳時代前期（庄内式～布留式古相）に比定される集落遺構が府道拡張工事で確認されており、その南側の広がりが今回の調査区にも続いていることが確認された。

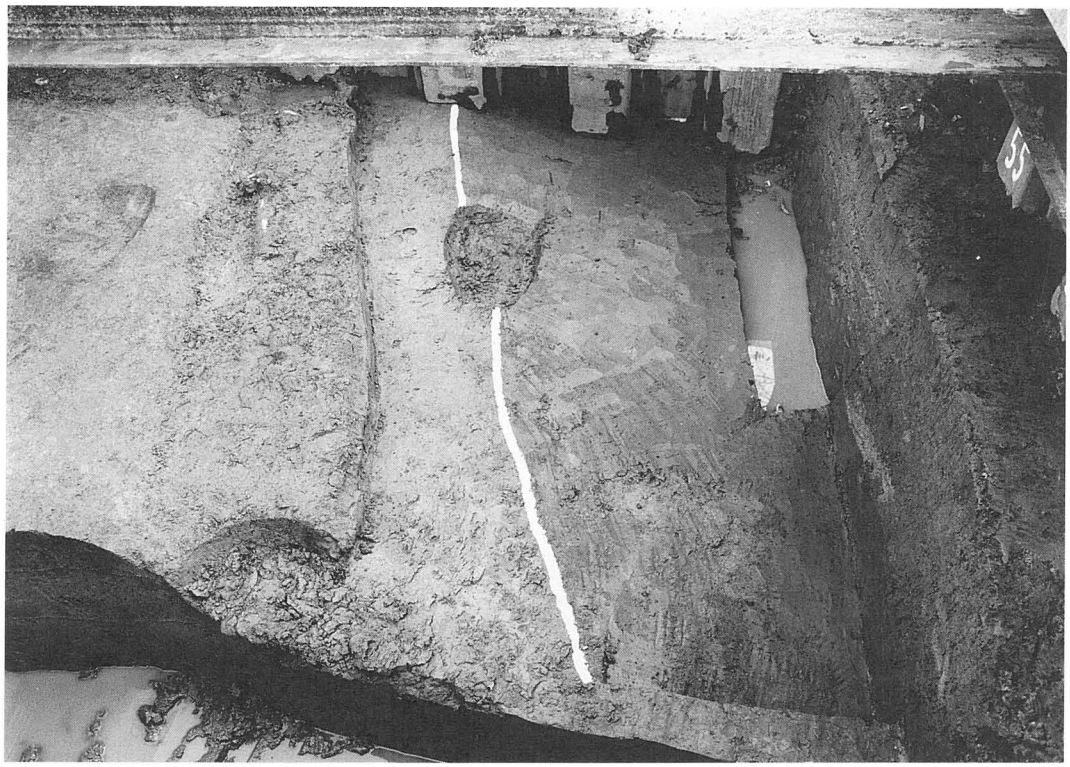
鎌倉時代以降

鎌倉時代以降の遺構は農耕に関連する溝が検出された。この溝は中世条里により、区画された条里方向に一致するものである。

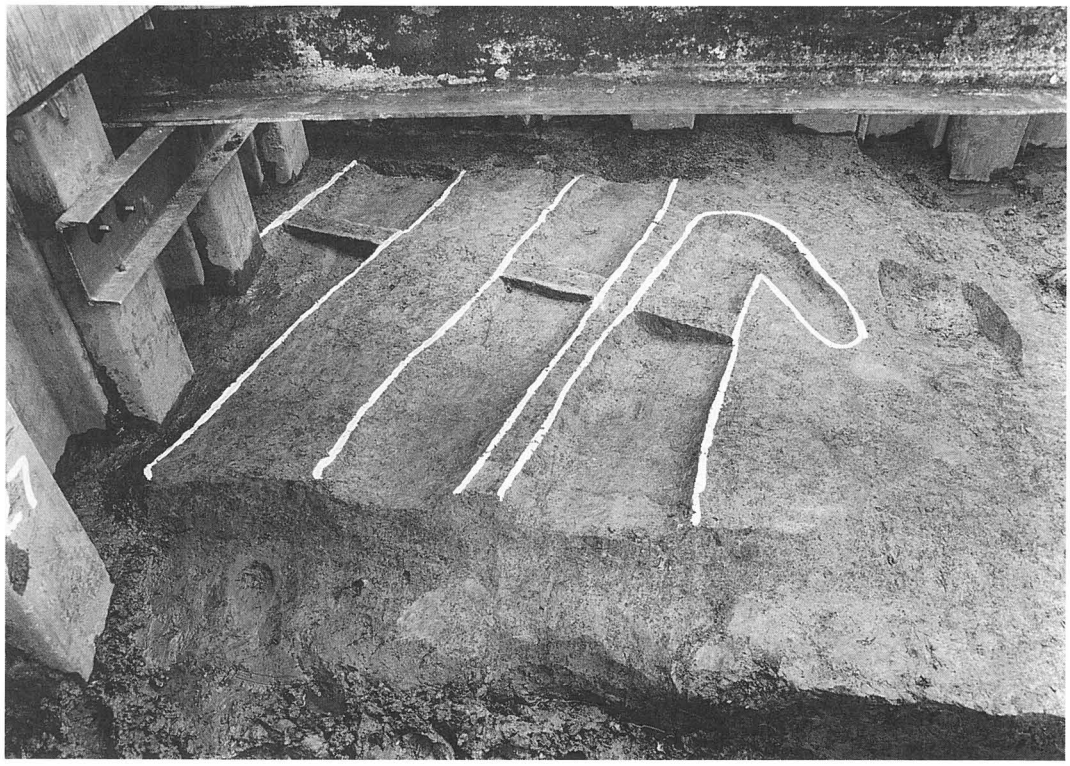
最後に、今回の調査地のように東部の小阪合遺跡に隣接しており、検出した集落・生産遺構などのは連なっているものと思われる。今後、遺跡間の関連についても考えて行く必要があろう。



ＳＫ－１（東から）



ＳＫ－２（北から）



ＳＤ－１～ＳＤ－５（北から）

下層掘削状況（東から）

Ⅷ　成法寺遺跡第11次調査（ＳＨ93－11）

例　　言

1．本書は、八尾市高美町１丁目地内で実施した公共下水道（平成５年度第18工区）工事に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第11次（ＳＨ93－11）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第76号　平成５年10月１日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年11月15日～11月22日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約30㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……53

2．調査概要……54

　1）調査の方法と経過……54

　2）基本層序……55

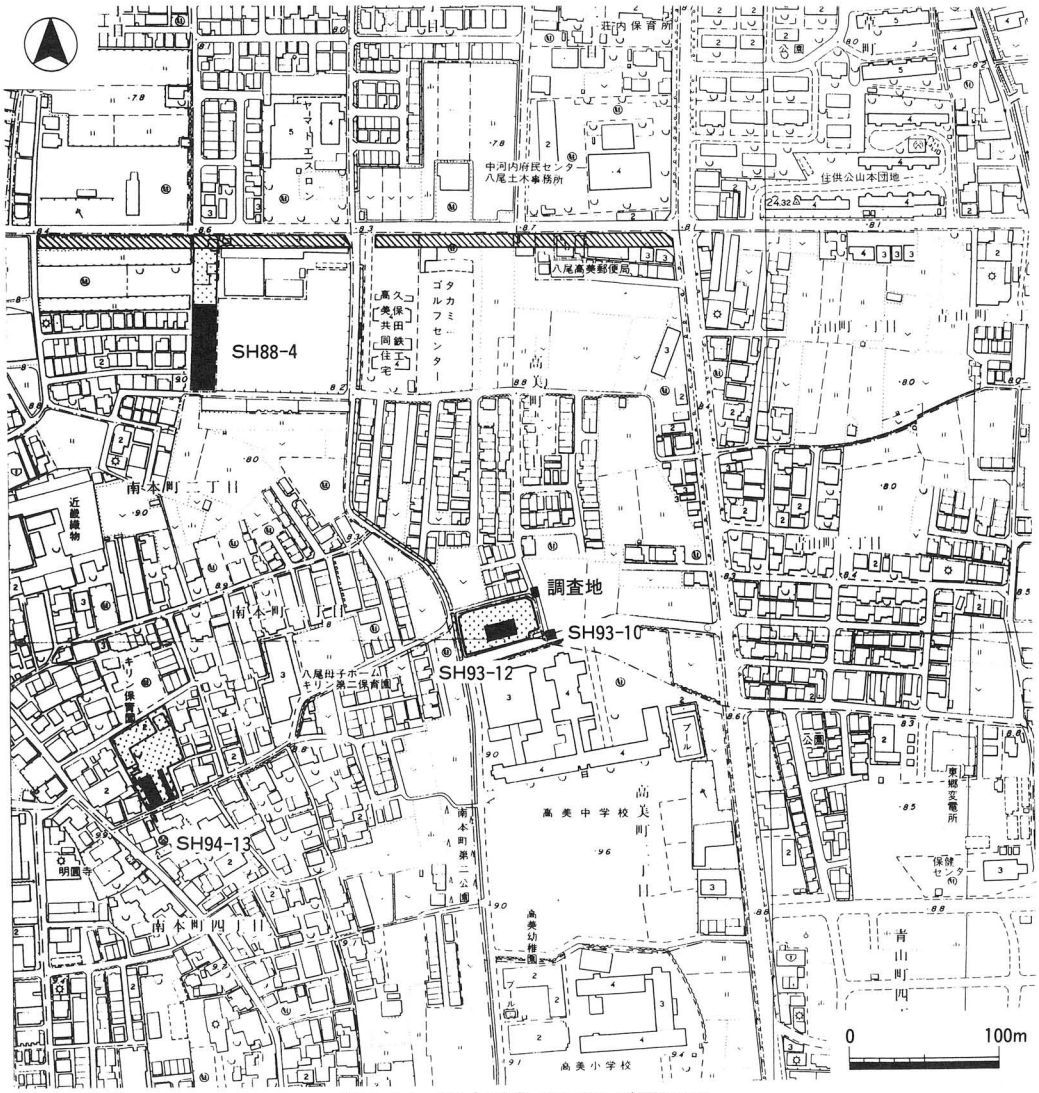
　3）検出遺構と出土遺物……55

3．まとめ……57

Ⅷ　成法寺遺跡第11次調査（ＳＨ93－11）

１．はじめに

成法寺遺跡は、現在の行政区画では八尾市の中央部にあたる光南町１・２丁目、清水町１・２丁目、南本町１～４丁目、高美町１・２丁目、陽光園１丁目、明美町１丁目、松山町１丁目に所在する古墳時代前期～平安時代に至る複合遺跡である。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。当遺跡と同一沖積地上では東に小阪合遺跡、南東に中田遺跡・東弓削遺跡、南に矢作遺跡、南西に竜華寺跡、北に東郷遺跡・萱振遺跡などがある。



第１図　調査地位置図及び周辺図

当遺跡では八尾市教育委員会が昭和56年度に実施された発掘調査（註１）で、弥生時代後期から古墳時代後期の遺構・遺物が検出され、遺跡として認知されたのが発端である。その後、当調査研究会・八尾市教育委員会・大阪府教育委員会により、現在までに十数回の発掘調査が行われ、弥生時代中期から近世に至る複合遺跡であることが確認されている。

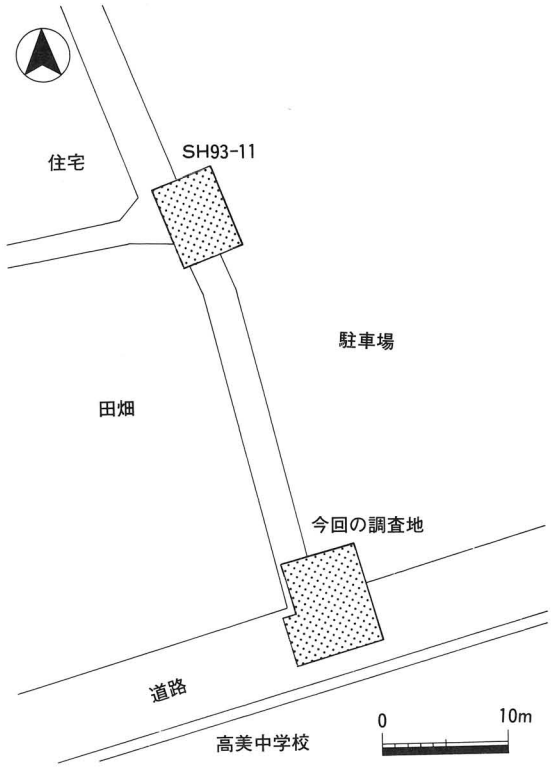
註１　八尾市教育委員会「成法寺ー八尾市光南町１丁目29番地の調査ー」 1983.3

２．調査概要

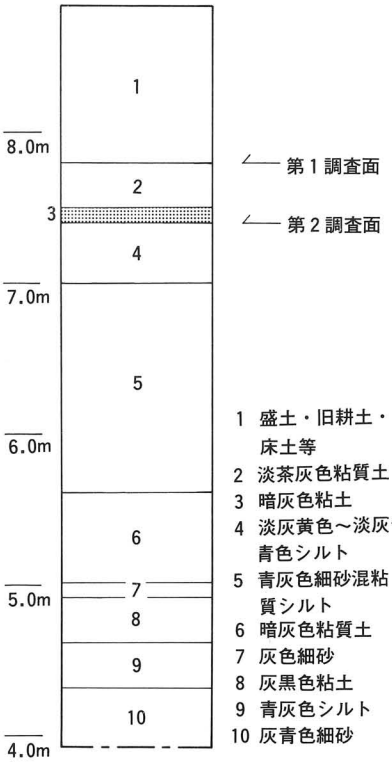
１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（第18工区）に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会、当調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成５年11月15日～11月22日である。今回の調査は、当調査研究会が実施した第11次調査（SH93-11）にあたる。

調査区は下水道工事の立孔部分１ヶ所（縦6.4ｍ×横4.8ｍ）で、面積約30㎡を測る。調査は現地表下約1.1～1.2ｍまでの土層を機械掘削し、以下、0.4ｍの土層については人力掘削、さらに下層確認として工事で掘削される最終深度までの土層の確認を行った。



第２図　調査区設定図



第３図　基本層序柱状図

２）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　盛土（層厚1.0～1.1ｍ）。アスファルト・バラス・盛り土・旧耕土・床土である。旧耕土・床土は東部（借換地内）の一部で確認されただけで、道路部分は水路及び水道・ガスなどの埋設工事により攪乱されている。

第２層　淡茶灰色粘質土（層厚30～35㎝）。この上面は中世以降の遺構面（第１調査面）である。標高は7.8ｍ前後を測る。上部は大半が攪乱により削平されている。

第３層　暗灰色粘土（層厚10㎝）。古墳時代前期の遺物包含層と思われるが、遺物は認められなかった。

第４層　淡灰黄色～淡灰青色シルト（層厚40～50㎝）。古墳時代前期の遺構面（第２調査面）と考えられる。標高は7.4ｍを測る。

第５層　青灰色細砂混粘質シルト（層厚140㎝）。無遺物層である。粘質土とシルトが相互に堆積しているのがみられる。

第６層　暗灰色粘質土（層厚50～60㎝）。無遺物層である。

第７層　灰色細砂（層厚10㎝）。１～２㎜程度の砂粒である。

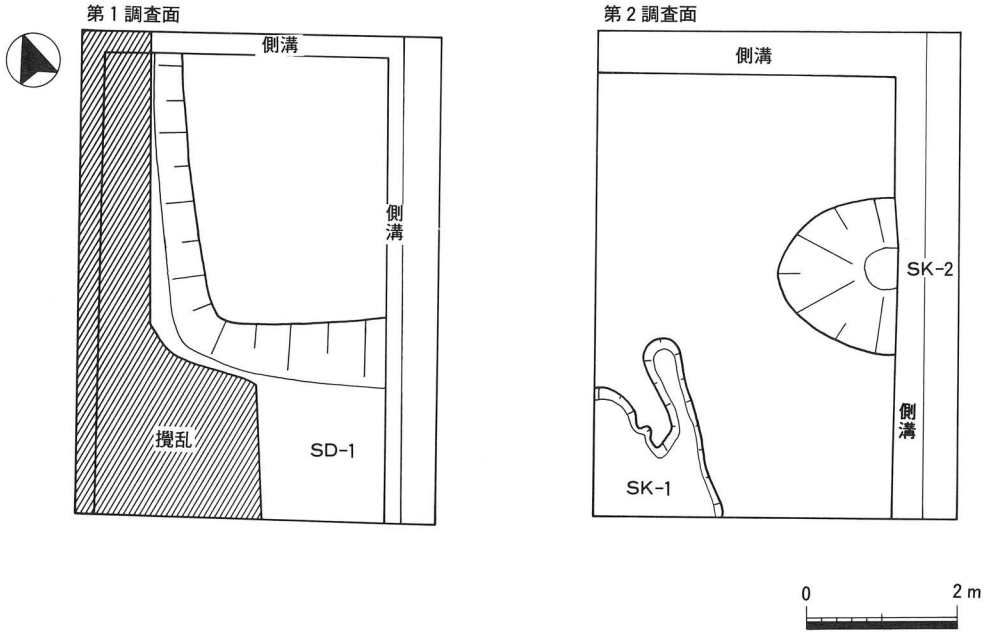
第８層　灰黒色粘土（層厚30㎝）。植物遺体を少量含む。

第９層　青灰色シルト（層厚30㎝）。植物遺体をごく少量含む。

第10層　灰青色細砂（層厚40㎝以上）。１～２㎜程度の砂粒である。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表（標高8.9～9.0ｍ）下1.2～1.3ｍの第２層上面（第１調査面）と現地表下1.6ｍの第３層上面（第２調査面）の２面を調査した。検出した遺構は中世以降の溝１条（ＳＤ－１）、平安時代後期に比定される土坑１基（ＳＫ－１）、古墳時代初頭に比定される土坑１基（ＳＫ－２）である。出土遺物は古墳時代初頭～中近世に至る遺物をコンテナ箱にして約１箱分であった。以下、各遺構について記す。



第４図　遺構平面図

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区の南西部で検出した土坑状遺構で、南西側は調査区外に至る。上部は水道管埋設工事により削平されている。検出部では平面不定形を呈し、東西径1.7ｍ、南北径2.3ｍ、深さ25㎝を測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は暗灰色細砂混シルトである。遺物は内部から平安時代後期に比定される土師質小皿など土器の小片がごく少量出土している。

ＳＫ－２

調査区東部で検出した。平面形状は検出部で半円形を呈する。東部の一部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西径1.9ｍ以上、南北径2.1ｍ、深さ60㎝を測る。断面は半円形を呈する。堆積土は淡灰青シルト（炭化した植物遺体が斑点状に含む）である。遺物は出土していないが層位からみて古墳時代初頭～前期ごろに比定されるであろう。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区で１条を検出した。調査区内で確認した方向は東から西へ伸びた後屈曲し、北方へ伸びるＬ字形に曲る溝である。西側の南北溝は大半が水道管埋設及び水路により撹乱されている。規模は検出部で、幅3.15ｍ以上、深さ56㎝を測る。断面形は検出部で、浅い半円形を呈する。堆積土は灰茶色砂礫粘質土・茶灰色細砂で、遺物は出土しなかった。この遺構の時期については検出面のレベルから判断すると鎌倉時代以降の自然河道と思われる。

３．まとめ

今回の発掘調査は小面積であり、明確なことは言えないが、この調査成果でわかったことについて各時代ごとに記す。

弥生時代中期後半

この時代のものは当調査区より北部へ約160ｍの地点で、大阪府教育委員会が実施した府道拡張工事の発掘調査で木棺・土器棺を主体部にもつ方形周溝墓が発見されており、その南側の広がりを確認する絶交の調査地であった。調査では第10次調査(SH93-10)と同様、対応する層位を明確に確認することができなかった。

古墳時代前期

古墳時代前期（庄内式～布留式古相）に比定される集落遺構が府道拡張工事で確認されており、その南側の広がりが第10次調査(SH93-10)と同様、今回の調査区でも確認された。

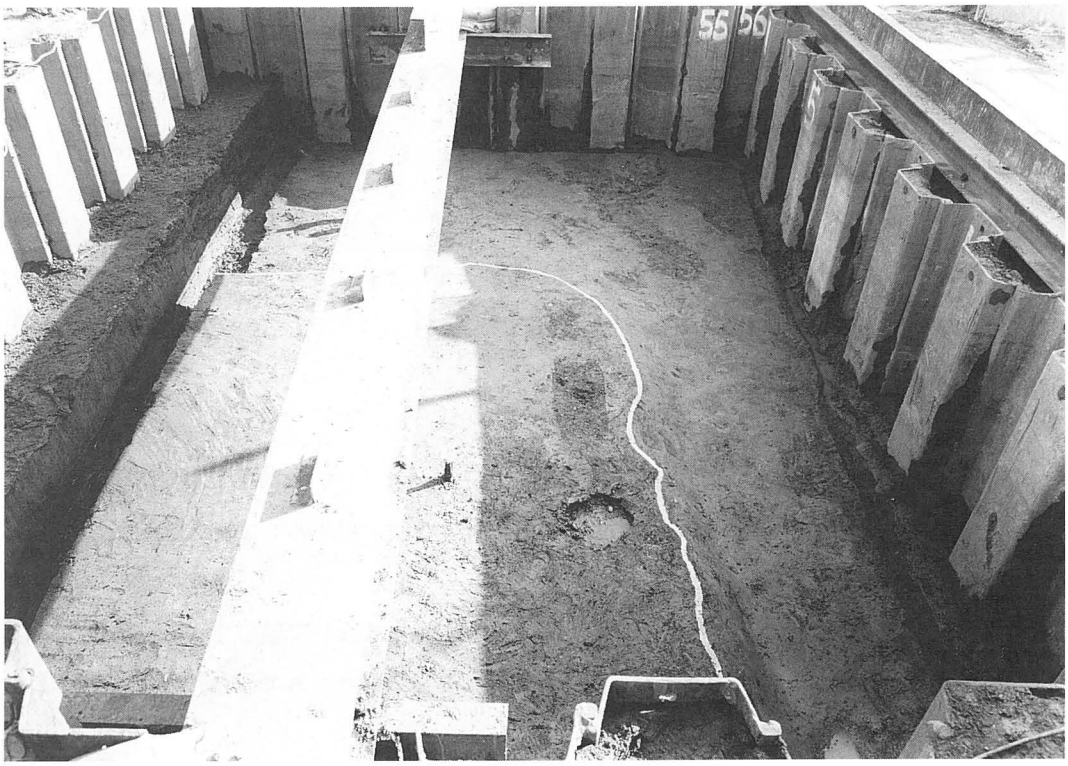
平安時代後期

生産域か集落域かは明確にできなかったが、この時代の遺構を確認している。第12次調査（SH93-12）では鋤溝・畝溝と思われる耕作に関連する溝が確認されており、周辺は生産域であったことがいえるであろう。

鎌倉時代以降

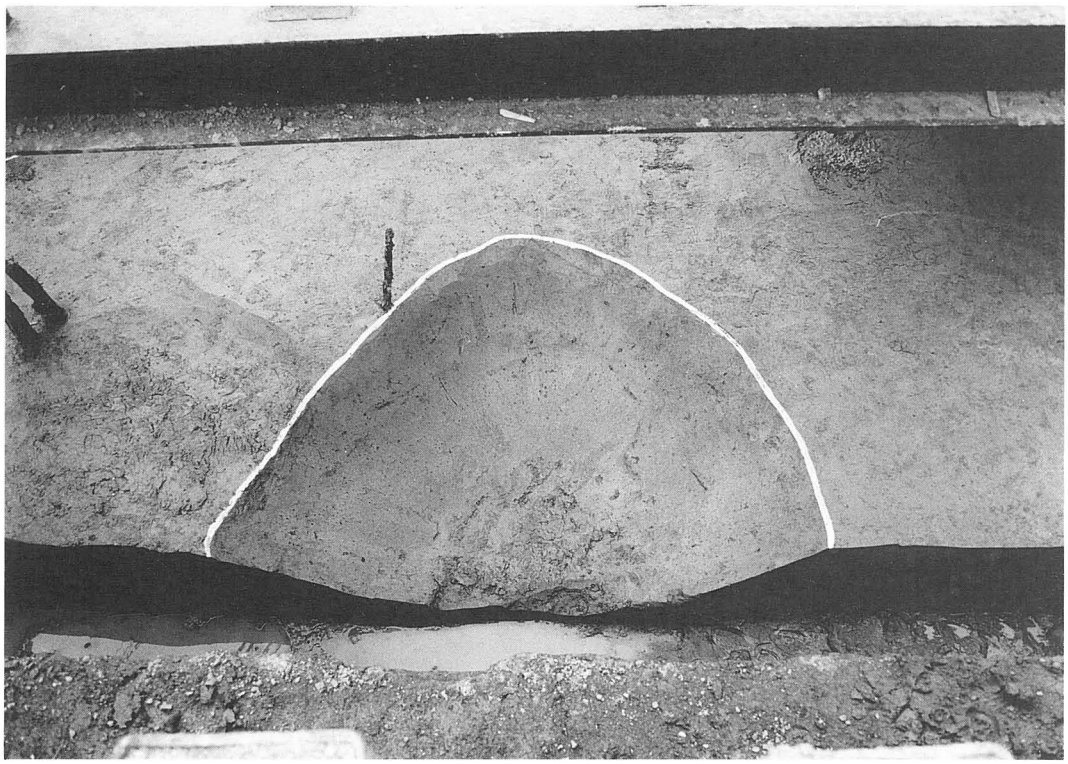
検出した溝は洪水などでできた自然河道と思われるもので、南部約40ｍの第10次調査(SH93-10)で確認された条里遺構は確認されなかった。

以上、今回の調査成果である。



第１調査面（北から）

第２調査面（南から）



ＳＫ－201（東から）

Ⅸ　成法寺遺跡第12次調査（ＳＨ93－12）

例　　言

1．本書は、八尾市高美町１丁目73・74で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する成法寺遺跡第12次調査（ＳＨ93－12）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第126号　平成６年１月24日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が大北幸男氏から委託をうけて実施したものである。

1．現地調査は、平成６年３月１日から３月15日にかけて、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は180㎡を測る。なお調査においては浜田千年・山内千恵子・平沼寿隆が参加した。

1．内業整理には上記の他、岩本順子・田島和恵・都築聡子が参加した。

1．本書の執筆・写真撮影及び編集は坪田が行った。

1．墨書人面土器の遺物実測図は、八尾市教育委員会文化財課作成のものを使用した。

本　文　目　次

1．はじめに……61

2．調査概要……62

　1）調査の方法と経過……62

　2）基本層序と出土遺物……62

　3）検出遺構と出土遺物……63

3．まとめ……71

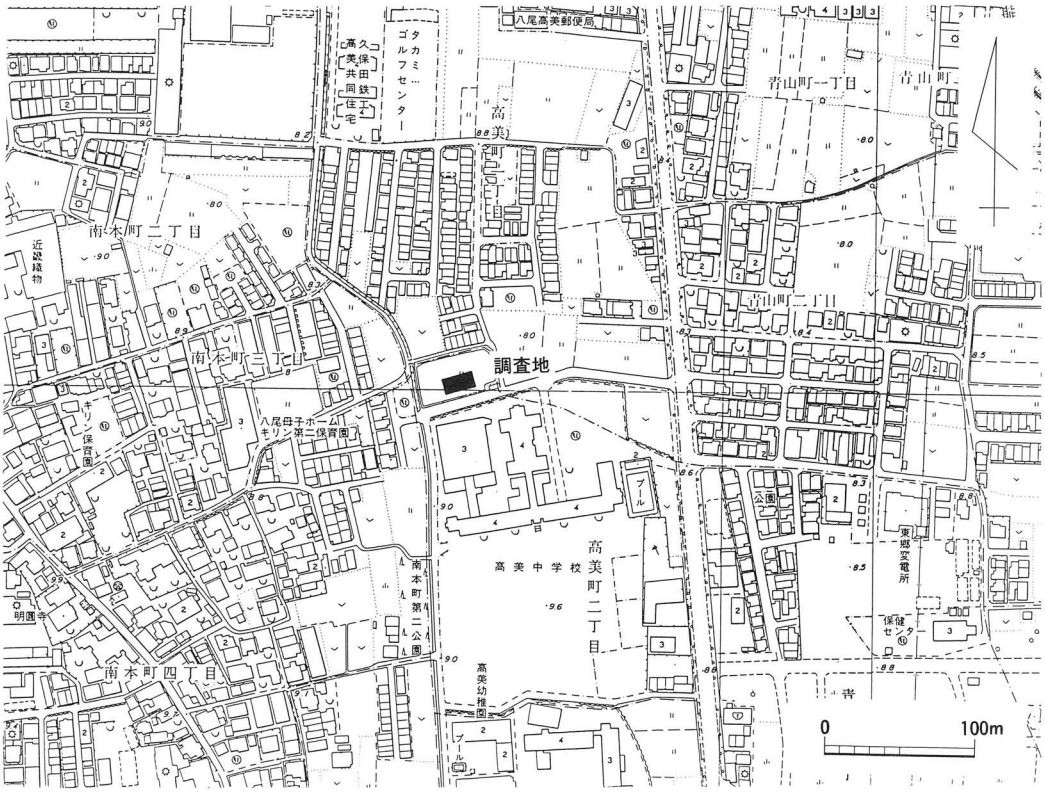
Ⅸ　成法寺遺跡第12次調査（ＳＨ93－12）

１．はじめに

成法寺遺跡は八尾市の中央部西に位置し、現在の行政区画では光南町・清水町・南本町・高美町・松山町・明美町・陽光園一帯にあたる。当遺跡は北側で東郷遺跡、東側で小阪合遺跡、南側で矢作遺跡に接しており、地形的には旧大和川の主流である長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に立地している。

当遺跡は昭和56年５月、八尾市教育委員会が光南町１丁目29番で実施した試掘調査により確認された遺跡で、以降八尾市教育委員会・大阪府教育委員会・当調査研究会により数次の発掘調査が行われている。これらの調査成果から、当遺跡は弥生時代中期～中世にわたる遺跡であることが知られている。

今回の調査地から北東・南東へ約20ｍの地点では、平成５年度、下水道工事の立坑部分で当調査研究会により第10・11次調査が行われており、古墳時代初頭から中近世の遺構・遺物が検出されている（前掲項）。



第１図　調査地位置図（Ｓ＝１／5000）

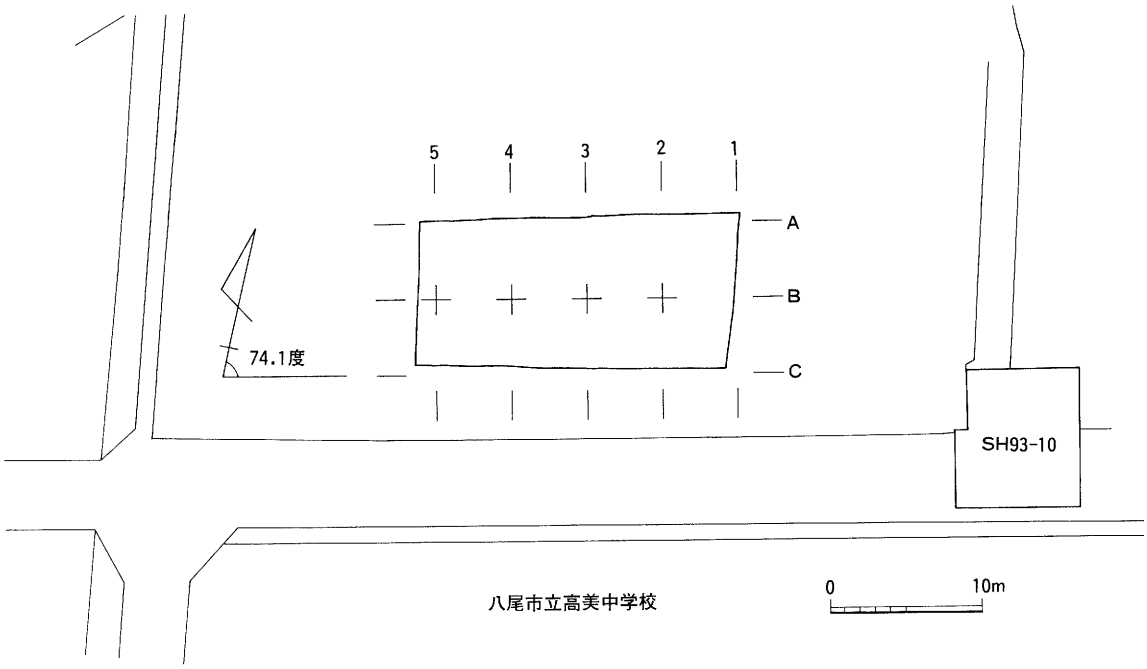
2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は共同住宅建設に伴う調査で、当調査研究会が成法寺遺跡内で行った第12次調査である。調査に至る経緯は、八尾市教育委員会文化財課の試掘により、奈良時代に比定される墨書人面土器を包蔵した井戸が検出されたことによる。

調査は、この試掘の成果をもとに、現地表下約1.2m～1.3mまでを機械掘削し、以下は人力掘削により実施した。

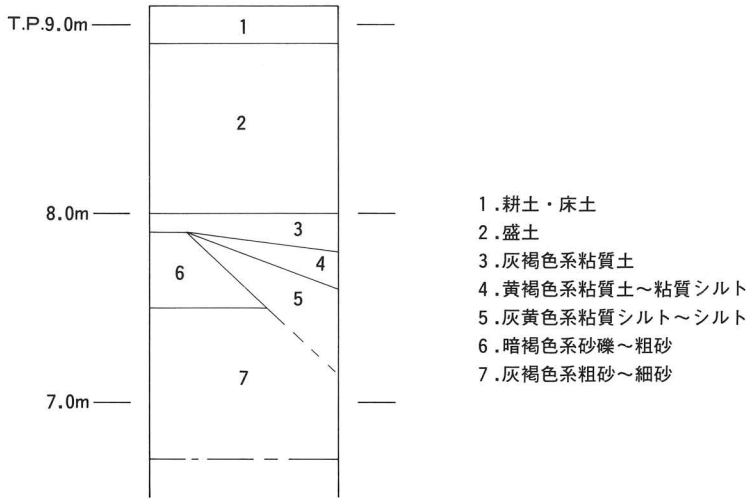
地区割は調査区平面形に合わせて5m方眼を任意に設定した。この5m区画の北東角の杭番号がその地区名となる。なお、この方眼の南北ラインは北から西に約15.9度振っている。



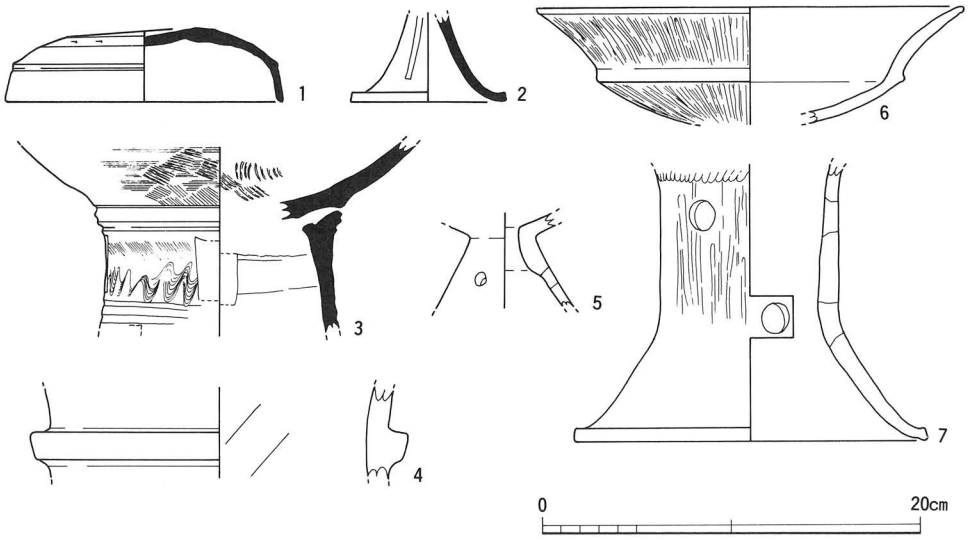
第2図　調査区設定図（S＝1／500）

2）基本層序と出土遺物

第1層は調査直前までの耕土・床土、第2層が第1層に伴う盛土である。第3層は中世頃の包含層で、土器を少量含んでいる。第4層・第5層は調査区東半に堆積している。第4層は弥生時代後期から奈良時代頃までの土器を含んでおり、この上面が第1次面で、標高は7.8m～7.9mを測る。第5層・第6層は弥生時代後期の土器を少量含んでおり、この上面が第2次面で、標高は7.6m～7.9mを測る。第7層から遺物は出土していない。



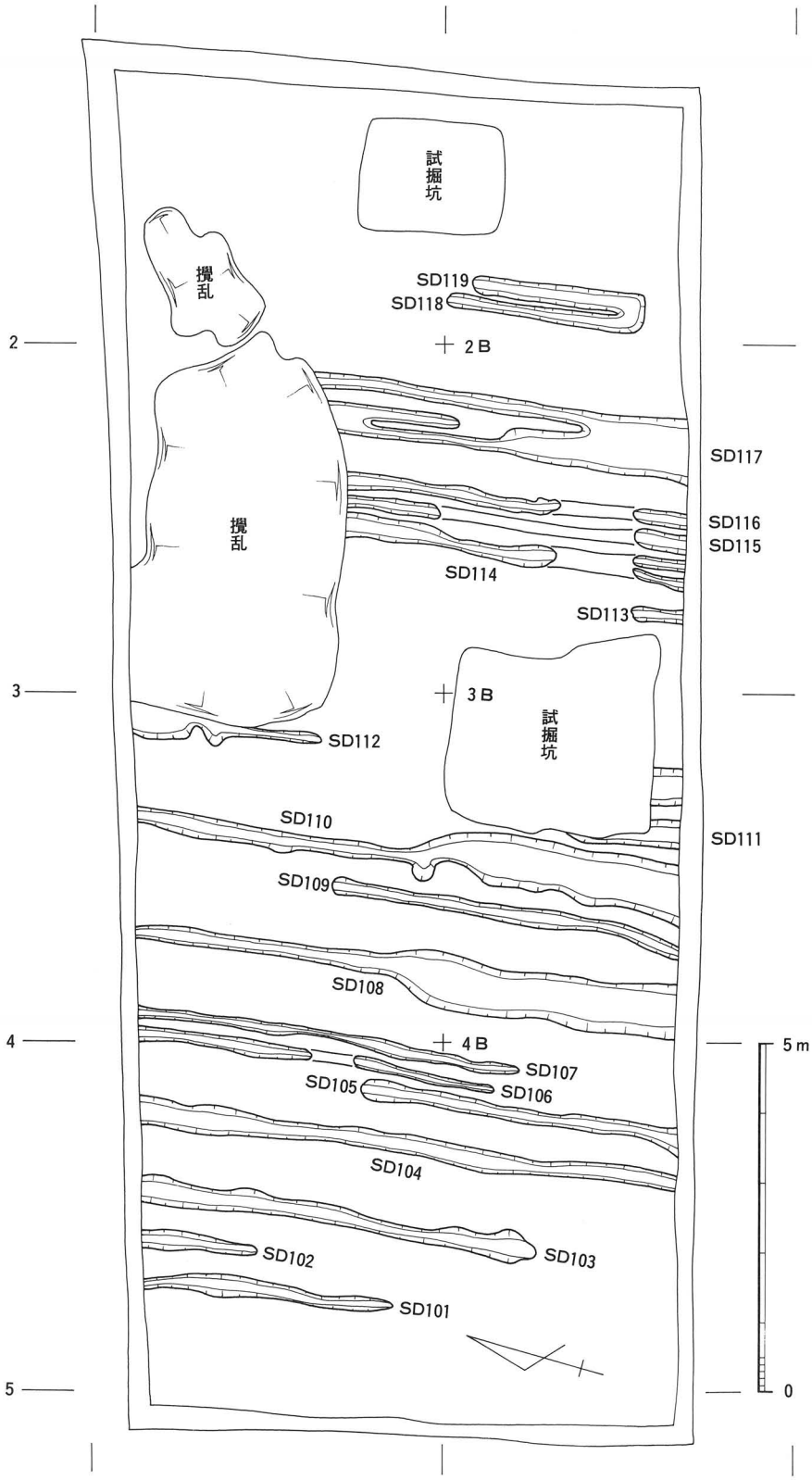
第３図　基本層序（Ｓ＝１／40）



第４図　包含層出土遺物（Ｓ＝１／４）

３）検出遺構と出土遺物

第１次面で溝19条（ＳＤ101～119）、第２次面で溝４条（ＳＤ201～204）・ピット３個（ＳＰ201～203）・井戸１基（ＳＥ201）・落ち込み２基（ＳＯ201・202）を検出した。



第５図　第１次面平面図（S＝１／100）

〈第１次面〉

ＳＤ101～119

調査区全域で検出したほぼ南北方向の溝で、平行して直線的に伸びるものである。幅10cm～80cm・深さ５cm～10cmを測り、埋土は灰褐色粗砂混じり粘土である。ＳＤ117は幅約20cmの３条の溝が南部では幅約80cmの１条の溝となっている。ＳＤ114やＳＤ118・119でも同様の状況が窺え、またＳＤ105～107やＳＤ114～116も、元々１条の溝であった可能性がある。中世～近世頃の耕作に関連する溝と考えられる。法量等は表１にまとめた。

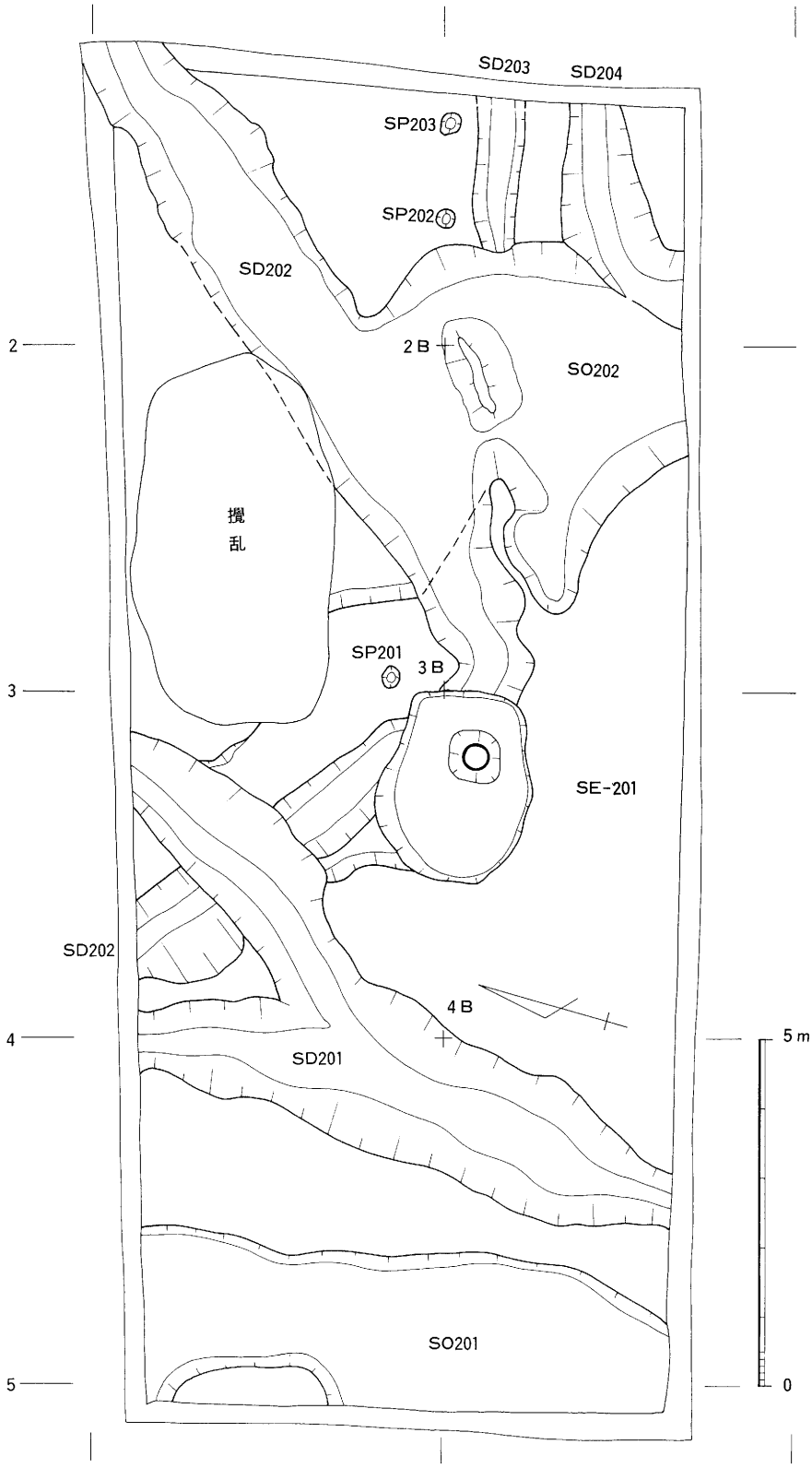
ＳＤ	地区	幅(cm)	深さ(cm)	検出長(m)	備　考	間隔(cm)
101	４Ａ	13～32	4	3.60		35
102	４Ａ	17～32	5	1.65		32
103	４Ａ～Ｂ	20～47	5	5.70		90
104	４Ａ～Ｂ	20～40	5	7.70		45
105	４Ａ～Ｂ	15～32	4	4.65		10
106	４Ａ～Ｂ	12～25	4	5.10		7
107	４Ａ～Ｂ	８～20	4	5.50		60～100
108	３Ａ～Ｂ	20～78	7	7.80		35～75
109	３Ａ～Ｂ	15～27	6	5.05		15
110	３Ａ～Ｂ	15～80	8	7.90		12
111	３Ｂ	40	5	1.60		20
112	３Ａ～Ｂ	12～52	7	7.90		215
113	２Ｂ	17	5	0.75		25
114	２Ａ～Ｂ	13～43	5	4.90	南は２本	10
115	２Ａ～Ｂ	15～25	5	4.90		10
116	２Ａ～Ｂ	15～26	5	4.90		42～62
117	２Ａ～Ｂ	85	５～17	5.40	北は３本	115
118	１Ｂ	15～23	8	2.80	南で連続	5
119	１Ｂ	27	10	2.50		

表１　第１次面溝（ＳＤ101～119）法量表

〈第２次面〉

ＳＤ201

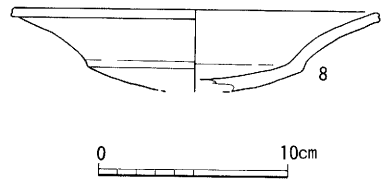
調査区西部を南北方向に伸びる溝で、検出長約10.5ｍを測り、北部で二又に分岐している状況である。規模は幅0.8ｍ～2.2ｍ、中央での深さ約0.4ｍを測り、底部のレベルはほぼフラットである。断面皿状で、埋土は上層が灰褐色粗砂混じり粘土（炭含む）、下層が灰色粗砂混じり粘土で、滞水していた状況が窺える。弥生時代後期から奈良時代の土器が少量出土している。



第６図　第２次面平面図（S＝１／100）

ＳＤ202

調査区北東角から南西方向に約10.5ｍ伸び、３Ｂ杭付近でほぼ直角に屈曲して、約6.5ｍ北西方向に伸びる直線的な溝である。北部でＳＤ201に削平されている。規模は幅1.2ｍ～1.8ｍ、深さ約40㎝を測り、底部のレベルは東部が深くなっている。断面逆台形に近く、埋土は上層が黄褐色系の粘質土、下層が灰色系の粘質シルト～粘土である。古墳時代中期頃までの土器が少量出土している。



第７図　ＳＤ202出土遺物（Ｓ＝１／４）

ＳＤ203

調査区南東１Ｂ区で検出した東西方向の溝である。西部はＳＯ201と連続しており、切り合い関係は確認できなかったが、当溝が削平されているようである。規模は幅0.5ｍ～0.7ｍ、深さ約７㎝を測る。断面皿状で、埋土は灰色粘土である。遺物は出土していない。

ＳＤ204

１Ｂ区、ＳＤ203の南で検出した東西方向の溝である。西部は南に屈曲し、ＳＯ201と連続しているが、切り合い関係は確認できなかった。規模は幅0.8ｍ～1.3ｍ、深さ約10㎝を測る。断面皿状で、埋土は暗褐色細砂混じり粘土である。遺物は弥生時代後期の土器が少量出土している。

ＳＰ201～203

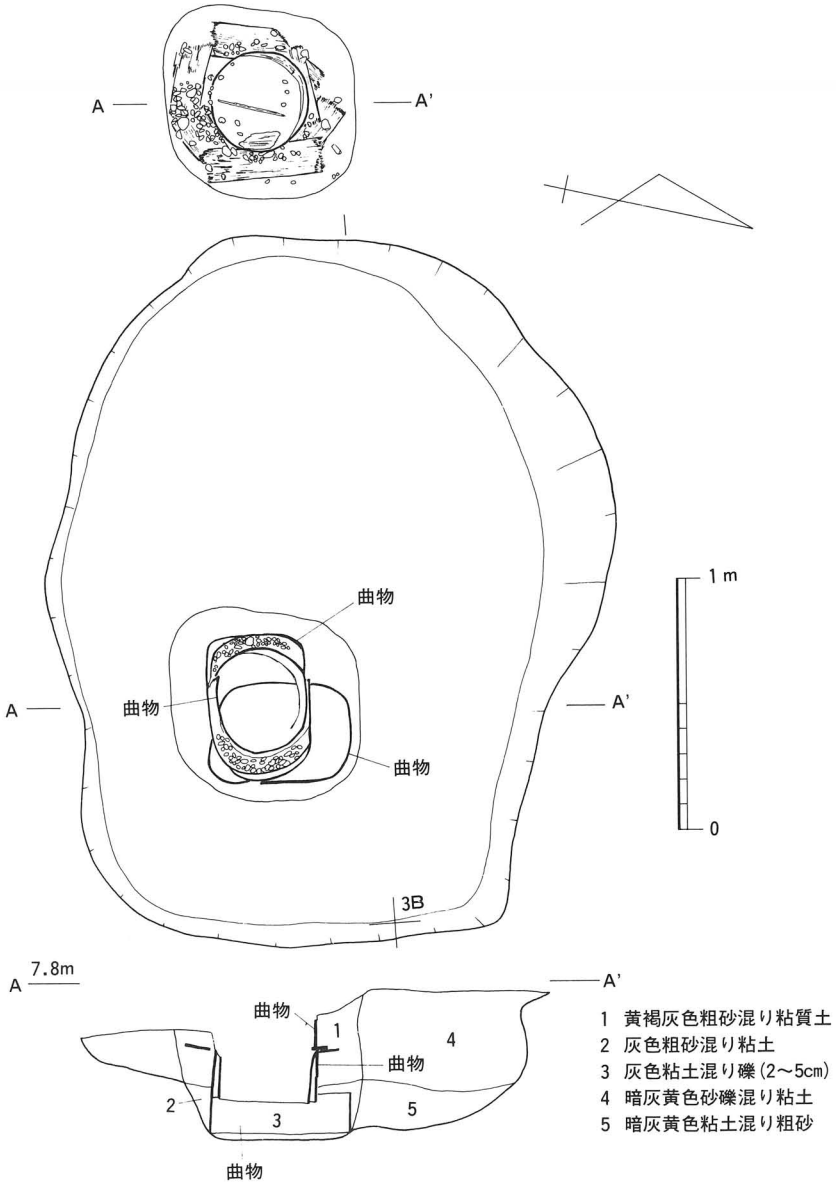
１Ｂ区のＳＰ202・203は約1.4ｍ間隔で、位置的にはＳＤ203の北側に平行していることから、これらの遺構に何らかの関連がある可能性がある。法量（長辺×短辺×深さ(㎝)）・埋土は、ＳＰ201－30×24×12・暗灰褐色細砂混じり粘土、ＳＰ202－25×23×４・淡褐灰色微砂混じり粘土、ＳＰ203－30×25×11・淡褐灰色微砂混じり粘土である。

ＳＥ201

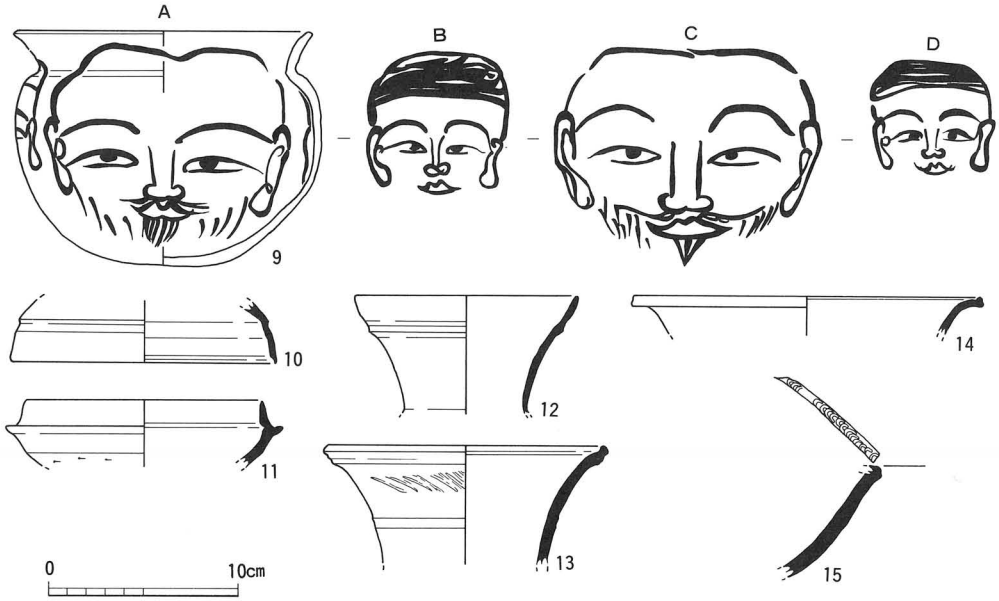
前述の試掘調査の際検出された井戸で、調査区中央３Ａ～Ｂ区に位置する。掘形平面形は長辺約2.8ｍ×短辺約2.2ｍの不定形で、深さ約0.6ｍを測る。井戸枠に曲物を使用しており、二段が遺存しているが、下から二段目は曲物が二重になっている。曲物の構造は、最下段（曲物１）は長辺約55㎝・短辺約40㎝・高さ約15㎝の平面隅丸長方形の曲物、二段目は長辺約55㎝・短辺約40㎝・高さ約20㎝の平面隅丸長方形の曲物（曲物２）の内に、直径約40㎝・高さ22㎝以上の平面円形の曲物（曲物３）というものである。上からみると曲物１と２をＬ字形に組み、交差部分に曲物３を入れている。二段目は曲物上面に段差があり、曲物３上面が外側の曲物２より高く、曲物２上位には幅５㎝～15㎝・長さ20㎝～30㎝・厚さ約１㎝の板を曲物３の周囲に

並べている。また曲物１内部には径２～５㎝の石、二段目の曲物間の隙間には径約２㎝の石が充填されている。

出土遺物には前述の墨書人面土器（９）の他、６世紀代から奈良時代に比定される須恵器・土師器がある。９は口径15.8㎝・器高12.6㎝・体部径16.1㎝を測る土師器甕である。口縁部ヨコナデ、底体部ナデで、外面に指頭痕が残る。底体部外面の４面に大小二種の人面が交互に描かれ、表裏面にあたるＡ・Ｃ面（大）とＢ・Ｄ面（小）はそれぞれ同一の人面となっている。これは４面を描く場合の通例のようである。次に観察される特徴を列挙する。



第８図　ＳＥ201平・断面図（Ｓ＝１／30）



第９図　ＳＥ201出土遺物（Ｓ＝１／４）

・Ａ・Ｃにはあご髭・鼻髭が描かれている。このような類例は宮城県市川橋河床遺跡にある。この例では同一人面を４面に描き、そのうちの２面に髭を付加している。

・口縁部にまで及んで頭部が描かれており、Ｂ・Ｄには横線による頭髪あるいは帽子状の表現がみられる。

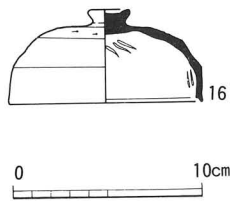
・ＢとＣが近接し、Ｂの左側部がＣの右耳を避けるようにややくぼんでいる。このことから墨書の順番はＡ・Ｃ→Ｂ・Ｄである可能性が高い。

・ＡとＣでは鼻髭の表現に、またＢとＤでは鼻部の筆使いに違いがある。

須恵器（15）は器台口縁部と考えられる。口縁端部に半裁竹管による刺突文を施している。

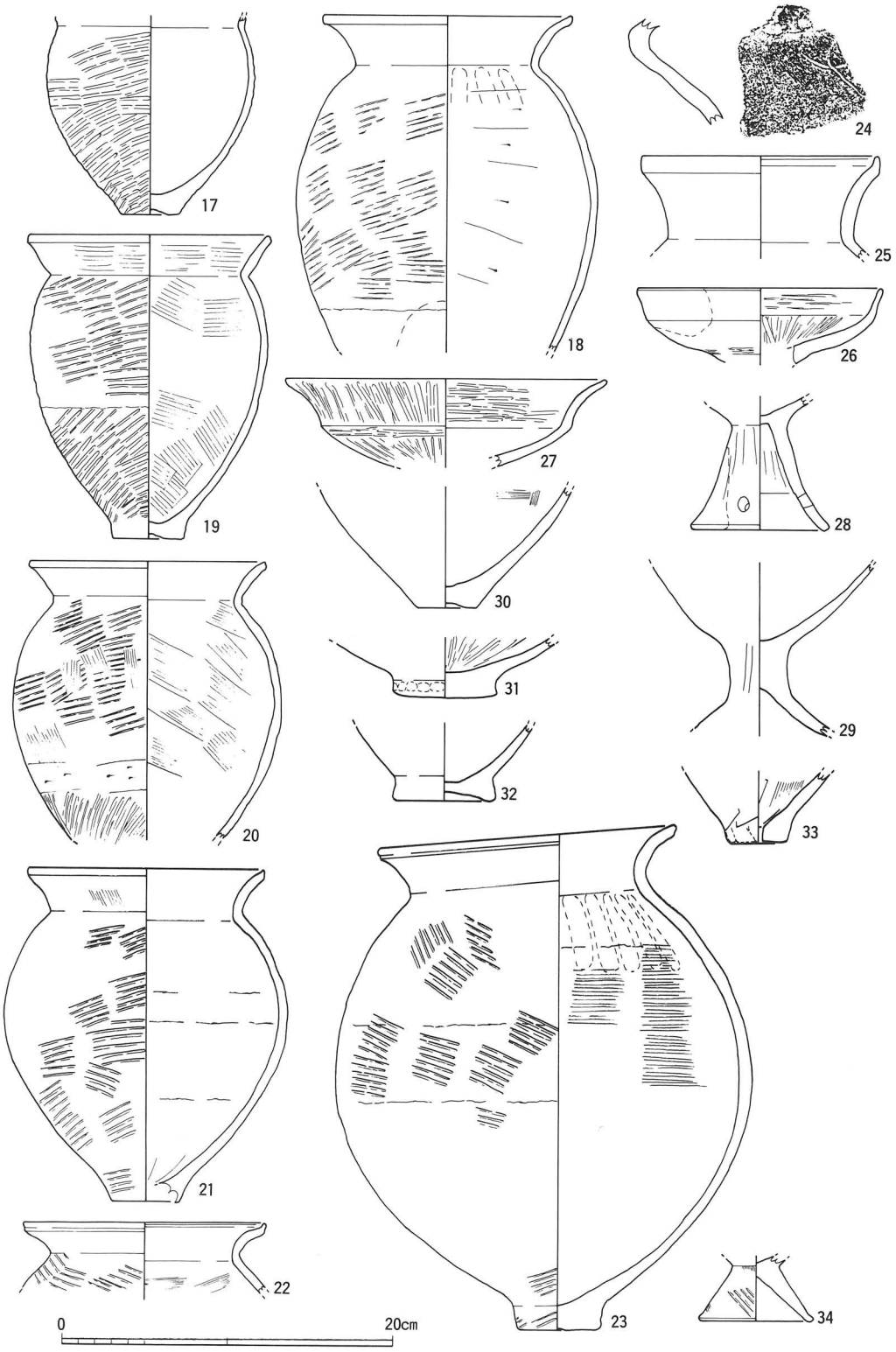
ＳＯ201

調査区東部で検出した平面不定形の浅い落ち込みである。規模は東西5.5ｍ・南北5.0ｍ以上・深さ約20㎝である。埋土は上から黄灰褐色粘質シルト・灰褐色粘質シルト・淡黄灰色粘質シルト・灰青色シルト～微砂である。検出状況ではＳＤ202を削平しているが、ＳＤ202のオーバーフローによる堆積部分である可能性がある。



第10図　ＳＯ201
出土遺物（Ｓ＝１／４）

遺物は古墳時代中期までの土器が出土している。須恵器杯蓋（16）は完形品である。口径10.4㎝・器高4.9㎝を測り、内面の天井部・口縁部にヘラ記号を有する。



第11図　ＳＯ202出土遺物（Ｓ＝１／４）

ＳＯ202

調査区西端で検出した。検出部は幅1.6ｍ以上・深さ約15㎝の南北方向の溝状を呈するが、埋土の状況等から自然の落ち込みであると考えた。埋土は黄褐灰色粘土混じり粗砂で、ベースとなる層に類似している。弥生時代後期末に比定される土器、甕（17～23）・壺（24・25）・高杯（26～28）・他（29～34）が出土している。壺（24）は肩部にヘラによる記号、あるいは絵画を描いている。

３．まとめ

今回の調査では、弥生時代後期末から中世・近世の遺構・遺物を検出した。

弥生時代後期末では落ち込みが検出され、当地はこの頃に埋没したと考えられる河川上にあたることが確認された。

奈良時代では井戸・溝等の遺構が検出されたが、建物等は検出されなかった。当時の遺構は当地から西に約500ｍで検出されているが、今回の調査地周辺にも当時の生活域があったのであろう。井戸ＳＥ201から出土した墨書人面土器は、八尾市域では弓削遺跡・東郷遺跡・成法寺遺跡に次いで四例目となるものである。このうち弓削遺跡のものは今回と同様井戸からの出土である。

中世・近世では鋤溝が検出され、当地は耕作地であったことが確認された。

なお、包含層中からは古墳時代中期～後期に比定される須恵器器台（３）や埴輪片（４）が出土しており、ＳＯ201出土の完形の須恵器杯蓋（16）とを考え合わせると、周辺に古墳の存在も考えられる。今回検出したほぼ直角に屈曲するＳＤ202は、その形状から古墳の周溝である可能性もあろう。

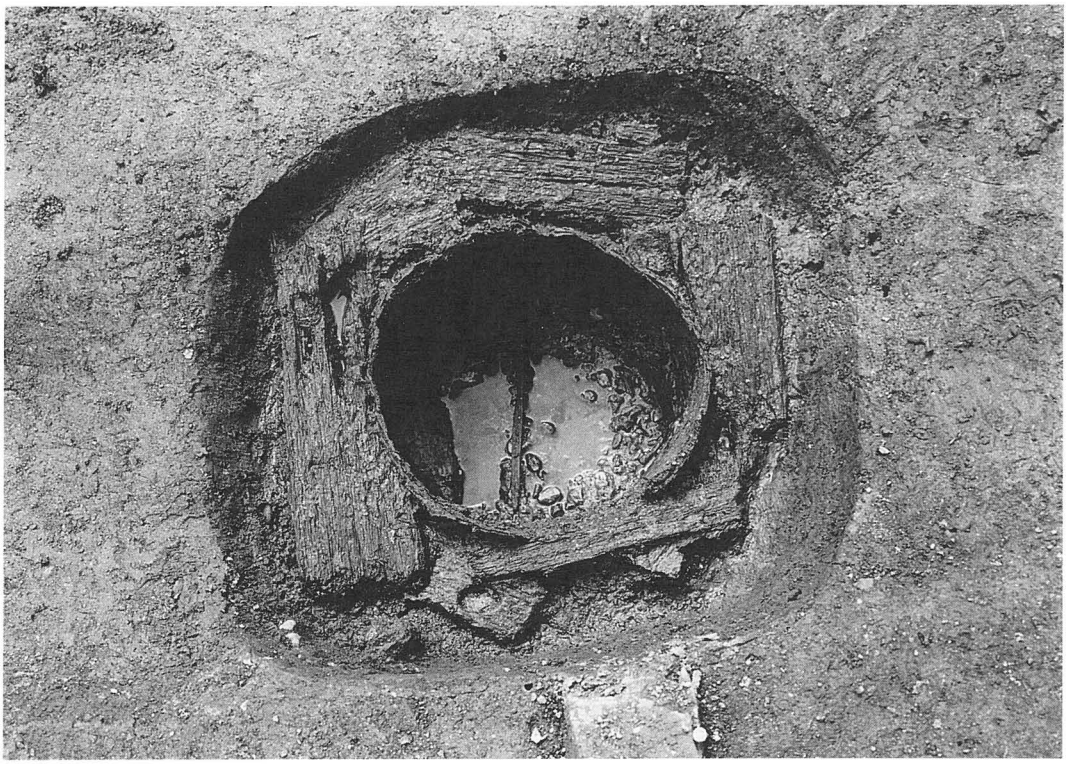
参考文献

田中勝弘「墨書人面土器について」（日本考古学会『考古学雑誌』第58巻　第４号）

図版一

第１次面（西から）

第２次面（東から）

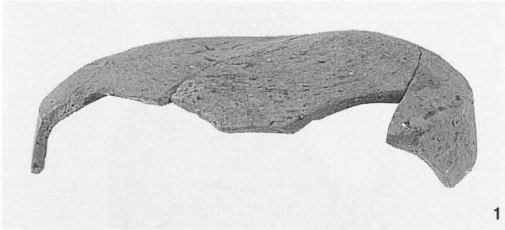


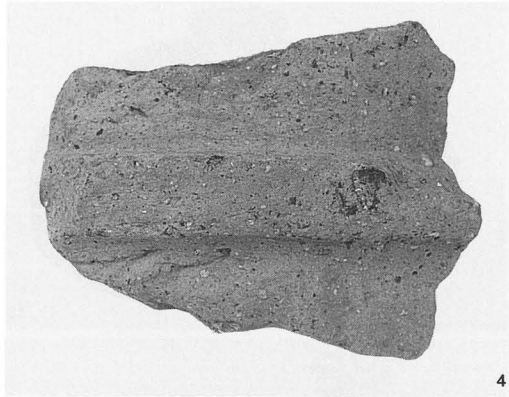
ＳＥ201上面（北から）

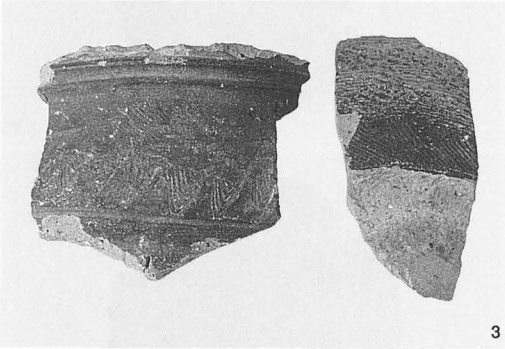
ＳＥ201（東から）

ＳＥ201曲物（東から）

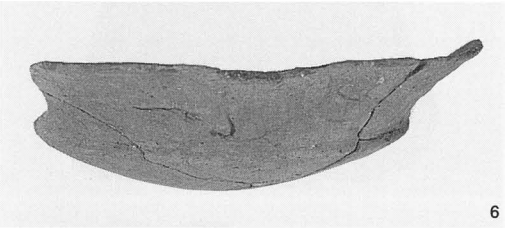
ＳＥ201曲物（北から）


1


4


3

7


6

A

C

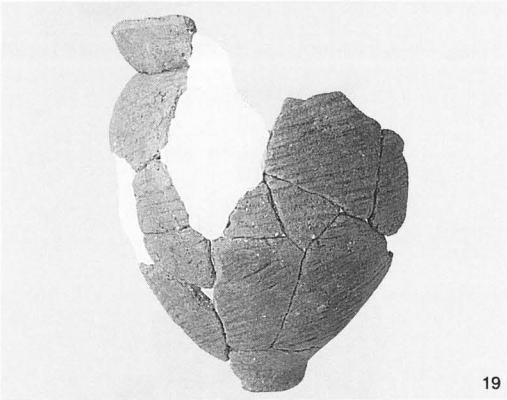
B

D

9

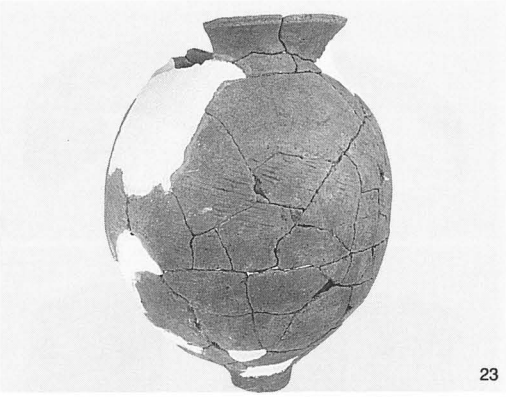
図版五

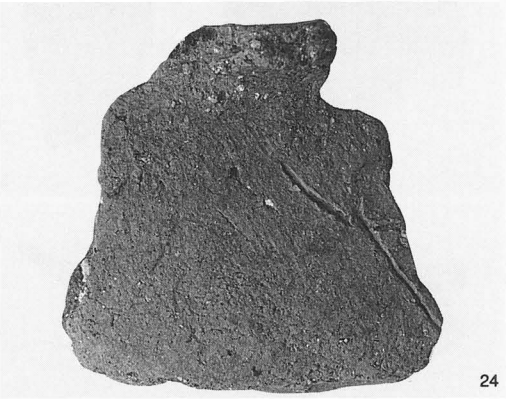
16


19

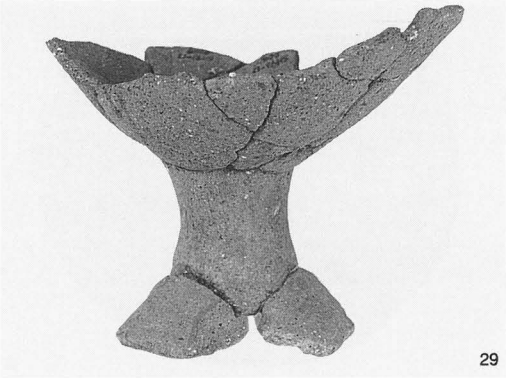
20

21


23


24

28


29

Ⅹ　太子堂遺跡第５次調査（ＴＳ93－５）

例　　言

1．本書は、八尾市東太子２丁目地内で実施した公共下水道工事（平成５年度第６工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する太子堂遺跡第５次調査（ＴＳ93－５）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第69号　平成５年９月14日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年11月30日～12月３日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約29㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……77

2．調査概要……78

　1）調査の方法と経過……78

　2）基本層序……78

　3）検出遺構と出土遺物……79

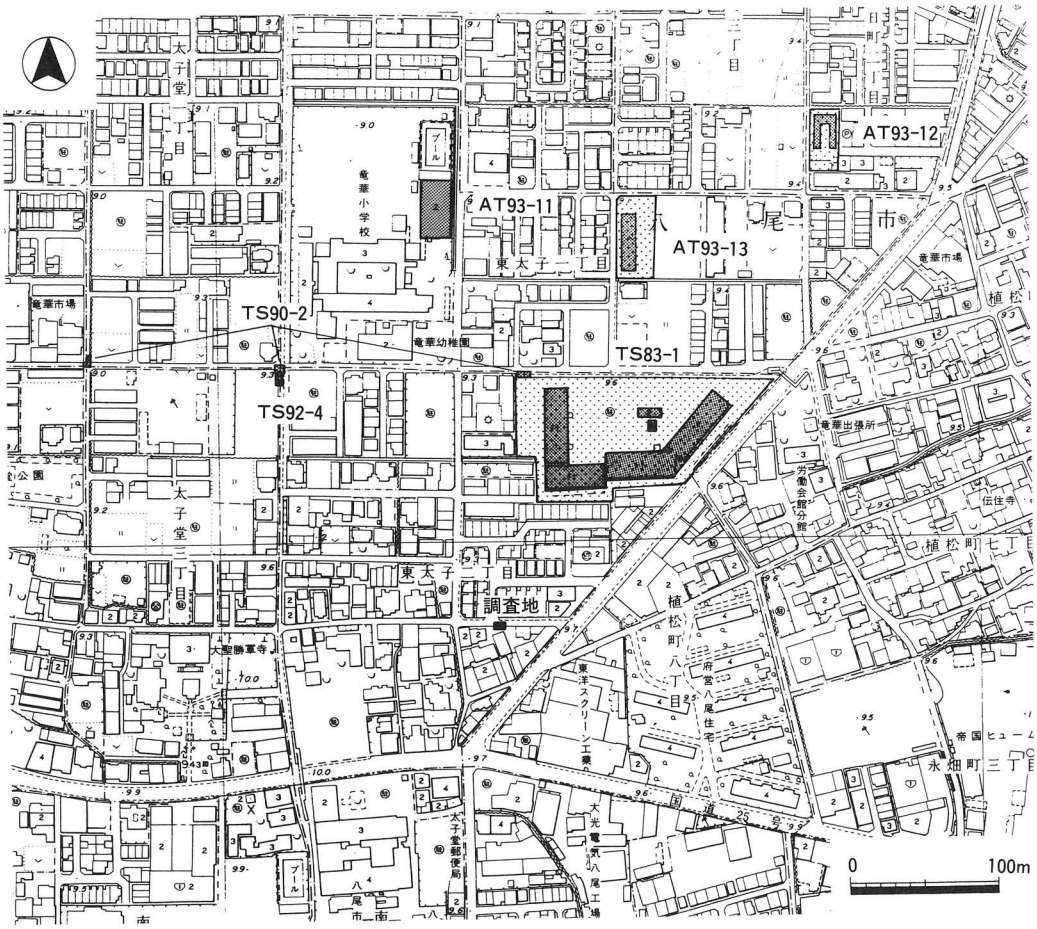
3．まとめ……80

Ⅹ　太子堂遺跡第５次調査（ＴＳ93－５）

１．はじめに

太子堂遺跡は八尾市の南西部にあたり、現在の行政区画では太子堂３～５丁目、東太子２丁目・南太子１～６丁目に所在する。地理的には旧大和川の主流である長瀬川と平野川に挟まれた沖積地の自然堤防上に位置する。当遺跡の周辺には南に木の本遺跡、南西に八尾南遺跡、北東に跡部遺跡、西に亀井遺跡が存在している。

当遺跡では昭和58年に当調査研究会が実施した第１次調査（TS84-1）で古墳時代後期・奈良時代の遺構・遺物が確認されている。その後、平成元年に公共下水道に伴う発掘調査が行われ、古墳時代前期の遺構・遺物が存在することを確認した。また、平成３年に大阪府教育委員会が当遺跡の南側を東西に走る国道25号線と東側の南北に走る旧主要地方道大阪環状線の太子堂交差点で下水工事に伴う発掘調査が行われ、古墳時代から平安時代の河川跡が確認されている。



第１図　調査地位置図及び周辺図

今回の調査地の周辺では、6世紀後半ごろに「物部氏と蘇我氏との戦いの痕跡」が遺存している。調査地より西へ約200mの所には「聖徳太子古戦場の石碑が建てられている大聖勝軍寺、南西へ約110mの所には「物部守屋墓」がある。また、調査では当調査地の北東へ約100mの所に第1次（TS83-1）調査地、北へ約150mの所に第2次（TS90-2）・第4次（TS92-4）調査地がある。

註

○ 八尾市役所「増補版 八尾市史(前近代)本文編」 1988年

○(財)八尾市文化財調査研究会『4. 太子堂遺跡第1次調査』「昭和58年度事業概要報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告5 1984

○(財)八尾市文化財調査研究会『18. 太子堂遺跡第2次調査』「平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」1991

○(財)八尾市文化財調査研究会「太子堂遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の発掘調査は公共下水道（第6工区）工事に伴うもので、八尾市と八尾市教育委員会、当調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は、平成5年11月30日～12月3日である。今回の調査は、当調査研究会が実施した第5次調査にあたる。

調査区は下水道工事の立孔部分1ヶ所（縦6.0m×横5.2m）で、面積約31㎡を測る。調査は現地表下約1.2mまでの土層を機械掘削した。さらに遺構面となる土層が認められないことから工事で掘削される最終深度付近までの土層の確認を行った。

第2図　調査区設定図

2）基本層序

基本層序は調査区内で検出した土層で普遍的に存在する13層を摘出した。

以下、これらの土層について記す。

第１層　盛土・攪乱・旧耕土（層厚60㎝）。道路の基礎と埋設工事等で攪乱している。旧耕土は借換地部分の一部で確認した。表土面（Ｇ．Ｌ）の標高は、約9.9ｍを測る。

第２層　灰茶色砂質土（層厚10～15㎝）。

第３層　灰茶色粘質土（層厚15㎝）。褐色の斑点がみられる。

第４層　茶灰色細砂混粘質土（層厚20㎝）。奈良時代の土器片がごく少量含まれている。

第５層　淡青灰色微砂（層厚40㎝）。第４層と同様、奈良時代の土器片がごく少量含んでいる。

第６層　淡灰茶色シルト（層厚40㎝）。奈良時代のベース面と考えられるが、遺構は認められなかった。

第７層　青灰色シルト（層厚30～35㎝）。

第８層　暗青灰色シルト（層厚10～15㎝）。

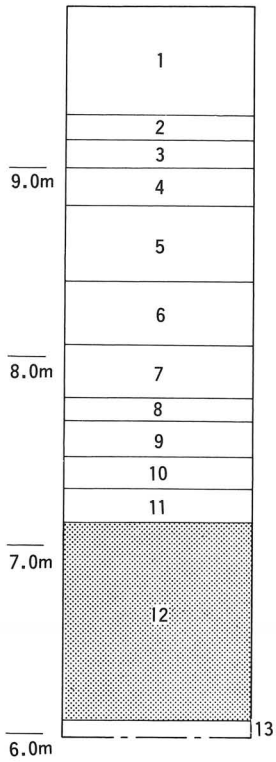
第９層　灰青色粘質シルト（層厚20㎝）。

第10層　淡灰青色微砂（層厚15～20㎝）。

第11層　灰色粘土（層厚15～20㎝）。

第12層　暗灰色粘土（層厚100～110㎝）。植物遺体を含む。

第13層　青灰色シルト（層厚10㎝以上）。上面の標高は6.1ｍを測る。



1.盛土・攪乱・旧耕土
2.灰茶色砂質土
3.灰茶色粘質土
4.茶灰色細砂混粘質土
5.淡青灰色微砂
6.淡灰茶色シルト
7.青灰色シルト
8.暗青灰色シルト
9.灰青色粘質シルト
10.淡灰青色微砂
11.灰色粘土
12.暗灰色粘土
13.青灰色シルト

第３図　基本層序柱状図

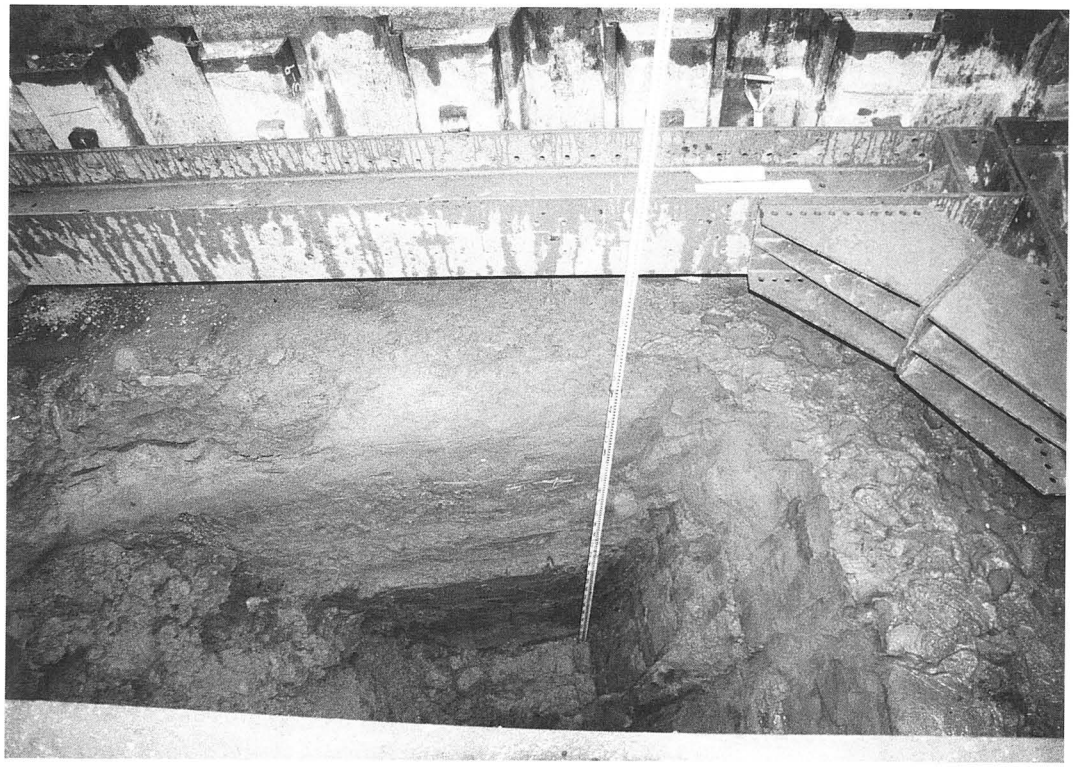
３）検出遺構と出土遺物

現地表（標高T.P.+9.9ｍ）下約0.6ｍ前後までの土層は、盛土及び攪乱である。さらに、北部では東西方向に埋設されたＮＴＴケーブルが走り、上幅1.5ｍ、下幅1.0ｍ、深さ2.0ｍの範囲で攪乱されていた。南側の借換地にあたる部分で上層の地層の一部が確認された程度である。第３層～第４層は奈良時代の土層と考えられる。その下の第５層上面が遺構面と思われるが遺構は検出しなかった。さらに下層でも生活面となる面は認められなかった。第12層は植物遺体を含む泥炭質の地層が厚く堆積しており、湿地帯であったと考えられる。

3．まとめ

今回の発掘調査は、小面積な調査区ではあったが奈良時代の遺物を包む層を検出することができた。しかし、遺構は調査区内では検出することはできなかった。北へ約100ｍの地点で行った第１次調査（TS83-1）では井戸・小穴などの集落遺構が確認されており、南部にもこの時期の生活域の範囲が想定される。また、調査区南部には古くから街道として栄えている国道25号線が走っており、今回の調査地の南側にはそれに関連する遺構が存在するであろう。

参考文献
○(財)八尾市文化財調査研究会「太子堂遺跡」(財)八尾市文化財調査研究会報告34 1992



南壁（北から）

下層確認（西から）

Ⅺ　田井中遺跡第13次調査（ＴＮ93－13）

例　　言

1．本書は、八尾市田井中１丁目で実施した公共下水道工事（平成５年度第90工区）に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する田井中遺跡第13次調査（ＴＮ93－13）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第163号平成５年２月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成６年２月２日から平成６年２月10日にかけて、岡田清一を担当者として実施した。面積は約25㎡を測る。

1．本書に関わる業務は、岡田が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに……83

2．調査概要……84

　1）調査の方法と経過……84

　2）基本層序……84

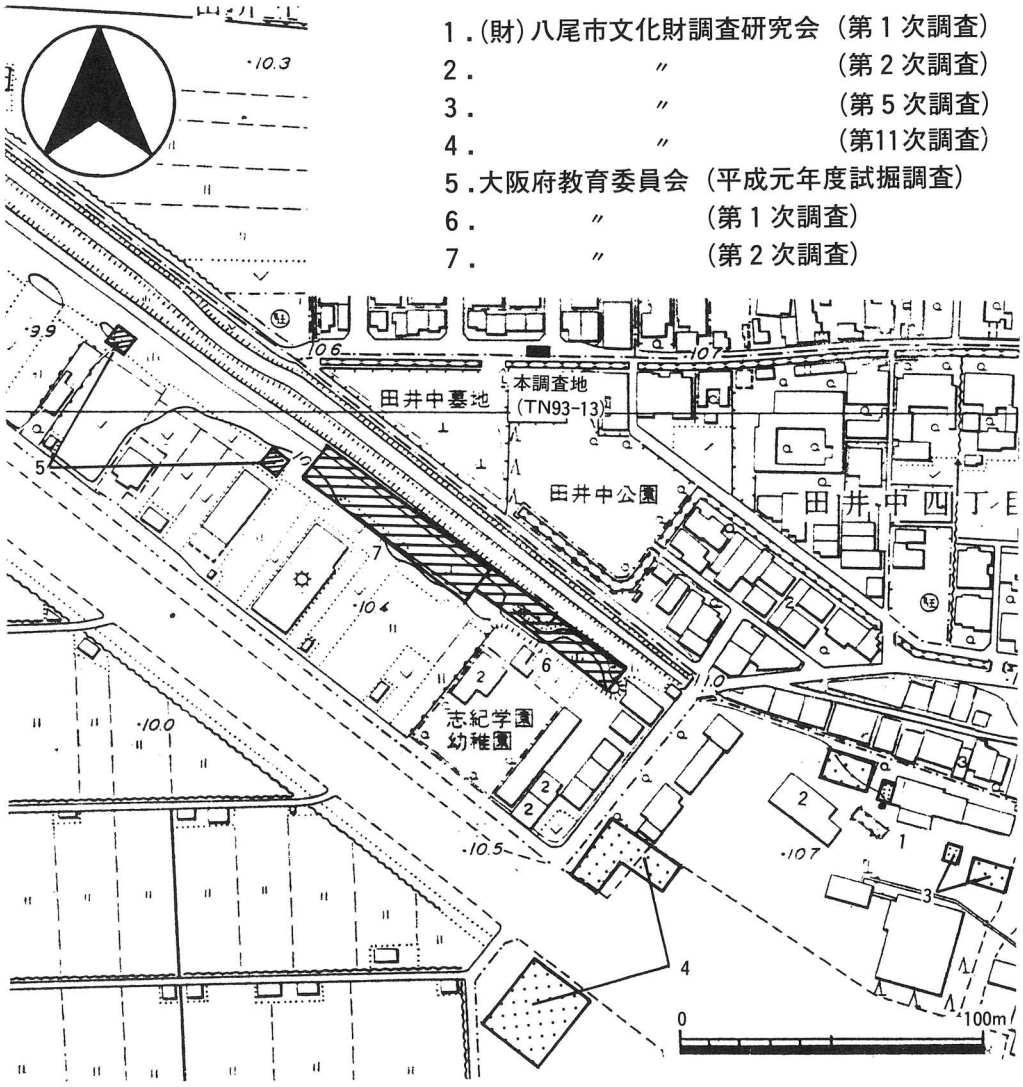
　3）検出遺構と出土遺物……85

3．まとめ……87

Ⅺ　田井中遺跡第13次調査（ＴＮ93－13）

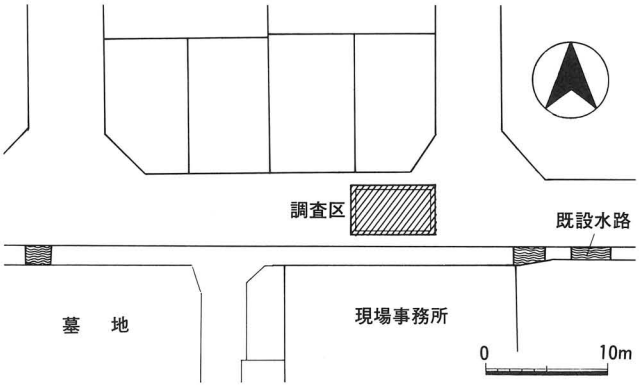
１．はじめに

田井中遺跡は八尾市の南部に位置し、現在の行政区画では志紀町西・田井中・空港１丁目一帯がその範囲にあたる。地理的にみるとこの地域は旧大和川水系長瀬川左岸の沖積地にあたる。当遺跡の周辺には、北部に老原遺跡・北東部に志紀遺跡・西部及び南部に木の本遺跡・南東部に弓削遺跡・長瀬川を挟んで東部に東弓削遺跡が隣接する。



第１図　調査地周辺図

当遺跡内では現在までに、当調査研究会によって12件の調査が実施されている。そのなかで陸上自衛隊八尾駐屯地内において実施されている一連の調査では弥生時代前期から古墳時代前期に至る集落跡が検出されている。また、国家公務員宿舎敷地内では弥生時代後期から平安時代後期までの水田遺構を検出している。当調査研究会以外では大阪府教育委員会による府営住宅建設に伴う調査で弥生時代中期まで遡る水田遺構を検出している。最近の同教育委員会の調査では同時代の８条に及ぶ大溝が確認され、当時期の水田に伴う水利施設を究明する貴重な調査結果を得ている。さらに本調査地の近隣をみると、同教育委員会が実施している空港北濠改修工事に伴う一連の調査で、縄文時代晩期から平安時代までの集落跡及び墓域が検出されている。



第２図　調査区位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、公共下水道工事に伴うもので、調査区の規模は約4×7ｍの28㎡前後を測る。調査の最終掘削深度は工事内容に準じて、現地表（標高11.4ｍ前後）から約5.5ｍである。調査は周囲の鋼矢板圧入時及び覆工板設置に伴う盛土及び攪乱層の除去作業から最深部に至るまで、重機と人力を併用して遺構・遺物の検出に努めた。

２）基本層序

本調査地においての土層堆積状況は、第４図に示すように各層ともフラットな様相を呈する。なお調査地の南側部分は現地表下1.5ｍ前後まで、以前の水道管埋設工事のための攪乱を受けている。また、北側部分は近世井戸（ＳＥ－101）の掘削によって近世以前の土層は削平されている。したがって部分的な小範囲内で摘出した9層を基本層序とし、各層の時期解釈については今回どの層からも顕著な遺物が出土しなかったので、近隣の調査資料を参考にした。

第１層：盛土及び攪乱層（層厚50㎝前後）。現代の道路建設時における造成層である。

第２層：灰白色微砂～細砂（層厚30㎝前後・下部に薄く酸化鉄分が含まれる）。大和川付け替え以前の洪水層か？

第３層：茶灰色微砂混じりシルト（層厚30㎝前後）。第２層との時期差はほとんどないと思われる。

第４層：灰色細砂混じり粘質土（層厚60㎝前後）。

第５層：灰色粘土（層厚60㎝前後）。周辺の調査結果から平安時代に相当する堆積層と思われる。

第６層：灰黒色粘土（層厚15㎝前後・植物遺体が断続的に含まれる）。周辺の調査結果から弥生時代中期から古墳時代前期に相当する堆積層と思われる。

第７層：暗灰色粘土（層厚15㎝前後）。第６層同様に層内には植物遺体が含まれる。第６・７層については上述の時期内において当地が沼地状を呈していたことを示唆するものといえる。

第８層：緑灰色粘土（層厚20㎝前後）。周辺の調査結果から弥生時代前期に相当する堆積層と思われる。

第９層：灰白色細砂～粗砂（層厚2ｍ以上・不規則に変形するラミナがみられる）。湧水が著しく、時期的に縄紋時代晩期～弥生時代前期に相当する自然河道の堆積層と思われる。

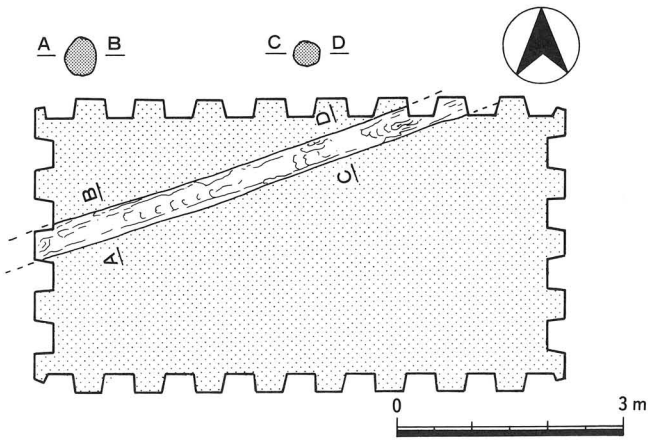
３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表下0.5ｍ前後（標高10.6ｍ前後）で近世井戸（ＳＥ－101）を１基、さらにそれより4ｍ前後（標高6.6ｍ前後）地点で縄紋時代晩期から弥生時代前期にかけての自然河道とみられる砂層内から腐植した自然樹木（風倒木）を１本確認した。

［縄紋時代晩期～弥生時代前期］

・自然樹木（風倒木）

調査区のやや北西よりの標高6.7ｍ前後の地点で南西－北東（樹根）方向に横たわった状態で確認した。樹種は針葉樹系と思われるが、両端とも鋼矢板によって分断され調査区外に至っているため詳細な規模は不明である。形状規模は確認できた部分だけをみると、全長6.5ｍ以上・径25～50㎝を測る。風倒木として自然河道によっ



第３図　自然樹木（風倒木）検出状況

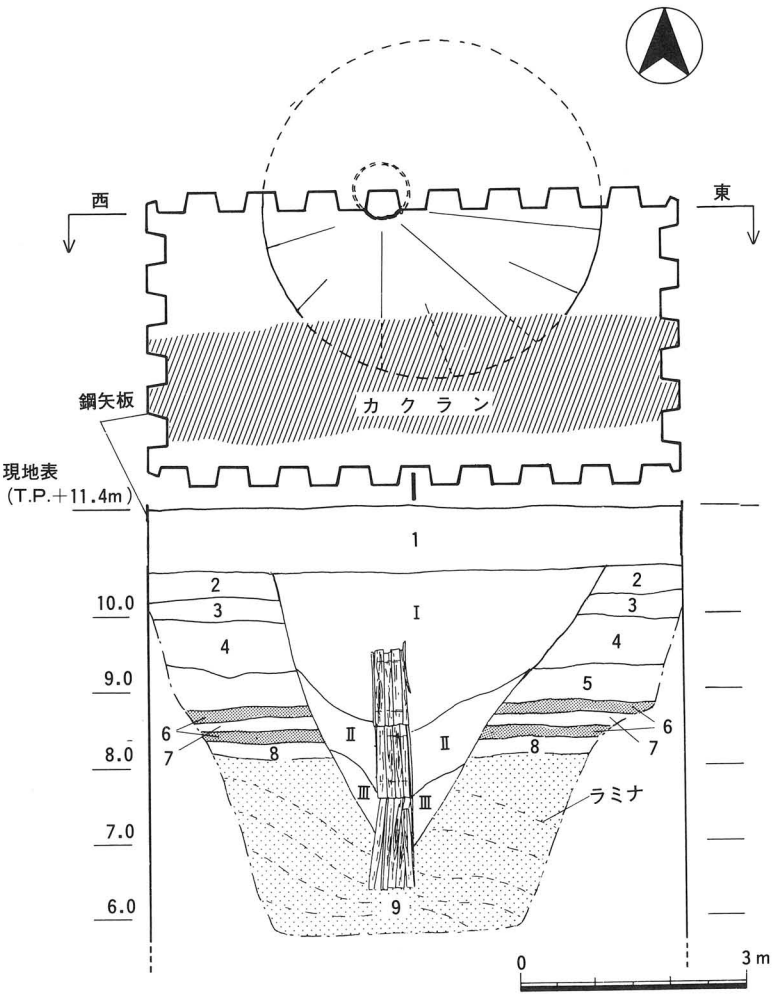
て当地まで運ばれてきたものであろう。全体的に樹皮の腐食は著しく、内部も断面観察したところ黒ずんで腐食している。樹木の埋没時期は、確認できる第９層灰白色細砂～粗砂層が既往の調査結果から縄紋時代晩期～弥生時代前期に比定される自然河道と考えられることから大まかにその時期が与えられよう。

［近世期］

・井戸

ＳＥ－101

調査区北寄り中央で検出した井戸側をもつ井戸である。掘り方の検出レベルは標高10.6ｍ前後・井戸底最深部は6.5ｍ前後を測る。上面の形状は北側半分が調査区外に至っており、明確なことはいえないが状況から推定してほぼ円形を呈すると思われる。掘り方の断面形は摺鉢状を呈している。井戸側は掘り方内のやや西寄りに、底板を打ち抜いた桶を３段積み重ねて設置されている。なお、井戸側の６割り程は鋼矢板に分断され調査区外に至っている。井戸側として用いられている桶１個体の法量は、径は推定で60㎝前後・深さ１ｍ前後を測る。掘り方内埋土は３層に分層され、上から第Ⅰ層暗青灰色シルト混粘質土（シルトはブロック状に混入する）・第Ⅱ層灰色微砂混粘土・第Ⅲ層青灰色シルトで、井戸側の最深部は水脈（湧水槽）となる第９層灰白色細砂～粗砂層に達する。井戸側内埋土は青灰色微砂の単一層で、



第４図　ＳＥ－101平・断面図

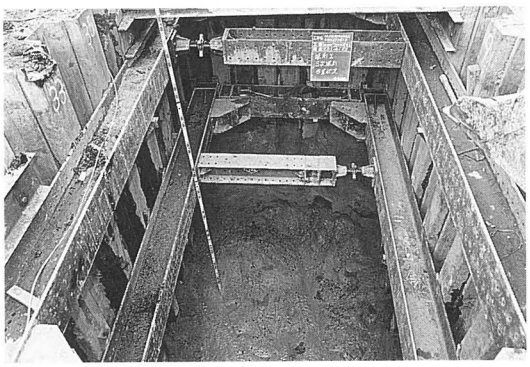
使用しなくなった時点で人工的に真砂を用いて埋められたものと思われる。遺物はいずれの層からも出土しなかった。この井戸は周辺の調査結果や掘り込み面の層位的な見識から、近世期における農耕に伴う灌漑用として機能していたものとおもわれる。

３．まとめ

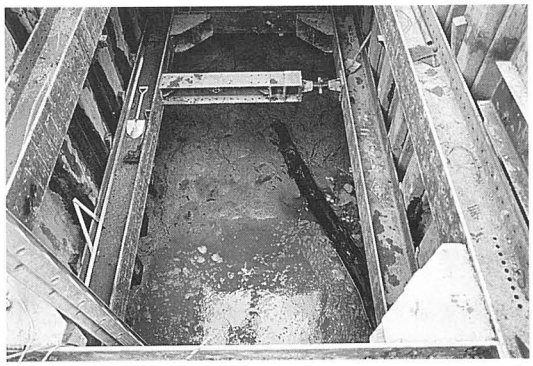
既述したように当調査地の近隣をみると、空港内外周辺において大阪府教育委員会をはじめ当調査研究会による調査から、縄紋時代晩期～平安時代に至って集落・生産域に関連する数多くの遺構・遺物が確認されている。しかし、本調査においては近世はともかく、中世以前における顕著な遺構・遺物の遺存はなく、周辺の調査結果から層位的に辛うじて時代の変遷をみるにとどまった。以下、層位ごとに私見を踏まえて記する。

標高8.0ｍ前後以下2ｍ以上を測る厚い砂層の堆積は、弥生時代前期からさらに縄文時代晩期まで遡る可能性がある河川と推定できる。標高8.0～9.0ｍの粘土層については、弥生時代中期から古墳時代に比定される堆積層で、植物腐食体の混入からみて当地が沼地状を呈していたことが窺われる。以上のことを考えると古墳時代以前は少なくとも当地については、人々が生活する土地条件ではなかったと言える。ここで既往の当遺跡内の調査結果をみると、古墳時代以前は北部（志紀町西地区）が水田遺構にみられる生産域としての性格をもつのに対して、南部（田井中・空港地区）では集落域及び墓域としての性格をもつことがやや大まかではあるが認識できる。そのようにみていくと、当調査地付近が前述の両域の中間地点に於ける「空閑地」であったと言えるのではあるまいか。ただ今回は面的な制限と各時代に於ける顕著な遺物がみられなかった云々等で、近隣の調査資料から層位的に大まかな時代変遷の様相を把握するのみに終わった。故に、この古墳時代以前に於ける「空閑地」の面的な広がりについては今後の調査結果を待ちたい。

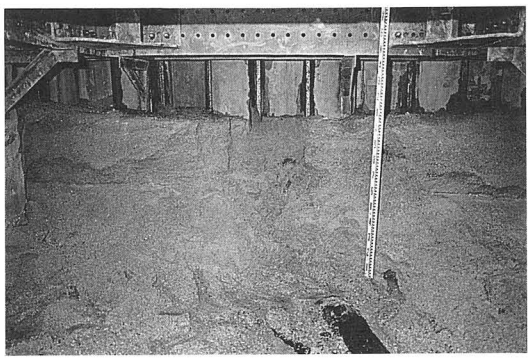
＜参考文献＞
◎大阪府教育委員会　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅰ』　1991年3月
◎大阪府教育委員会　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅱ』　1992年3月
◎大阪府教育委員会　『田井中遺跡発掘調査概要・Ⅲ』　1993年3月
◎大阪府教育委員会　『志紀遺跡発掘調査概要・Ⅲ』　1993.3
◎（財）八尾市文化財調査研究会　『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査　－その成果と概要－』　1983
◎（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市文化財調査研究会年報　昭和62年度』　1988年
◎（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度』　1989年
◎（財）八尾市文化財調査研究会　『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和63年度』　1989年３月



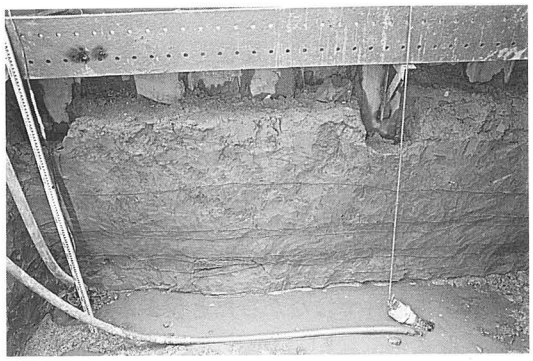
最終面状況（東から）



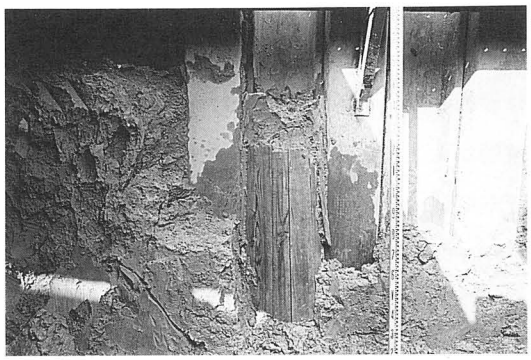
自然樹木（流木） 出土状況（東から）



西壁面　標高6.0～7.5m（東から）



南壁面　標高8.0～9.5m（北から）



ＳＥ－101　井戸側１段目（南から）

ＳＥ－101　井戸側２段目（南から）

ＳＥ－101　井戸側３段目（南から）

自然樹木（流木）

XII　東郷遺跡第40次調査（ＴＧ93－40）

例　　言

1．本書は、八尾市光町１丁目51番地・52番地で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第40次（ＴＧ93－40）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第133号　平成４年11月18日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が森田千清から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年６月３日～６月25日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は352㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一・大見康裕が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子・赤澤茂美、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに…… 89

2．調査概要…… 90

　1）調査の方法と経過…… 90

　2）基本層序…… 91

　3）検出遺構と出土遺物…… 92

　4）遺構に伴わない出土遺物…… 102

　5）出土遺物観察表…… 103

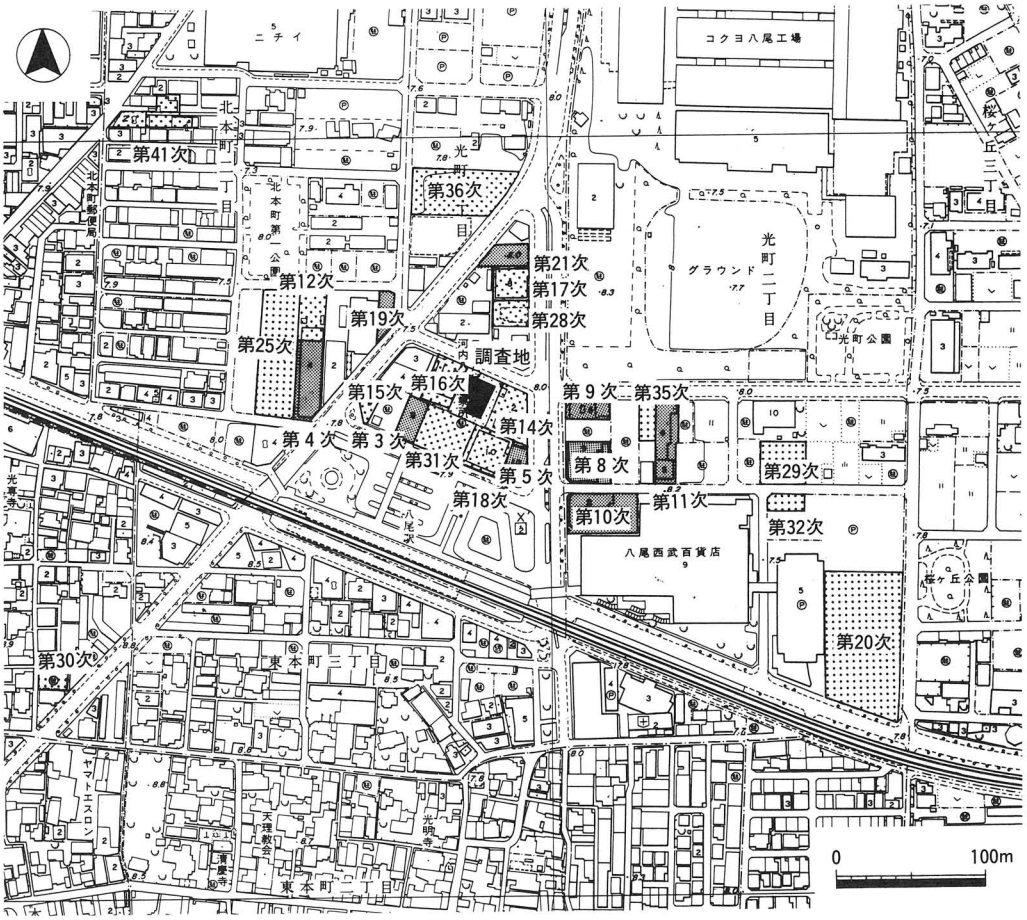
3．まとめ…… 104

Ⅻ　東郷遺跡第40次調査（ＴＧ93－40）

１．はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画では八尾市本町・東本町・光町・桜ケ丘一帯に所在する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

当遺跡の契機は昭和46年に東本町２丁目（光明寺付近）の道路敷下で行われた水道管埋設工事の際に、奈良時代の墨書人面土器が出土したことから遺跡の存在が認識された。その後、近鉄八尾駅移転に伴って実施された駅前の区画整理以後、駅前開発が急激に進みそれに伴う発掘調査が多数実施された。その結果、弥生時代中期から中世に至る遺構・遺物が存在することが明らかになった。



第１図　調査地位置図及び周辺図

特に古墳時代前期の集落構成を研究する上で貴重な資料が得られている。

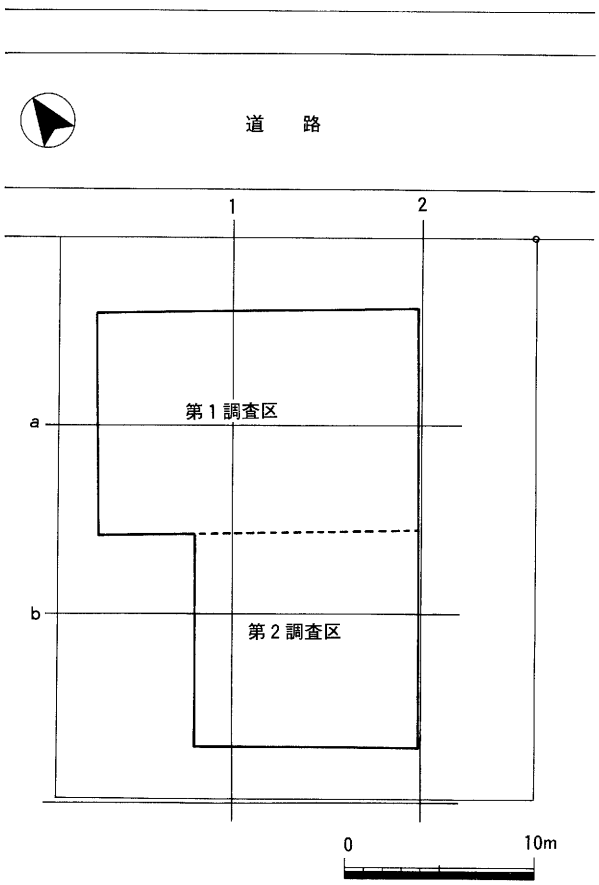
当遺跡の周辺には南東に小阪合遺跡、南西に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、東に萱振遺跡が存在している。今回の調査地の周辺では八尾市教育委員会が実施した第３次（TG81-3）・第４次（TG81-4）・第５次（TG81-5）、当調査研究会が実施した第14次（TG82-14）・第15次（TG83-15）・第17次（TG85-17）・第18次調査（TG88-26）が隣接している（第１図）。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、事業者と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成５年６月３日～６月25日である。調査面積は354㎡を測る。今回の調査は、当遺跡で実施した第40次調査（TG92-40）である。調査地は当遺跡の中央北部にあたり、第３・５・９・14・18次調査地に囲まれた北部に位置する。これらの発掘調査では古墳時代前期の集落遺構を中心とした遺構が検出されており、今回の調査地はそれを埋める調査である。

調査区は残土処理の関係上２分して調査を実施した。北部を第１調査区（面積214㎡）、南部を第２調査区



第２図　調査区設定図

（面積140㎡）とした（第２図）。掘削は現地表下約1.5～1.7ｍまでを機械で行い、以下0.3～0.5ｍの土層については人力掘削を実施した。残土及び掘削作業の都合上、調査の順位は第２調査区より実施した。

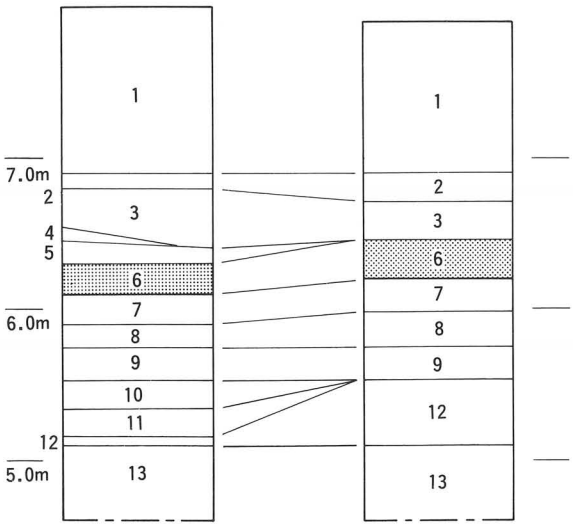
調査にあたっては、調査地北東部の土地境界杭を基点にして西部の土地境界杭に方向を合わせた東西軸から南へ90度振り、調査区全体が把握できる範囲に10ｍ四方角の区画を作成した。地区名については基点より南へ10ｍの東西線が北からアルファベットのａ～ｃを付し、西へ16ｍの南北線が西から数字の１～２、交差する北西側を優先して１ａ～２ｃ区と呼称して調査を進めた（第３図）。

２）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　盛土（層厚1.0～1.1ｍ）。調査前は舗装した駐車場であり、上部ではアスファルト・バラス、下部は区画整理事業（昭和53年～55年）によって埋めた整地土である。

第２層　旧耕土（層厚５～10㎝）。区画整理事業で整地され、埋まるまでは耕作土としていた層である。



1 盛土
2 旧耕土
3 灰緑褐色粘砂
4 褐灰色青灰色細砂～シルト
5 灰色粘土
6 暗褐灰色粘質シルト
7 淡灰褐色シルト
8 淡灰茶色粘質土
9 淡灰色粘質土
10 淡青灰色シルト
11 乳灰色細砂
12 青灰色シルト
13 乳灰色細砂～粗砂

第３図　基本層序柱状図

第３層　灰緑褐色粘砂（層厚20～40㎝）。古墳時代から近世の土器の小片がごく少量含まれている。

第４層　褐灰～青灰色細砂～シルト砂粘土（層厚０～20㎝）。中世以降に洪水層である。調査区の南西部の一部で遺存している。

第５層　灰色粘土（層厚０～10㎝）。第２調査区の南西部の一部で検出した層である。この層は中世以降の洪水層（第４層）で埋まった中世の水田土と思われる。第16次調査でも確認している。その他は第３層で削平されている。

第６層　暗褐灰色粘質シルト（層厚20～30㎝）。酸化鉄の斑点がある。古墳時代前期の包含層である。

第７層　淡灰褐色シルト（層厚10～20㎝）。古墳時代前期の遺構検出面である。上面の標高は5.9～7.0ｍで、南西部が低い。

第８層　淡灰茶色粘質土（層厚10～20㎝）。
第９層　淡灰色粘土（層厚20㎝）。
第10層　淡青灰色シルト（層厚０～20㎝）。
　　無遺物層である。

第11層　乳灰色細砂（層厚０～20㎝）。弥生時代中期末以前の自然河川の堆積層とみられる。層厚を確認することができなかった。

第12層　青灰色シルト（層厚10～50㎝）。

第13層　乳灰色細砂（層厚50㎝以上）。弥生時代中期末以前の自然河川の堆積層ないしは洪水層とみられるが、かなりの湧水があり、層厚を確認することができなかった。

３）検出遺構と出土遺物

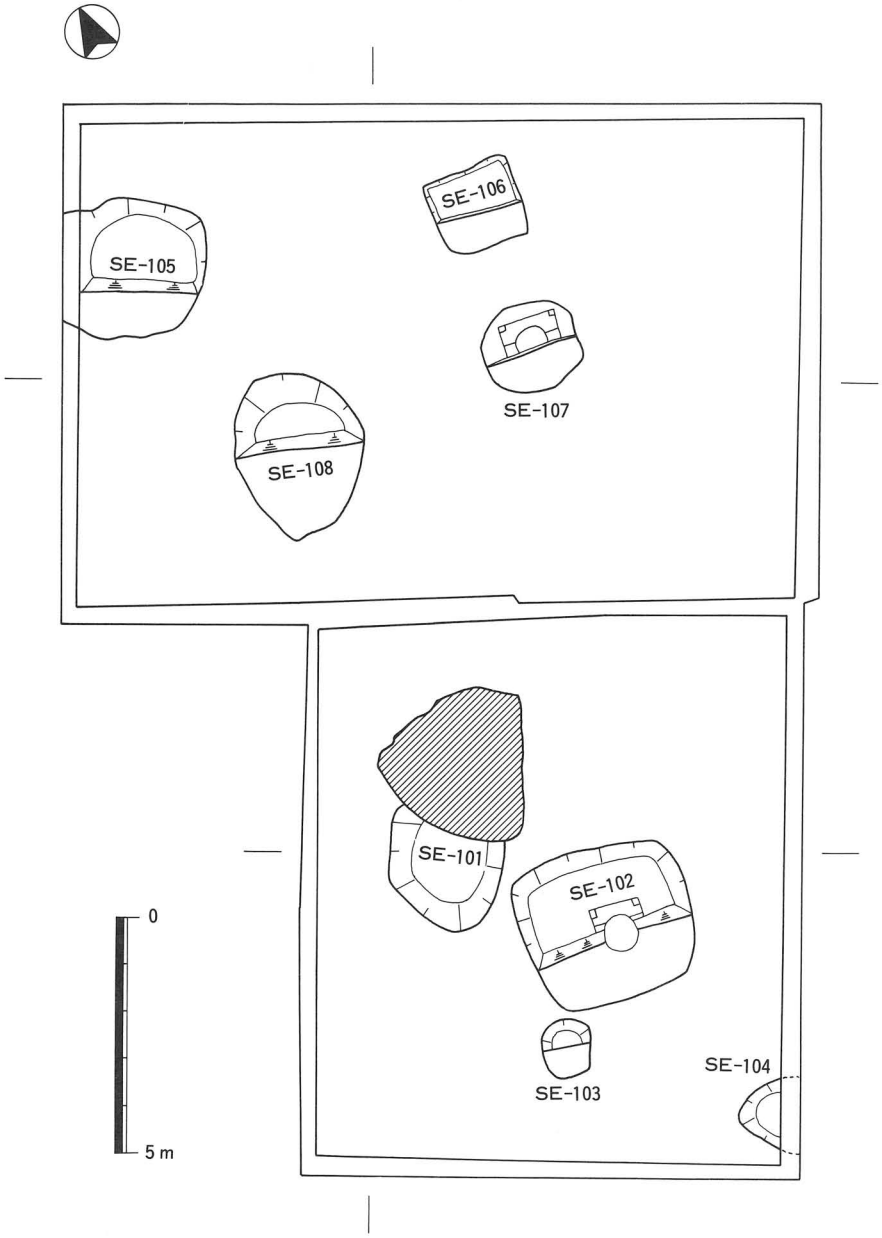
調査の結果、現地表(標高7.9～8.0ｍ)下1.4～1.6ｍの第２層上面から切り込む近世以降に比定される井戸状遺構８基(ＳＥ－101～ＳＥ－108)を検出した(第１調査面)。現地表下1.7～1.9ｍ(標高6.1～6.2ｍ)の第８層上面から切り込む古墳時代前期の遺構を検出した(第２調査面)。遺構は井戸１基(ＳＥ－201)、土坑13基(ＳＫ－201～ＳＫ－213)、小穴31個(ＳＰ－201～ＳＰ－231)、溝44条(ＳＤ－201～ＳＤ－244)である。以下、各遺構について記す。なお、遺構番号は第２層上面から切り込む遺構を100番台、第８層上面から切り込む遺構を200番台とした。

第１調査面

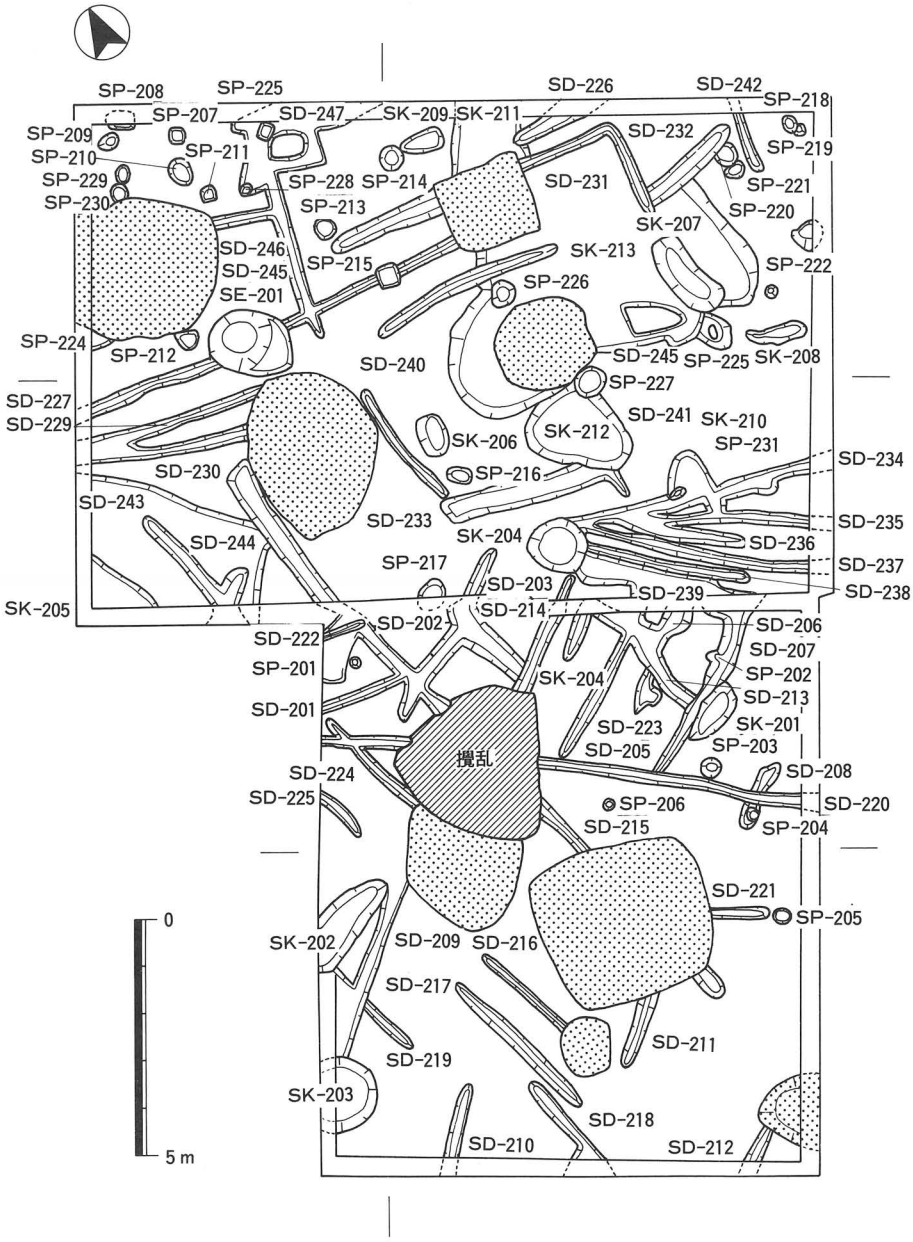
井戸（ＳＥ）

ＳＥ－101～ＳＥ－108

第４層上面より切り込まれていた井戸状遺構８基を検出した。井戸枠があるもの２基（ＳＥ－



第４図　第１調査面遺構平面図



第５図　第２調査面遺構平面図

102・ＳＥ－107）で、その他は素掘りの井戸である。枠がある井戸（ＳＥ－102）は上段に井戸瓦２段、中段に桶状の枠１段、最下段は四方に支柱を打ち、方形に組んだ枠で構成されている。ＳＥ－107も同様に組んだ井戸枠と思われるが、上段・中段は埋める際に抜き取ったようで最下段の部分しか検出しなかった。この井戸枠の構造をもつ井戸は江戸時代から近代まで灌漑用として作られたもので、八尾市内では発掘調査において普遍的にみられるものである。その他の素掘りの井戸とした遺構は井戸として掘ったものと思われるが、断面の状況や内部堆積の観察ではブロック状に埋まっており、井戸としての役目をはたさず、すぐに埋め戻したようである。以下、各井戸については第１表に掲載した。

第１表　井戸（ＳＥ）一覧表

＊単位はcm

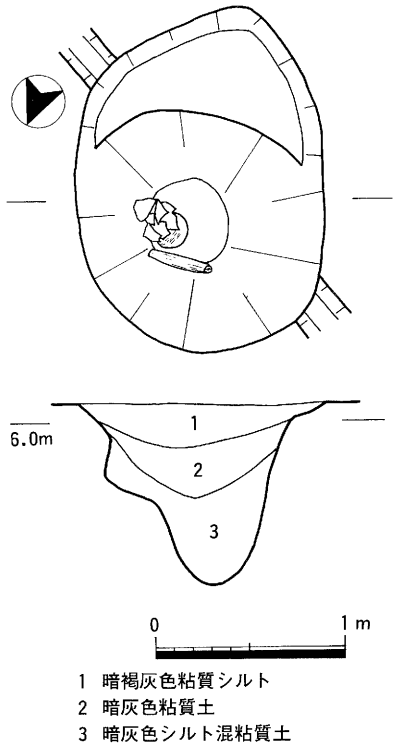
遺構番号	区　名	平面形	断面形	径	深　さ	堆　積　土	備　考
SE-101	2b・2c区	楕円形	逆台形	250以上	93	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SD-209・224を切る。
SE-102	2b・2c区	方　形	逆台形	東西 360 南北 330	165以上	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	上段に２段の瓦・中段に１段の桶・最下段に方形木枠組み。
SE-103	2c区	円　形	逆台形	370	150	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SD-211・215・221を切る。
SE-104	2c区	－	逆台形	150	88	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SD-212を切る。東部は調査区外。
SE-105	1a区	楕円形	逆台形	395	150	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SP-230・224・SD-225を切る。西部は調査区外。
SE-106	2a区	方　形	逆台形	東西 180 南北 170	82	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SK-211・213・SD-226・231を切る。
SE-107	2a区	円　形	逆台形	200	155	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SK-213・SP-227を切る。最下段の方形木枠残存。
SE-108	1b区	楕円形	逆台形	280～350	156	暗灰青色粘質土と淡橙色細砂のブロック土	SD-229・230を切る。

第２調査面

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－201

調査区（2b区）で検出した。ＳＤ－227を切っている。平面形状は（検出）上面で楕円形、深く掘り込んでいる部分は円形を呈する。規模は長径185㎝、短径135㎝、深さ108㎝を測る。断面はＵ字形を呈し、上部の東側が浅く皿状になっている。堆積土は３層に分けられる。上層から第１層暗褐灰色粘質シルト・第２層暗灰色粘質土・第３層暗灰色シルト混粘質土である。第２層内には炭及び植物遺体（桃の種）が含まれていた。基底部は細砂層の湧水層まで達しており、井戸とした。遺物は、第１層から小片化した土師器（壺・甕等）、第２層から高坏・東海系のＳ字甕・Ｖ様式系甕、第３層から高坏・壺を出土した。時期は古墳時代前期（庄内式～布留式古相）に比定されるもので、下層で出土した土器がやや古い形式をもつものと思われる。図示できたものは11点ですべて下層からの出土である。壺（１～５）・甕（６～８）・高坏（９～11）である。原田編年（註１）と照合してみると１は短頸壺Ａ、６・７は甕Ａ2、９は高坏Ａに属するものである。この井戸の時期は庄内式古相に築造・使用し、布留式古相には廃絶・埋没していたものと考えられる。



第６図　ＳＥ－201平断面図

註１　(財)八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」(財)八尾市文化財調査研究会報告37

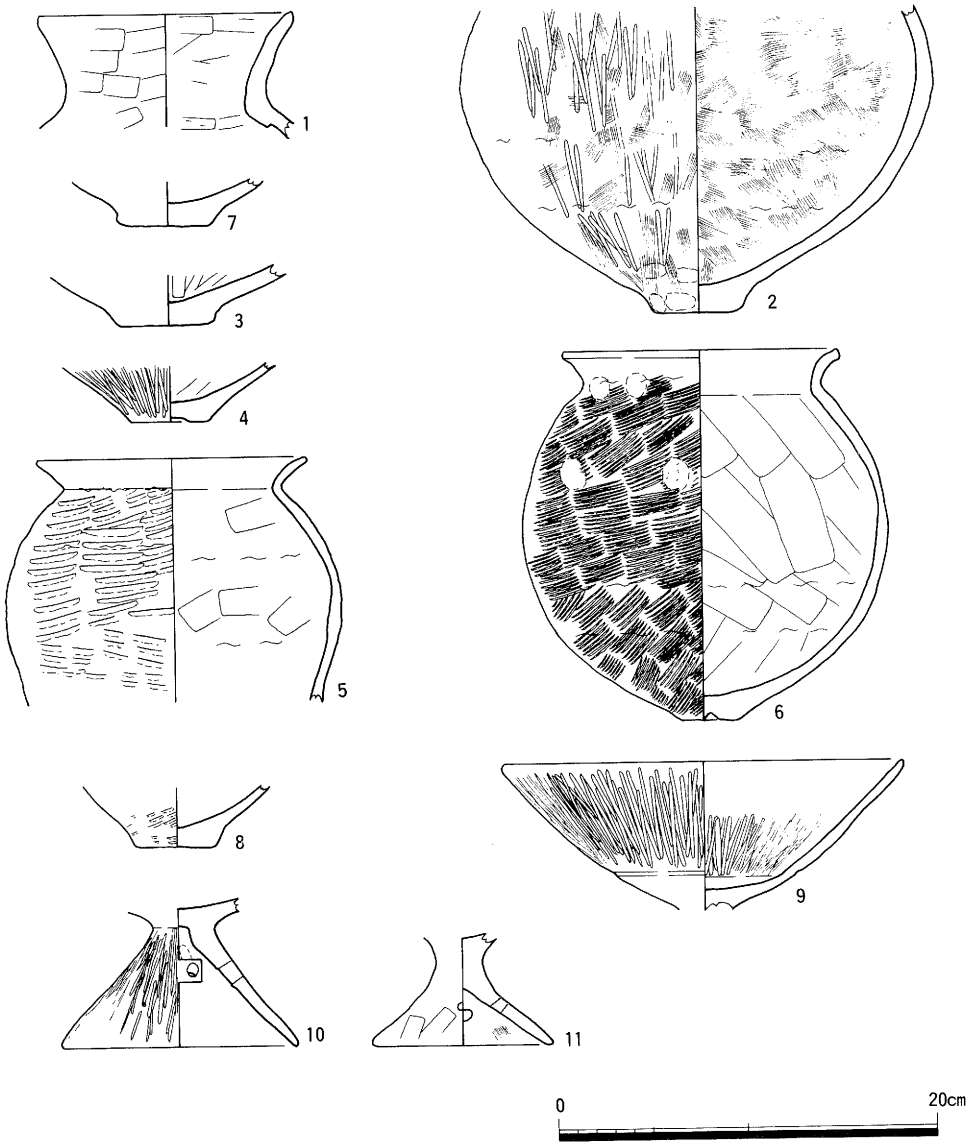
土坑（ＳＫ）

ＳＫ－201

調査区（2b区）で検出した。ＳＤ－207を切る。平面形状は楕円形を呈する。規模は長径145㎝、短径66㎝、深さ11㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は褐灰色細砂混シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－202

調査区(1c区)で検出した。ＳＤ－209・ＳＤ－218と切り合い。西部の一部は調査区外に至る。検出部での平面形状は楕円形を呈する。規模は検出部で長径200㎝、短径90㎝、深さ24㎝を測る。



第７図　ＳＥ－201出土遺物実測図

断面は皿状形を呈する。堆積土は暗灰色粘質土である。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－203

調査区（1c区）で検出した。西部の一部は調査区外に至る。検出部での平面形状は半円形を呈する。規模は検出部で南北径157㎝、深さ14㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗灰色粘質土である。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－204

調査区（2b区）で検出した。ＳＤ－234～ＳＤ－239と切り合う。平面形状は円形を呈する。規模は長径130㎝、短径115㎝、深さ20㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－205

調査区（1b区）で検出した。ＳＤ－215に切られ、基底面にはＳＤ－243・ＳＤ－244がある。南西部は調査区外に至り、平面形は不明である。規模は検出部で東西幅400㎝、南北幅340㎝、深さ17㎝を測り、南西方向に深くなっている。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（庄内式～布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－206

調査区（2b区）で検出した。平面形状は楕円形を呈する。規模は長径95㎝、短径70㎝、深さ40㎝を測る。断面は半円形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－207

調査区（2a区）で検出した。ＳＤ－231・ＳＤ－232に切られ、ＳＫ－213・ＳＤ－241と切り合う。平面形状は不定形を呈する。規模は長径300㎝、短径250㎝、深さ43㎝を測る。堆積土は褐灰色粘質シルト・暗灰色粘質土である。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－208

調査区（2a区）で検出した。平面形状は不定形を呈する。規模は長径130㎝、短径40㎝、深さ19㎝を測る。断面は半円形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－209

調査区（2a区）で検出した。平面形状は東西方向に長い楕円形を呈する。規模は長径80㎝、短径40㎝、深さ10㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－210

調査区（2b区）で検出した。南部はＳＤ－234に切られる。規模は東西径100㎝、深さ９㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－211

調査区（2a区）で検出した。南部はＳＤ－226・231・ＳＥ－106に切られ、北部は調査区外に至る。規模は検出部で東西幅130㎝、南北幅200㎝、深さ11㎝を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－212

調査区（2a区）で検出した。北部の一部はＳＥ－107・ＳＰ－227に切られる。平面形状は楕円形に近い形状を呈する。規模は長径220㎝、短径170㎝、深さ14㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

ＳＫ－213

調査区（2a区）で検出した。ＳＥ－107・ＳＤ－228に切られ、ＳＫ－207と切り合う。平面形状は不定形を呈する。規模は東西幅400㎝、南北幅350㎝、深さ20㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片が少量出土している。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－201～ＳＰ－231

調査区で31個を検出した。平面形状は、円形及び楕円形が多く、方形のものが小数であった。調査区北部で検出した小穴は柱痕跡はみられなかったが深くまで掘っている。ＳＰ－214の基底面から柱根の痕跡が出土しており、多くのものは建物に関連する柱穴であると考えられる。ただ、調査面積の制約があり、調査区内での規則的な配列をもつものはなかった。時期は、小穴内部からごく少量出土した土器の小片や周辺の遺構の状況から古墳時代前期（庄内式新相～布留式古相）に比定されるものと思われる。以下、各小穴については第２表に掲載した。

第２表　小穴（ＳＰ）一覧表

＊単位はcm

遺構番号	区　名	平面形	断面形	径	深　さ	堆　積　土	備　　考
SP-201	1b区	円　形	半円形	23	8	暗褐灰色粘質シルト	
SP-202	2b区	－	半円形	30	9	暗褐灰色粘質シルト	SD-207と切合う。
SP-203	2b区	円　形	半円形	42	12	暗褐灰色粘質シルト	
SP-204	2b区	円　形	半円形	29	19	暗褐灰色粘質シルト	SD-208の基底面より検出。
SP-205	2c区	円　形	逆台形	28～33	4	暗褐灰色粘質シルト	
SP-206	2c区	円　形	半円形	20	9	暗褐灰色粘質シルト	
SP-207	1a区	円　形	半円形	34	20	暗褐灰色粘質シルト	
SP-208	1a区	方　形	半円形	56	14	暗褐灰色粘質シルト	
SP-209	1a区	楕円形	半円形	35～45	22	暗褐灰色粘質シルト	
SP-210	1a区	楕円形	半円形	45～60	27	暗褐灰色粘質シルト	
SP-211	1a区	方　形	逆台形	30～33	19	暗褐灰色粘質シルト	
SP-212	1a区	楕円形	半円形	40～50	20	暗褐灰色粘質シルト	SE-105に切られる。
SP-213	1a区	円　形	半円形	46	23	暗褐灰色粘質シルト	
SP-214	2a区	円　形	U字形	52	40	暗褐灰色粘質シルト	
SP-215	2a区	方　形	U字形	45～50	19	暗褐灰色粘質シルト	SD-227に切られる。
SP-216	2b区	楕円形	半円形	32～53	17	暗褐灰色粘質シルト	
SP-217	2b区	－	半円形	53	10	暗褐灰色粘質シルト	
SP-218	2a区	楕円形	U字形	32～40	35	暗褐灰色粘質シルト	SP-219を切る。
SP-219	2a区	－	U字形	25	27	暗褐灰色粘質シルト	SP-218に切られる。
SP-220	2a区	円　形	半円形	48	29	暗褐灰色粘質シルト	SD-232に切られ、SP-221を切る。
SP-221	2a区	楕円形	半円形	32～45	18	暗褐灰色粘質シルト	
SP-222	2a区	楕円形	半円形	64	19	暗褐灰色粘質シルト	
SP-223	2a区	円　形	半円形	28	15	暗褐灰色粘質シルト	
SP-224	1a区	－	半円形	50	22	暗褐灰色粘質シルト	SE-105に切られる。
SP-225	2a区	方　形	逆台形	28～37	13	暗褐灰色粘質シルト	SD-223の基底面より検出。
SP-226	2a区	円　形	半円形	53	19	暗褐灰色粘質シルト	SI-201の基底面より検出。
SP-227	2b区	－	半円形	47	27	暗褐灰色粘質シルト	SK-212に切られる。
SP-228	1a区	円　形	半円形	21～28	25	暗褐灰色粘質シルト	SD-224の基底面より検出。
SP-229	1a区	楕円形	半円形	32～40	22	暗褐灰色粘質シルト	
SP-230	1a区	－	半円形	36	9	暗褐灰色粘質シルト	SE-105に切られる。
SP-231	2b区	楕円形	半円形	22～38	19	暗褐灰色粘質シルト	SK-210の基底面より検出。－ －

溝（ＳＤ）

ＳＤ－201～ＳＤ－248

調査区で48条を検出した。方向は東－西方向のもの13条、南－北方向のもの14条、東南東－西北西方向のもの８条、北北東－南南西方向のもの13条である。これらの溝はそれぞれ切り合い関係があるものと思われるが、ほとんどが明瞭な切り合いの判断がつきにくい状態であった。このことはそれぞれの溝はあまり時期差がないものと考えられる。規模は幅15～65cm、深さ４～25cmを測る小規模な溝である。断面形は浅い半円形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトまたは暗褐灰色粘質シルトである。遺物は古墳時代前期（布留式古相）に比定される土器の小片がごく少量出土している。これらの溝の性格を考えるに、当調査区では住居跡の遺構は確認されなかったが、周辺の既往調査でも検出しており、おそらく住居に関連する排水・雨水溝などであろう。以下、各溝については第３表に掲載した。

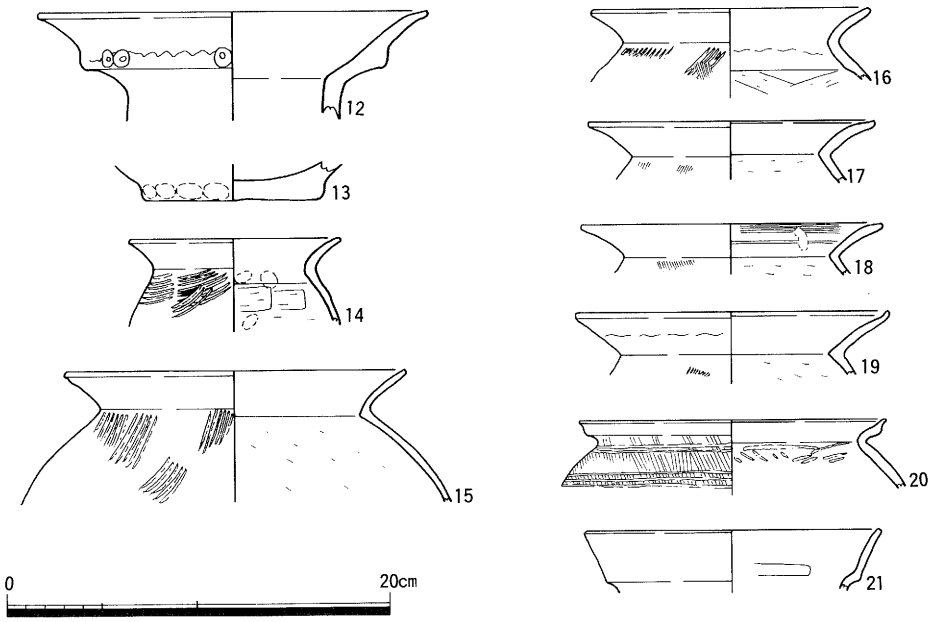
第３表　溝（ＳＤ）一覧表

＊単位はcm

遺構番号	区　名	方　向	断面形	径	深　さ	堆　積　土	備　　考
SD-201	1b区	東-西	半円形	24	9	褐灰色粘質シルト	SD-215と切合う。
SD-202	2b区	北北東-南南西	半円形	33～40	10～15	褐灰色粘質シルト	SD-214・215と切合う。
SD-203	2B区	北北東-南南西	半円形	27～36	12	暗褐灰色粘質シルト	SD-214を切る。
SD-204	2b区	北北東-南南西	皿状形	24～30	5	暗褐灰色粘質シルト	SD-213と切合う。
SD-205	2b区	北北東-南南西	皿状形	30	6	暗褐灰色粘質シルト	SD-213と切合い、SD-220に切られる。
SD-206	2b区	北北東-南南西	皿状形	25～60	10	暗褐灰色粘質シルト	SD-213と切合う。
SD-207	2b区	北北東-南南西	半円形	18～46	11	暗褐灰色粘質シルト	SK-201に切られ、SD-213と切合う。
SD-208	2b区	北北東-南南西	皿状形	30～40	5	褐灰色粘質シルト	SD-220に切られる。
SD-209	1c区	北北東-南南西	半円形	26～35	11	褐灰色粘質シルト	SD-202・SD-219と切合う。
SD-210	2c区	北北東-南南西	半円形	28	12	褐灰色粘質シルト	
SD-211	2c区	北北東-南南西	半円形	34	11	暗褐灰色粘質シルト	SE-102に切られる。
SD-212	2c区	北北東-南南西	皿状形	18～30	6	暗褐灰色粘質シルト	SE-104に切られる。
SD-213	2b区	南-北	皿状形	35～42	6	暗褐灰色粘質シルト	SD-204～207と切合う。
SD-214	2b区	南-北	半円形	45～65	25	褐灰色粘質シルト	SD-203に切られ、SD-202と切合う。
SD-215	1b・2b区	南-北	皿状形	25～35	10	褐灰色粘質シルト	SD-202・222と切合う。
SD-216	2c区	南-北	皿状形	17～20	6	褐灰色粘質シルト	SE-103に切られる。
SD-217	2c区	南-北	皿状形	25～35	7	褐灰色粘質シルト	
SD-218	2c区	南-北	皿状形	25～32	7	褐灰色粘質シルト	
SD-219	1c・2c区	南-北	皿状形	20～25	5	褐灰色粘質シルト	SD-209と切合う。
SD-220	1b・2b区	東南東-西北西	皿状形	20～32	9	暗褐灰色粘質シルト	攪乱に切られ、SD-205・207・208を切る。
SD-221	2c区	東南東-西北西	皿状形	21	6	暗褐灰色粘質シルト	SE-102に切られる。
SD-222	1b区	東-西	皿状形	16	4	暗褐灰色粘質シルト	SD-215と切合う。
SD-223	2b区	北北東-南南西	皿状形	25	8	褐灰色粘質シルト	SD-213に切られる。
SD-224	1b・2b区	南-北	皿状形	20～25	7	暗褐灰色粘質シルト	SD-220と切合う。
SD-225	1b区	南-北	皿状形	20	7	暗褐灰色粘質シルト	
SD-226	2a区	東-西	半円形	35	12	暗褐灰色粘質シルト	
SD-227	1a・2a区	東-西	半円形	21～25	13	暗褐灰色粘質シルト	SD-201・SP-225に切られる。
SD-228	2a区	東-西	半円形	26	10～12	暗褐灰色粘質シルト	
SD-229	1b区	東-西	半円形	20～28	6	暗褐灰色粘質シルト	SD-230と切合う。
SD-230	1b区	東-西	半円形	22～30	10	暗褐灰色粘質シルト	SD-229と切合い、SE-107に切られる。
SD-231	2a区	東-西	半円形	20～25	11	暗褐灰色粘質シルト	SD-232と切合い、SE-106に切られる。
SD-232	2a区	東-西	半円形	40～45	13	暗褐灰色粘質シルト	SI-201・SD-231に切られる。
SD-233	2b区	東南東-西北西	半円形	50	11	暗褐灰色粘質シルト	SK-212・SD-245と切合う。
SD-234	2b区	東-西	半円形	27～40	10	暗褐灰色粘質シルト	SK-210を切り，SK-204・SD-235と切合う。
SD-235	2b区	東南東-西北西	半円形	20～27	7	暗褐灰色粘質シルト	SK-204・SD-231・237と切合う。
SD-236	2b区	東南東-西北西	半円形	30	11	暗褐灰色粘質シルト	SK-204・SD-231と切合う。
SD-237	2b区	東南東-西北西	半円形	16～30	11	暗褐灰色粘質シルト	SK-204と切合う。
SD-238	2b区	東南東-西北西	半円形	20～23	12	暗褐灰色粘質シルト	SK-204と切合う。
SD-239	2b区	東南東-西北西	半円形	50	20	暗褐灰色粘質シルト	SK-204・SD-205～207と切合う。
SD-240	1b・2b区	南-北	半円形	20～34	7～10	暗褐灰色粘質シルト	SK-207と切合う。
SD-241	2b区	南-北	半円形	42～55	9～12	暗褐灰色粘質シルト	
SD-242	2a区	南-北	半円形	17～24	5	暗褐灰色粘質シルト	
SD-243	1b区	北北東-南南西	半円形	24～30	5	暗褐灰色粘質シルト	SK-212・SD-233と切合う。
SD-244	1b区	南-北	皿状形	30～35	8	暗褐灰色粘質シルト	SD-246～248と切合う。
SD-245	1a区	南-北	皿状形	20	5	暗褐灰色粘質シルト	SD-245と切合い，SE-105に切られる。
SD-246	1a区	東-西	半円形	24	6	暗褐灰色粘質シルト	SD-245と切合う。
SD-247	2b区	東-西	半円形	50	16	暗褐灰色粘質シルト	SD-245と切合う。
SD-248	1b・2b区	東-西	半円形	27～30	16	暗褐灰色粘質シルト	

4）遺構に伴わない出土遺物

基本層序の第３・４・第６層の土層内より古墳時代初頭～近世に至る遺物がコンテナにして約２箱分出土している。第３層は近世に比定される遺物、第４層は古墳時代～中世に比定される遺物が出土している。が、ほとんどの遺物は摩滅し、小片化したものである。量もごく少量であった。器種がわかったものでは土師質の小皿・甕、瓦器の椀・青磁である。第６層は弥生時代後期末から古墳時代前期に比定される遺物が出土している。器種がわかったものでは弥生土器（Ｖ様式）の甕、庄内式土器の壺・甕・高坏、布留式土器の甕などである。図示できたものは10点である。壺（12・13）・甕（14）・庄内式甕（15～19）・東海系Ｓ字甕（20）・複合口縁甕（21）である。原田編年では、12が複合口縁壺Ｂ1、14が甕Ｋ、15～19が甕Ｂ、20が甕Ｎにそれぞれ該当するものである。



第８図　遺構に伴わない出土遺物実測図

5）出土遺物観察表

ＳＥ-201

遺物番号	器種 遺構番号	法量（cm） 口径 器高	形態と技法と特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	壺 （土師器）	口径 13.2	口縁内部ヘラナデ、くびれ部内面ヘラケズリ	淡橙灰色	3㎜以下の砂粒（長石）を多量に含む	良好	黒斑有り
2	同上	体部径 25.0 底径 4.2	体部内面ハケナデ、外面ハケナデ後ヘラミガキ	外 灰黒褐色 内 淡灰明茶色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	黒斑有り
3	同上	底径 4.8	内面ヘラナデ、外面ナデ	外 暗灰茶色 内 灰茶色	4㎜以下の砂粒（長石・雲母）を多量に含む	良好	黒斑有り
4	同上	底径 4.0	内面ナデ、外面ヘラミガキ	淡橙灰色	3㎜以下の砂粒（長石・雲母）を含む	良	
5	同上	口径 14.0	口縁部内外面ヨコナデ・接合痕、外面タタキ（2本／cm）	淡灰茶色	3㎜以下の砂粒（長石）を多量に含む	良好	
6	甕 （土師器）	口径 14.4 器高 19.7 最大径 19.1	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ヘラナデ、外面タタキ、内外面に接合痕が残る	淡茶灰色	6㎜以下の砂粒（長石・雲母）を含む	良好	煤付着
7	同上	口径 4.0	底部内面ナデ、外面タタキ後ナデ	外 灰黒褐色 内 淡灰明茶色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
8	同上	底径 4.0	底部内面ヘラナデ、外面タタキ	外 明橙茶色～乳灰茶色 内 明橙茶色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
9	高坏 （土師器）	杯部径 21.0	杯部内外面ヨコナデ後ヘラミガキ	乳茶灰色～灰茶色	3.5㎜以下の砂粒（長石）を少量含む	良好	
10	同上	脚部径 12.2	脚部内面ナデ、外面ヘラミガキ	淡黄茶灰色	4㎜以下の砂粒（長石・雲母）を少量含む	良好	
11	同上	底径 9.0	脚部内面ハケナデ、外面ヘラナデ及びナデ	茶灰色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	

遺構に伴わない出土遺物（第６層）

遺物番号	器種 遺構番号	法量（cm） 口径 器高	形態と技法と特徴	色調	胎土	焼成	備考
12	壷 （土師器）	口径 20.2	口縁部摩耗のため調整不明、外面に円形浮文	橙灰色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	煤付着
13	同上	底径 9.0	内面ヘラナデ、外面ナデ	茶灰色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
14	甕 （土師器）	口径 10.8	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケナデ	にぶい黄色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
15	同上	口径 17.6	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケナデ	外 明褐灰色 内 にぶい黄橙色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
16	同上	口径 14.2	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケナデ	外 灰白色 内 灰黄色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
17	同上	口径 20.2	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケナデ	外 にぶい赤褐色 内 乳茶灰色	1㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
18	同上	口径 15.6	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ、外面ハケナデ	外 淡橙色 内 灰白色	2㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
19	同上	口径 20.2	口縁内外面ヨコナデ・接合痕、体部内面ヘラケズリ、外面タタキ後ハケナデ	にぶい黄褐色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
20	同上	口径 15.8	口縁内外面ヨコナデ、体部内面ハケナデ、ヘラケズリ、ヘラ押さえ	外 明褐灰色 内 灰白色	3㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	
21	同上	口径 15.2	口縁内面ヨコナデ・ヘラナデ、外面摩耗のため調整不明	乳橙灰色	4㎜以下の砂粒（長石・角閃石・雲母）を多量に含む	良好	

3．まとめ

今回の調査地周辺の隣接地では数次にわたる発掘調査を実施しており、貴重な調査成果が得られている。特に古墳時代前期（庄内式～布留式古相）に比定される集落域の存在が確認されている。今回の調査地においては明瞭にわかる住居跡はなかったが集落に関連する井戸・小穴など遺構が確認されており、調査地周辺は居住域としていたことが検出した遺構から明白である。周辺の調査成果を踏まえて集落域を想定すると、第７図に掲載した今回の調査区の立地は、集落の中心部（昭和56年度市教委の第8次）の西側にあり、集落の端にあたるものと思われる。調査区の南側では既往調査で沼沢地として紹介している部分があり、居住域の外れと思われる。

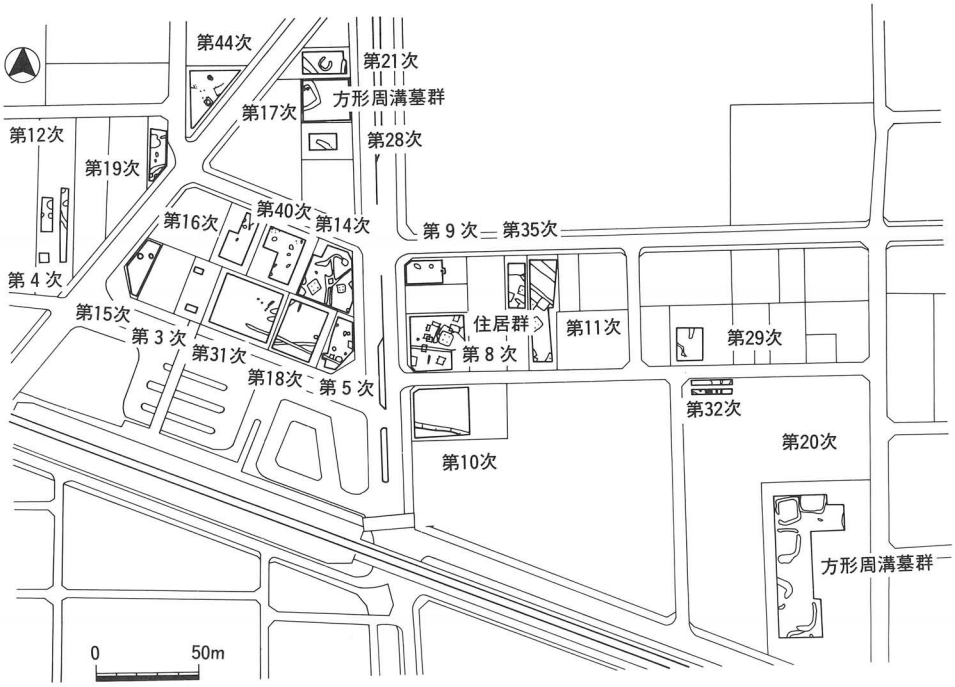
最後に、長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する東郷遺跡の南側には同一時期の集落が確認されている中田遺跡・小阪合遺跡・成法寺遺跡などの遺跡が連なっており、古墳時代前期の集落集団の構成を研究する上で、当遺跡の成果が重要な一資料となるものである。

参考文献

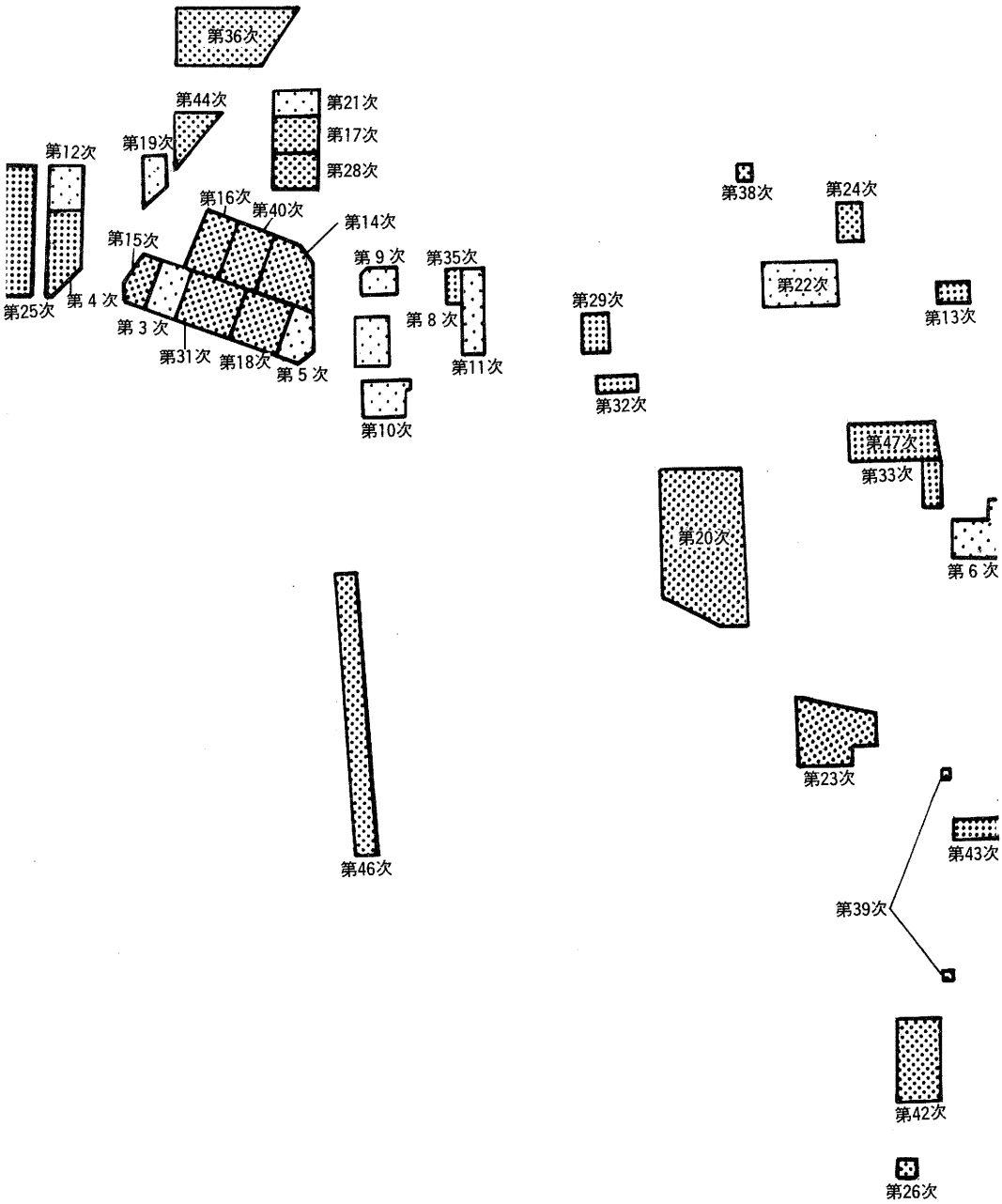
○八尾市教育委員会「第８章東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報』1983.3

○(財)八尾市文化財調査研究会「Ⅲ東郷遺跡(第20次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和61年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告13　1987

○(財)八尾市文化財調査研究会「Ⅰ東郷遺跡(第11次～第16次・第18次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告17　1989.3

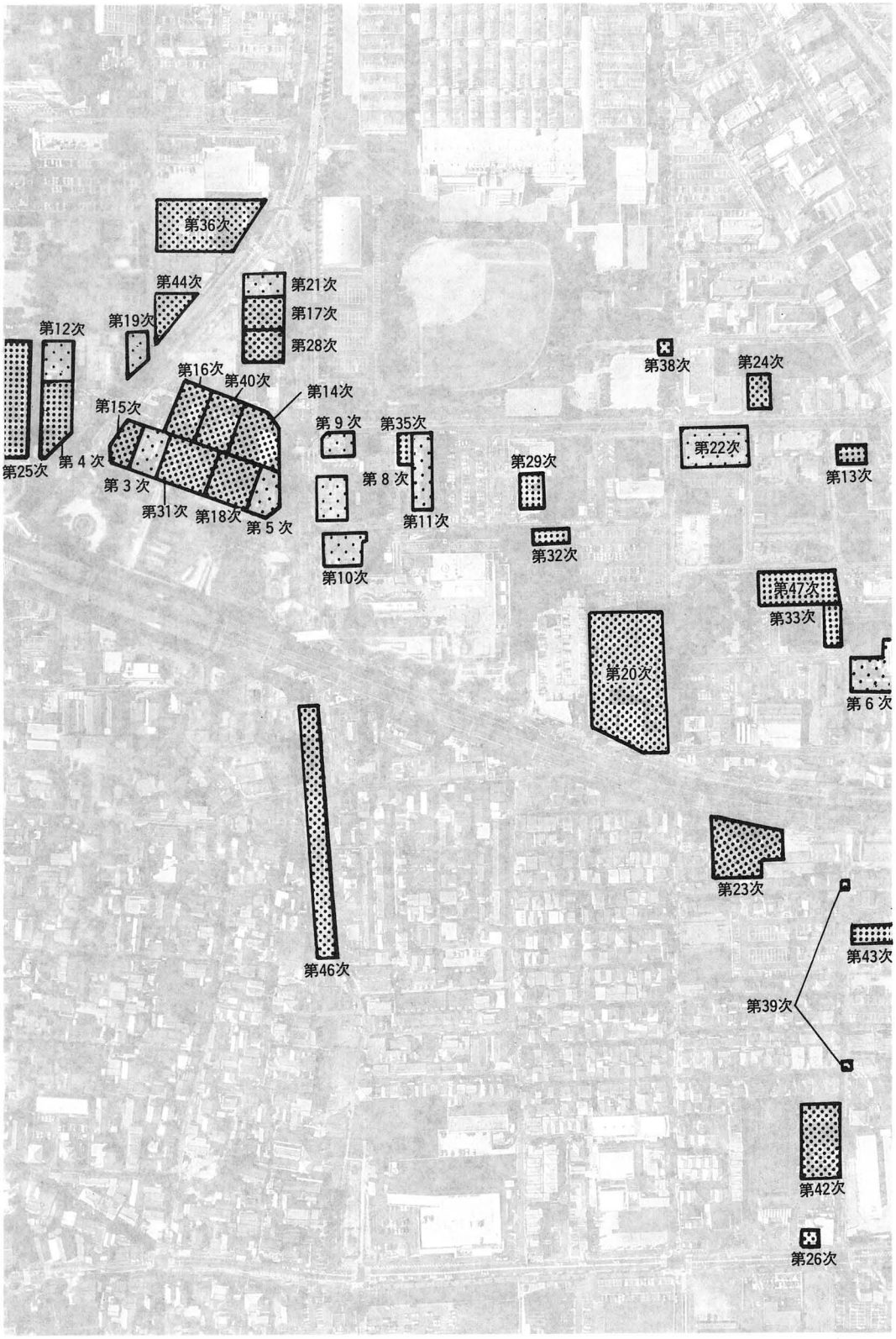


第９図　古墳時代前期の集落遺構検出配置図

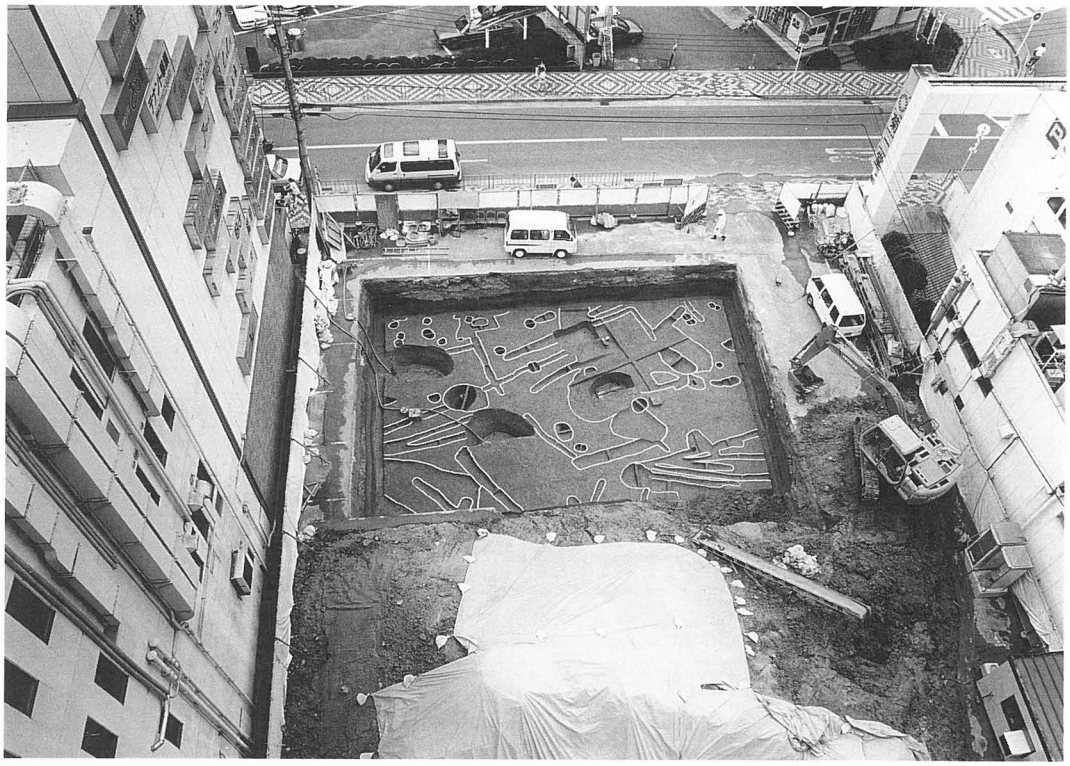

第36次
第44次
第21次
第17次
第28次
第19次
第12次
第38次
第24次
第16次
第40次
第14次
第15次
第9次
第35次
第22次
第13次
第25次
第4次
第29次
第3次
第8次
第31次
第18次
第5次
第11次
第32次
第10次
第47次
第33次
第20次
第6次
第46次
第23次
第43次
第39次
第42次
第26次

図版一　航空写真

東郷遺跡（上空から）

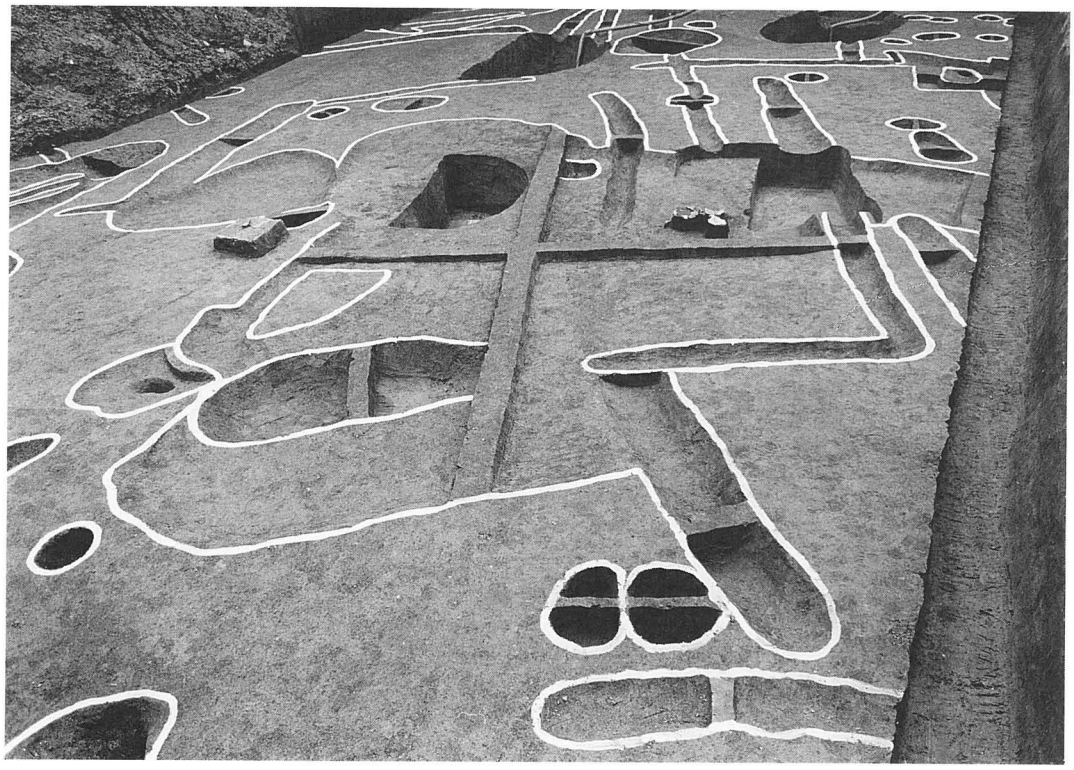

第36次
第44次
第21次
第17次
第28次
第19次
第12次
第16次
第40次
第14次
第15次
第9次
第35次
第38次
第24次
第22次
第13次
第25次
第4次
第3次
第31次
第18次
第5次
第8次
第11次
第29次
第10次
第32次
第47次
第33次
第20次
第6次
第46次
第23次
第43次
第39次
第42次
第26次

東郷遺跡（上空から）

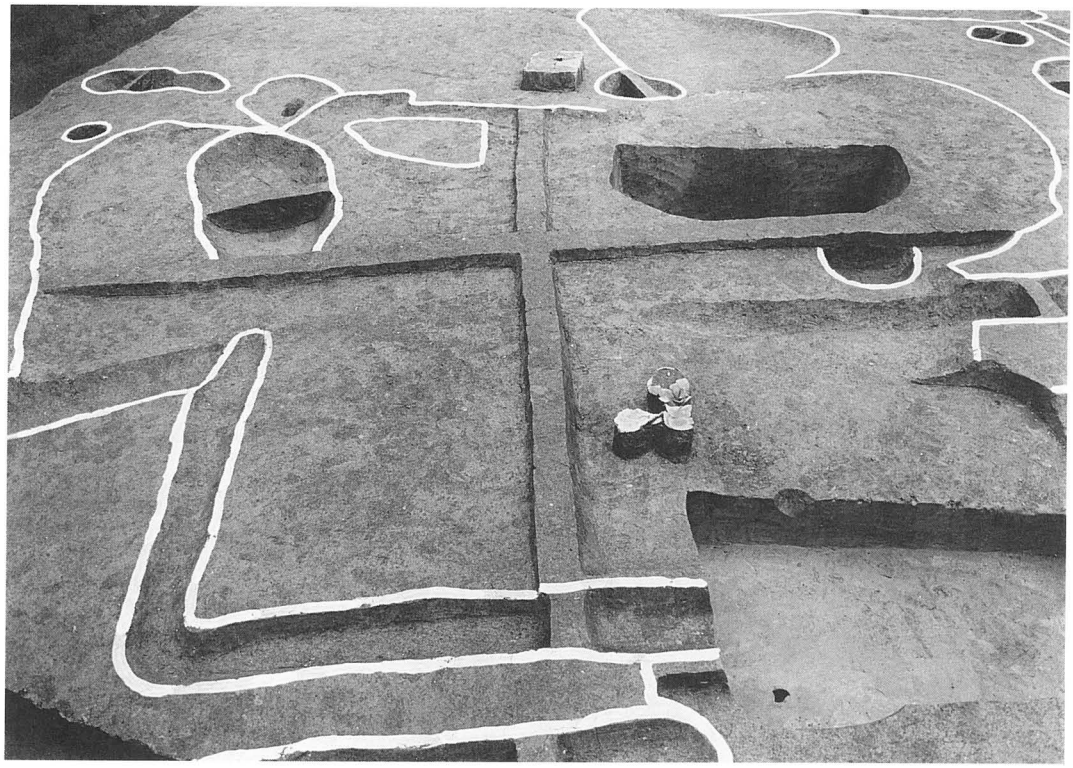


第１調査区全景（南から）

第２調査区全景（南から）

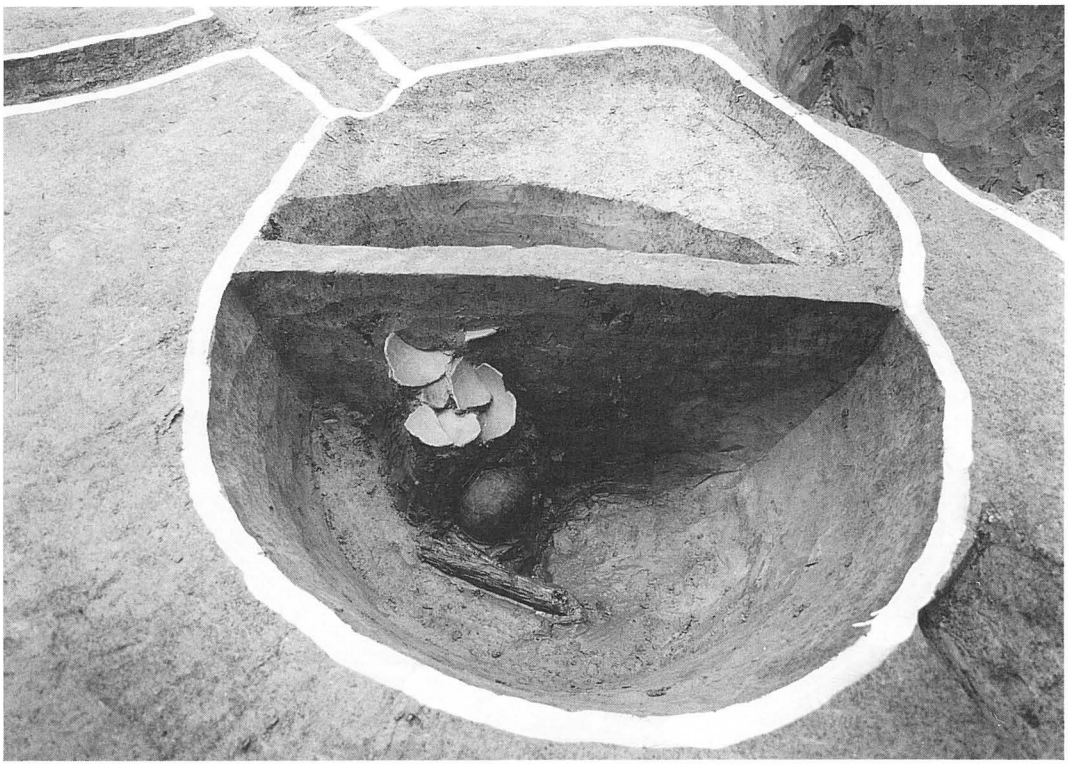


第１調査区（東から）

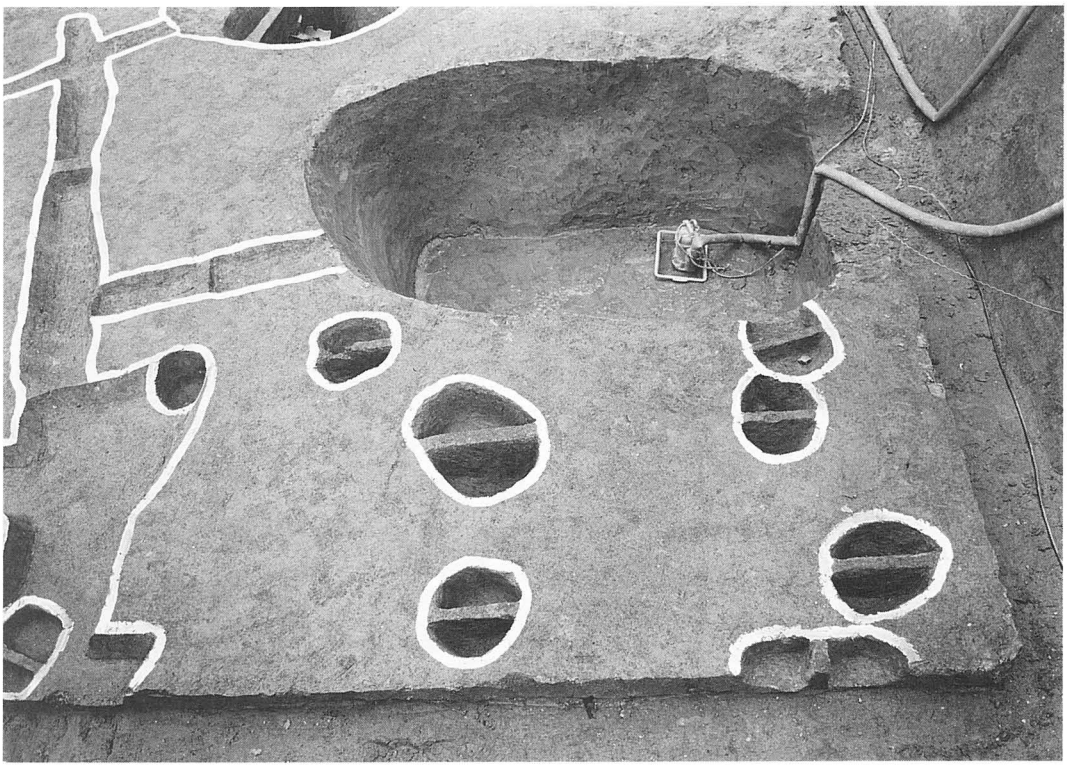


第１調査区中央（北から）

図版四



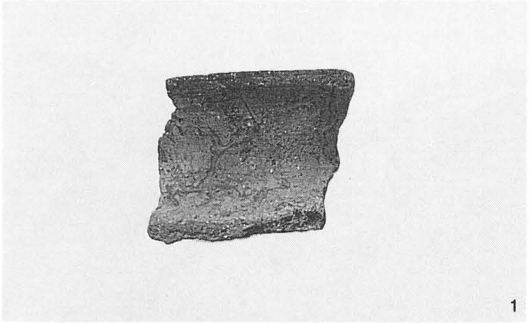
ＳＥ－201（西から）

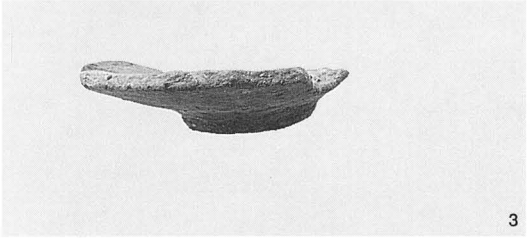


北西部小穴群（北から）

ＳＥ－102（北から）

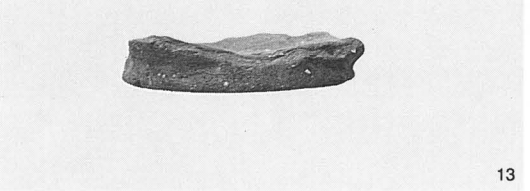
ＳＥ－107（北から）


1

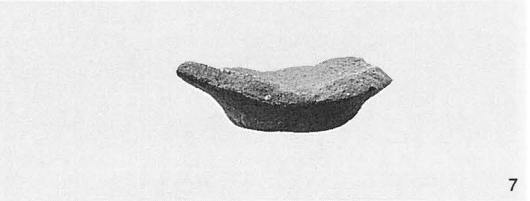

3

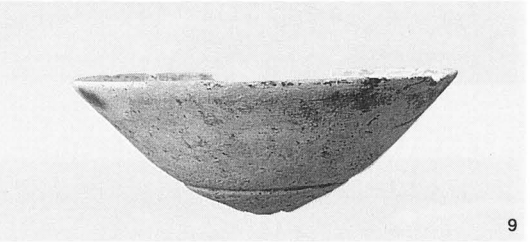
5

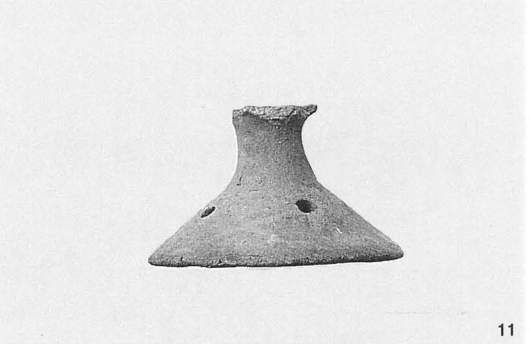
10

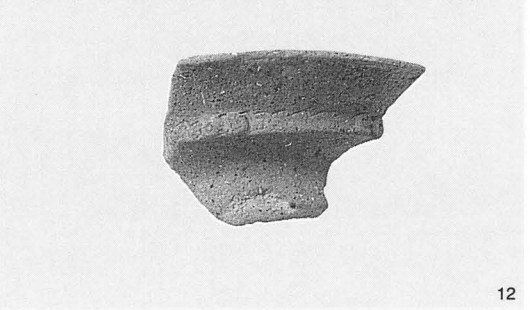

13

6

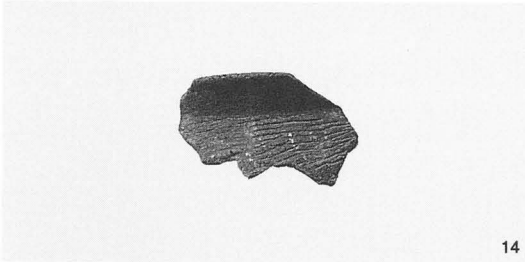

7

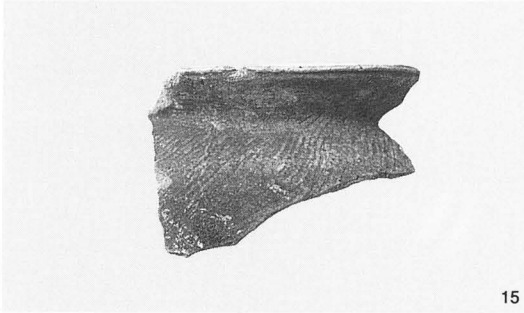

9

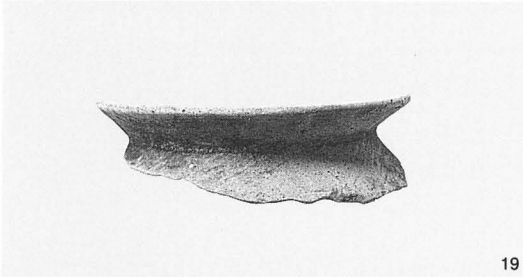

11

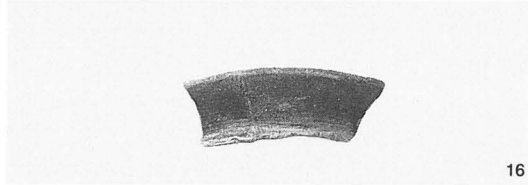

12

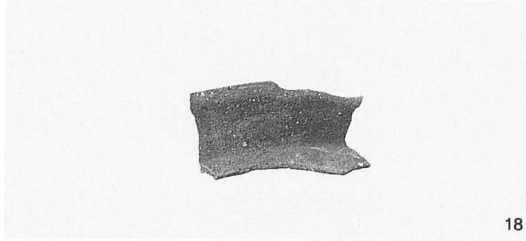
ＳＥ－２・11・３・５～７・９～11
包含層　12・13

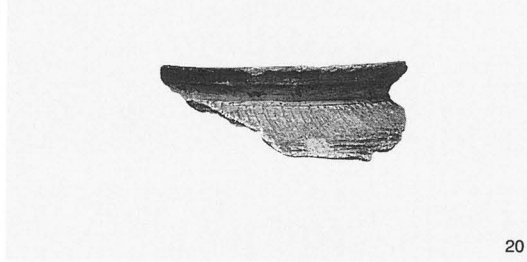

14


15


19


16


18


20

21

包含層

XIII　東郷遺跡第41次調査（ＴＧ93－41）

例　　言

1．本書は、八尾市北本町２丁目43－１の一部、43－３で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第41次調査（ＴＧ93－41）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第53号　平成５年８月11日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が嶋野興産株式会社から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成５年８月30日～９月６日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約120㎡である。なお、調査においては中谷嘉多・八田雅美・西岡千恵子・市森千恵子・島野鋼一が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡、図面レイアウト・トレース－市森、遺物観察表－西岡、遺物写真・本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに…… 113

2．調査概要…… 114

　1）調査の方法と経過…… 114

　2）基本層序…… 115

　3）検出遺構と出土遺物…… 117

　4）遺構に伴わない出土遺物…… 120

　5）出土遺物観察表…… 121

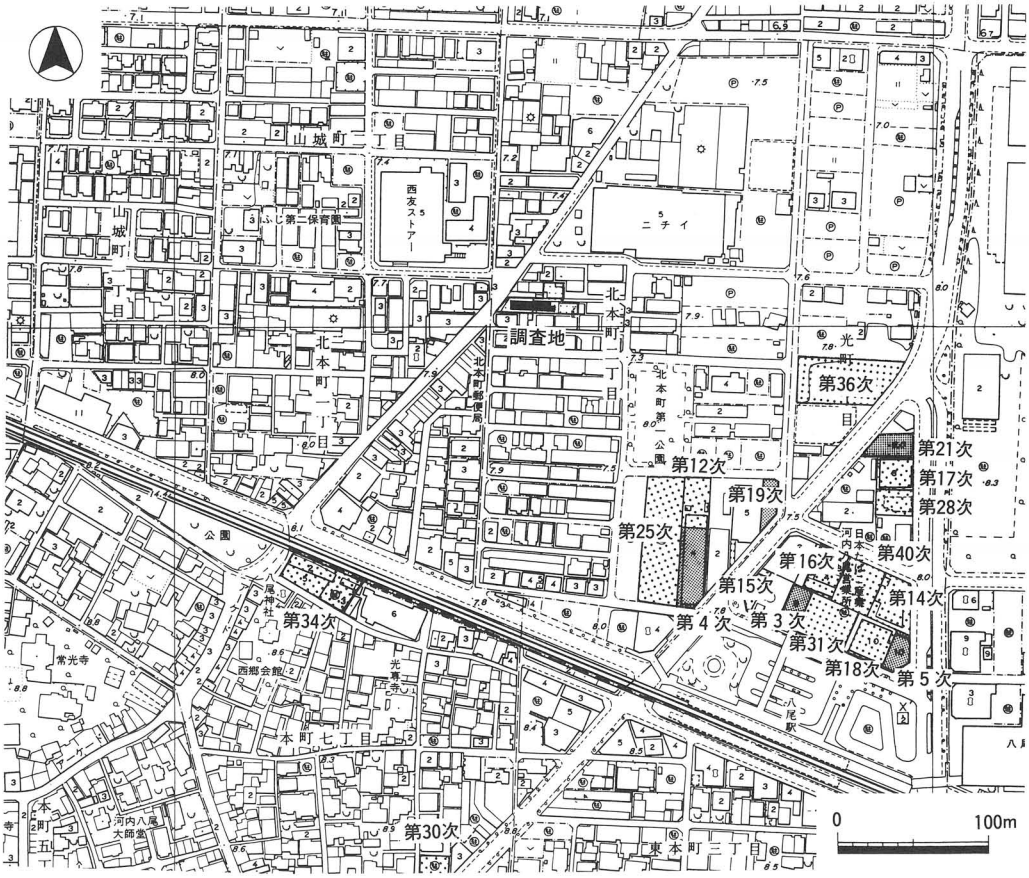
3．まとめ…… 122

Ⅻ　東郷遺跡第41次調査（ＴＧ93－41）

１．はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画では八尾市本町１・７丁目、北本町２丁目、東本町１～５丁目、光町１・２丁目、桜ケ丘１～３丁目、荘内町１・２丁目一帯に所在する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

当遺跡の契機は昭和46年に東本町２丁目（光明寺付近）の道路敷下で行われた水道管埋設工事の際に、奈良時代の墨書人面土器を出土したことから遺跡の存在が認識された。その後、近鉄八尾駅移転に伴って実施された駅前の区画整理事業以後、駅前開発が急激に進みそれに伴う発掘調査が数次にわたり実施された。その調査成果、弥生時代中期から中世に至る遺構・遺物が存在することが明らかになった。特に古墳時代前期の集落を研究する上で貴重な資料が得られている。



第１図　調査区位置図及び周辺図

当遺跡の周辺には南東に小阪合遺跡、南西に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、北東に萱振遺跡が存在している。発掘調査では当調査研究会が実施した第12次（TG82-12）・第25次（TG87-25）・第34次（TG90-34）・第36次（TG91-36）が今回の調査地周辺に隣接している（第１図）。

２．調査概要

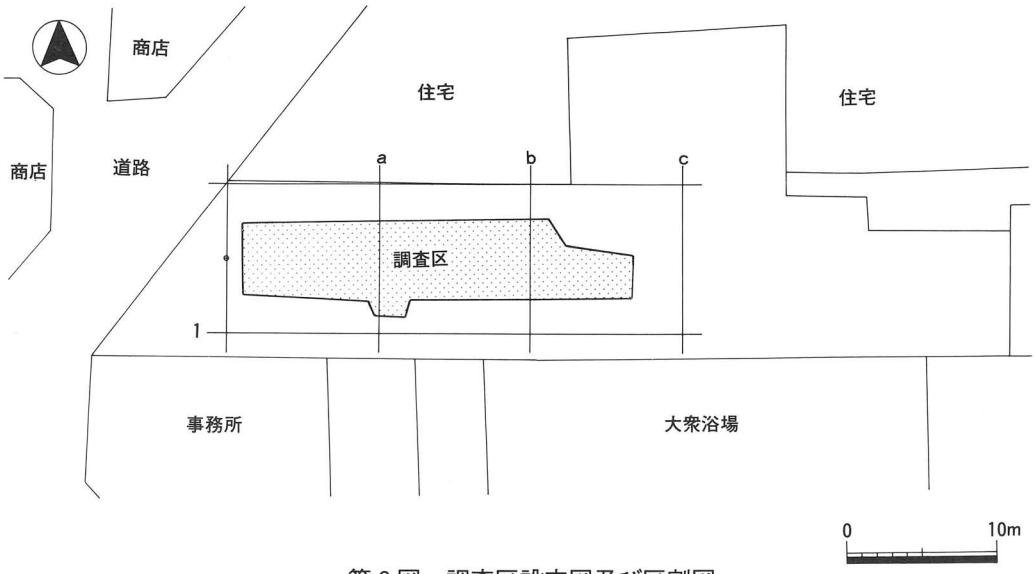
１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は共同住宅建設に伴うもので、事業者と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成５年８月30日～９月６日である。調査面積は120㎡を測る。今回の調査は、当遺跡で実施した第41次調査（TG93-41）である。調査地は当遺跡の西部にあたり、南西部へ約110ｍのところに第34次調査地（TG90-34）が位置する。この発掘調査では中世～近世の集落遺構を中心とした遺構が検出されている。

今回の調査区は建築予定の部分に幅５ｍ×長さ24ｍを設定したが、北東部に現在使用している下水管が走っており、その部分を避けた。それによって縮小した面積を補うため、東側へ拡張した（第２図）。

掘削は現地表（T.P.＋8.0ｍ）下1.7ｍ前後までを機械で行い、以下0.2～0.3ｍの土層については人力掘削を実施した。

調査にあたっては、調査区の西部に任意の基点を設定し、調査区の方向を合わせ、調査区全体が把握できる範囲の10ｍ四方角の区画を作成した。地区名については基点より南へ５ｍの東西線を数字の１とし、西へ10ｍの南北線は北から南へアルファベットのａ～ｃを付称した。交差する北西側を優先して１ａ～１ｃ区と呼称して調査を進めた（第３図）。



第２図　調査区設定図及び区割図

2）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　盛土及び攪乱（層厚40～150㎝）。調査前は東部が駐車場・西部が建物跡である。西部は建物の基礎により、現地地表下1.5ｍ前後まで攪乱している。

第２層　明茶灰色砂質土（層厚20～40㎝）。

第３層　暗灰色砂質土（層厚10～20㎝）。近世以降の耕作土と考えられる。

第４層　褐灰色砂質土（層厚５～10㎝）。

第５層　淡茶灰色微砂（層厚10～25㎝）。

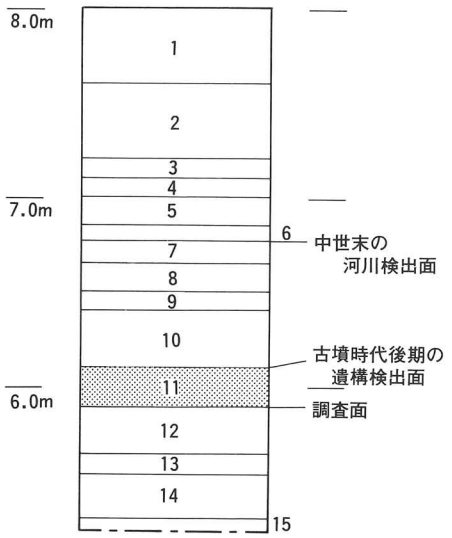
第６層　淡灰茶色砂礫混じり微砂（層厚10～20㎝）。鎌倉時代後期以降の河川跡が切り込まれている。標高は6.8ｍを測る。

第７層　褐灰色微砂（層厚10～20㎝）。

第８層　灰褐色細砂混微砂（層厚10～20㎝）。

第９層　灰茶色細砂（層厚５～15㎝）。

第10層　灰青色粘質土（層厚20～30㎝）。酸化鉄（褐色）の班点がみられる。



1 盛土及び攪乱（層厚40～150㎝）
2 明茶灰色砂質土（層厚20～40㎝）
3 暗灰色砂質土（層厚10～20㎝）
4 褐灰色砂質土（層厚５～10㎝）
5 淡茶灰色微砂（層厚10～25㎝）
6 淡灰茶色砂礫混じり微砂（層厚10～20㎝）
7 褐灰色微砂（層厚10～20㎝）
8 灰褐色細砂混微砂（層厚10～20㎝）
9 灰茶色細砂（層厚５～15㎝）
10 灰青色粘質土（層厚20～30㎝）褐色の斑点
11 暗灰黒色粘質土（層厚20～30㎝）古墳前期の包含層
12 青灰色～淡茶灰色シルト（層厚20～30㎝）調査面
13 灰青色粘質土（層厚10～20㎝）
14 灰青色シルト（層厚30～40㎝）植物遺体を含む
15 淡青灰色細砂（層厚10㎝以上）

第３図　基本層序柱状図（Ｓ＝１／40）

第11層　暗灰黒色粘質土（層厚20～30㎝）。古墳時代前期の遺物包含層である。東側へ行くに従い層厚が薄くなっている。この上面より古墳時代後期の遺構が切り込んでいるのが南西部の壁面でみられた。

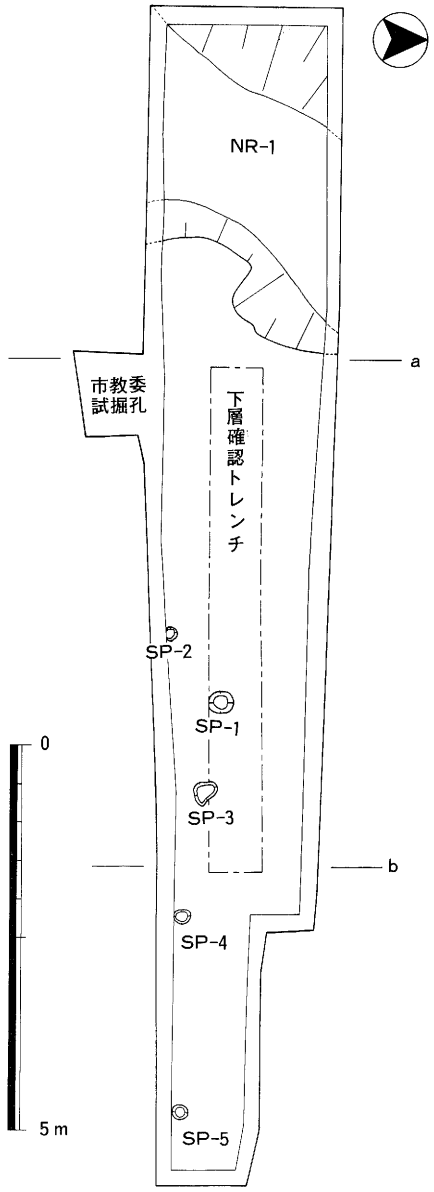
第12層　青灰色～淡茶灰色シルト（層厚20～30㎝）。弥生時代後期末から古墳時代前期の遺構面である。上面は標高5.9ｍ前後を測る。当遺跡の中央部で検出されている遺構面より20㎝前後低い。

第13層　灰青色粘質土（層厚10～20㎝）。植物遺体を少量含む。

第14層　灰青色シルト（層厚30～40㎝）。植物遺体を少量含む。

第15層　淡青灰色細砂（層厚10㎝以上）。この層から激しく湧水があり、これより以下の土層観察の掘削を断念した。

以上、調査区の基本層序である。なお、第13層～第15層は、下層確認トレンチで観察できた土層である。



第４図　遺構平面図

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、現地表（標高8.0ｍ）下2.0ｍ前後の第12層上面から切り込む古墳時代前期に比定される小穴５個（ＳＰ－１～ＳＰ－５）を検出した。現地表下1.2ｍ（標高6.8ｍ）前後の第６層上面から切り込む鎌倉時代後期以降の河川１条（ＮＲ－１）を検出した。以下、各遺構について記す。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１～ＳＰ－５

調査区東部で５個を検出した。平面形状は、円形及び楕円形である。検出した小穴は柱痕跡はみられなかった。深くまで掘り込んでいる小穴は１個だけで、その他は浅い。小穴の性格は建物に関連する柱穴跡とは考えにくい。時期は、小穴の内部からごく少量の土器片や第11層が古墳時代前期に比定される包含層であることから古墳時代前期の時期のものと思われる。以下、各小穴については第１表に掲載した。

第１表　小穴（ＳＰ）一覧表　＊単位はcm

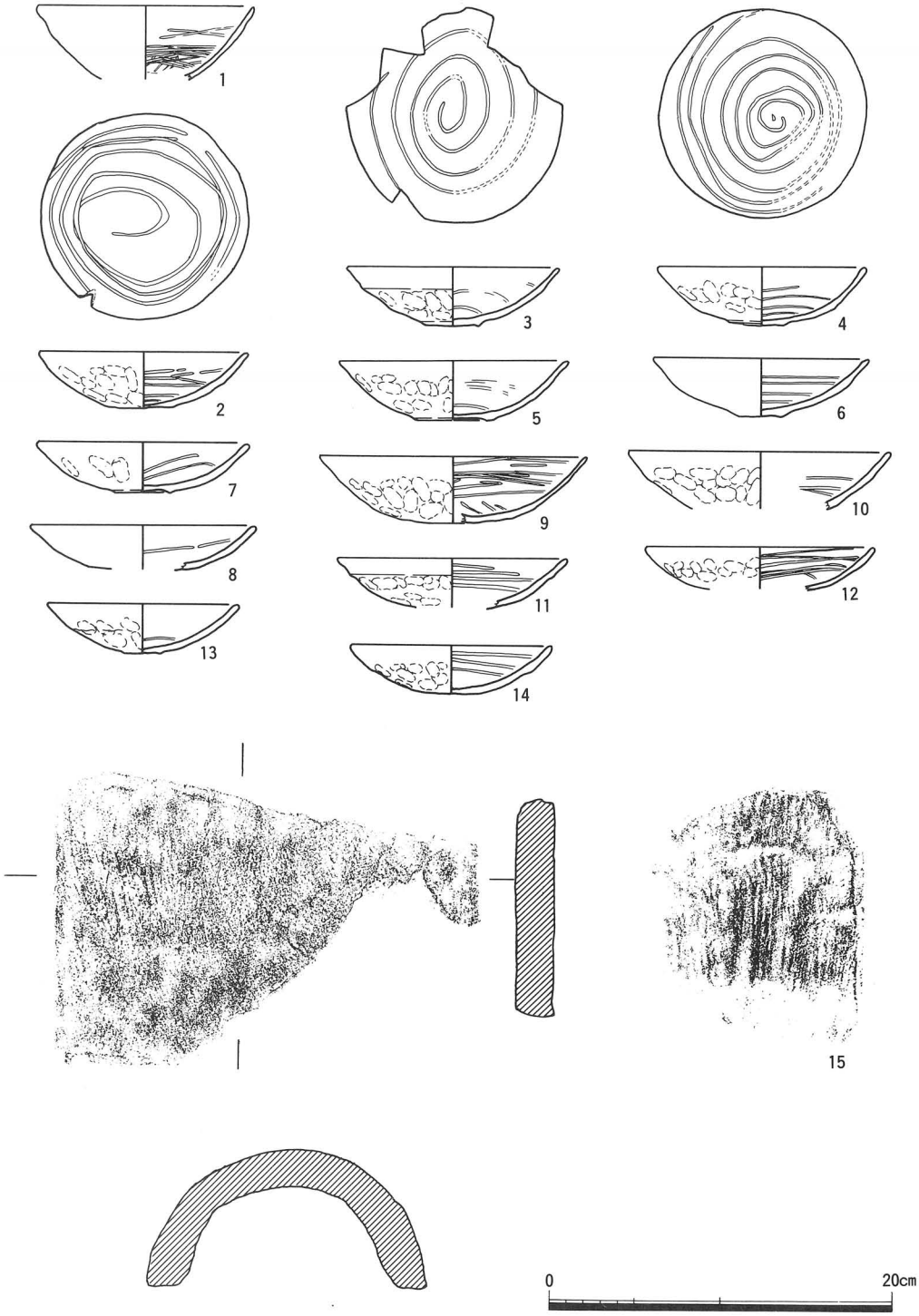
遺構番号	区　名	平面形	断面形	径	深さ	堆　積　土	備　考
SP-1	2a区	円　形	半円形	45～48	15	暗灰褐色粘質土	土器片
SP-2	2a区	楕円形	半円形	24～30	5	暗灰褐色粘質土	
SP-3	2a区	楕円形	半円形	36～50	5	暗灰褐色粘質土	
SP-4	3a区	楕円形	半円形	28～34	11	暗灰褐色粘質土	
SP-5	3a区	円　形	半円形	30～32	17	暗灰褐色粘質土	土器片

河川（ＮＲ）

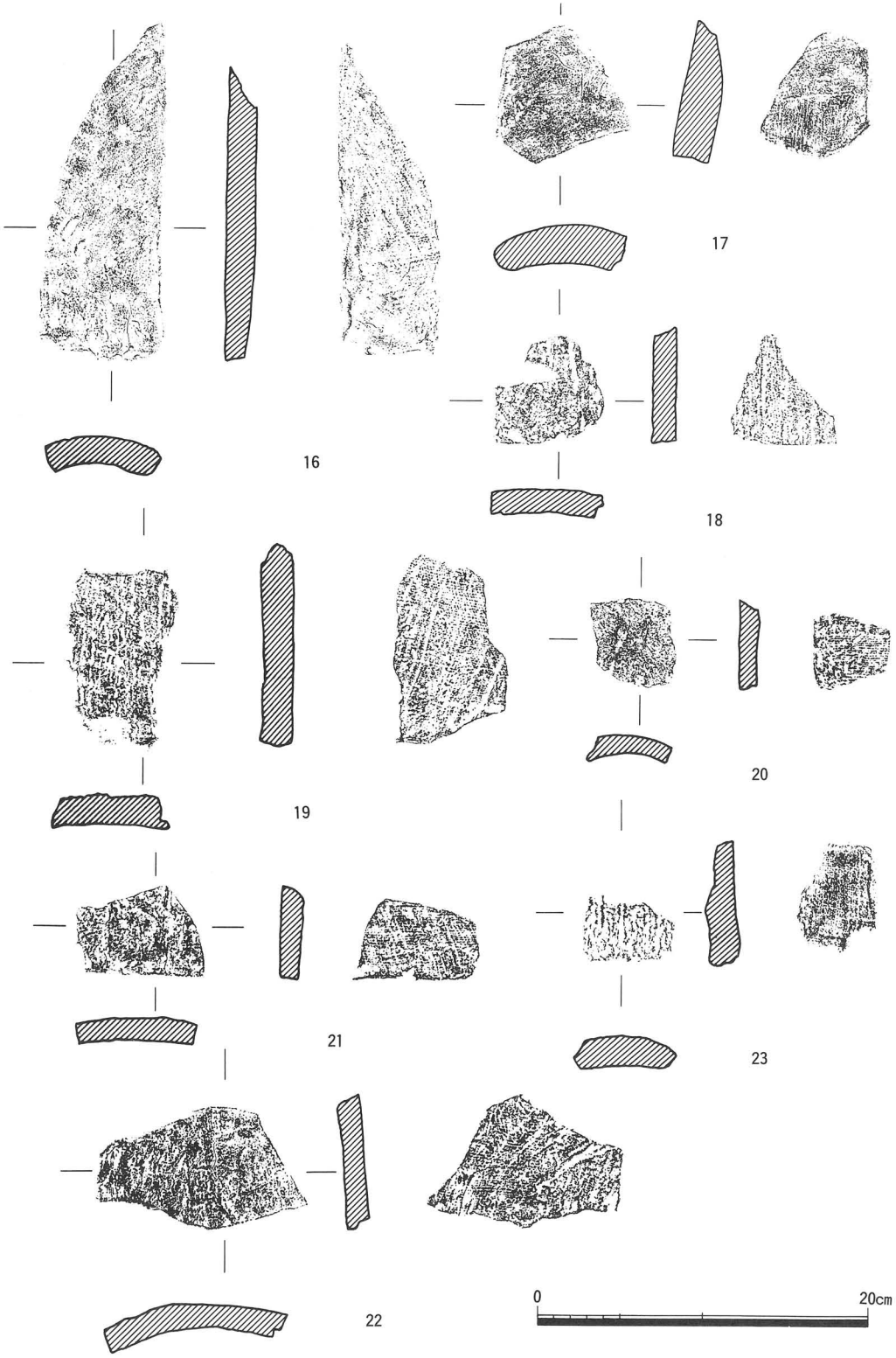
ＮＲ－１

調査区西部（1a区）で検出した。第６層上面から切り込みがみられる河川跡である。検出長は約５ｍを確認した。方向は調査区内で南西－北東方向に走る。規模は西肩が西壁の調査区外に至り、明確な幅は不明であるが、調査区西壁で河川肩が上がっており、その状況から想定すると10ｍ前後の川幅をもつものと思われる。深さは最深部で約90cmを測り、砂層を基調とした堆積土である。上層は薄い粘質土層がサンド状にみられる細砂層で、下層は植物遺体を含む粘質混細砂層である。遺物は、内部から古墳時代前期～鎌倉時代後期に比定される土師器・須恵器・瓦器・瓦などの破片が出土している。コンテナ箱にして約２箱分である。このうち図示できたものは鎌倉時代後期に比定される瓦器椀（１～14）・丸瓦（15）・平瓦（16～23）である。瓦器は浅い椀形で底部高台が退化している。これは瓦器の最終期にあたるもので、八尾の瓦器編年（註１）ではⅥ～Ⅴ期に比定されるものである。瓦は凹面に布目、凸面に縄目が残る。

註１（財）八尾市文化財調査研究会「1.萱振Ａ遺跡（第１次調査）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告　昭和61年度』（財）八尾市文化財調査研究会報告13



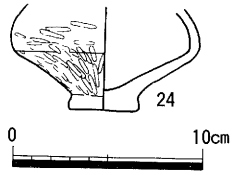
第５図　ＮＲ１－２出土遺物実測図



第６図　ＮＲ－１出土遺物実測図

4）遺構に伴わない出土遺物

第４・５層・第11層で出土した。第４・５層は鎌倉時代後期以降の遺物を含む土層で、ごく少量の瓦器小片が出土しただけである。第11層は古墳時代前期の遺物包含層で、弥生時代後期から古墳時代前期に比定される土器片がごく少量出土している。器種では壺・Ｖ様式甕・庄内式甕・布留式甕である。図示できたものは１点で、古墳時代初頭に比定される小型壺（24）である。



第７図　第11層出土遺物
実測図

5）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器種 遺構番号	法量（cm） 器構	口径	形態と技法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1	椀 （瓦器） ＮＲ－１	口径	12.4	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、格子ヘラミガキ。高台部外面ナデ	短灰色	精良（５㎜の礫１つ含む）	良好	1/4残存
2 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	12.0 3.3	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	短灰黒色～白灰色	４㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	完形
3 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	12.2 3.4	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ		３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	完形
4 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	12.0 3.4	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	黒灰色～白灰色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3残存
5 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	13.7 3.6	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	淡灰黒色	２㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/3残存
6 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	12.4 3.4	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	淡黄灰色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/4残存
7 図版三	同上 ＮＲ－１	口径 器高	12.0 2.9	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	外　白灰色～淡黒灰色 内　淡灰色	４㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/2残存
8	同上 ＮＲ－１	口径	13.0	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	外　黒灰色 内　淡灰黄色	２㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/6残存
9 図版三	同上 ＮＲ－１	口径	15.4	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、平行ヘラミガキ、高台部外面ナデ	淡黒灰色	４㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/3残存
10	同上 ＮＲ－１	口径	15.2	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	外　淡黒灰色 内　淡灰黒色	精良	良好	1/3残存
11	同上 ＮＲ－１	口径	13.2	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	淡黒灰色	４㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	2/3残存
12	同上 ＮＲ－１	口径	13.2	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	淡黒灰色	精良	良好	1/5残存
13	同上	口径 器高	11.0 2.9	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	黒灰色	２㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/5残存
14 図版三	同上	口径 器高	10.6 2.9	口縁部外面ヨコナデ、体部外面指頭圧痕、内面見込みから体部にかけて渦巻き状ヘラミガキ、高台部外面ナデ	外　淡黒灰色 内　灰白色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	1/2残存
15 図版三	丸瓦 ＮＲ－１	厚み	2.2	凹面布目、凸面縄目	外　灰色 内　茶灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
16 図版三	同上 ＮＲ－１	厚み	1.7	凹面布目、凸面縄目	黒灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
17 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	2.3	凹面布目、凸面縄目	暗灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
18 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	1.4	凹面布目、凸面縄目	外　黒灰色 内　灰色	２㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
19 図版四	平瓦 ＮＲ－１	厚み	1.8	凹面布目、凸面縄目	外　黒灰色 内　茶灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
20 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	1.1	凹面布目、凸面縄目	黒灰色	４㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
21 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	1.3	凹面布目、凸面縄目	暗灰色	密	良好	
22 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	1.4	凹面布目、凸面縄目	暗灰色	密	良好	
23 図版四	同上 ＮＲ－１	厚み	1.8	凹面布目、凸面縄目	茶灰色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
24 図版四	壷 （土師器） 包含層	底径	3.4	外面ヘラミガキ、底面ナデ、内面ナデ	淡灰黄褐色	４㎜以下の砂粒（長石角閃石雲母）を少量含む	良好	

3．まとめ

今回の調査は当遺跡の東部に位置し、調査地の周辺では発掘調査があまり実施されてない箇所であった。調査地の東側（当遺跡中心）では数次にわたる発掘調査が実施され、弥生時代中期～中世に至る遺構・遺物を多数検出している。特に古墳時代前期（庄内式～布留式古相）の集落構成を研究する上で貴重な資料が得られている。以下、検出した各時代について記す。

古墳時代前期

調査区では小穴を検出している。また調査区全面に古墳時代前期の遺物包含層が広がっていることが確認されており、調査地周辺にも集落が存在する可能性が考えられる。しかし、調査区では明確に住居域と判断する遺構の検出は乏しく、集落域とは言い難い。今後、この周辺で行われる調査成果に期待したい。

鎌倉時代後期

近接の調査では当調査地の南へ約200ｍの地点で行われた第34次調査（TG90-34）で鎌倉時代～近世に至る集落遺構が確認されているが、当調査地では河川跡のみであり、集落遺構に関連する明確な遺構はなかった。が、河川内から瓦器・瓦片などの遺物が出土しており、近接には集落域が存在するであろう。

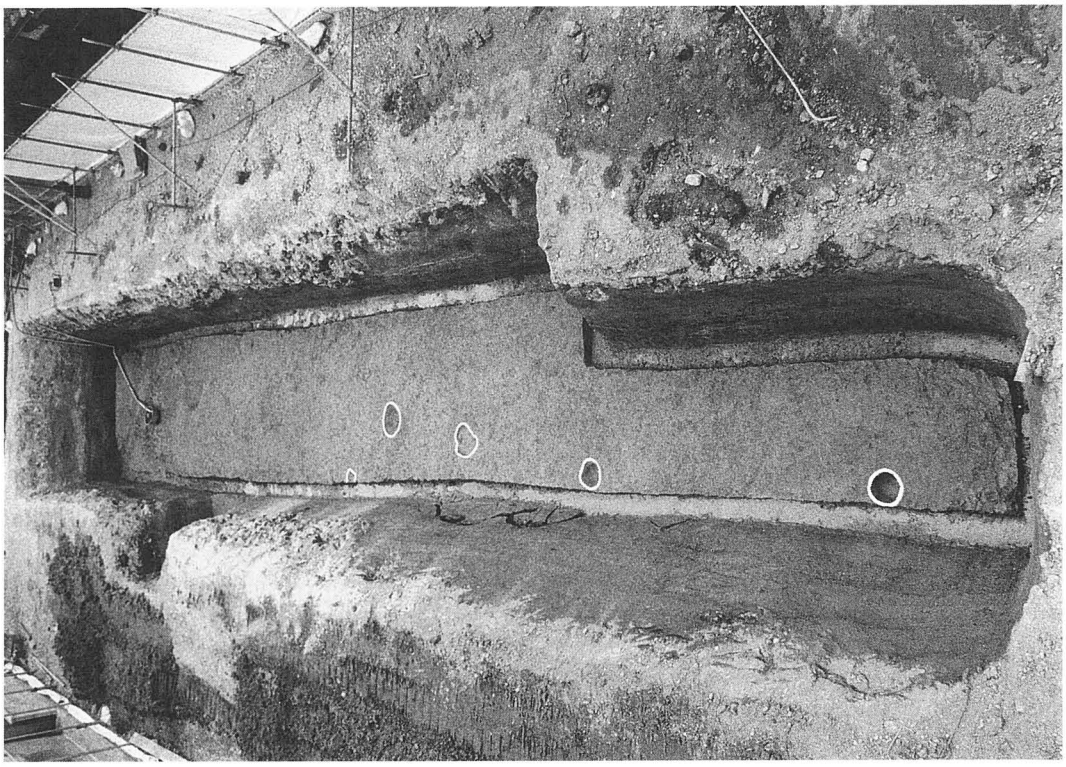
参考文献

○(財)八尾市文化財調査研究会「第８章東郷遺跡」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　1980･1981年度』(財)八尾市文化財調査研究会２　1983

○(財)八尾市文化財調査研究会「東郷遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要報告　昭和59年度』(財)八尾市文化財調査研究会６　1985

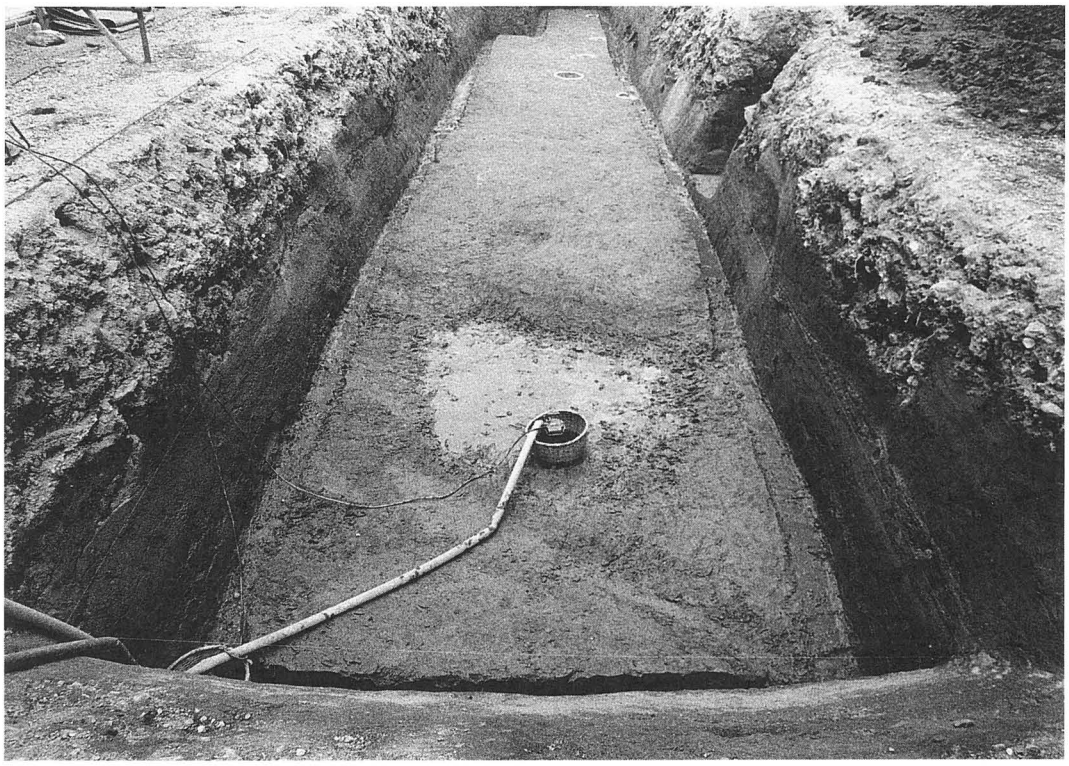
○(財)八尾市文化財調査研究会「Ⅲ東郷遺跡(第20次調査)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報　昭和61年度』(財)八尾市文化財調査研究会13　1987

○(財)八尾市文化財調査研究会「８．東郷遺跡第35次調査(TG90-35)」『平成２年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』1991



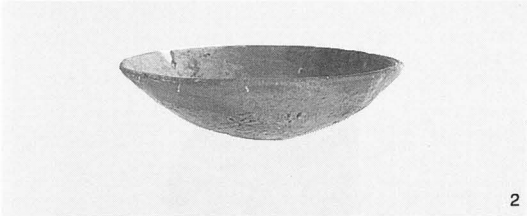
調査区全景（東から）

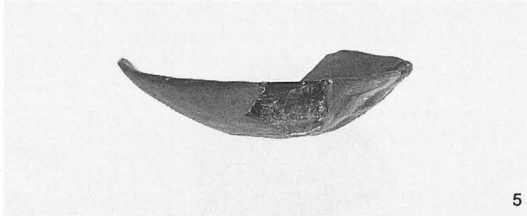
小穴群（西から）

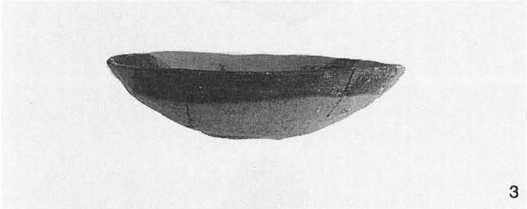


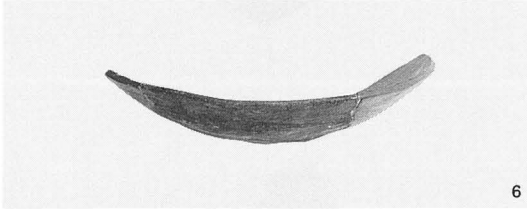
ＮＲ－１（西から）

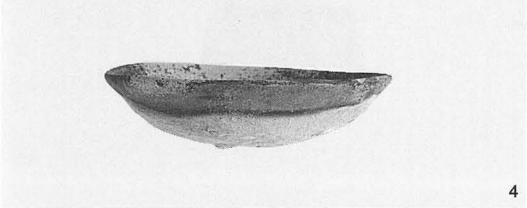
ＮＲ－１内出遺物（南から）

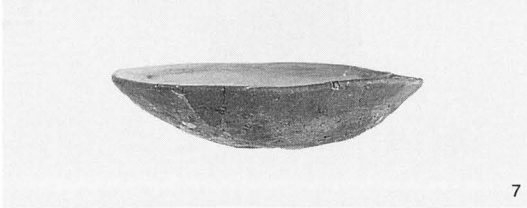

2

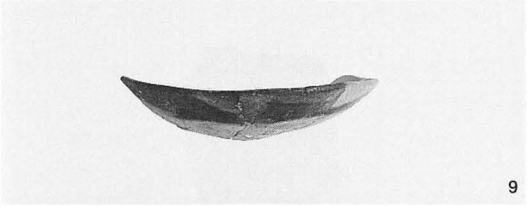

5

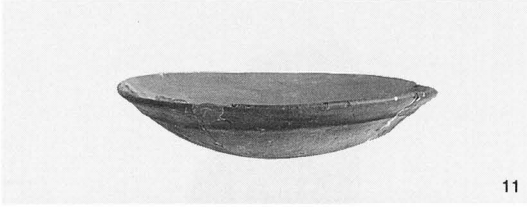

3

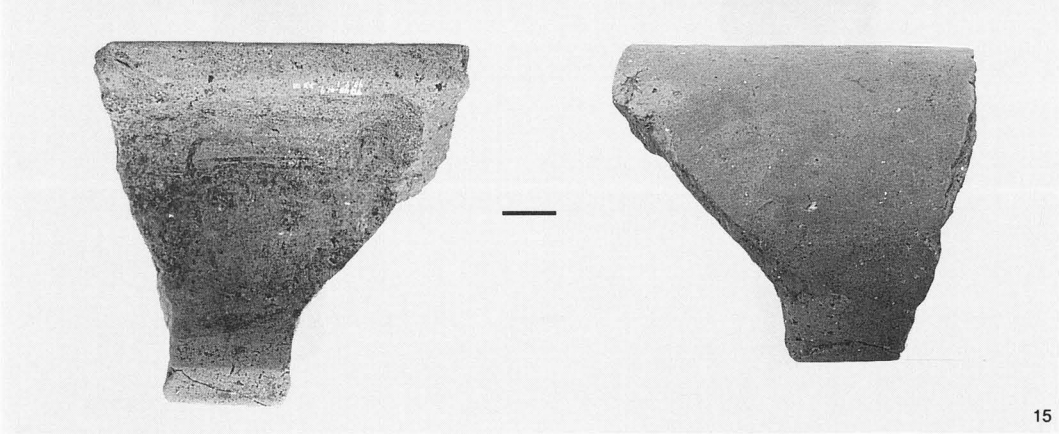

6

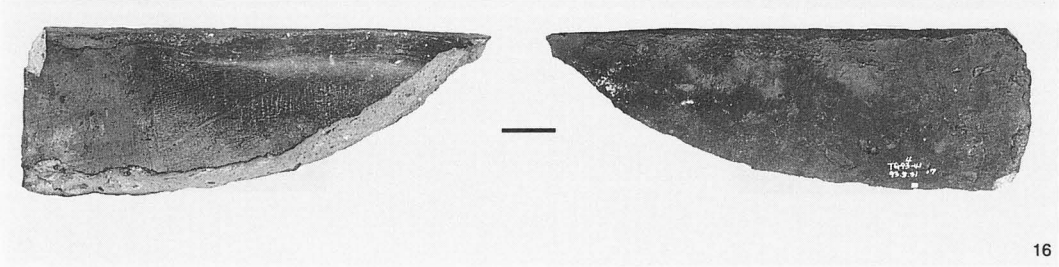

4


7

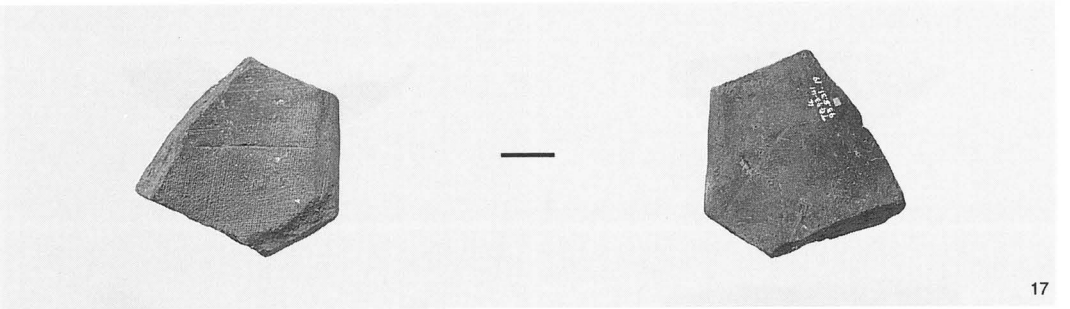

9


11

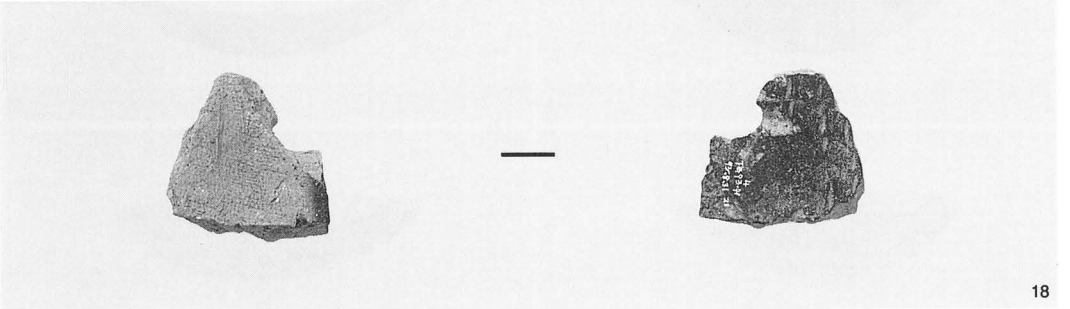

15


16

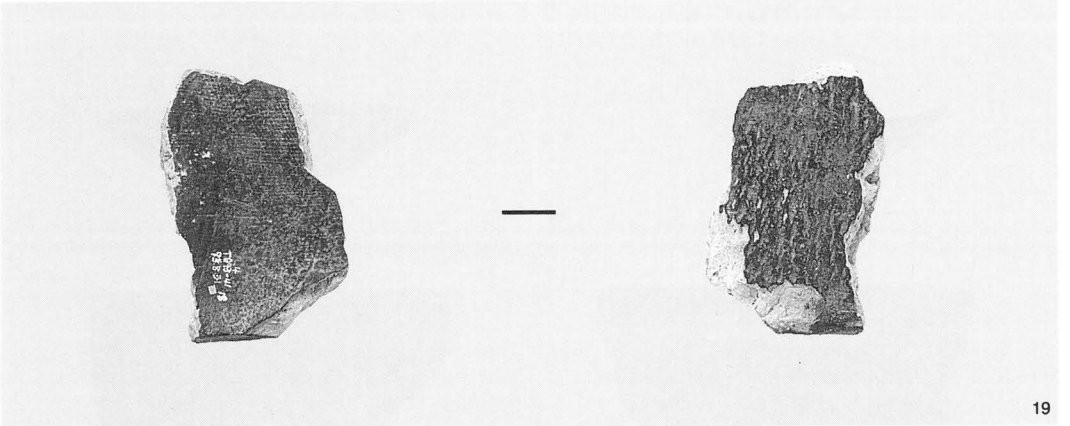
ＮＲ－１



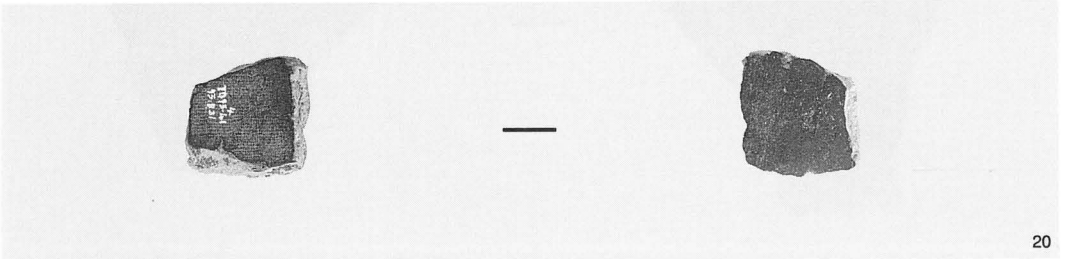
17



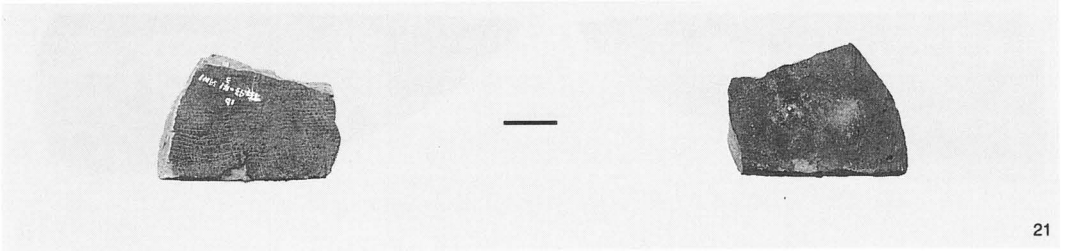
18



19

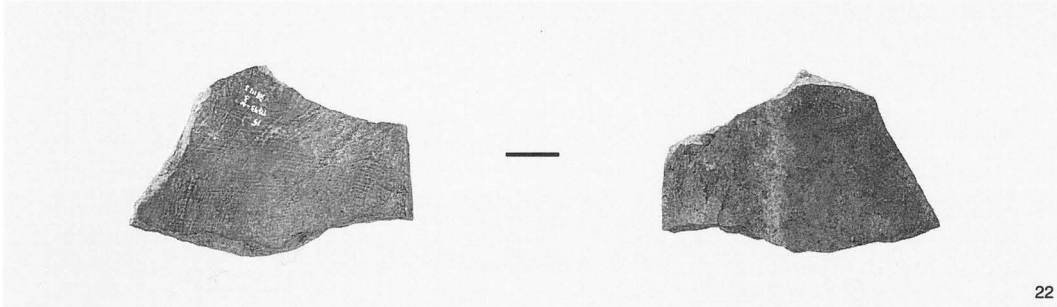


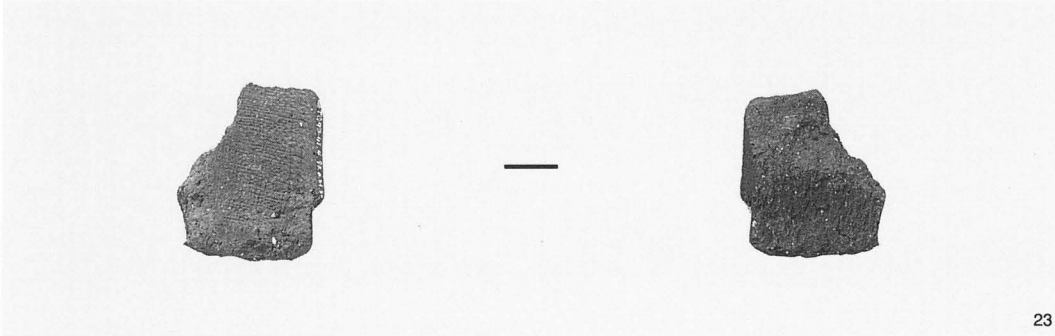
20

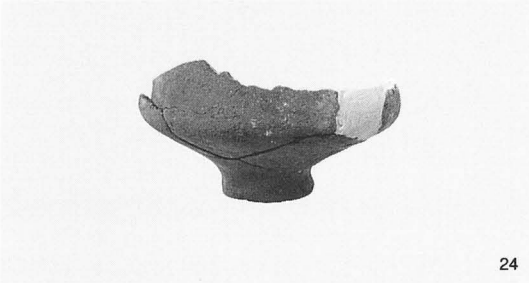


21

NR－1







ＮＲ－１　22・23
包含層　24

XIV　東郷遺跡第43次調査（ＴＧ93－43）

例　　言

1．本書は、八尾市荘内町２丁目15・16・17・18で実施した共同住宅建設に伴う発掘調査の報告書である。

1．本書で報告する東郷遺跡第43次調査（ＴＧ93－43）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教社文第70号　平成５年９月17日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が中田健治氏から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成６年１月10日～１月26日にかけて、高萩千秋を調査担当として実施した。調査面積は約306㎡である。なお、調査においては八田雅美・島野鋼一・大見康裕・今木敏文・松岡章雄が参加した。

1．本書に関わる業務は、遺物実測－西岡千恵子、図面レイアウト・トレース－市森千恵子・赤澤茂美・川上節子、遺物観察表－西岡、遺物写真－八田雅美、本文の執筆－高萩が担当した。

本　文　目　次

1．はじめに…… 129

2．調査概要…… 130

　1）調査の方法と経過…… 130

　2）基本層序…… 131

　3）検出遺構と出土遺物…… 132

　4）遺構に伴わない出土遺物…… 144

　5）出土遺物観察表…… 147

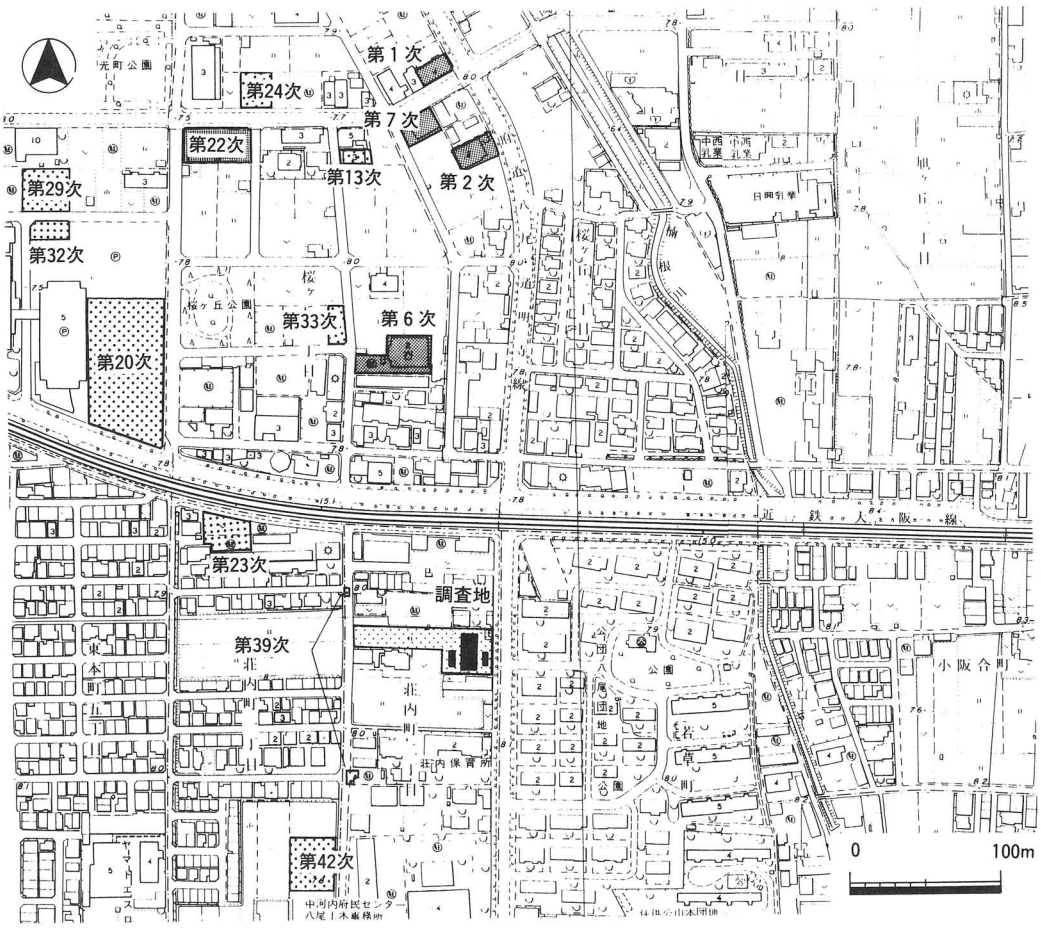
3．まとめ…… 149

XIV　東郷遺跡第43次調査（ＴＧ93－43）

１．はじめに

東郷遺跡は、現在の行政区画では八尾市本町・東本町・光町・桜ケ丘一帯に所在する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての複合遺跡である。地形的には旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川に挟まれた沖積地上に位置する。

当遺跡の契機は昭和46年に東本町２丁目（光明寺付近）の道路敷下で行われた水道管埋設工事の際に、奈良時代の墨書人面土器が出土したことから遺跡の存在が認識された。その後、近鉄八尾駅移転に伴って実施された駅前の区画整理以後、駅前開発が急激に進みそれに伴う発掘調査が多数実施された。その結果、弥生時代中期から中世に至る遺構・遺物が存在することが明らかになった。特に古墳時代初頭～前期の集落を研究する上で貴重な資料が得られている。



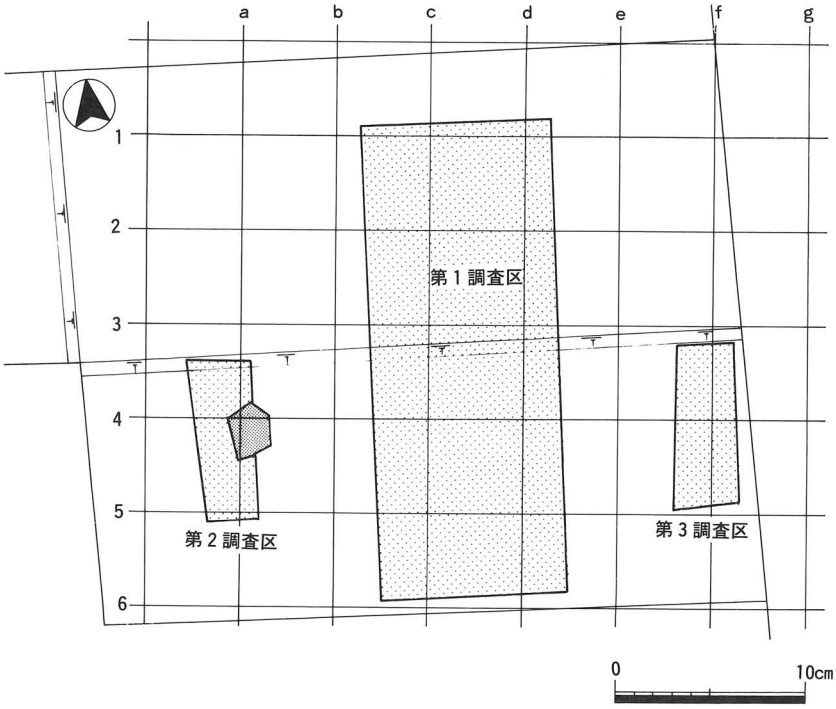
第１図　調査区設定図及び周辺図

当遺跡は弥生時代から近世にかけての複合遺跡が密集する中心にあたる。周辺には南東に小阪合遺跡、南に成法寺遺跡、北西に宮町遺跡、北東に萱振遺跡が接している。今回の調査地は当遺跡範囲内の東南部にあたり、この周辺では八尾市教育委員会が実施した第３次（TG81-3）・第４次（TG81-4）・第５次（TG81-5）、当調査研究会が実施した第14次（TG82-14）・第15次（TG83-15）・第17次（TG85-17）・第18次調査（TG88-26）が行われている（第１図）。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の発掘調査は荘内町２丁目15～18の共同住宅建設に伴うもので、事業者と八尾市教育委員会・（財）八尾市文化財調査研究会との三者で協定書を締結して実施した。調査期間は平成５年12月13日～12月27日である。今回の調査地は当遺跡の南東部にあたり、当遺跡内で実施した第43次調査（TG93-43）になる。調査地周辺では第23次（TG88-23）・第26次（TG89-26）・第39次（TG92-39）・第42次（TG93-42）の調査が行われている。これらの発掘調査では古



第２図　調査区位置図及び区割り図

墳時代初頭～前期に比定される集落遺構を中心とした遺構が検出されており、今回の調査地はその東部の広がりを埋める調査である。

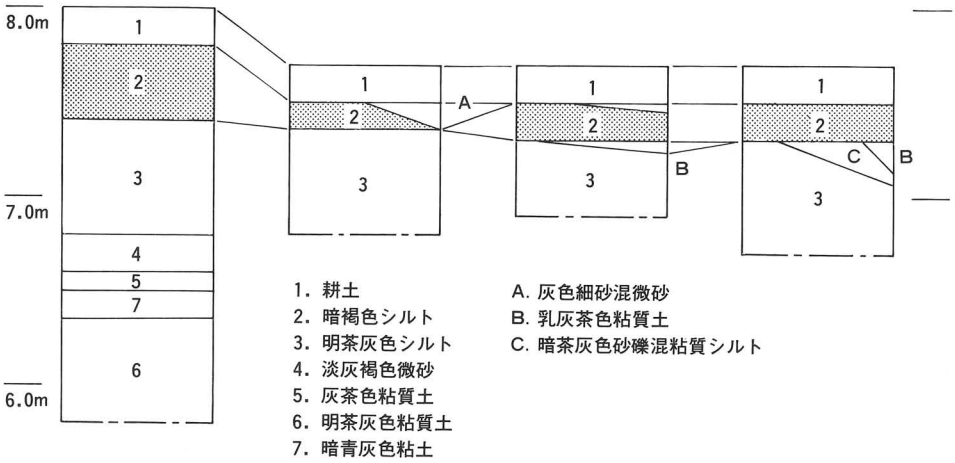
調査区は３箇所で、中央部を第１調査区（縦25.5ｍ×10.0ｍ＝面積255.0㎡）、西部を第２調査区（縦3.0ｍ×横8.5ｍ＝面積25.5㎡）、東部を第３調査区（縦3.0ｍ×横8.5ｍ＝面積25.5㎡）とした（第２図）。総調査面積は306㎡を測る。掘削は現地表下約0.2～0.5ｍまでを機械で行い、以下0.1～0.6ｍの土層については人力掘削を実施した。

調査にあたっては、調査地北東部の土地境界杭を基点にして調査区全体が把握できる範囲に５ｍ四方角の区画を作成した。地区名については基点より西へ25ｍの南北線から東へアルファベットのａ～ｇを付し、基点より西25ｍ、南５ｍの東西線から南へ数字の１～６を付けた。区名は交差する北西側を優先して1a～6g区と呼称して調査を進めた（第２図）。

２）基本層序

調査区の基本層序は、第３図に示すとおりである。

第１層　耕土（層厚0.1～0.2ｍ）。現在までの耕作としていた土層である。現地表面は北部が標高8.0ｍ、南部が7.7ｍである。さらに東部の道路面は標高8.4ｍを測る。



第３図　基本層序柱状図

第２層　暗褐色シルト（層厚０～50㎝）。中世の包含層である。第１調査区の北部では整地されたものと思われ、まわりより一段高く、厚く堆積している。

第３層　明茶灰色微砂（層厚60㎝）。古墳時代から中世の遺構検出面である。この面を調査面とした。標高は7.5～7.6ｍを測り、北部がやや高い。

第４層　淡灰褐色微砂（層厚20㎝）。古墳時代前期以前に堆積した洪水層である。

第５層　灰茶色粘質土（層厚10㎝）。柔らかく粘着のある土層で、少量の炭化物が含まれている。

第６層　明茶灰色粘質土（層厚15㎝）。酸化鉄の斑点がある。古墳時代前期の包含層である。

第７層　暗青灰色粘土（層厚60㎝以上）。無遺物層で、粘性の強い粘土である。

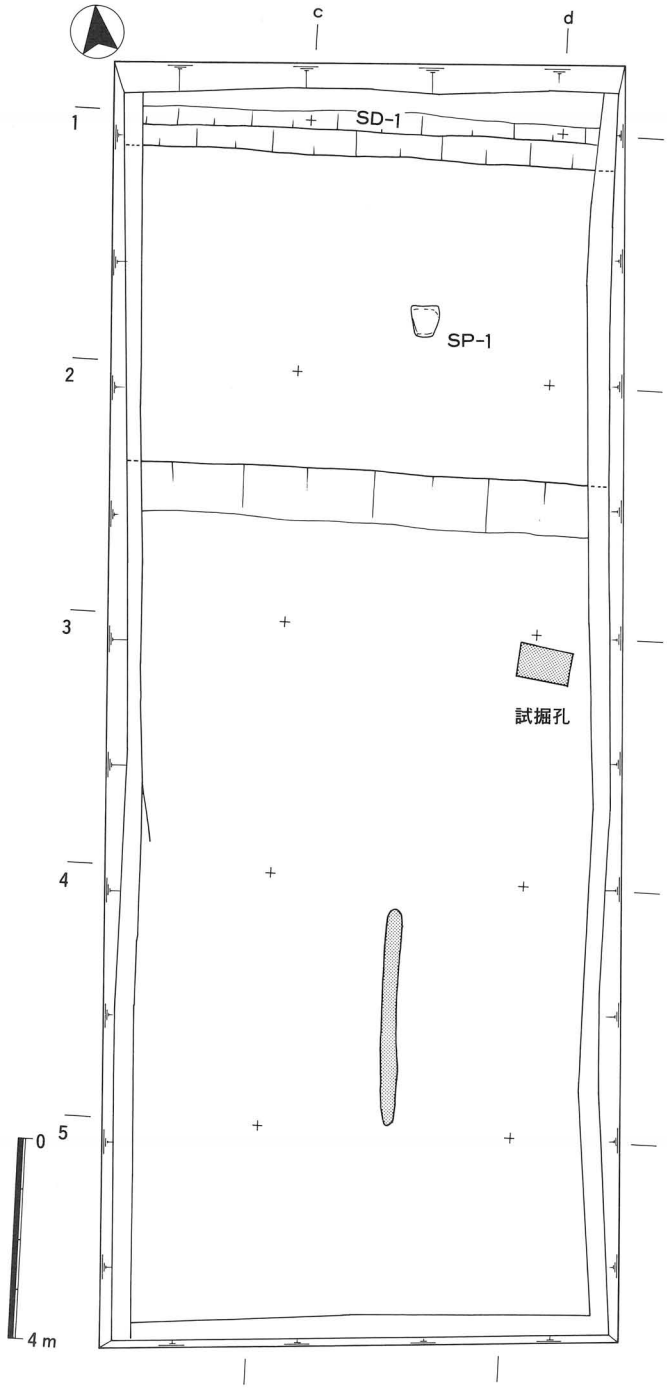
Ａ層　灰色細砂混微砂。第２調査区で確認された層である。近世以降に小規模な洪水層で堆積した土層と思われる。

Ｂ層　乳灰茶色粘質土。調査区南部でみられた中世ごろの耕作土である。

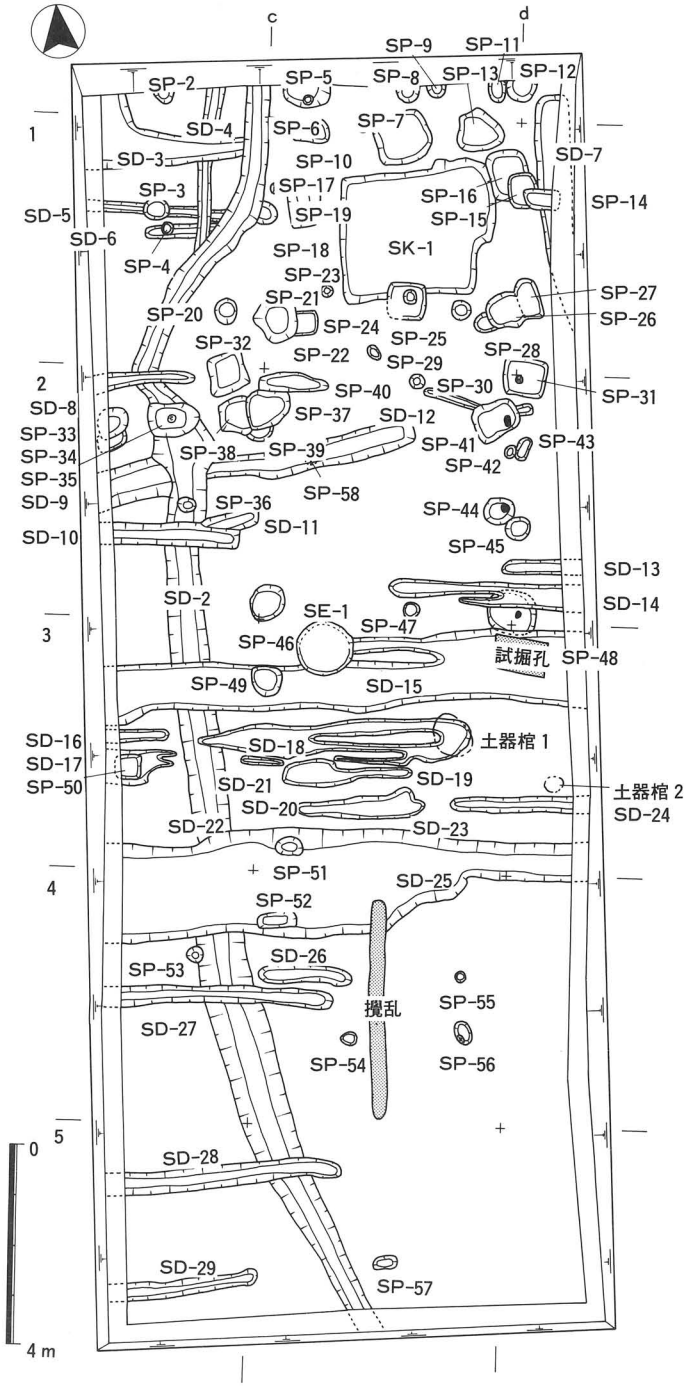
Ｃ層　暗茶灰色砂礫混粘質シルト。第３調査区で確認された古墳時代後期の遺構の堆積土である。

３）検出遺構と出土遺物

調査の結果、第１調査区では現地表下0.2ｍの第２層上面（標高7.8ｍ）から切り込む近世以降に比定される溝１条（ＳＤ－１）・根石１個（ＳＰ－１）を検出した（第１調査面）。第３層上面（標高7.5～7.6ｍ）より古墳時代前期に比定される土器棺墓２基（土器棺１・土器棺２）、奈良時代から近世に比定される井戸１基（ＳＥ－１）・土坑２基（ＳＫ－１・ＳＫ－２）・小穴57個（ＳＰ－２～ＳＰ－58）・溝29条（ＳＤ－２～ＳＤ－29）を検出した（第２調査面）。第２調査区では第３層上面（標高7.5ｍ）より小穴１個（ＳＰ－59）・落込み２ヶ所（ＳＯ－1・ＳＯ－２）・溝４条（ＳＤ－30～ＳＤ－33）を検出した。第３調査区では第３層上面（標高7.5ｍ）より土坑１基（ＳＫ－２）・小穴５個（ＳＰ－60～ＳＰ－64）・溝４条（ＳＤ－34～ＳＤ－36）を検出した。これら各調査区で検出した遺構の時期は古墳時代前期から近世に至るものである。出土遺物は、遺構・整地層・包含層内からコンテナ箱にして８箱分を数える。以下、各調査区ごとに各遺構について記す。なお、遺構番号については、第２層上面・第３層上面から検出した遺構、各調査区で検出した遺構は、遺構・時期に関係なく遺構種別に通し番号を付している。



第４図　第１調査区遺構平面図



第５図　第１調査区第２調査面遺構平面図

◆第１調査区

〈第１調査面〉（第４図）

溝（ＳＤ）

ＳＤ－１

調査区北部（1・2a区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、検出長約10ｍ、幅1.1ｍ以上、深さ0.6㎝を測る。南肩は緩やかなＳ字状に傾斜し、北肩は調査区外で不明である。堆積土は淡橙灰色砂質土である。遺物は出土しなかったが、層位からみて江戸時代以降と思われる。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－１

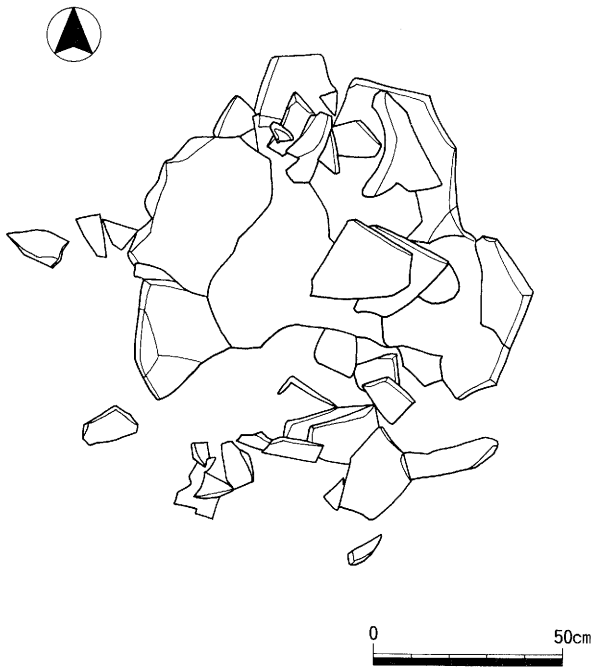
調査区北部（2ｄ区）で検出した。調査では掘形の輪郭を確認することができなかったが、第３層の整地層から掘り込まれたものと思われる礎石が、約20㎝掘り下げた所からみつかった。礎石は平面隅丸方形で上部はやや平らになっている。大きさは長辺62㎝、短辺56㎝、厚さ約25㎝を測る。この礎石は調査区内で１つしか見つからなかったことから大黒柱の部分に使用したものと思われる。

〈第２調査面〉

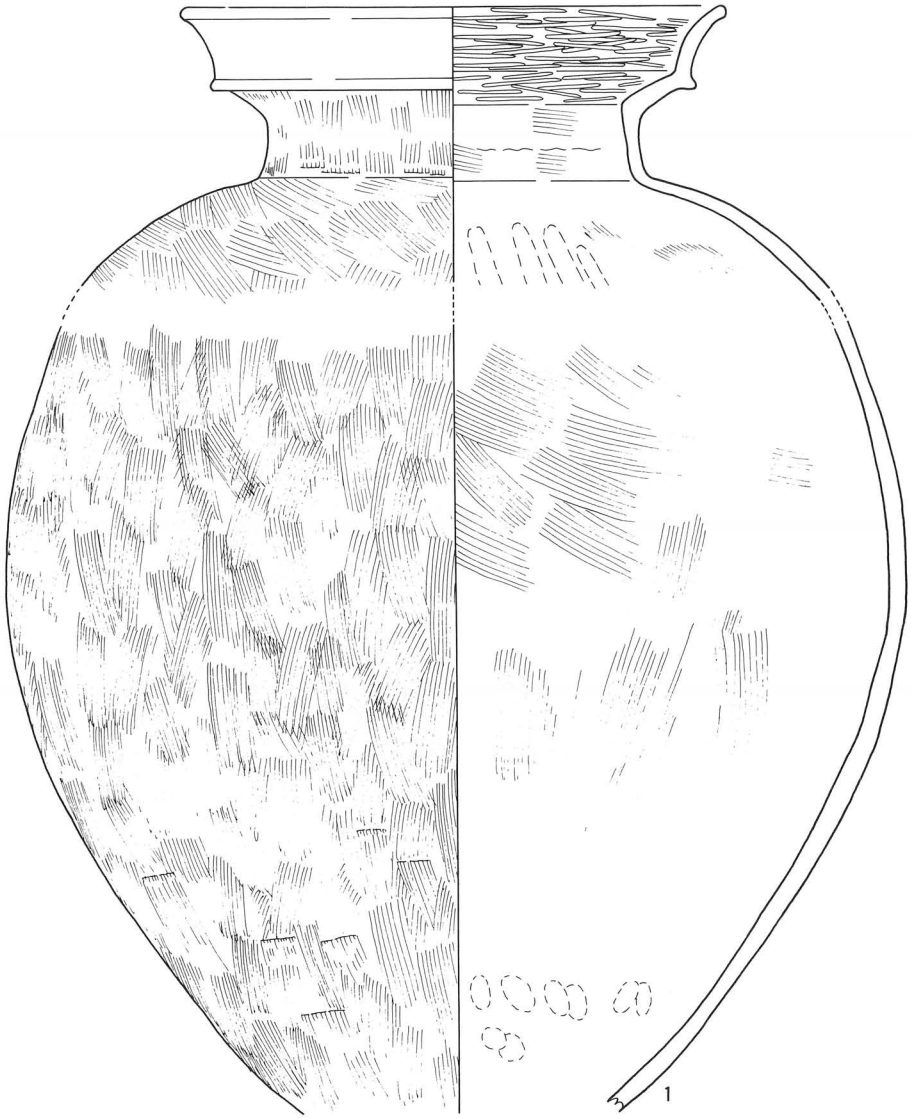
土器棺墓（土器棺）

土器棺１

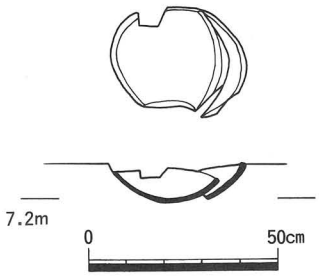
調査区中央東寄り（4d区）で、上部が鎌倉時代後期以降の耕作溝（ＳＤ－18・ＳＤ－19）により上部が削平された状態で検出した土器（壺）棺墓である（第５図）。棺は布留式新相に比定される大形の複合口縁壺（１）を使用している。壺は口縁部分を棺蓋、胴体部分を棺身に二分し、棺口を北側に向け、棺底をやや斜め下に向けて葬っていたと考えられる。棺を埋設した掘り形は上部が削平されており、確認できなかった。検出規模は長径70㎝、短径60㎝を測る。また、内部埋土から埋葬者の遺骸や副葬品はなかった。埋葬者の特定はできないがおそらく幼児ないしは子供を埋葬したものと思われる。



第６図　土器棺１平面図



第７図　土器棺１実測図

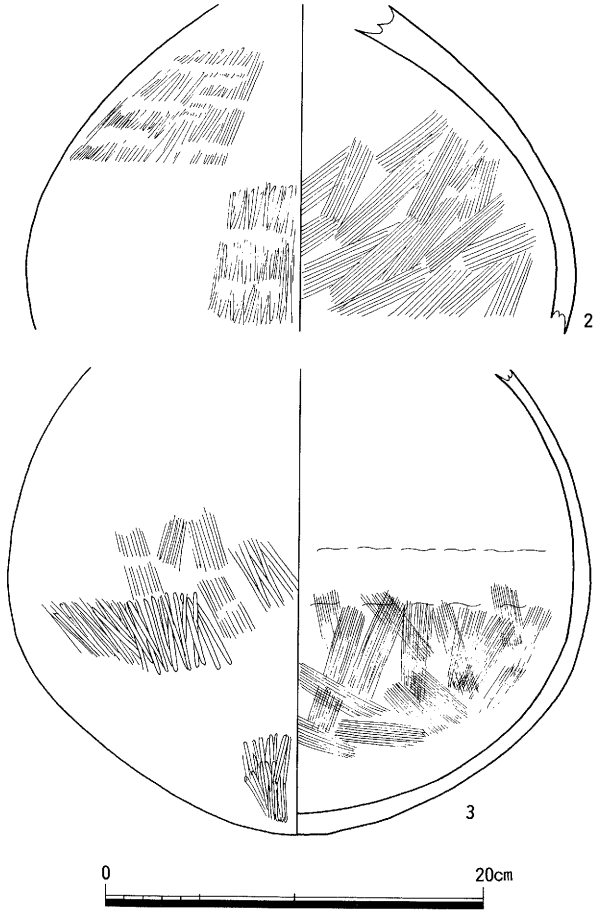


第８図　土器棺２平断面図

土器棺２

調査区中央東隅（4d区）で、上部が後世により削平された状態で検出した。土器(壺)棺は布留式新相に比定される壺で、口縁部を取り除き体部のみのした２個体の壺を合わせて葬っていた。２は棺蓋、３は棺身と考えられる。土器棺を埋設した掘り形は上部が削平されており、確認できなかったが、検出した時点の規模は長径40㎝、短径30㎝を測り、ほぼ棺の大きさとおなじくらいの掘り形と考えられる。

また、内部埋土から埋葬者や副葬品と思われるものはなかったが、大きさから想定して乳児を埋葬したものと思われる。



第９図　土器棺２実測図

井戸（ＳＥ）

ＳＥ－１

調査区中央（4d区）で検出した。ＳＤ－15を切っている。平面形状は円形を呈する。規模は径110㎝、深さ66㎝以上を測る。断面は逆台形を呈する。堆積土は茶灰色シルトと青灰色粘質土のブロックである。遺物は出土しなかった。時期は鎌倉時代以降のものと考えられる。

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－１

調査区（2d区）で検出した。ＳＰ－24を切られる。平面形状は方形を呈する。規模は長辺312㎝、短辺244㎝、深さ10～14㎝を測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は茶灰褐色シルトである。遺物は内部から古墳時代前期から奈良時代に比定される土器の小片がごく少量出土している。

小穴（ＳＰ）

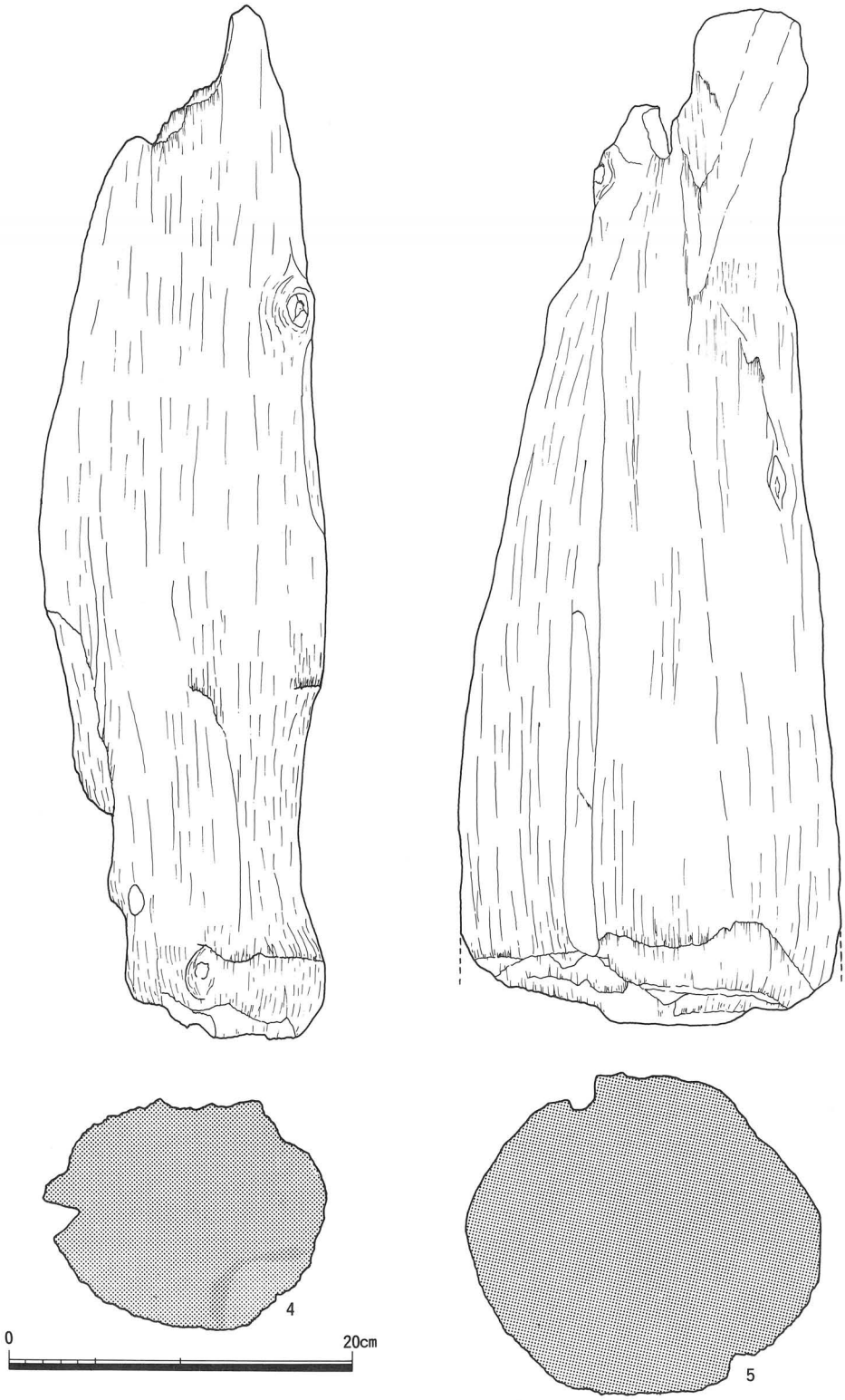
ＳＰ－２～ＳＰ－58

調査区で57個を検出した。大半は調査区北部の整地して盛り上げた土層下からである。平面

第１表　第１調査区第２調査面小穴（ＳＰ）一覧表

＊単位はcm

遺構番号	区名	平面形	断面形	径	深さ	堆　積　土	備　　考
ＳＰ－02	1c区	－	－	42	15	暗灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
ＳＰ－03	2c区	楕円形	逆台形	43～54	8	暗褐灰色粘質シルト	ＳＤ－５を切る。
ＳＰ－04	2c区	円　形	逆台形	22	22	灰茶色粘質シルト	ＳＤ－６を切る。
ＳＰ－05	1d区	－	逆台形	92	30	暗灰褐色粘質シルト	柱痕跡有り。北部は調査区外。
ＳＰ－06	2d区	長方形	逆台形	44～75	12	暗灰褐色粘質シルト	柱痕有り。
ＳＰ－07	1･2d区	円　形	逆台形	34	6	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－08	1d区	－	逆台形	48	17	暗灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
ＳＰ－09	1d区	－	逆台形	37	10	灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
ＳＰ－10	1･2d区	方　形	逆台形	106	20	灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－11	1d区	－	逆台形	34	15	暗灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
ＳＰ－12	1d･e区	－	逆台形	60	15	灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
ＳＰ－13	1･2d区	方　形	逆台形	86～93	13	灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－14	2e区	長方形	逆台形	40～	16	暗褐灰色粘質シルト	ＳＰ－15・ＳＤ－７を切る。
ＳＰ－15	2d･e区	方　形	逆台形	60～72	26	暗灰褐色粘質シルト	ＳＰ－16を切り、ＳＰ－14に切られる。
ＳＰ－16	2d･e区	－	逆台形	76～102	11	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－15に切られる。
ＳＰ－17	2d区	円　形	逆台形	21	9	灰茶色粘質シルト	
ＳＰ－18	2c･d区	－	逆台形	46	9	灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２に切られる。
ＳＰ－19	2d区	方　形	逆台形	65～86	15	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－20	2c区	円　形	逆台形	42～53	17	暗灰褐色粘質シルト	ＳＥ－105に切られる。
ＳＰ－21	2c･d区	楕円形	逆台形	88	29	暗灰褐色粘質シルト	ＳＰ－22を切る。
ＳＰ－22	2d区	方　形	逆台形	47	16	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－21に切られる。
ＳＰ－23	2d区	円　形	逆台形	24	18	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－24	2d区	方　形	逆台形	76～78	23	灰褐色粘質シルト	SP-1に切られ､SK-1を切る｡柱痕有り。
ＳＰ－25	2d区	円　形	逆台形	38	31	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－26	2d･e区	方　形	逆台形	74	34	暗灰褐色粘質シルト	ＳＰ－28を切り、ＳＰ－27と切り合う。
ＳＰ－28	2d区	円形？	逆台形	46～84	28	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－26に切られる。
ＳＰ－29	2d区	楕円形	逆台形	21～33	15	灰茶色粘質シルト	
ＳＰ－30	3d区	円　形	逆台形	31	25	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－31	2･3･d･e	方　形	逆台形	75～86	50	灰褐色粘質シルト	柱根残存。
ＳＰ－32	区	方　形	逆台形	72～76	15	淡茶灰色シルト	
ＳＰ－33	2･3c区	方　形	逆台形	60	8	灰茶色シルト	ＳＰ－34を切る。
ＳＰ－34	3c区	方形？	逆台形	－	9	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－33に切られる。
ＳＰ－35	3c区	方　形	逆台形	70～102	60	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。柱根残存。
ＳＰ－36	3c区	円　形	逆台形	30～37	7	灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。
ＳＰ－37	3c区	方　形	逆台形	76～88	20	暗灰褐色粘質シルト	ＳＰ－38・39を切る。
ＳＰ－38	3c･d区	方　形	逆台形	78	15	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－39を切り、ＳＰ－38に切られる。
ＳＰ－39	3c区	円　形	逆台形	56	14	灰褐色粘質シルト	ＳＰ－37・38に切られる。
ＳＰ－40	3c･d区	長方形	逆台形	40～138	24	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－41	3c･d区	方　形	逆台形	68～92	21	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－12を切る。根石有り。
ＳＰ－42	3d区	円　形	逆台形	21～38	8	灰茶色シルト	
ＳＰ－43	3e区	長方形	逆台形	26～48	10	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－44	3d区	楕円形	逆台形	55～64	19	暗灰褐色粘質シルト	根石有り。
ＳＰ－45	3d･e区	円　形	逆台形	48～50	14	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－46	3c･d区	円　形	逆台形	70～74	38	灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－47	3d区	円　形	半円形	32	10	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－48	3･4･d･e区	方　形	逆台形	86～100	38	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－14・15に切られる。根石有り。
ＳＰ－49	4d区	円　形	逆台形	62～70	11	灰褐色粘質シルト	ＳＤ－15に切られる。
ＳＰ－50	4c区	方形？	逆台形	50	26	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－17に切られる。
ＳＰ－51	4d区	楕円形	逆台形	37～53	24	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－25に切られる。
ＳＰ－52	5d区	方　形	逆台形	30～80	19	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－25に切られる。
ＳＰ－53	5c区	円　形	半円形	32	6	灰褐色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。
ＳＰ－54	5d区	円　形	逆台形	26～34	10	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－55	5d区	円　形	半円形	20	5	暗灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－56	5d区	楕円形	逆台形	32～47	19	暗灰褐色粘質シルト	柱痕有り。
ＳＰ－57	6d区	楕円形	半円形	26～48	8	灰褐色粘質シルト	
ＳＰ－58	3d区	－	逆台形	30	20	暗灰褐色粘質シルト	



第10図　柱根実測図

形状には、円形・楕円形・方形のものがみられるが、掘形の大きいもの(平均約70㎝)が方形で、小さいもの(平均約35㎝)が円形ないしは楕円形に分けることができる。また、大きい小穴には柱痕跡や根石がみられるものがある。さらにその中には柱根が残存するものもあった。柱根は径約25㎝を測る大きなものである（第６図の柱根実測図は４がＳＰ－14・５がＳＰ－21)。これらの小穴は比較的規模の大きい建物の柱跡と思われる。しかし、調査範囲の制約があり、規則的な配列をもつ建物跡は調査区内では確認できなかった。数カ所、直線的に並ぶ柱穴跡を確認されただけである。

小穴の時期であるが、小穴内部からごく少量出土した土器の小片、埋土の違いや切り合い関係から若干の時期差がみられるが、周辺の遺構の状況などから判断して鎌倉時代後期の範疇入るものと思われる。以下、各小穴については第１表に掲載した。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－２～ＳＤ－29

調査区内で28条を検出した。方向は東－西方向のもの26条、南－北方向のもの２条である。これらの溝はそれぞれ切り合い関係がある。ＳＤ－10～ＳＤ－29はほとんどが明瞭な切り合い

第２表　第１調査区第２調査面溝(ＳＤ)一覧表

＊単位は㎝

遺構番号	区　名	方　向	断面形	幅	深さ	堆積土	備　　考
ＳＤ－01	1･2c･d区	東－西	－	110	60	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－02	1～6c区	南－北	半円形	46～120	10～20	褐灰色粘質シルト	SD-3～6･9を切り、SD-8･10･15･18･25･27･28に切られる。
ＳＤ－03	1･2c区	東－西	半円形	35～76	8～10	暗灰褐色粘シルト	ＳＤ－２に切られ、ＳＤ－４を切る。
ＳＤ－04	1･2c区	南－北	半円形	26～32	6～8	灰褐色粘質シルト	ＳＤ－２・３に切られ、ＳＤ５・６を切る。
ＳＤ－05	2c区	東－西	皿状形	20～22	5	茶灰色シルト	ＳＰ－３・ＳＤ－２・４に切られる。
ＳＤ－06	2c区	東－西	皿状形	28	6	茶灰色シルト	ＳＰ－４・ＳＤ－２・４に切られる。
ＳＤ－07	1･2e区	南－北	半円形	－	11	灰茶色シルト	ＳＤ－14に切られる。
ＳＤ－08	3c区	東－西	半円形	20～37	8	乳灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。
ＳＤ－09	3c･d区	東－西	皿状形	40～74	5～9	乳灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２に切られる。
ＳＤ－10	3c区	東－西	半円形	42	11	暗灰褐色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。
ＳＤ－11	3c区	東－西	皿状形	36	4	乳灰茶色粘質シルト	ＳＤ－10と切り合う。
ＳＤ－12	3d･e区	東－西	皿状形	15～17	4	暗灰褐色粘質シルト	ＳＰ－41に切られる。
ＳＤ－13	3d･e区	東－西	皿状形	28	5	淡灰褐色粘質シルト	
ＳＤ－14	3d･e区	東－西	皿状形	50	5	乳灰茶色粘質シルト	ＳＰ－48を切る。二股に分かれている。
ＳＤ－15	4c～e区	東－西	皿状形	88～140	3～6	乳灰茶色粘質シルト	SP-48･49SD-2を切る。SE-1に切られる。
ＳＤ－16	4c区	東－西	皿状形	22	3	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－17	4c区	東－西	皿状形	72	4	乳灰茶色粘質シルト	ＳＰ－50を切る。
ＳＤ－18	4c･d区	東－西	皿状形	22～34	7	乳灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。ＳＰ－19と切り合う。
ＳＤ－19	4d区	東－西	皿状形	10～18	8	乳灰茶色粘質シルト	ＳＰ－18・20と切り合う。
ＳＤ－20	4d区	東－西	皿状形	8～15	5	乳灰茶色粘質シルト	ＳＰ－19と切り合う。
ＳＤ－21	4c･d区	東－西	皿状形	12～16	4	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－22	4d区	東－西	皿状形	20～58	9	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－23	4d区	東－西	半円形	26～46	4	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－24	4d･e区	東－西	皿状形	26～34	7	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－25	4･5c～e区	東－西	半円形	66～190	8～12	乳灰茶色粘質シルト	ＳＰ－51･52･ＳＤ－２を切る。
ＳＤ－26	5d区	東－西	皿状形	33	5	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－27	5c･d区	東－西	皿状形	30～38	3～5	乳灰茶色粘質シルト	ＳＤ－２を切る。
ＳＤ－28	6c･d区	東－西	皿状形	34～46	4～6	乳灰茶色粘質シルト	
ＳＤ－29	6c･d区	東－西	半円形	22～37	8	乳灰茶色粘質シルト	

の判断がつきにくい状態であった。このことはそれぞれの溝はあまり時期差がないものと考えられる。規模は幅15～190㎝、深さ３～12㎝を測る小規模な溝である。断面形は浅い半円形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトまたは暗褐灰色粘質シルトである。遺物は鎌倉時代後期に比定される土器の小片がごく少量出土している。これらの溝の性格を考えると、ＳＤ－２～ＳＤ－９は住居跡に関連する排水溝・雨水溝などで、ＳＤ－10～ＳＤ－29はおそらく耕作に関連する鋤溝・畝溝などであろう。以下、各溝については第２表に掲載した。

◆第２調査区

小穴（ＳＰ）

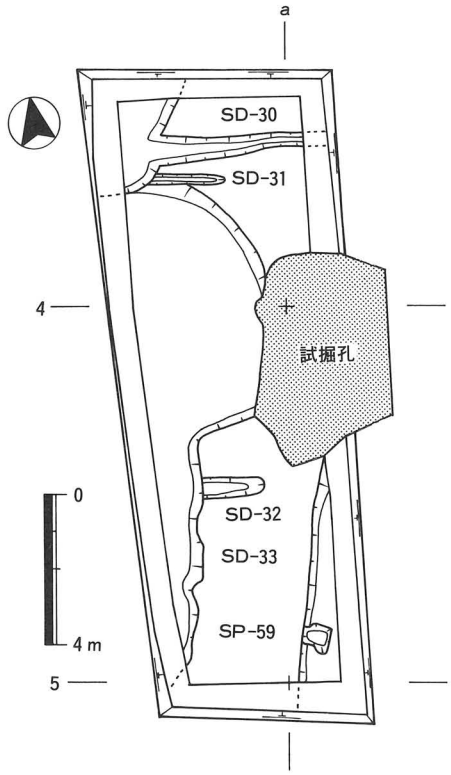
ＳＰ－59

調査区（5b区）で検出した。ＳＤ－33に切られる。平面形状は方形を呈する。規模は長辺37㎝、短辺35㎝、深さ14㎝を測る。断面は浅い逆台形を呈する。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかった。

落込み（ＳＯ）

ＳＯ－１

調査区（4a区）で検出した。ＳＤ－31を切り、ＳＯ－２・ＳＤ－30と切り合う。北西部は調査区外に至る。規模は検出部で、東西1.1ｍ以上、南北1.6ｍ以上、深さ20㎝を測る。断面は北西部へ緩やかに落ち込んでいる。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は内部から土師器の小片が少量出土している。時期は鎌倉時代後期と思われる。



第11図　第２調査区遺構平面図

ＳＯ－２

調査区（2d区）で検出した。ＳＤ－31・ＳＤ－32を切り、ＳＯ－１と切り合う。西部は調査区外に至り、平面の形状は不明である。規模は検出部で、東西2.1ｍ、南北6.7ｍを測る。底面は平坦で深さ12ｍ前後である。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は内部から鎌倉時代後期に比定される土器の小片がごく少量出土している。

溝（ＳＤ）

ＳＤ－30

調査区北部（4a･b区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、西部はＳＯ－１と切り合い、東部は調査区外に至る。検出長2.2ｍ、幅18～38㎝、深さ４㎝を測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかったが、ＳＯ－１と切り合いことから鎌倉時代後期ごろの耕作溝と思われる。

ＳＤ－31

調査区北部（4a区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、西部はＳＯ－１と切り合い、東部は途切れている。規模は検出長1.0ｍ、幅14㎝、深さ９㎝を測る。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかったが、ＳＯ－１と切り合いことから鎌倉時代後期ごろの耕作溝と思われる。

ＳＤ－32

調査区中央付近（5a区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、西部はＳＯ－１に切られ、東部は途切れている。規模は検出長0.8ｍ、幅28㎝、深さ５㎝を測る。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

ＳＤ－33

調査区南東部（5b区）で検出した北北東－南南西方向に伸びる溝で、南・北・東は調査区外に至る。規模は検出長3.4ｍ、幅90㎝、深さ７㎝を測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は乳灰茶色粘質土である。遺物は出土しなかったが、ＳＯ－１などと同一層から鎌倉時代後期ごろの耕作溝と思われる。

◆第３調査区

土坑（ＳＫ）

ＳＫ－２

調査区南部（5f区）で検出した。ＳＤ－36・ＳＤ－37を切り、ＳＤ－35に切られる。規模は検出部で、東西1.4ｍ、南北1.1ｍ、深さ16㎝を測る。断面は浅い皿状形を呈する。堆積土は灰茶色粘質土である。遺物は、内部から古墳時代後期から奈良時代に比定される土器の小片がごく少量出土している。

小穴（ＳＰ）

ＳＰ－60～ＳＰ－64

調査区で５個を検出した。平面形状には円形・楕円形・方形のものがあり、大きいものが方形、小さいものが円形ないしは楕円形に分けることができる。これらは第１調査区で検出した

小穴と同一のものと考えられる建物に関連する柱穴跡である。しかし、第１調査区同様、調査範囲の制約があり、調査区内での規則的な配列をもつものは確認できなかった。小穴の時期は、鎌倉時代の範疇入るものと思われる。以下、各小穴については第４表に掲載した。

第３表　第３調査区小穴（ＳＰ）一覧表　＊単位はcm

遺構番号	区　名	平面形	断面形	径	深さ	堆　積　土	備　考
SP-60	4f区	－	逆台形	－	19	暗灰褐色粘質シルト	北部は調査区外。
SP-61	4f区	方　形	逆台形	75～85	15	暗灰褐色粘質シルト	
SP-62	4g区	円　形	逆台形	46	16	暗褐灰色粘質シルト	
SP-63	4g区	円　形	逆台形	34	15	暗灰褐色粘質シルト	
SP-64	5f区	円　形	逆台形	38	10	暗灰褐色粘質シルト	

溝（ＳＤ）

ＳＤ－34

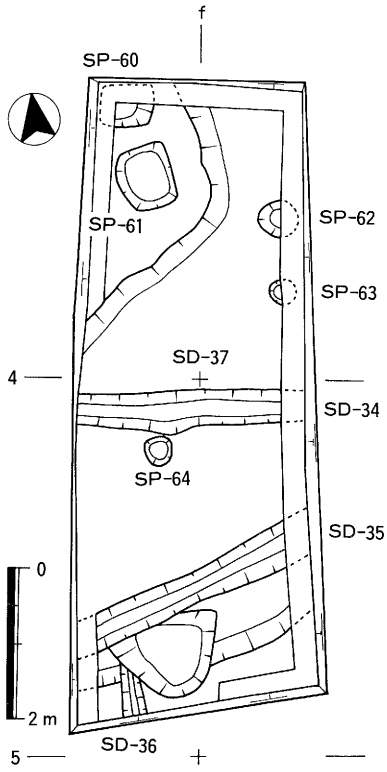
調査区中央部（5f･g区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、ＳＤ－37を切っている。規模は検出長3.0ｍ、幅45～58cm、深さ25cmを測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は褐灰色粘質シルトである。遺物は、内部から鎌倉時代後期に比定される土器の小片がごく少量出土している。

ＳＤ－35

調査区南部（5f･g区）で検出した東北東－西南西方向に伸びる溝で、ＳＫ－２・ＳＤ－37を切っている。規模は検出長3.0ｍ、幅40～55cm、深さ14cmを測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は灰褐色粘質シルトである。遺物は、内部から鎌倉時代後期に比定される土器の小片がごく少量出土している。

ＳＤ－36

調査区南部（5f区）で検出した東－西方向に伸びる溝で、ＳＤ－37を切り、ＳＫ－２に切られる。南部は調査区外に至る。規模は検出長0.7ｍ、幅24～30cm、深さ11cmを測る。断面は皿状形を呈する。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は内部から土師器の小片がごく少量出土している。

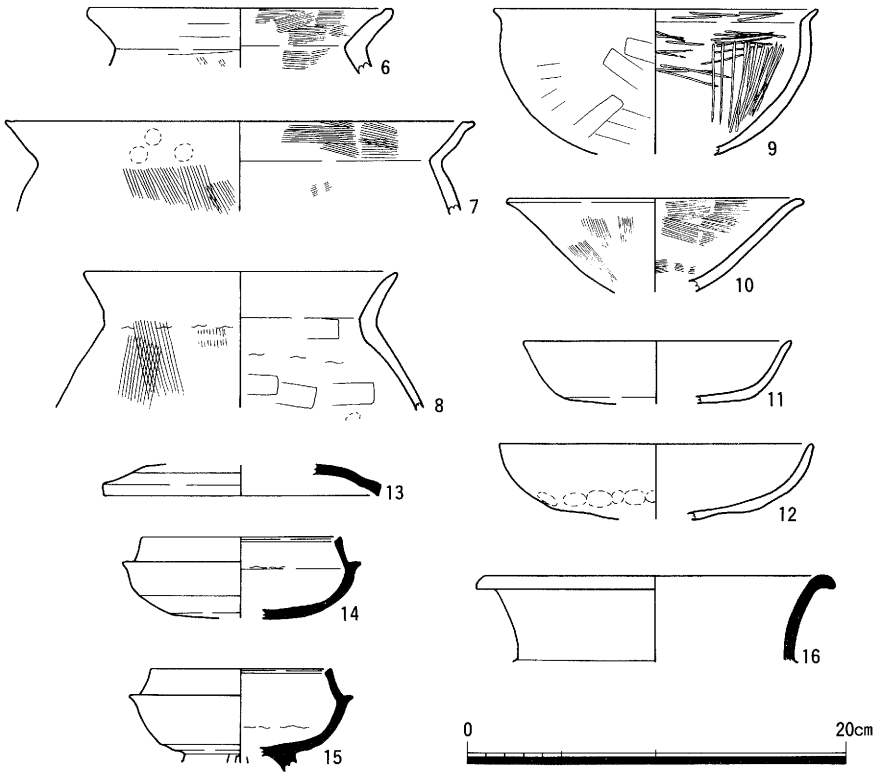


第12図　第３調査区遺構平面図

ＳＤ－37

調査区南部（4･5f･g区）で検出した溝で、ＳＫ－１・ＳＰ－62～ＳＰ－64・ＳＤ－34～ＳＤ－

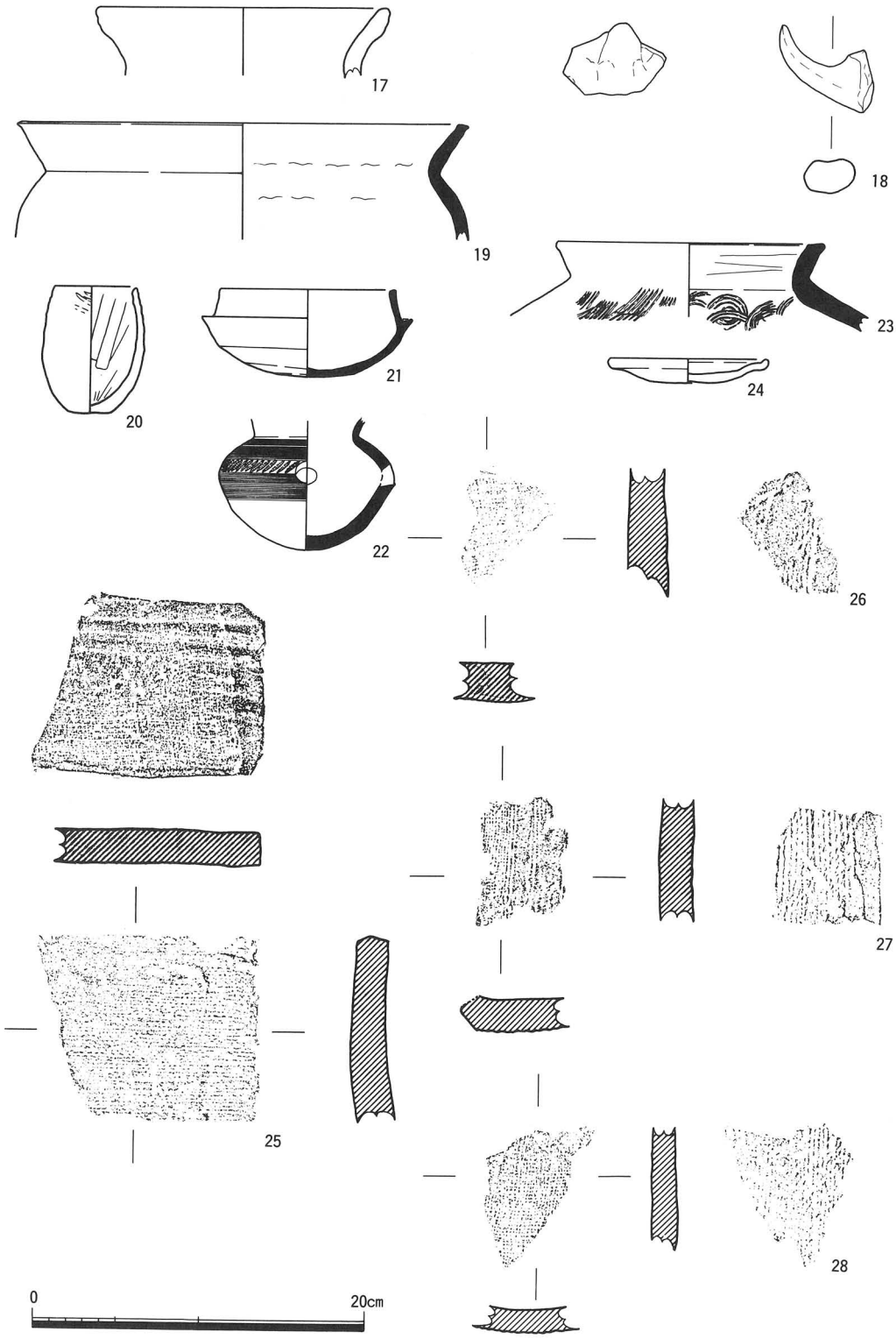
36に切られる。方向は南西から北東へ伸びた後、北へ伸びる。規模は検出長約8.0m、幅5.0m前後、深さ35～40cmを測る。断面は半円形を呈する。堆積土は暗褐灰色粘質シルトである。遺物は、内部から古墳時代前期から奈良時代に比定される土器の小片が少量出土している。図示できたものは古墳時代中期に比定される土師器の甕(6～8)・鉢(9)・高坏(10)、須恵器の坏身(14)・高坏(15)・甕(16)、奈良時代に比定される土師器の坏(11・12)、須恵器の蓋(13)である。



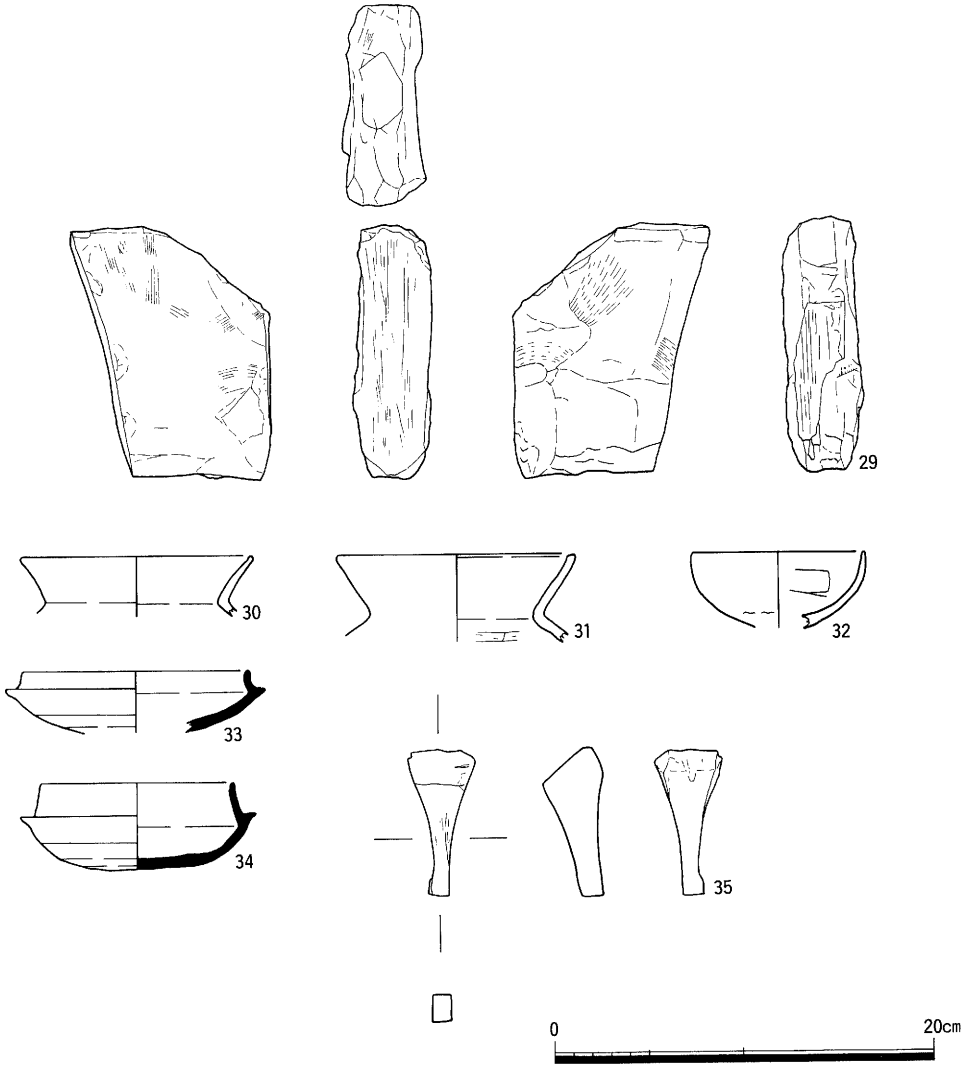
第13図　ＳＤ－37出土遺物実測図

4）遺構に伴わない出土遺物

第1調査区～第3調査区の第2層からコンテナ箱にして約3箱出土した。時期は古墳時代前期～中世に至るもので、主に古墳時代中期から奈良時代・鎌倉時代のもので、細片化した土器類が多く出土した。図示できたものについて記す。第1調査区では古墳時代中期に比定される土師器の甕（17）・甕か甑の取手（18)、製塩土器（20)、須恵器の坏身（21）・瑤(22)・甕(23)、平安時代後期に比定される土師器の小皿(24)、平安時代後期～鎌倉時代の瓦（25～28)、時期不明の砥石（29)。第3調査区では古墳時代前期の庄内式甕（30）・布留式甕（31）・器台（32)、古墳時代中期に比定される須恵器の坏身（33・34)、時期不明の砥石（35）である。



第14図　遺構に伴わない出土遺物実測図



第15図　遺構に伴わない出土遺物実測図２

5）出土遺物観察表

遺物番号 図版番号	器　種 遺構番号	法量　口径 (cm)　器構	形態と技法と特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
1	壺 （土師器） 土師棺１	体部径　47.8	体部外面ハケナデ、内面ハケナデ・指ナデ	淡灰茶色	８㎜以下の砂粒（長石・石英・チャート・雲母）を少量含む	良好	
2	同上 土師棺２		外面ヘラミガキ、内面ハケナデ	淡茶灰色	６㎜以下の砂粒（長石・石英・雲母）を多量に含む	良好	
3	同上 土師棺２	体部径　31.0	体部外面ハケナデ後ヘラミガキ、内面ハケナデ、底部外面ヘラケズリ	淡灰橙色	５㎜以下の砂粒（長石・チャート・雲母）を多量に含む	良好	黒斑有り
4	柱根 （木製品） ＳＰ－14	残存長　61.2 径　16.5	－	－	－	－	
5	同上 ＳＰ－21	残存長　60.2 径　20.7	－	－	－	－	
6	甕 （土師器） ＳＤ－37	口径　16.0	口縁部外面ヘラナデ、内面ハケナデ、体部内外面ハケナデ	茶灰色	３㎜以下の砂粒（長石）を含む	良好	
7	同上 ＳＤ－37	口径　23.6	口縁部外面ヨコナデ、内面ハケナデ、体部内外面ハケナデ	淡橙灰色	２㎜以下の砂粒（雲母）を少量含む	良好	
8	同上 ＳＤ－37	口径　16.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部外面ハケナデ・接合痕、内面ヘラナデ・接合痕	暗茶灰色	３㎜以下の砂粒（長石・赤褐色酸化粒）を含む	良好	
9	鉢 （土師器） ＳＤ－37	口径　17.0	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラミガキ、体部外面ヘラナデ、内面ヘラミガキ	淡灰橙色	３㎜以下の砂粒（長石・赤褐色酸化粒）を少量含む	良好	
10	同高坏 （土師器） ＳＤ－37	坏部径　15.4	坏部内外面ハケナデ	茶灰色	２㎜以下の砂粒（長石・雲母）を含む	良好	黒斑有り
11	坏 （土師器） ＳＤ－37	口径　14.0	口縁部内外面ナデ	乳灰茶色～明茶黄色 内　乳黒灰色	１㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
12	同上 ＳＤ－37	口径　16.2	口縁部内外面ヨコナデ、外面ナデ・指押さえ、内面ナデ	外　明茶灰色 内　淡灰茶色	１㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
13	坏蓋 （須恵器） ＳＤ－37	口径　14.4	口縁部内外面回転ナデ、天井部外面回転ヘラケズリ	淡灰色	２㎜以下の砂粒微量に含む	良好	
14	坏身 （須恵器） ＳＤ－37	口径　10.4 受部径　12.6	口縁部内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	淡青灰色	２㎜以下の砂粒微量に含む	良好	
15	高坏 （須恵器） ＳＤ－37	口径　9.4 受部径　11.8	坏部内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ、脚部四方孔有り	淡青灰色	３㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
16	甕 （須恵器） ＳＤ－37	口径　18.0	口縁部内外面回転ナデ	淡青灰色	密	良好	
17	甕 （土師器） 包含層	口径　17.4	口縁部内外面ヨコナデ	淡灰色	１㎜以下の砂粒を含む	良好	
18	同上 包含層		内外ナデ	乳橙灰色	1.5㎜以下の砂粒（長石・赤褐色酸化粒）を多量に含む	良好	
19	甕 （須恵器） 包含層	口径　26.2	内外面回転ナデ	乳青灰色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
20	製塩土器 包含層	口径　4.8 器高　7.7	外面タタキヨコナデ、内面ヘラナデ	淡茶灰色～淡橙灰色	３㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
21 図版五	坏身 （須恵器） 包含層	口径　10.4 受部径　12.8	坏部内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラケズリ	淡青灰色	２㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
22	瓶 （須恵器） 包含層	体部径　10.6	体部外面回転かき目・平行タタキ・櫛描文、内面回転ナデ	淡青灰色	３㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	

遺物番号 図版番号	器　種 遺構番号	法量　口径 (cm)　器構	形態と技法と特徴	色　調	胎　土	焼成	備　考
23	甕 (須恵器) 包含層	口径　16.0	口縁部内外面回転ナデ、体部外面平行タタキ、内面同心円タタキ	淡青灰色	2㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
24	小皿 (土師器) 包含層	口径　9.4 器高　1.5	口縁部内外面ヨコナデ・体部内外面ナデ	外　淡灰茶色 内　淡灰茶色～端灰茶褐色	1㎜以下の砂粒（長石）を微量に含む	良好	
25	平瓦 包含層	厚み　2.1	外面布目、内面縄目	淡黄灰褐色	4㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
26	同上 包含層	厚み　2.3	外面布目、内面縄目	外　明灰褐色 内　淡橙茶灰色	6㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
27	同上 包含層	厚み　2.0	外面布目、内面縄目	白灰色	4㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
28	同上 包含層	厚み　1.4	外面布目、内面縄目	淡灰色	2㎜以下の砂粒を多量に含む	良好	
29	砥石 (石製品) 包含層	長軸　13.2 短軸　8.6 厚み　3.8	研磨面2面	暗青灰色	―		
30	甕 (土師器) 包含層	口径　12.2	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ハケナデ	乳灰橙色	2㎜以下の砂粒（長石・赤褐色酸化粒）を多量に含む	良好	
31	同上 包含層	口径　12.4	口縁部内外面ヨコナデ、体部内面ヘラケズリ	乳灰茶色	5㎜以下の砂粒（長石・雲母）を多量に含む	良好	
32	高坏 (土師器) 包含層	口径　9.0	外面ナデ、内面ヘラナデ	外　褐灰色 内　淡褐灰色	1㎜以下の砂粒（長石）を少量含む	良好	
33	坏身 (須恵器) 包含層	口径　11.8 受部径　13.8	内外面回転ナデ、体部外面回転ヘラケズリ	淡灰色	1.5㎜以下の砂粒を少量含む	良好	
34	同上 包含層	口径　10.0 受部径　12.4	内外面回転ナデ、体部外面回転ヘラケズリ	淡青灰色	3㎜以下の砂粒を微量に含む	良好	
35	砥石 (石製品) 包含層	長軸　7.8 短軸　1.0 ～3.6	研磨面5面	乳白灰色			

３．まとめ

今回の調査地周辺の隣接地ではあまり発掘調査を実施していない区域であり、この調査で得られた成果は当遺跡東部の状況を確認する非常に有意義な調査であったといえる。

調査成果では古墳時代前期から近世に至る遺構・遺物を検出した。特に鎌倉時代後期に比定される集落域の存在が確認された。調査区内においては明瞭にわかる建物配列はわからなかったが建物に関連する柱穴跡が確認されており、調査地周辺では居住域としていたことは明らかになった。今回の調査地の付近では、遺跡名を異にするが、南東部へ約250ｍの所で、当調査研究会が行った区画整理事業に伴う小阪合遺跡第８次調査(KS87-8)で、同じような整地層があり、鎌倉時代の集落遺構を検出している。また、当遺跡では調査区から北部へ約250ｍの所で、当調査研究会及び市教委が行った第１次・第６次・第12次・第33次の調査地でも同じような状況で検出しており、同時期の集落域が南東から北西方向へ継続ないしは断続的に連なっていることがいえるであろう。

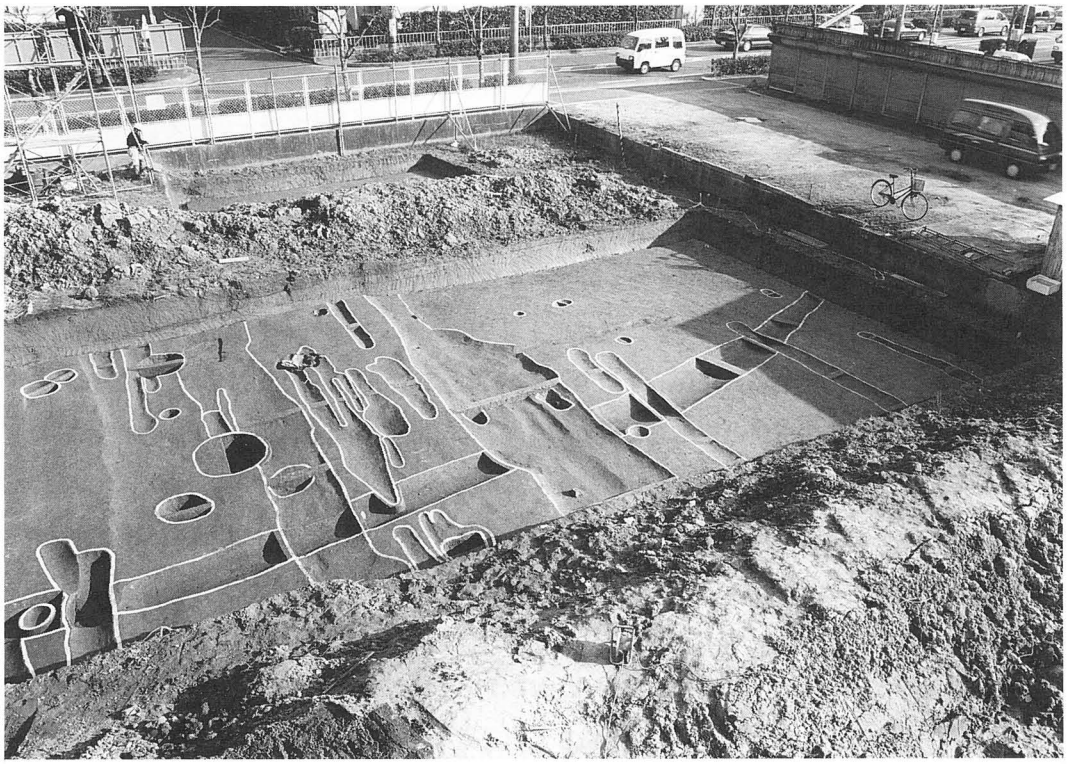
古墳時代前期の遺構としては土器棺墓２基を検出した。調査区西部約50ｍの地点においても第39次調査（TG92-39）で方形周溝墓と思われる溝を確認しており、調査地周辺が墓域の可能性が考えられる。この時期の集落構成を知る上で貴重な資料を当遺跡の中央付近で得られており、今回の調査により東南部にあたる部分の貴重な資料が得られた。

参考文献

○（財）八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」『東郷遺跡』（財）八尾市文化財調査研究会17　1989

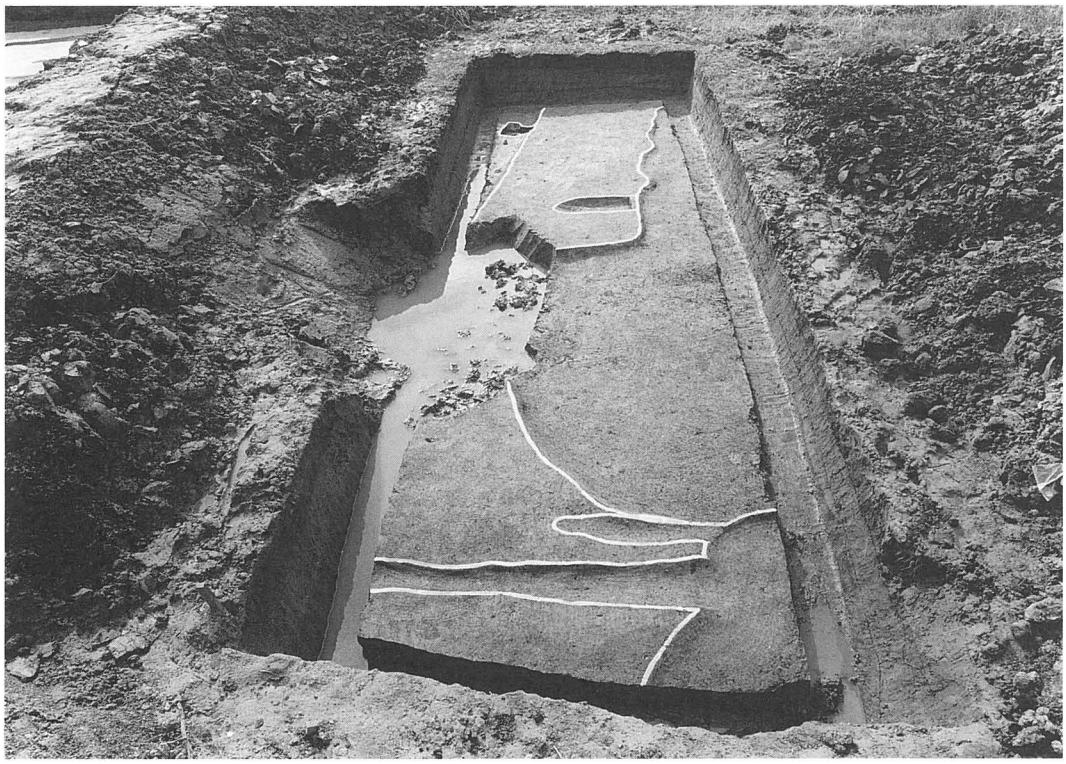
○（財）八尾市文化財調査研究会「八尾市埋蔵文化財発掘調査報告」『ＸⅡ．東郷遺跡第39次調査』（財）八尾市文化財調査研究会39　1993

図版一

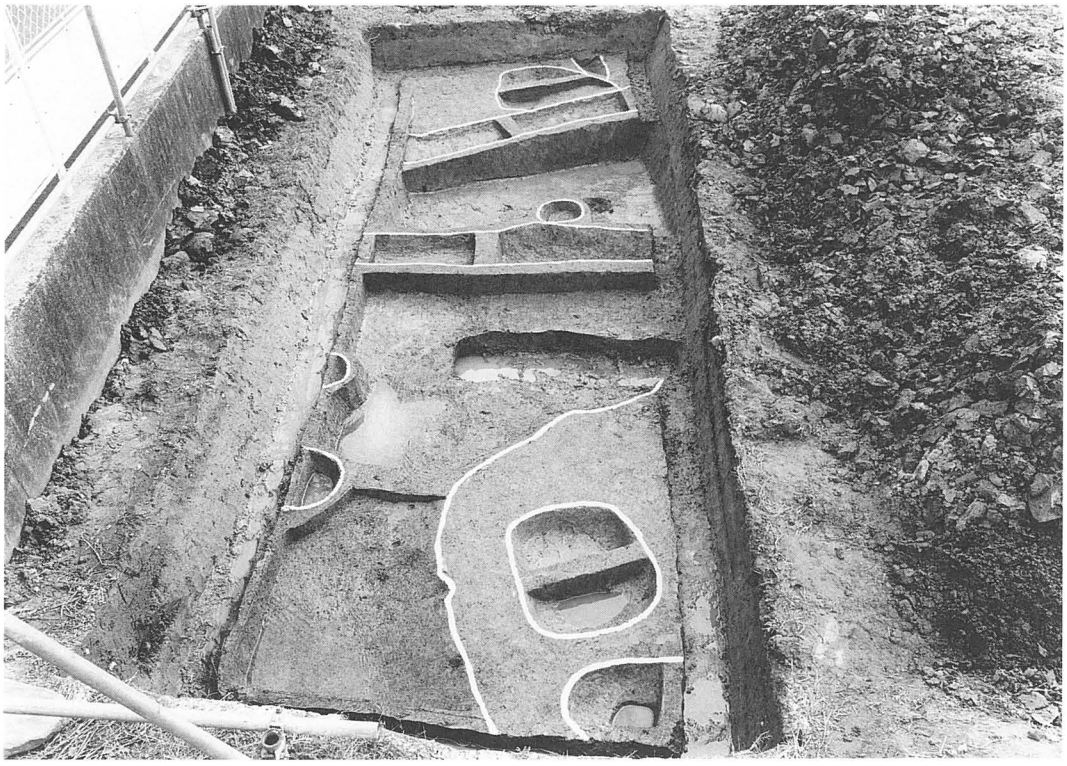


第１調査区南部（西から）

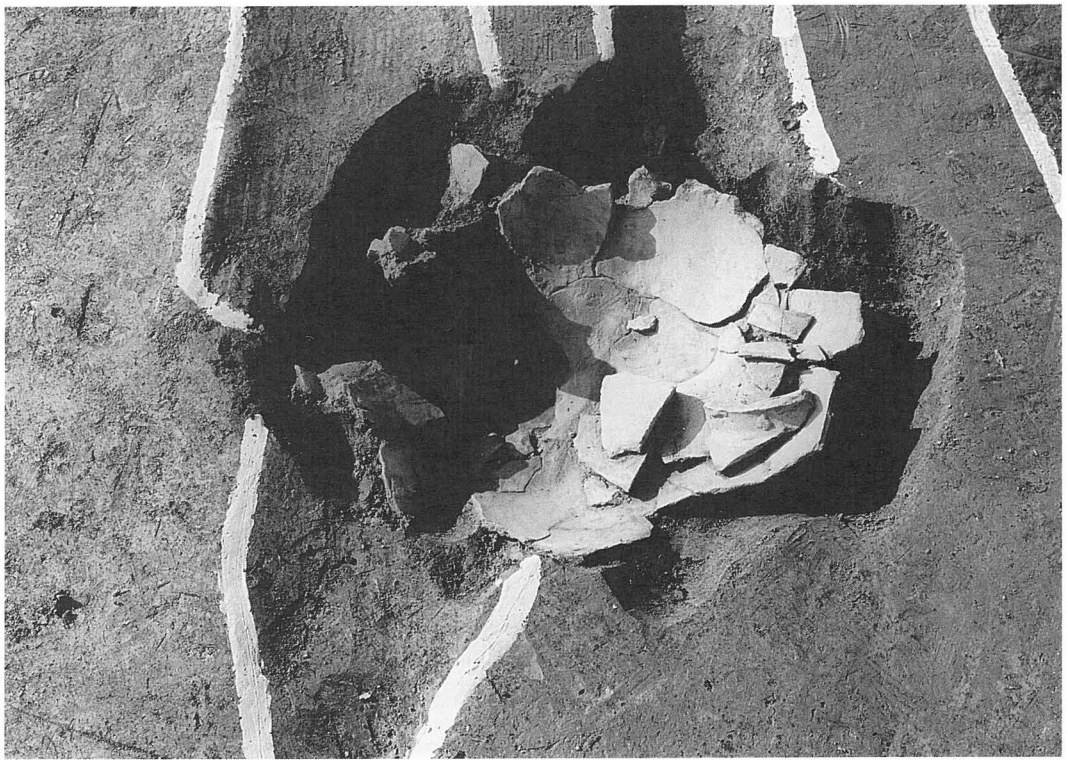
第１調査区北部（西から）



第２調査区（北から）

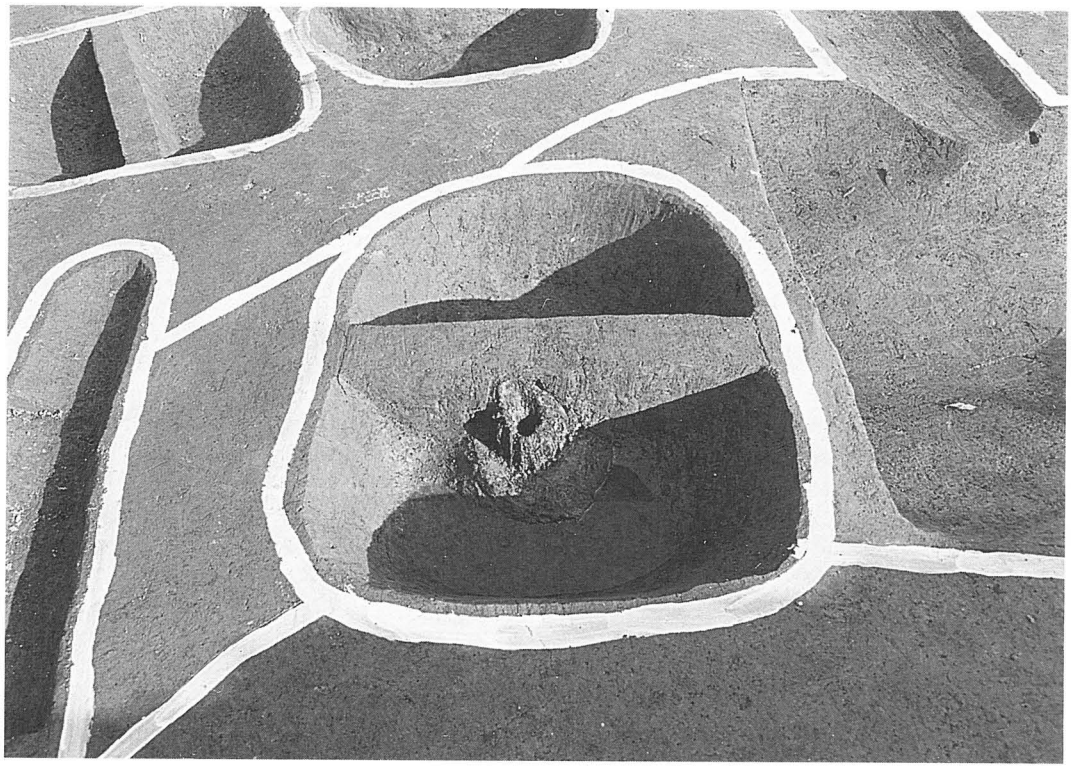


第３調査区（北から）

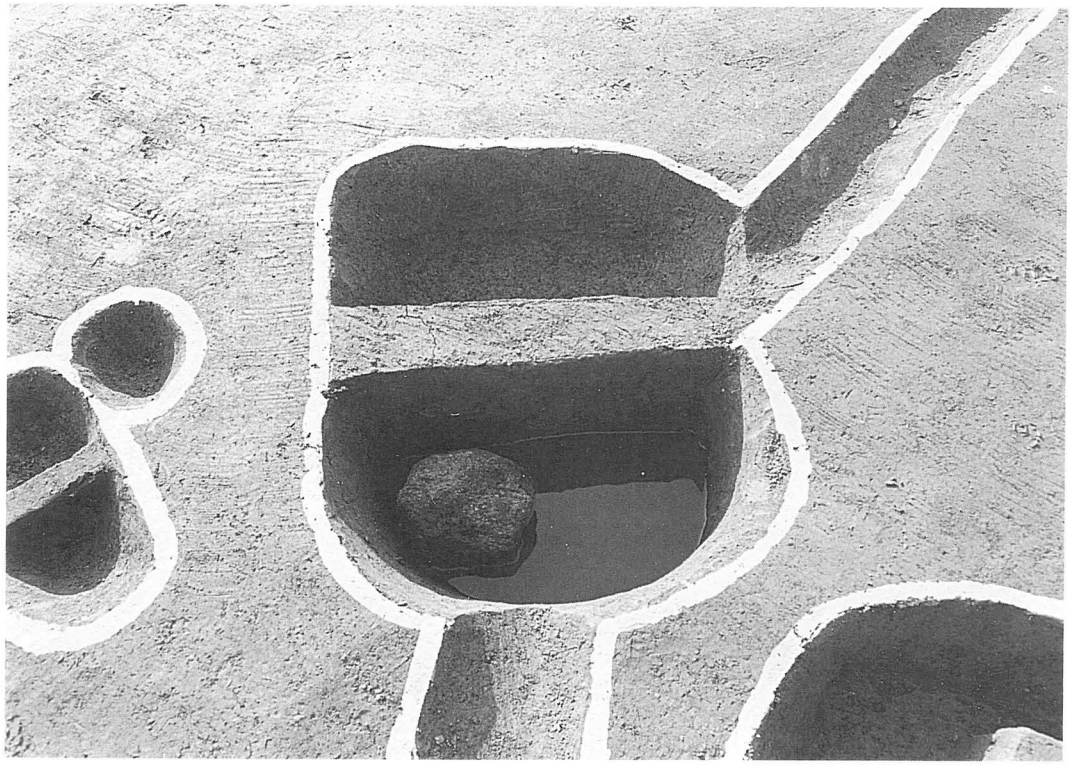


土器棺１（東から）

土器棺２（西から）

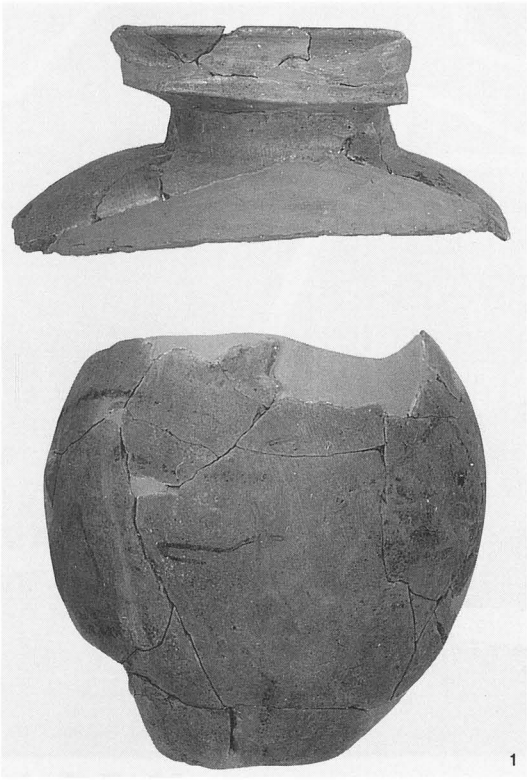


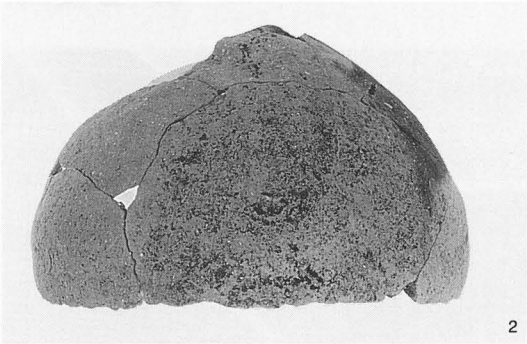
ＳＰ－35（東から）

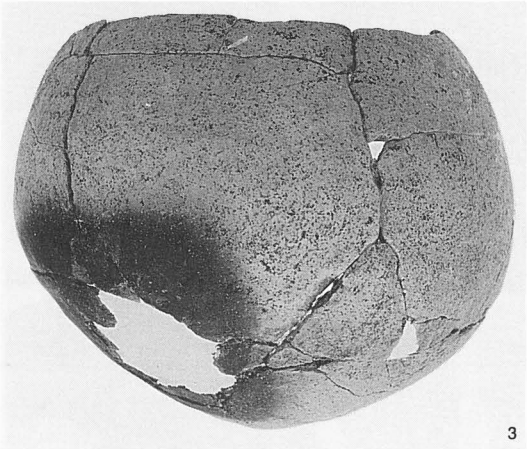


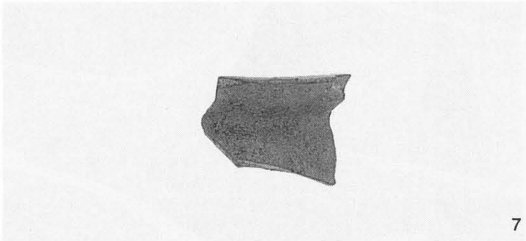
ＳＰ－41（西から）

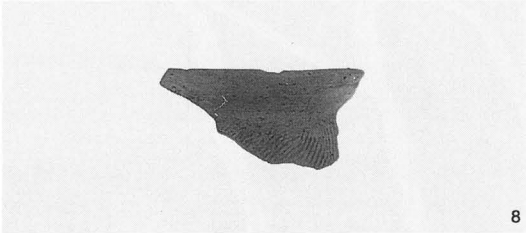
図版五

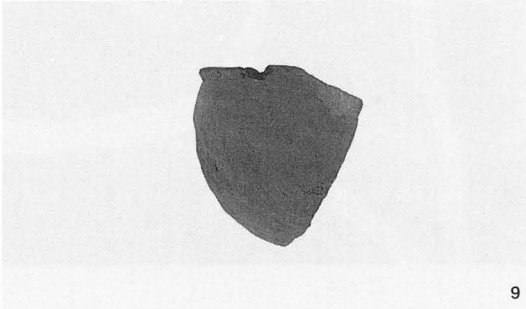


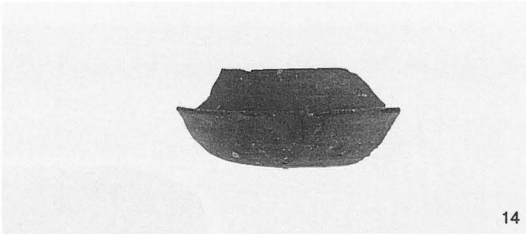


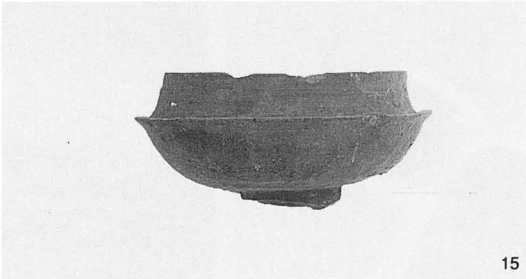


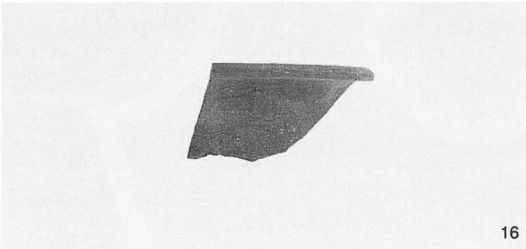












土器棺1　1　土器棺2　2・3
ＳＤ－37　7～9　14～16

報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん　やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人　八尾市文化財調査研究会報告４２
副書名	Ⅰ　跡部遺跡（第14次）　Ⅱ　植松遺跡（第２次調査）　Ⅲ　太田川遺跡（第１次調査）　Ⅳ　久宝寺遺跡（第16次調査）　Ⅴ　小阪合遺跡（第25次調査）　Ⅵ　志紀遺跡（第１次調査）　Ⅶ　成法寺遺跡（第10次調査）　Ⅷ　成法寺遺跡（第11次調査）　Ⅸ　成法寺遺跡（第12次調査）　Ⅹ　太子堂遺跡（第５次調査）　ⅩⅠ　田井中遺跡（第13次調査）　ⅩⅡ　東郷遺跡（第40次調査）　ⅩⅢ　東郷遺跡（第41次調査）　ⅩⅣ　東郷遺跡（第43次調査）
巻次	
シリーズ名	(財) 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	42
編集者名	高萩千秋・成海佳子・西村公助・坪田真一・岡田清一
編集機関	財団法人　八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581 八尾市青山町４丁目４番18号　TEL 0729-94-4700
発行年月日	西暦1994年10月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
跡部遺跡 （第14次調査）	大阪府八尾市跡部北の町１丁目地内	27212		34度 36分 59秒	135度 35分 19秒	19931119～1210	38	公共下水道工事に伴う事前調査
植松遺跡 （第２次調査）	大阪府八尾市永畑町３丁目１番１号地	27212		34度 36分 34秒	135度 35分 49秒	19930420～0719	134.64	公共下水道工事に伴う事前調査
太田川遺跡 （第１次調査）	大阪府八尾市大竹１丁目地内	27212		34度 37分 59秒	135度 38分 16秒	19931215～19940203	18.5	電話地下管路新設工事に伴う事前調査
久宝寺遺跡 （第16次調査）	大阪府八尾市北亀井町３丁目地内	27212		34度 37分 03秒	135度 34分 53秒	19930531～0608	25	公共下水道工事に伴う事前調査
小阪合遺跡 （第25次調査）	大阪府八尾市青山町２丁目５番地	27212		34度 37分 12秒	135度 36分 48秒	19930402～0709	44	公共下水道工事に伴う事前調査
志紀遺跡 （第１次調査）	大阪府八尾市志紀町西３丁目地内	27212		34度 35分 52秒	135度 36分 41秒	19931120～1227	52	公共下水道工事に伴う事前調査
成法寺遺跡 （第10次調査）	大阪府八尾市高美町１丁目地内	27212		34度 37分 12秒	135度 36分 41秒	19931109～1124	50	公共下水道工事に伴う事前調査
（第11次調査）	大阪府八尾市高美町１丁目地内	27212		34度 37分 13秒	135度 36分 40秒	19931115～1122	30	公共下水道工事に伴う事前調査
（第12次調査）	大阪府八尾市高美町１丁目73・74	27212		34度 37分 12秒	135度 36分 39秒	19940301～0315	180	共同住宅建設に伴う事前調査
太子堂遺跡 （第５次調査）	大阪府八尾市東太子２丁目地内	27212		34度 36分 43秒	135度 35分 29秒	19931130～1203	29	公共下水道工事に伴う事前調査
田井中遺跡 （第13次調査）	大阪府八尾市田井中１丁目	27212		34度 35分 52秒	135度 36分 20秒	19940202～0210	25	公共下水道工事に伴う事前調査
東郷遺跡 （第40次調査）	大阪府八尾市光町１丁目51番地・52番地	27212		34度 37分 39秒	135度 36分 24秒	19930603～0625	352	共同住宅建設に伴う事前調査
（第41次調査）	大阪府八尾市北本町２丁目43-1の一部、43-1	27212		34度 37分 45秒	135度 36分 16秒	19930830～0906	120	共同住宅建設に伴う事前調査
（第43次調査）	大阪府八尾市荘内町２丁目15・16・17・18	27212		34度 37分 28秒	135度 36分 42秒	19931213～1227	300	共同住宅建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
跡部遺跡　第14次	集落遺構	古墳時代	なし	なし	
植松遺跡　第２次	集落遺構	平安時代末	河川	なし	
太田川遺跡第１次	集落遺構	縄文時代晩期～奈良時代	土坑・溝	縄文晩期・弥生	
久宝寺遺跡第16次	集落遺構	奈良時代	河川	土師器高杯・鉢	
小阪合遺跡第25次	集落遺構	弥生時代中期～近世	土坑・小穴・溝	弥生土器・土師	
志紀遺跡　第１次	水田遺構	縄文時代後期～近世	水田・河川・沼沢地	土師器・瓦器	
成法寺遺跡第10次	集落遺構	古墳時代前期	土坑・小穴	庄内式土器	
第11次	集落遺構	平安時代末	土坑	土師質小皿	
第12次	集落遺構	弥生時代後期末～近世	井戸・小穴・溝	弥生土器・土師	井戸から墨書人面土器出土
太子堂遺跡第５次	集落遺構	奈良時代	なし	土師器	
田井中遺跡第13次	集落遺構	縄文時代晩期～近世	井戸・自然河川	なし	
東郷遺跡　第40次	集落遺構	古墳時代前期	土坑・小穴・溝	庄内式土器	
第41次	集落遺構	鎌倉時代	河川	瓦器・瓦	
第43次	集落遺構	古墳時代前期 鎌倉時代	土器棺墓２基 井戸・小穴群	布留式土器 瓦器・土師器	

財団法人八尾市文化財調査研究会報告42

Ⅰ 跡部遺跡（第14次調査）
Ⅱ 植松遺跡（第２次調査）
Ⅲ 太田川遺跡（第１次調査）
Ⅳ 久宝寺遺跡（第16次調査）
Ⅴ 小阪合遺跡（第25次調査）
Ⅵ 志紀遺跡（第１次調査）
Ⅶ 成法寺遺跡（第10次調査）
Ⅷ 成法寺遺跡（第11次調査）
Ⅸ 成法寺遺跡（第12次調査）
Ⅹ 太子堂遺跡（第５次調査）
Ⅺ 田井中遺跡（第13次調査）
Ⅻ 東郷遺跡（第40次調査）
XIII 東郷遺跡（第41次調査）
XIV 東郷遺跡（第43次調査）

発　行　1994年10月
編　集　財団法人　八尾市文化財調査研究会
〒581 大阪府八尾市青山町４丁目４番18号
TEL0729－94－4700
印　刷　㈱近畿印刷センター
表　紙　レザック66　＜260kg＞
本　文　マットアート＜ 90kg＞
見返し上質　＜ 90kg＞
色トビラ　色上質　厚口

C02